

# 下齊田・滝川A遺跡 滝川B・C遺跡

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第17集 —

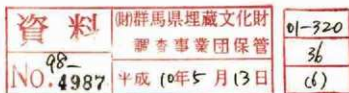
1987

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



下齊田・滝川・A・B・C遺跡 正 誤 表 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	誤	正
P.36	表10中	器高 <sup>一</sup>	器高4.0
P.62	表24中	29号土壘 長 <sup>・</sup> 円 <sup>・</sup> 形	29号土壘 長 <sup>・</sup> 方 <sup>・</sup> 形
P.88	2行目	3号溝に切られる	ト <sup>・</sup> ル
P.92	表32中	埴	小 <sup>・</sup> 型 <sup>・</sup> 壺
		2号土壘 長 <sup>・</sup> 円 <sup>・</sup> 形	2号土壘 長 <sup>・</sup> 方 <sup>・</sup> 形
P.107	第94図中	14号土壘	14号溝
P.154	表38中 11行目	無 <sup>・</sup> 果 <sup>・</sup> 実 <sup>・</sup> 型	無 <sup>・</sup> 花 <sup>・</sup> 果 <sup>・</sup> 型
	表39 下から6～5行目	共存する <sup>う</sup> よう	共存する <sup>よ</sup> う







# 下齊田・滝川A遺跡 滝川B・C遺跡

— 関越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第17集—

1987

群馬県教育委員会  
財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団



## 序

関越自動車道新潟線は、首都圏と新潟を結ぶ交通の大動脈として、多くの人々に利用されています。この関越自動車道建設事業にかかわり、当事業団では、多くの貴重な遺跡を発掘調査してまいりました。現在、調査によって発見、出土した資料は貴重な文化遺産として、その活用を図るために、整理事業を進め、報告書の刊行に努力してまいりました。

ここに報告します下斉田・滝川A遺跡、滝川B・C遺跡は、群馬県教育委員会が調査主体となり、昭和49～51年度にかけて調査が行われましたが、その整理事業は当事業団で実施するところとなりました。

下斉田・滝川A遺跡では、古墳時代前期の住居址、方形周溝墓、平安時代の住居址などの遺構が、滝川C遺跡では、古墳時代前期の多量の遺物等が発見されています。これらの遺構・遺物は、高崎市周辺地域における古代の歴史を知るうえで、貴重な資料になるものと言えます。

これら遺跡の整理事業は、昭和61、62年度の2カ年にわたって進め、関越自動車道（新潟線）埋蔵文化財発掘調査報告書第17集として刊行する運びになりました。

整理事業にあたっては、日本道路公団東京第二建設局の方々を始めとして、発掘調査、整理事業を進めていただいたの方々等、多くの関係者のご指導、ご協力を頂きました。ここに厚く感謝の意を表するとともに、本報告書が学界を始めとして、多くの人々に活用されることを念じて序文といたします。

昭和62年10月

群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長 清水 一郎



## 例 言



1. 本書は開越自動車道新岡線の建設に伴い、事前調査された群馬県高崎市下斉田町字小芝・熊野他に所在する下斉田・流川A遺跡及び流川B・C遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は第一次調査を昭和49年11月14日～昭和50年2月4日、第二次調査を昭和50年9月22日～昭和51年2月28日にかけて実施した。
3. 調査の実施は、日本道路公団東京第二建設局の委託を受けて、群馬県教育委員会文化財保護課が行った。
4. 調査担当者（当時の職名）、調査員は次の通りである。

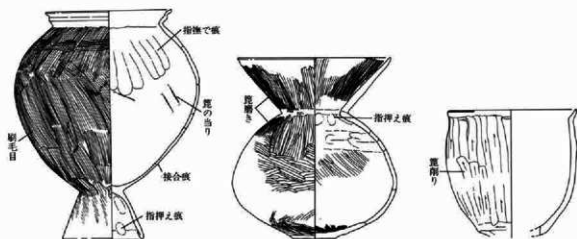
松本浩一（群馬県教育委員会文化財保護課主事）現在勢多郡東村小学校校長  
横倉興一（同 上）現在高崎市教育委員会文化財保護係  
巾 隆之（同 上）現在群馬県教育委員会文化財保護課  
坂爪久純（嘱 託 員）現在佐波郡境町教育委員会
5. 整理作業および執筆担当は以下の通りである。

事務担当 白石保三郎、井上唯雄、大沢秋良、田口紀雄、上原啓巳、平野進一、定方隆史、国定 均、  
笠原秀樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、野島のお江、並木綾子、今井もと子、松井美  
智子、大島敬子  
整理担当 小野和之（群馬県埋蔵文化財調査事業団）昭和61年度  
山口逸弘（群馬県埋蔵文化財調査事業団）昭和62年度  
図面整理、遺物実測、トレース等は長沼久美子、高橋美津子、桑原恵美子、高橋とし子、  
高橋裕美、串淵すみ江、茂木範子、安達好子、阿部由美子、萩原鈴代、八峠美津子が行った。
6. 執筆分担 I-1、III-1、IV-1、V-1、VI-1、巾隆之  
VI-2、横倉興一  
結び 松本浩一  
上記以外を小野が行った。
7. 本書の編集は小野が行った。
8. 発掘調査、整理作業にあたり下記の方々にご協力を頂いた。記して感謝の意を表する。（敬称略）  
新井房夫、工業普通、増田逸朗、田口一郎、桜井衛、金子智一、五十嵐信
9. 石材鑑定は群馬地質研究会員、飯高静男氏にお願いした。
10. 出土遺物および図面類は、現在群馬県埋蔵文化財調査センターに保管している。



## 凡 例

1. 本書における遺構番号は、住居址、掘立柱建物址については調査時のものを用いたが、土壌、溝に関しては新たに付け直した。
2. 遺構図におけるスクリーン・トーンは次のことを表す。  

 は地山を  は焼土をそれぞれ表す。  
 なお上記以外のものについては図中に示した。
3. 本書における遺物実測図は原則として1/3とした。また遺構図の縮尺は住居址1/60、土壌1/40を基本とし、それ以外のものについては図中に記した。
4. 土器の実測図における表記は以下のことを表す。



土器実測図の内、断面黒色のものは須恵器を表す。また縄文土器の断面におけるスクリーン・トーンは縄文土器を表す。

5. 遺物観察表中、法量・遺構計測値の ( ) は推定値を表す。
6. 遺物写真図版中の番号は挿図中の番号と同一である。





# 目 次

序	
例 言	
凡 例	
I. 調査の経過	1
1. 調査に至るまでの経過	1
II. 周辺の地形と遺跡	1
1. 遺跡の概要	1
2. 地理的環境	1
3. 歴史的環境	1
III. 下斉田・滝川 A 遺跡	6
1. 調査の方法と経過	6
(1) 調査の経過と遺跡の概要	
2. 基本土層	10
3. 遺構と遺物	10
(1) 住居址   (2) 方形周溝墓   (3) 掘立柱建物址	
(4) 土塋   (5) 溝   (6) 水田址   (7) グリッド出土遺物	
IV. 滝川 B 遺跡	80
1. 調査の方法と経過	80
2. 基本土層	80
3. 遺跡の概要	80
V. 滝川 C 遺跡	81
1. 調査の方法と経過	81
2. 基本土層	81
3. 遺構と遺物	82
(1) 土塋   (2) 溝	
4. グリッド出土遺物	100
VI. ま と め	131
1. 遺 構	131
2. 遺 物	132



# 挿 図 目 次

## 下斉田遺跡

第1図	遺跡の位置と周辺の遺跡	3
第2図	調査区域図	6
第3図	A区拡張区	8
第4図	C・D区拡張区	9
第5図	基本土層図	10
第6図	1号住居址	11
第7図	1号住居址遺物出土状態	12
第8図	1号住居址出土遺物(1)	13
第9図	1号住居址出土遺物(2)	14
第10図	1号住居址出土遺物(3)	15
第11図	2号住居址	18
第12図	2号住居址出土遺物(1)	18
第13図	2号住居址出土遺物(2)	19
第14図	3号住居址・出土遺物	20
第15図	4号住居址	21
第16図	4号住居址出土遺物(1)	22
第17図	4号住居址出土遺物(2)	23
第18図	5号住居址・出土遺物	24
第19図	6号住居址	25
第20図	6号住居址出土遺物	26
第21図	7号住居址	27
第22図	7号住居址出土遺物	27
第23図	8号住居址及び9号址	28
第24図	8号住居址出土遺物(1)	30
第25図	8号住居址出土遺物(2)	31
第26図	8号住居址出土遺物(3)	33
第27図	8号住居址出土遺物(4)	34
第28図	9号住居址	36
第29図	9号住居址出土遺物	36
第30図	10号住居址	37
第31図	10号住居址出土遺物	37
第32図	11号住居址	38
第33図	12号住居址	39
第34図	12号住居址出土遺物	39
第35図	13号住居址	40
第36図	13号住居址出土遺物	40
第37図	14号住居址	41
第38図	14号住居址出土遺物	41
第39図	方形周溝墓	42
第40図	方形周溝墓出土遺物	43
第41図	1号竪立柱建物址	46
第42図	2号竪立柱建物址	47
第43図	3号竪立柱建物址	48
第44図	4号竪立柱建物址	49
第45図	5号竪立柱建物址	50
第46図	竪立柱建物址出土遺物	51
第47図	1-6号土層(1)	52
第48図	7-14号土層(2)	53
第49図	15-16号土層(3)	55
第50図	17-20号土層(4)	56
第51図	21-24号土層(5)	57
第52図	25-28号土層(6)	58
第53図	29-31号土層(7)	60
第54図	32-35号土層(8)	61
第55図	2・3・4・13・16号土層出土遺物	63
第56図	20号土層出土遺物	64
第57図	20・26号土層出土遺物	65
第58図	29号土層出土遺物	66

第59図	溝全体図	67
第60図	2・3・7号溝出土遺物	68
第61図	グリッド出土縄文土器	69
第62図	グリッド出土遺物	70
第63図	グリッド出土埴輪	71
第64図	1・4・6・7・8・9号住居址出土土器	73
第65図	10・14号住居址・方形周溝墓出土土器	74
第66図	方形周溝墓・土層出土土器	75
第67図	溝出土土器	76
第68図	グリッド出土遺物	76
第69図	グリッド出土土器(1)	77
第70図	グリッド出土土器(2)	79

## 滝川B遺跡

第71図	調査区域図	80
第72図	基本土層図	80

## 滝川C遺跡

第73図	調査区域図	81
第74図	基本土層図	82
第75図	遺構全体図	83
第76図	1-4号土層(1)	84
第77図	5-9号土層(2)	85
第78図	10-13号土層(3)	86
第79図	14-18号土層(4)	87
第80図	19-22号土層(5)	89
第81図	23-28号土層(6)	90
第82図	29-30号土層(7)	91
第83図	1・2・5・7・8・9・10号土層出土遺物	93
第84図	11・13・14・19号土層出土遺物	94
第85図	2・8・19号溝出土遺物	97
第86図	19号溝出土遺物	98
第87図	遺構削付図	100
第88図	遺構図 1	101
第89図	遺構図 2	102
第90図	遺構図 3	103
第91図	遺構図 4	104
第92図	遺構図 5	105
第93図	遺構図 6	106
第94図	遺構図 7	107
第95図	遺構図 8	108
第96図	遺構図 9	109
第97図	遺構図 10	110
第98図	遺構図 11	111
第99図	遺構図 12	112
第100図	遺構図 13	113
第101図	遺構図 14	114
第102図	遺構図 15	115
第103図	遺構図 16	116
第104図	遺構図 17	117
第105図	遺構図 18	118
第106図	遺物分布図	119
第107図	グリッド出土遺物(1)	120
第108図	グリッド出土遺物(2)	121
第109図	グリッド出土遺物(3)	122
第110図	グリッド出土遺物(4)	123
第111図	グリッド出土遺物(5)	124
第112図	グリッド出土縄文土器	124
第113図	グリッド出土土器	129
第114図	遺構全体図	折り込み

## ま と め

第115回	下舟田遺跡出土遺物	134
第116回	下舟田遺跡出土遺物	136
第117回	遺跡位置図	137
第118回	下郷遺跡出土遺物	139
第119回	下郷遺跡古墳関連遺物	140
第120回	八幡原遺跡出土遺物	141
第121回	滝川C遺跡出土遺物	141
第122回	綿貫遺跡出土遺物	141

第123回	上滝遺跡出土遺物	142
第124回	元島名若草塚古墳出土遺物	142
第125回	元島名遺跡遺跡区出土遺物	142
第126回	鈴ノ宮遺跡出土遺物	143
第127回	矢中村東遺跡・矢中下村北遺跡出土遺物	144
第128回	上大畑北宅地遺跡	145
第129回	具沢柳町遺跡出土遺物	146
第130回	新保田中遺跡出土遺物	147
第131回	下日高田河遺資料	148

## 表 目 次

### 下舟田遺跡

表 1	周辺の遺跡一覧表	4
表 2	1号住居址遺物観察表	12
表 3	2号住居址遺物観察表	17
表 4	3号住居址遺物観察表	20
表 5	4号住居址遺物観察表	21
表 6	5号住居址遺物観察表	25
表 7	6号住居址遺物観察表	26
表 8	7号住居址遺物観察表	29
表 9	8号住居址遺物観察表	29
表 10	9号住居址遺物観察表	36
表 11	10号住居址遺物観察表	38
表 12	12号住居址遺物観察表	38
表 13	13号住居址遺物観察表	39
表 14	14号住居址遺物観察表	42
表 15	方形周溝墓遺物観察表	44
表 16	1～14号住居址、方形周溝墓遺物観察表	45
表 17	1号竪立柱建物址遺物観察表	46
表 18	2号竪立柱建物址遺物観察表	47
表 19	3号竪立柱建物址遺物観察表	48
表 20	4号竪立柱建物址遺物観察表	49
表 21	5号竪立柱建物址遺物観察表	49
表 22	竪立柱建物址遺物観察表	50

表 23	竪立柱建物址遺物観察表	50
表 24	土壌計測値	62
表 25	土壌遺物観察表	62
表 26	溝出土遺物観察表	68
表 27	グリッド出土縄文土器観察表	71
表 28	グリッド出土遺物観察表	71
表 29	グリッド出土埴輪観察表	72
表 30	住居、土壌、溝出土石器観察表	73
表 31	グリッド出土石器観察表	78

### 滝川C遺跡

表 32	土壌計測値	92
表 33	土壌遺物観察表	94
表 34	溝遺物観察表	99
表 35	グリッド遺物観察表	125
表 36	グリッド出土縄文土器観察表	128
表 37	グリッド出土石器観察表	130

## ま と め

表 38	埴輪土器の分類とその特徴	154
表 39	単口縁系変型土器の分類とその特徴	154
表 40	井野川下流域における関連遺跡での土器 組み合わせ状況	155

## 写真図版目次

### 下舟田遺跡

図版 1	下舟田遺跡全景
図版 2	下舟田遺跡全景
図版 3	1～4号住居址
図版 4	5～8号住居址
図版 5	9～13号住居址
図版 6	14号住居址、方形周溝墓
図版 7	1～5号竪立柱建物址
図版 8	1～9号土壌
図版 9	10～18号土壌
図版 10	19～27号土壌
図版 11	29～35号土壌、3号溝
図版 12	1号住居址出土遺物
図版 13	1・2号住居址出土遺物
図版 14	2・3・4号住居址出土遺物
図版 15	5・6・7・8号住居址出土遺物
図版 16	8号住居址出土遺物
図版 17	8号住居址出土遺物
図版 18	9・10・12・13・14号住居址 方形周溝墓出土遺物
図版 19	方形周溝墓、土壌出土遺物

図版 20	土壌、竪立柱建物址出土遺物
図版 21	溝、グリッド出土遺物
図版 22	グリッド出土埴輪、グリッド出土縄文土器
図版 23	1～14号住居址、方形周溝墓出土石器
図版 24	方形周溝墓、土壌、溝出土石器
図版 25	グリッド出土石器

### 滝川B・C遺跡

図版 26	滝川B遺跡、滝川C遺跡遺跡区
図版 27	滝川C遺跡調査区
図版 28	1～8号土壌
図版 29	9～15号土壌
図版 30	16～28号土壌
図版 31	土壌、溝出土遺物
図版 32	溝出土遺物
図版 33	溝、グリッド出土遺物
図版 34	グリッド出土遺物
図版 35	グリッド出土遺物、グリッド出土縄文土器
図版 36	グリッド出土石器、28号土壌出土馬歯
図版 37	下舟田、滝川C遺跡土器部分写真

# I. 調査の経過

## 1. 調査に至るまでの経過

関越自動車道新潟線は、昭和42年に出色された「道路整備特別処置法」に基づき、建設大臣から事業認可が  
出た事業である。東京から新潟を結ぶ総計310kmに及ぶもので、東京―川越間が、昭和46年に共用開始となっ  
た。それに続く川越―洗川間は昭和44年に基本計画が策定され、昭和48年に正式路線が発表された。

群馬県教育委員会では、埋蔵文化財を保護するため基本計画策定の前年に分布調査を計画した。昭和44年  
に洗川市以南の、路線が通過することの予想される地域について、幅4kmに限定し、国の補助金を得て実施  
した。更に昭和46年には、整備計画に基づき、洗川市以南の幅200m内について詳細な分布調査を実施し、藤  
岡市―洗川市間で合計22箇所の遺跡を発見した。

遺跡名は、遺跡の所在する地域の大字あるいは小字名をとって命名したが、略号として「関越高速道」の  
頭文字である「KK」の2文字で表現することとし、南から番号を与えることとした。従って下斉田遺跡は「KK  
6」、滝川A遺跡は「KK7」、滝川B遺跡は「KK8」、滝川C遺跡は「KK9」となる。

関越自動車道新潟線の発掘調査は、昭和48年の佐波郡玉村町下郷遺跡から開始された。同年中に藤岡市温  
井遺跡の調査も行われ、翌49年には高崎市八幡原A・B両遺跡及び下斉田遺跡と順次進められた。滝川A遺  
跡は下斉田遺跡と隣接しており、遺構のありかた等から個別の遺跡として区別することができないことが判  
明したため、併せて調査を行うこととした。

# II. 周辺の地形と遺跡

## 1. 遺跡の概要

下斉田遺跡は関越自動車道新潟線の建設に伴い、第一次（昭和49年11月～同50年2月まで）、第二次（昭和  
50年9月～同51年2月）にかけて調査を行った。検出された遺構は古墳時代初頭から平安時代にかけてのも  
のが主である。主な遺構の種類は、住居址、掘立柱建物址、土壇、溝、および方形周溝墓である。遺構の残  
りは、確認面までがかなり浅く、また遺構がかなり小範囲に集中して切り合っていたことや、近・現代の溝、  
土壇などの重複等で検出状況は良好ではなかった。

## 2. 地理的環境

下斉田・滝川A遺跡は高崎市の南東部にある。現在の行政区画下斉田町の北東部に位置する。遺跡は高崎  
市と伊勢崎市を結ぶ国道354号線の北側に在って、榛名山麓に源を発する井野川左岸にあり、東側には滝川が  
南流している。遺跡は前橋台地の南端縁にあり、周囲の地形は比較的緩やかで、現況は水田地帯が広がり、  
僅かに微高地上に桑畑が点在している。遺跡の標高は約70mである。

## 3. 歴史的環境

埼玉県のほぼ中央を横断した関越自動車道は群馬県に入り、藤岡市から烏川を渡り玉村町から高崎市の東

## Ⅱ. 周辺の地形と遺跡

でやや西側へカーブして北上する。この玉村町から高崎市東部のこの地域にかけては多くの遺跡が知られており、特に古墳時代に関しては古式古墳として知られる、柴崎蟹沢古墳（註1）を初めとして元鳥名將軍塚古墳（註2）、観音山古墳（註3）、不動山古墳（註4）、岩鼻二子山古墳（註5）等が知られ、他にも若宮古墳群等、数多くの古墳が存在する。また近年の開発に伴う発掘調査で周辺地域においても多くの集落跡が調査されており次第に本地域の様子が明らかになりつつある。群馬県内の関越道に伴う発掘調査は下郷遺跡（註6）を皮切りに温井遺跡（註7）、八幡原A・B遺跡（註8）、そして本報告の下斉田・滝川A遺跡、滝川B・C遺跡、さらには上滝遺跡（註9）と調査が進められた。そして本遺跡より5km程井野川上流の新保遺跡（註10）、日高遺跡（註11）では弥生時代から平安時代にかけての集落、墓址、水田址とともに多くの土器や木製品、さらには獣骨類が多量に発見され注目を集め、井野川流域における弥生から古墳時代にかけての遺跡の濃密さがあらためて浮き彫りにされた形となった。

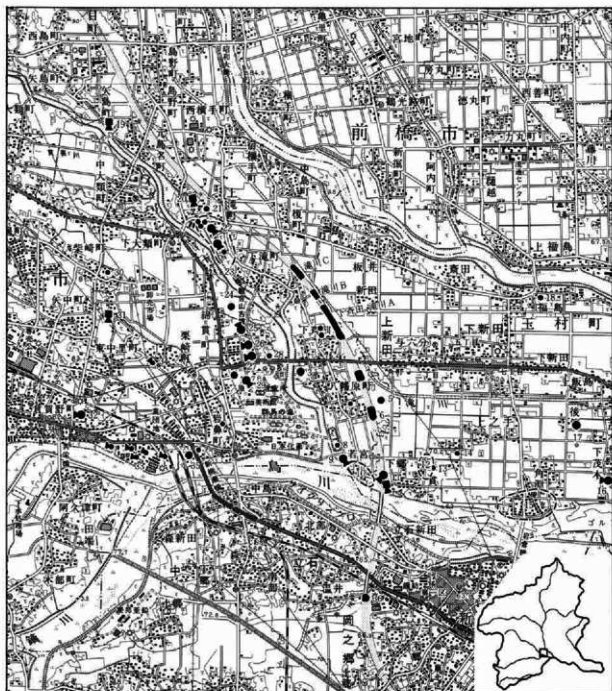
本遺跡の周辺における各時代毎の遺跡について、近年明らかになったものを中心に概観しておきたい。縄文時代の遺構は少ないが、八幡原A遺跡では前期の住居址1軒を調査している。また堀米前遺跡（註12）では中期の土壌、元鳥名遺跡（註13）では後期の土壌が、また井野川に沿ってやや上流へ上った大類地区では川押遺跡（註14）、天神遺跡（註15）、万相寺遺跡（註16）などでも中期、前期の遺構、遺物が検出されている。弥生時代に関しては、鈴ノ宮遺跡（註17）、元鳥名遺跡、万相寺遺跡で中期から後期にかけての遺構が検出されている。特に鈴ノ宮遺跡では中期の方形周溝墓が見られ、後続する次代の遺構と関連して注目される。また近年調査された矢島・竹之内遺跡（註18）は鈴ノ宮遺跡の西にあたるが、弥生時代後期の住居址と古墳時代初期の周溝墓が3基検出されている。万相寺遺跡では後期樽式期の住居址を検出している。古墳時代については、井野川の左岸段丘上には墳墓以外にも多くの集落跡の存在が知られており、灰塚遺跡（註19）、八幡原遺跡（註20）、八幡原大鼻・稲荷遺跡（註21）上滝遺跡などでは住居址、土壌、溝等が検出されている。こうした集落に隣接する形でいくつかの古墳群が見られる。また、前方後方形の方形周溝墓が矢中村東遺跡（註22）や下郷遺跡で検出されており注目される。若宮古墳群は井野川と烏川の合流地点にあり下郷遺跡と接している。その東には字貫古墳群がある。上滝遺跡の西に位置する元鳥名將軍塚古墳は全長90mの前方後方墳で4世紀代の築造とされる。その南には下滝古墳群がある。井野川を挟んだ対岸には大形の前方後円墳である観音山古墳、不動山古墳がありそれらの周辺では綿貫遺跡（註23）、堀米前遺跡などで集落が調査されている。

古墳時代後期になると集落地は広がり、この井野川を挟んだ両段丘上には多くの古墳が築造されることになる。

本遺跡が立地する場所は現在では北に水田地帯が広がり、南側には井野川に沿った両段丘上に多くの古墳が存在していた。さらに西側の烏川の段丘上にも浅間山古墳、大鶴巻古墳、小鶴巻古墳などがあり、一つの地域集団が形成されていたと考えられ、下佐野遺跡（註24）や万福寺遺跡（註25）などの調査成果は今後の研究に必要な具体的資料を提供していると言える。

水田址は本遺跡の南東部沖積地でB軽石下の水田址が検出されている。八幡原大鼻・稲荷遺跡では長方形区画の水田が検出されている。矢中地区（註26）では広い範囲にわたり調査が行われ、浅間B軽石に覆われた水田址やこれらに伴う水路を調査している。下斉田遺跡でもA・B区において浅間山B軽石層の堆積が認められ、直下に水田土壌らしきものも認めているがトレンチ調査のために面的な確認はなし得なかった。

奈良・平安時代の集落は綿貫遺跡において数十軒の住居址を調査しており、さらに東西17m、南北14mの土壇状の遺構が検出されており周辺からは大量の瓦片が確認され、何等かの建物址が存在したと考えられる。



第1図 遺跡の位置と周辺の遺跡

国土地理院(高緯)五万分の1使用

- |               |             |             |               |            |
|---------------|-------------|-------------|---------------|------------|
| 1 諏訪甲341号古墳   | 8 前原1052号墳  | 16 梨ノ木山古墳   | 24 綿貫遺跡群      | 31 矢中村東B遺跡 |
| 2 天神山古墳       | 9 若宮八幡北古墳   | 17 単配山古墳    | 25 観音山古墳      | 32 長賢寺古墳   |
| 3 灰塚遺跡        | 10 若宮古墳群    | 18 天神古墳     | 26 普賢寺墓古墳     | 33 大道南古墳   |
| 4 稲荷山古墳       | 11 下郷遺跡     | 19 鈴ノ宮遺跡    | 27 不動山古墳      | 34 飯王山古墳   |
| 5 八幡原大鼻・稲荷塚遺跡 | 12 字貫古墳群    | 20 元島名将軍塚古墳 | 28 堀米前・不動山東遺跡 | 35 大応寺遺跡   |
| 6 八幡原A遺跡      | 13 上之手薬師前古墳 | 21 淵ノ上遺跡    | 29 岩鼻二子山古墳    | 36 温井遺跡    |
| 7 八幡原B遺跡      | 14 若王子古墳    | 22 御伊勢山古墳   | 30 柴崎蟹沢古墳     |            |
|               | 15 角瀨古墳群    | 23 下瀨古墳群    |               |            |

## II. 周辺の地形と遺跡

中世以降についてはいちいち取り上げないが、付近には岩鼻陣屋跡を初めとして元島名城跡、元島名内出跡などが知られる。

表 1 周辺の遺跡一覧表

遺 跡 名	内 容
1 諏訪甲341号古墳	下青田遺跡の西に近接する小円墳。
2 天神山古墳	下青田遺跡の西に位置し、近接する。
3 灰塚遺跡	昭和50年度に高崎市教育委員会で調査。古墳時代から平安時代にかけての住居跡約30軒を抽出。
4 稲荷山古墳	八幡原B遺跡の西に位置する。八幡原古墳群に含まれる。
5 八幡原A遺跡	滝川の右岸に位置しており、八幡原A・B遺跡の東側に接する。古墳時代後期を中心とする集落。
6 八幡原B遺跡	井野川左岸台地上に位置。縄文前期諸墳B1式の住居跡、掘立柱建物跡、中世の溝等多数抽出。
7 八幡原C遺跡	井野川左岸台地上に位置。中世の居館、溝等多数あり。
8 前原1052号墳	若宮古墳群の中に含まれ、若宮北古墳の北西に近接。
9 若宮八幡北古墳	前方後円墳。全長71.5m、墳丘長46.3mで長方形の周壕帯を持つ。
10 若宮古墳群	井野川と烏川が合流する左岸に広がる古墳群で、前述した8・9も含まれる。
11 下郷遺跡	烏川右岸台地上に位置。古墳時代前期の方形周溝墓を始め、古墳、住居址、土壇等が抽出されている。特に全長46mの前方後方墳SZ42と推定墳丘長約80mのSZ16は、興味ある変遷過程を示すものとして注目される。
12 宇貫古墳群	若宮古墳群の東に位置する。
13 上之手墓師前古墳	宇貫古墳群に含まれる。
14 若王子古墳	径10～15mの円墳であるが、かなり平夷されている。土器、直刀等出土。
15 角瀬古墳群	烏川と神流川の合流する付近、玉村町角瀬にある小円墳群。
16 梨ノ木山古墳	径約40mの円墳と思われていたが、調査の結果2重の濠を巡らす前方後円墳と判明。主体部は壑穴式と思われる、銅器品として直刀、写玉、石製模造品などが発見されている。
17 塚原山古墳	昭和5年に発掘されている。築造時は基礎部が低い二段築造の円墳と思われる。高さ6m、径40m。出土遺物は内行文瓦葺2面の他に、玉釧、刀、鉄鏝、鉄斧などが発見されている。河原石と粘土で固められた堀を持つ。4世紀末に比定される。
18 天神古墳	得根川右岸。
19 鈴ノ宮遺跡	井野川左岸台地上に位置。弥生時代から平安時代にかけての集落跡、住居址、方形周溝墓、土壇、溝等多く抽出している。特に弥生時代から続く墳墓の流れは四隅が切れる形から、方形、前方後方形、さらには円墳と興味ある資料が抽出されている。
20 元島名塚原古墳	前方後方墳。全長91m、後方部径51m、前方部長40m、明治44年に発掘された土壌内から鏡1、石銅、刀、鏝などが出土。さらに昭和55年に高崎市教育委員会によって周壕の一部が調査され、墳丘の構築状況などが明らかにされ、周壕中からは底部穿孔の二重円縁帯が出土している。高崎市指定史跡。
21 園ノ上遺跡	住宅の建設に伴う確認調査により古墳時代の住居址の存在が確認された。
22 御伊勢山古墳	前方後円墳。全長30m、横穴式両輪型石室を持つ。5世紀代の築造。下流古墳群内。
23 下流古墳群	若軍塚古墳の南に有り、御伊勢山古墳を含む2基の前方後円墳を中心に多くの円墳から成る古墳群。
24 鏡賀遺跡群	鏡賀山古墳の西側一帯を占める。土地改良に伴い昭和58年度に高崎市教育委員会によって調査が行われた。その結果古墳時代前期から奈良時代、平安時代の住居址、中世の溝等が抽出されているが、興味を引くものとして毎日瓦を伴う土壇状の遺構がある。
25 観音山古墳	前方後円墳。全長97m、後円径61m、後円高9.6m。切石角四石安山岩両輪型横穴式石室。2段築造で、2重の濠を持つ。墳丘には磐人または武人などの城廓群が配列されていた。また、出土した鏡や銅製水飯は東アジアとの強い交流を窺わせている。国指定史跡。
26 普賢寺裏古墳	前方後円墳。墳丘長約70m。
27 不動山古墳	前方後円墳。全長94m、後円径54m、高さ10m、前方南端部幅56m、高さ9m。墳丘は二段構築で後円部寄りに入り出しあり、主体部は舟形石積。
28 船来前遺跡・不動山東遺跡	不動山古墳の北に位置する。両院の建設に伴い調査が行われたもので、両者は同一の遺跡と考えられる。古墳時代前期から奈良・平安時代にかけての住居址を中心に抽出している。船来前遺跡では古式の須石器が、不動山古墳では叩き目の残る土師器の壺が出土している。
29 岩鼻二子山古墳	前方後円墳。全長約120m、主体部は舟形石積、埴輪列有り、神獣鏡、太刀、鉄鏝、鉄鉏、櫛、石製模造品等出土。現在は消滅。
30 柴崎賀沢古墳	円墳または方墳。明治43年頃に平夷、□始元年銘の三角縁神獣鏡の他に鏡3面、鉄斧、鈴等出土。この地における初現的なものとして注目される古墳である。
31 矢中村東B遺跡	前方後方形の周溝墓が抽出されている。
32 長賀寺山古墳	前方後円墳。全長約50mで周壕を巡らす。
33 大道南古墳	縄文記載。旧倉賀野村75号墳。横穴式両輪型石室を持つ。1980年調査。ガラス小玉、鉄鏝、刀子等出土。
34 飯王山古墳	前方後円墳。全長30m。
35 大志寺遺跡	古墳時代中期から後期にかけての住居址が30軒抽出されている。
36 温井遺跡	鍋川と烏川が形成する沖積微高地上に位置する古墳時代の集落跡。住居址37軒の他土壇、溝等を抽出している。



### 3. 歴史的環境

- (註1) 前期古墳。「□」始元年隴是作の銘を持つ船藏四神四獣鏡・散文帯三神三獣鏡製内行花文鏡など鏡3面と、鉄斧、槍等を出土している。墳丘は現在は崩平され失われている。
- (註2) 元島名苜草塚古墳 高崎市文化財調査報告書 第22集
- (註3) 史跡観音山古墳 1981 (昭56) 年  
1981 (昭56) 年
- (註4) 不動山古墳 梅沢東昭「群馬県群馬郡桐貫不動山古墳」年報18 日本古考古学会 1970 (昭45) 年
- (註5) 津金沢古茂、熊島義雄、大久保美加 群馬県高崎市岩鼻町「群馬の森」を中心とする地域の歴史について 群馬県歴史博物館紀要第2号 1981 (昭56) 年  
1980 (昭55) 年  
1981 (昭56) 年  
1981 (昭56) 年
- (註6) 下郷 群馬県教育委員会
- (註7) 真下高幸他「温井遺跡」群馬県教育委員会
- (註8) 八幡原A・上郷・元島名A遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (註9) 註8に同じ
- (註10) 新保遺跡I大講編 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1986 (昭61) 年
- (註11) 日高遺跡 群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982 (昭57) 年
- (註12) 堀米前遺跡 昭和53年高崎市教育委員会調査。古墳時代中期の住居址、土壌等を検出。なお昭和61年4月～6月にかけて本遺跡の西側を調査しており古墳時代初期から平安時代にかけての懸穴住居址6軒、井戸1基、溝4条、集石状遺構1、土塊37等を検出している。  
田村孝、清水秀紀 不動山東遺跡 不動山東遺跡調査会 1986 (昭61) 年
- (註13) 元島名遺跡 高崎市文化財調査報告書 第6集 1979 (昭54) 年
- (註14) 天田・川柳遺跡 \* 第41集 1983 (昭58) 年
- (註15) 山島・天神遺跡 \* 第56集 1984 (昭59) 年
- (註16) 万相寺遺跡 \* 第66集 1985 (昭60) 年
- (註17) 鈴ノ宮遺跡 \* 第4集 1978 (昭53) 年
- (註18) 矢島・竹之内遺跡 昭和63年刊行予定
- (註19) 杯塚遺跡 昭和50年高崎市教育委員会発掘調査。
- (註20) 八幡原遺跡 高崎市文化財調査報告書 第3集 1974 (昭49) 年
- (註21) 八幡原大鼻・福尚遺跡 高崎市文化財調査報告書 1984 (昭59) 年
- (註22) 矢中村東遺跡 高崎市文化財調査報告書 第57集 1984 (昭59) 年
- (註23) 柿貫遺跡 高崎市文化財調査報告書第47集 1985 (昭60) 年
- (註24) 下佐野遺跡 上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書第6集(附)群馬県埋蔵文化財調査事業団 縄文時代から平安時代までの住居址等が調査されている。王造工房址を含む古墳時代の住居址などが調査されている。 1986 (昭61) 年
- (註25) 倉賀野方福寺遺跡 高崎市倉賀野方福寺遺跡調査会 1983 (昭58) 年
- (註26) 矢中遺跡群(Ⅰ) 高崎市文化財調査報告書 第28集 1981 (昭56) 年  
天王前遺跡 \* 第35集 1982 (昭57) 年  
村岡・富士坂前A遺跡 \* 第49集 1984 (昭59) 年  
柴崎前・村北B遺跡 \* 第52集 1984 (昭59) 年  
平安時代の水路、水田址、古墳時代の方形周溝墓等を検出している。遺物としては副製の古印「物部私印」出土。

#### 参考文献

- ・木崎吉雄他 群馬のおいちをたずねて(上)(下)上毛新聞社 1977 (昭52) 年
- ・上毛古墳総覧 群馬県史跡名勝天然記念物調査報告書第五集 群馬県 1938 (昭13) 年
- ・前澤輝政 毛野園の研究上・下 古墳時代の解明 1982 (昭57) 年
- ・群馬県史 資料編第 県史編纂委員会 1983 (昭58) 年

### Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

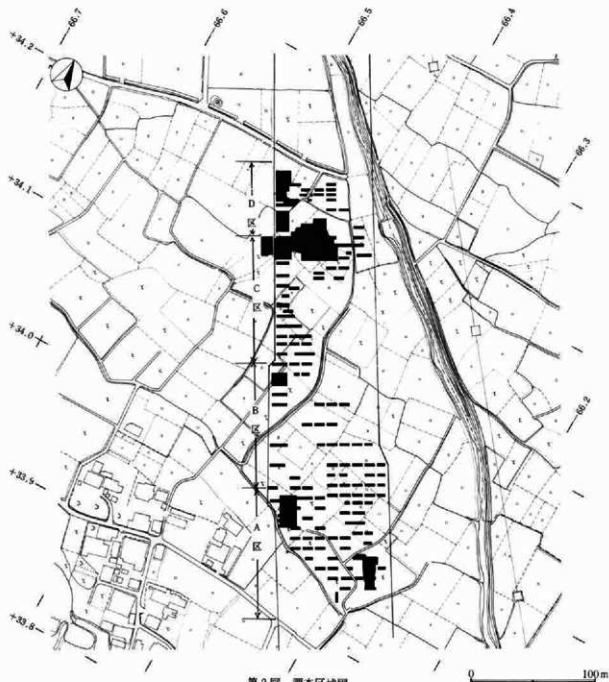
#### 1. 調査の方法と経過

##### (1) 調査の経過と遺跡の概要

発掘調査は二次にわたり実施した。

第一次調査（昭和49年11月14日～昭和50年2月4日）

遺跡地は桑畑の微高地と、水田の低地が交互に繰り返された地形となっている。第一次調査では、遺構跡



第2区 調査区域図

## 1. 調査の方法と経過

認のためのトレンチ調査から開始した。

道路の中心軌の2点を結んだ線を基軸とし、グリッドを設定した。遺構の南東隅にグリッドの原点を置き南北をX軸、東西をY軸とし、両軸とも最小単位を2mに区切り数字を配した。数字は東から西に、同じく南から北へ大きくなるように配したが、長軸が全体で400mと長いため、100mごとに区切り、アルファベットの配した。グリッドの表記方法は(X軸、Y軸)とした。便宜的に南からA～D地区と呼称することとした。

A・B区の水田面の低地に、幅2m、長さ4mのトレンチを8mごとに配置し、掘削を行うこととした。微高地の縁辺部から、浅間B軽石を覆土にもつ溝や、土壌遺構とともに、B軽石下の黒色土を検出した。本遺跡を調査していた段階では、B軽石下の水田遺構について認識されていなかったため、調査に至っていない。

C地区にトレンチ調査を進めると、浅間A軽石を含む溝が多数検出された。

D地区においても、微高地に対するトレンチ調査を行う。古墳時代前期の竪穴住居をはじめ、土壌、溝状遺構等を検出した。

昭和50年になり、B～D地区西側の側道部分を優先的に調査するよう要請があったために調査を開始する。1～3号住居址、1～4号土壌を検出する。なお、D区の一部は滝川A遺跡として登録されているが、下斉田遺跡と区別できないため、併せて調査を行う。A・B軽石を覆土に持つ溝状遺構が重複して発見されたが、現行の水田用小水路と重複していることが判明した。

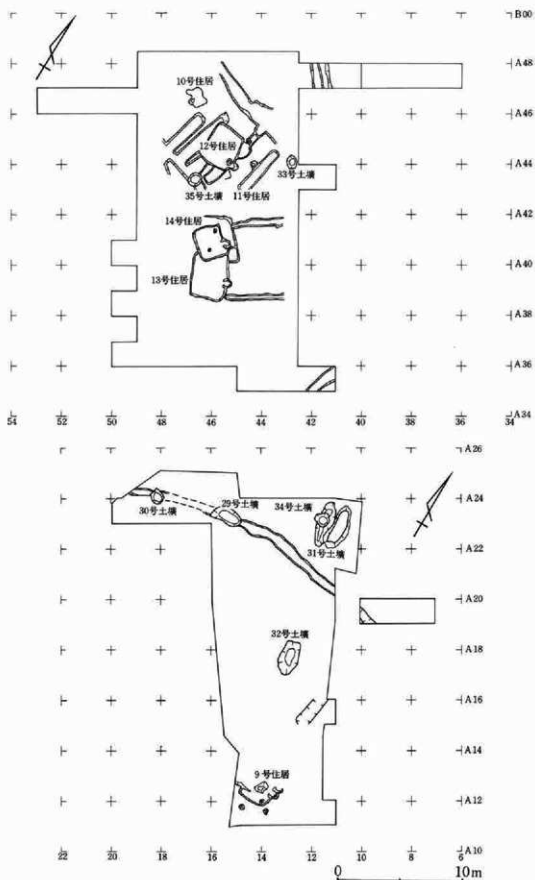
第二次調査(昭和50年9月22日～昭和51年2月28日)

第二次調査では、A・B地区の微高地に対するトレンチ調査から再開し、続いてC・D地区のトレンチ調査を行う。A地区では、竪穴住居址、溝状遺構、形象埴輪を出土する土壌等を検出する。

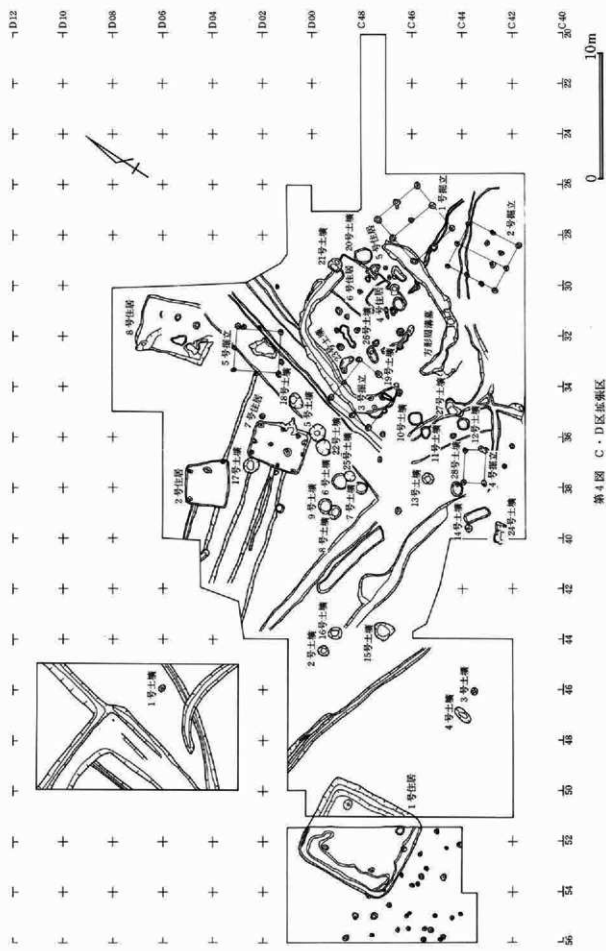
C・D地区の微高地上からは、竪穴住居址や方形周溝墓をはじめ、掘立柱建物址、小鍛冶遺構、土壌墓、溝状遺構等を検出する。なお、1号住居址は第一次調査の側道部分から発見されたが、西側のほとんどが路線外であったため、今回の調査で隣地を借地した上で、全面調査を行った。

註 関越自動車道(新堀橋)地埋蔵文化財発掘調査概報Ⅱ 群馬県教育委員会 1975(昭50)年  
\* \* \* \* \* 1976(昭51)年

Ⅲ. 下齐田・滝川A遺跡



第3図 A区発掘区



第4图 C·D区底架区

### Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

## 2. 基本土層 (第5図)

遺跡地内の地形は若干の起伏を示しており、やや高まった微高地と低地部とでは層序に若干の差が認められる。B軽石層(註1)は差はあるがどちらにも確認され、表土からこのB軽石層までは基本的には差がない。軽石下については粘性土を基調としてはいるが色調、混入物に違いが見られ、3ないし4層に分けられる。微高地ではC軽石(註2)の堆積が見られる。以下ローム漸移、ローム層またはシルト層となる。以上が基本的な層序であるが、場所によって若干の差が認められる。

I層 A軽石(註3)混入の灰褐色土で表土層。

Ⅱ層 B軽石自然堆積層より上の褐色土層で、2～3層に細分される。

Ⅲ層 微高地は3層に低地は4層に細分される。

微高地

Ⅲ-1b層 粘性のある黒色土層で鉄分が凝集し、焦げ茶色を帯びる。

Ⅲ-2b層 黒色土層で部分的に褐色を帯びる。C軽石が認められる。

Ⅲ-3b層 第1地区では黒色土層で、第2地区では焦げ茶色に近い黒色土層。

低地

Ⅲ-1a層 粘性黒色土層で、粒状に凝集した鉄分を多量に含む。

Ⅲ-2a層 粘性黒色土層で、褐色ないしは灰褐色を帯びる。

Ⅲ-3a層 粘性黒褐色土層で、ローム混入のため褐色を帯びる。

Ⅲ-4a層 強い粘性黒色土層で、鉄分大凝集斑を多く作る。第2地区では砂利を多量に含むところが多い。

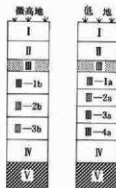
Ⅳ層 ローム漸移層。低地では黒色土と粘土ブロックの混土。

Ⅴ層 微高地はローム層、低地は浅いローム(再堆積)またはシルト層。

(註1) 浅間山を起源とする降下軽石で天仁元年(1108)降下と考えられている。

(註2) 浅間山を起源とする降下軽石で4世紀初めに降下したと考えられている。

(註3) 浅間山を起源とする降下軽石で天明三年(1783)の降下。



第5図 基本土層図

## 3. 遺構と遺物

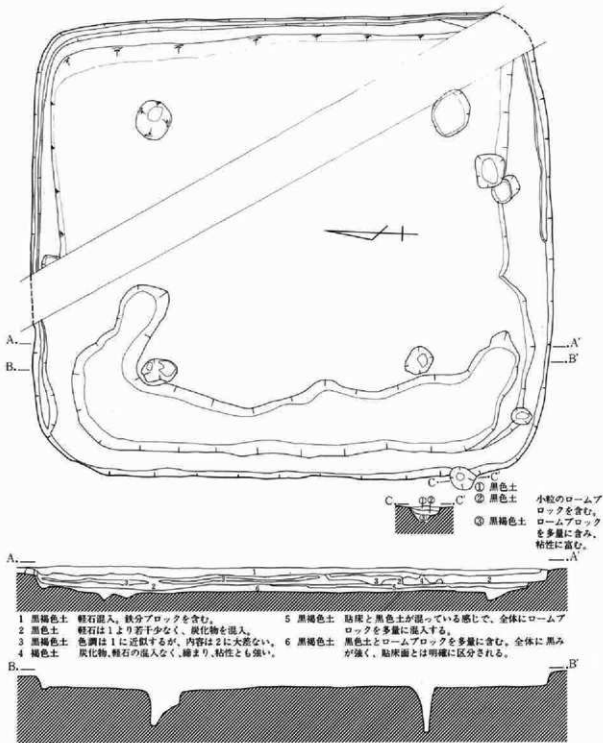
検出された遺構の内訳は竪穴住居址14軒、方形溝溝墓1基、土壇35基、掘立柱建物址5棟、小竈遺構1、溝22条である。その他近世の溝、掘り込み等により遺構の遺存状況は余り良くなかった。

### (1) 住居址

検出した総軒数は14軒である。時期別に見ると、古墳時代初頭が3軒、奈良・平安時代が8軒、不明3軒である。この内5・9・10・11号住居址については遺存状況が極めて悪く、住居址一部分のみの調査である。

#### 1号住居址 (第6図)

本住居址はC区西拡張区49-54-C45-D00グリッドにて検出した。西側半分が調査区外へ延びていたためにその部分は後日調査を行った。平面形状はやや南北に長い隅丸長方形を呈し、規模は830×726cmで壁高は平均20cm、主軸方位はN-5°-Wである。本遺跡で検出された住居址中最大規模を持つ。床面は比較的平

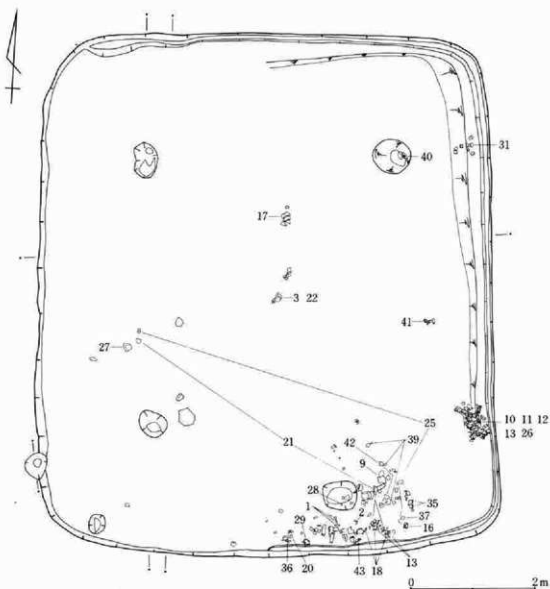


第6図 1号住居址

0 2m

坦であるが最初に調査を行った北側半分については床面の確認が困難であった。各壁の掘り込みは垂直に近い。壁周溝は幅10-15cmで北側半分程に廻る。柱穴はほぼ対角線上に4本が検出された。それぞれの規模は Pit 1 が57×37cm、深さ55cm。Pit 2 が46×39cm、深さ73cm。Pit 3 が76×60cm、深さ16cm。Pit 4 が60×57cm、深さ39cmである。炉は中央やや北よりに検出された。地床が焼土が若干認められた。遺物は住居址の南東コー

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第7図 1号住居址遺物出土状態

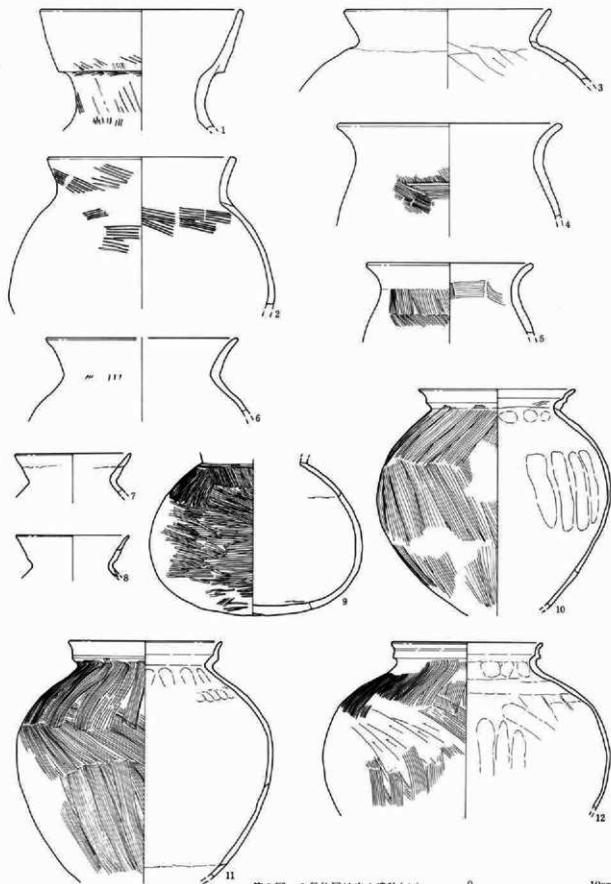
ナ一部分にS字溝、高坪、器台等が多く出土したが、ほとんどが床面との間に間層を挟む。時期は古墳時代初頭に比定される。

表 2 1号住居址遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	壺	口径 16.2 器高 — 底径 —	頸部は直気味に立ち、折り返し部はやや内彎気味に外へ開く。	外面 口縁部刷毛目後、横筋巻き。頸部縦刷毛目。 内面 横刷毛目後、横筋巻き。	砂粒を混入やや軟弱	橙色	
2	甕	口 15.0 高 — 底 —	肩部余り強らず、頸部縮く締まり口縁部外反する。	口縁部 内面横撫で、外面斜め刷毛目 外面 胴部縦刷毛目。 内面 胴部横撫で、上部横刷毛目。	小石 (5mm前後) 混入やや軟弱	橙色	
3	甕	口 (16.1) 高 — 底 —	丸みのある肩部より、口縁部は狭く「く」の字に外反する。	外面 口縁部横撫で。肩部縦撫で。 内面 肩部縦撫で。	砂粒を含む良	橙色一部黒褐色	

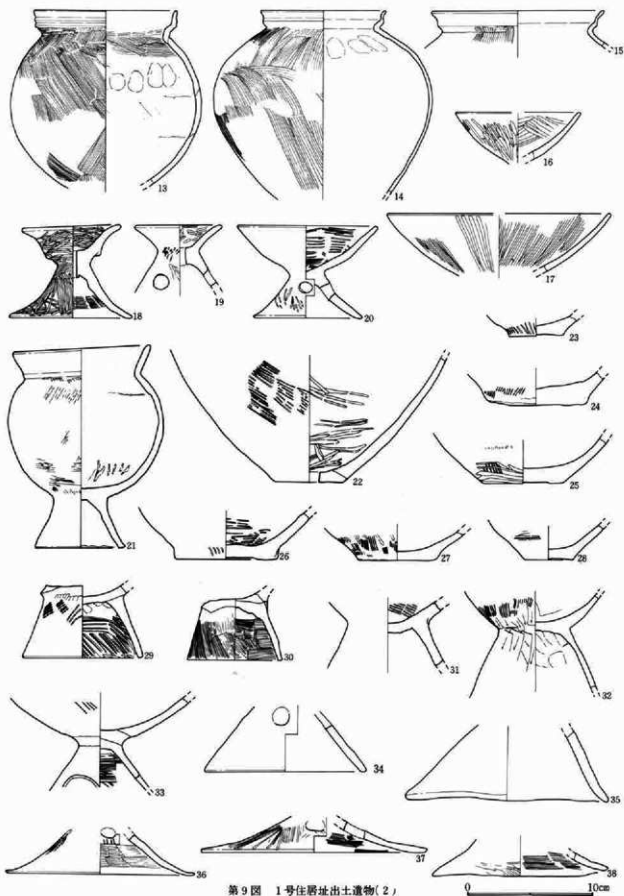


3. 遺跡と遺物



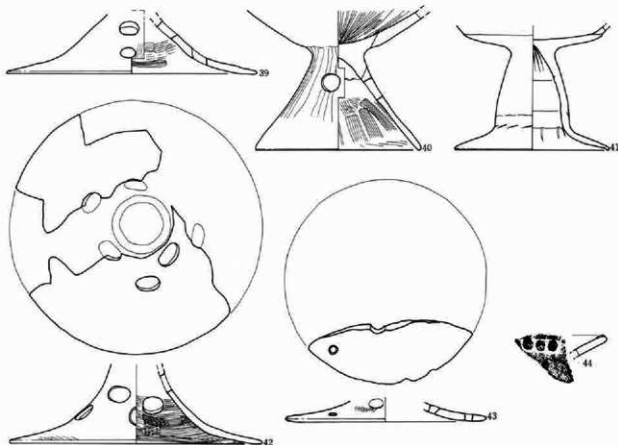
第8図 1号住居址出土遺物(1)

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第9図 1号住居址出土遺物(2)

3. 遺跡と遺物



第10図 1号住居址出土遺物(3)

0 10cm

番号	器種	流量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	粘土・焼成	色調	備考
4	壺	口径 (18.0) 器高 — 底径 —	頸部丸みを持って外反する。	口縁部 横撫で。 外面 斜め刷毛目。 内面 荒撫で。	細砂粒を含む	褐色	
5	壺	口 (13.2) 高 — 底径 —	なだらかな肩部からやや締まり、口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 刷毛目横撫で。	小石を混入良	褐色	刷毛目粗い
6	壺	口 (15.3) 高 — 底 —	頸部「く」の字にくびれ、口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 調整不明。 内面 刷毛目。	砕粒・石粒(1~2mm)含む 普通	褐色	器外面荒れている
7	小型壺	口 (9.2) 高 — 底 —	頸部「く」の字にくびれ口縁部外反する。口唇部薄くなる。	口縁部 横撫で。	細砂粒を混入良	褐色	
8	小型壺	口 (9.0) 高 — 底 —	頸部「く」の字にくびれ口縁部やや膨らみを持って外反する。	口縁部 横撫で。	細砂粒を混入良	褐色	
9	壺	口 — 高 — 底 2.2	胴部下位で膨らみ、最大径を持つ。底部は平に近い丸底を呈し、中央が丸く凹む。	外面 頸部横荒磨き。肩部縦荒磨き。 胴部中位下斜め又は横荒磨き。 内面 横撫で。	微細砂粒混入 堅緻	下部黒褐色、上部淡褐色	
10	S字壺	口 12.3 高 — 底 —	口縁部開き気味に立ち、肩部外反する。胴部丸みを持ち上半部に最大径。	口縁部 横撫で。 外面 斜め刷毛目。 内面 縦撫で、頸部刷毛目後荒撫で。	砕粒を含む良	暗赤褐色	
11	S字壺	口 (12.0) 高 — 底 —	口縁部開き気味に立ち、肩部外反する。胴部丸みを持ち上半部に最大径。	口縁部 横撫で。 外面 斜め刷毛目。 内面 指撫で、肩部指押え痕。	石粒(2~3mm)を混入良	灰褐色	
12	S字壺	口 (12.0) 高 — 底 —	口縁部直気味に立ち、肩部やや外反。胴上半部に最大径を持ち、肩部膨る。	口縁部 横撫で。 外面 斜め刷毛目、一部荒磨り。 内面 縦撫で、頸部横荒撫で。	砕粒・石粒を少量混入良	黒褐色	

Ⅲ. 下舟田・流川A遺跡

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
13	S字甕	口径 11.4 器高 — 底径 —	球形の胴部、胴部「く」の字に續まり、口縁部はほぼ直に立つ。外面に浅い凹線をも本持つ。	口縁部 横撫で。 外面 胴部縦い斜め刷毛目。 内面 胴部斜め筋割り、肩・胴部横刷毛目。	糠砂(1~5mm)を多量に含む 良	橙色	
14	S字甕	口 10.0 高 — 底 —	口縁部直気味に立ち、口唇部やや外反。胴部やや上位で最大径を持つ。	口縁部 横撫で。 外面 胴部刷毛目。 内面 指撫で肩部指押え、胴部横撫で。	口縁・石粒を含む 良	暗赤褐色	
15	S字甕	口 (13.8) 高 — 底 —	口縁下段外傾し、上段は外反する。	口縁部 横撫で。 外面 斜め刷毛目。 内面 指撫で。	石粒・砂粒を含む 良	にぶい黄褐色	
16	高坏	口 (10.0) 高 — 底 —	やや丸みを持って外反する。	外面 縦走磨き。 内面 横走磨き。	細砂粒を含む 良	灰黒色	坏部のみ
17	高坏	口 (18.0) 高 — 底 —	内野気味に外傾して立ち上がる。	外面 口縁横、以下縦走磨き。 内面 縦走磨き。	砂粒を含む 良	橙色	坏部のみ
18	器台	口 7.5 高 7.2 底 9.7	器受け部は段を持ち外反する。胴部は「ハ」の字に開き、筋は大きく開く。	外面 器受け部横走磨き、脚部刷毛目後走磨き。 内面 器受け部横走磨き脚部横刷毛目。	細砂・粗砂を含む 良	橙色	
19	器台	口 7.0 高 — 底 —	器受け部は小さく、直線的に開く。円形の通し孔3個。	外面 器受け部上横撫で、以下縦走磨き。 内面 器受け部走磨き、脚部横撫で。	細砂粒を含む 良	橙色	
20	高坏	口 (11.2) 高 7.3 底 8.3	杯部直線的に外傾する。脚部は「ハ」の字に開き低い。円形の通し孔3個。	外面 坏部、脚部ともに縦走磨き。 内面 坏部横刷毛目後走磨き、脚部横撫で。	砂粒を混入 堅緻	褐色	
21	小型台付甕	口 11.0 高 15.8 底 7.2	胴部は丸みを持って立ち上がる。台部は外へ開く。	外面 胴部横撫で、台部縦走磨き。 内面 胴部・台部ともに横撫で。	砂粒を混入 やや軟弱	橙色	
22	甕	口 — 高 — 底 (5.5)	平底から胴部縦く内野して外傾する。孔は一つで径1cm。	外面 刷毛目後走磨で。 内面 走磨き。	小石を混入 堅緻	赤褐色	底部のみ
23	小型甕	口 — 高 — 底 4.1	小さな底部から胴部は開く。	外面 刷毛目、底面走磨き。 内面 刷毛目。	小石を混入 堅緻	褐色	底部のみ
24	壺	口 — 高 — 底 7.9	厚手で底面やや凹凸を持つ。	外面 刷毛目後走磨き、底面走磨き。 内面 走磨で。	砂粒を混入 普通	明褐色	底部のみ
25	甕	口 — 高 — 底 6.1	外傾して立ち上がる。底部外縁わずかに高まる。	外面 走磨き。 内面 走磨き。	小石を混入 堅緻	褐色 黒色	底部のみ
26	甕	口 — 高 — 底 8.0	厚みのある底部から外傾して立ち上がる。	外面 刷毛目後走磨き。 内面 刷毛目後走磨き。	砂粒を混入 やや軟弱	橙色	底面に積炭
27	壺	口 — 高 — 底 (6.0)	底部より外反して立ち上がる。	外面 刷毛目後走磨き。 内面 走磨き。	細砂粒を含む 良	にぶい橙褐色	底部のみ
28	甕	口 — 高 — 底 3.8	小さい底部から外傾して立ち上がる。	外面 走磨き。 内面 走磨で。	小石を混入 堅緻	淡褐色	底部のみ
29	台付甕	口 — 高 — 底 9.6	やや丸みを持って「ハ」の字に開く。	外面 横撫で。 内面 台部斜め刷毛目。	砂粒を混入 堅緻	褐色	台部のみ
30	台付甕	口 — 高 — 底 (7.2)	「ハ」の字に開く。	外面 斜め刷毛目。 内面 壺底部走磨き、台部横刷毛目。	砂粒を混入 堅緻	褐色	台部のみ
31	台付甕	口 — 高 — 底 —	「ハ」の字に開く台部。	外面 横撫で。 内面 底部刷毛目、台部横撫で。	砂粒を混入 堅緻	黒褐色	台部のみ
32	S字甕	口 — 高 — 底 —	「ハ」の字に開く台部から、「く」の字に折れ、外傾する胴部へ続く。	外面 筋割り後刷毛目。 内面 底面横撫で、台部指撫で。	砂粒を多く含む 良	にぶい橙褐色	台部のみ

## 3. 遺跡と遺物

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	底・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
33	高坏	口径 — 器高 — 底径 —	坏部は直線的に外へ開く。脚部も直線的に開く。円形の透し孔3個あり。	外面 胎磨き。 内面 坏部不明、脚部横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙褐色	外面風化している
34	高坏	口径 — 器高 — 底径 (13.0)	「ハ」の字に直線的に開く。円形の透し孔。	外面 胎磨き。 内面 胎無で。	砂粒・石粒を含む 良	橙褐色	脚部のみ
35	高坏	口径 — 器高 — 底径 (16.2)	「ハ」の字に開くが、焼き歪みを生じている。	外面 器面荒れており、調整痕不明。 内面 器面荒れており、調整痕不明。	砂粒を多量に混入	にぶい橙褐色	二次焼成受け発泡陶の一部
36	高坏	口径 — 器高 — 底径 15.1	大きく裾部広がる。円形の透し孔4個あり。	外面 刷毛目後縦磨き。 内面 横刷毛目。	砂粒を含む 良	橙褐色	脚部のみ 器面風化
37	高坏	口径 — 器高 — 底径 (18.0)	横へ開く裾部。円形の透し孔。	外面 縦磨き。 内面 横刷毛目、端部縦磨き。	砂粒・石粒を含む 良	橙褐色	脚部のみ
38	高坏	口径 — 器高 — 底径 (14.0)	やや膨らみを持って外へ開く。	外面 刷毛目。 内面 横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙褐色	脚部のみ 焼き歪み有り
39	高坏	口径 — 器高 — 底径 20.0	大きく裾部広がる。円形の透し孔を2段に付す。	外面 胎磨き。 内面 横刷毛目。	砂粒を混入 やや軟弱	橙褐色	脚部のみ
40	高坏	口径 — 器高 — 底径 13.0	坏部やや丸みを持って開く。脚部大きく「ハ」の字に開く。円形の透し孔3個あり。	外面 胎磨き。 内面 坏部胎磨き、脚部斜め刷毛目。	礫砂・粗粒を多量に含む やや甘い	橙褐色	脚部のみ
41	高坏	口径 — 器高 — 底径 (12.4)	坏部は横へ開き弱い縁を持つ。柱部は膨らみを持ち裾部は横へ開き端部内側へ折れる。	外面 胎磨き。 内面 胎無で、接合部紋目残る。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙褐色	脚部のみ
42	高坏	口径 — 器高 — 底径 20.0	大きく裾部広がる。円形の透し孔8個あり。	外面 胎磨き。 内面 上半胎無で、下半横刷毛目。	細砂粒を混入 堅緻	にぶい橙褐色	脚部のみ
43	高坏	口径 — 器高 — 底径 (16.0)	横へ開く裾部。円形の透し孔。	外面 胎磨き。 内面 胎磨き。	小石を多量に含む 不良	橙褐色、裾部黒褐色有り	脚部のみ 裾部に補修孔?
44	壺	口径 — 器高 — 底径 —	直線的に外反。	口縁部 横無で。 内縁部に円形浮文。	砂粒を混入 普通	橙褐色	口縁部破片

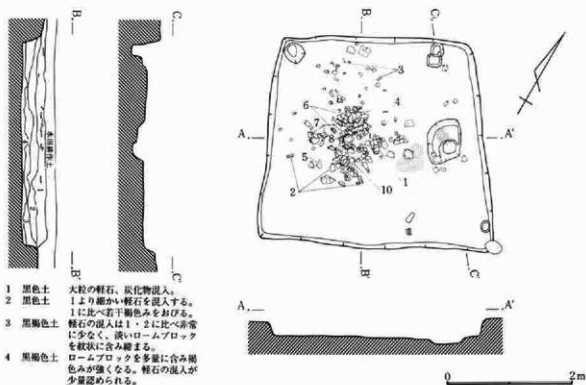
## 2号住居址(第11図)

調査区37-38-D03-04グリッドに位置する。平面形状は小形で南辺がやや長い台形を呈し、規模は345×335cmで壁高は27cmである。主軸方位はN-36°-Wである。各壁は垂直に近く掘り込まれている。柱穴は不明であるが、北辺の両隅に小ピットが見られた。床面は比較的平坦である。炉は中央やや東よりに焼土が見られ、東側に接して40×30cm程の浅い掘り込みがある。出土遺物はほぼ中央に壺類を中心にまとまった状態で出土したが、いずれも覆土層からの出土である。時期は古墳時代初期である。

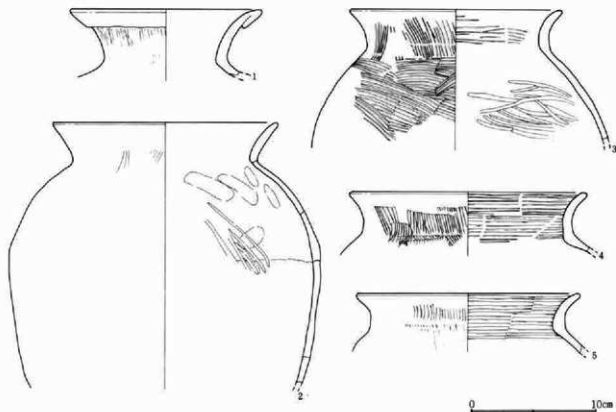
表 3 2号住居址遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	底・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	壺	口径 (15.3) 器高 — 底径 —	口縁部やや外傾して立ち上がり端部外反する。口縁部折り返し。	外面 折り返し部分横無で、頸部縦刷毛目。 内面 刷毛目後胎無で。	微細砂粒を含む 良	橙褐色	
2	壺	口径 (18.0) 器高 — 底径 —	口縁部外反、頸部で「く」の字に締まり、胴上位でやや膨らむ。	外面 刷毛目。 内面 胎無で、肩部指頭圧痕。口縁部内面 刷毛目。	砂粒・石粒を多量に含む 良	にぶい橙褐色	器面荒れている
3	壺	口径 (16.9) 器高 — 底径 —	口縁部端部が外反。肩部横く開く。	口縁部 端部横、胴部斜め刷毛目。 外面 胴部横、胴部斜め刷毛目。 内面 刷毛目後胎磨き。	砂粒・石粒(1-2mm)を含む 不良	にぶい黄褐色、胴灰色混り	

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

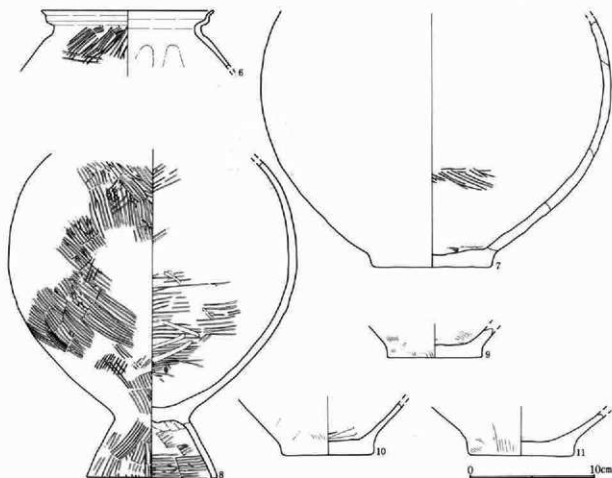


第11図 2号住居址



第12図 2号住居址出土遺物(1)

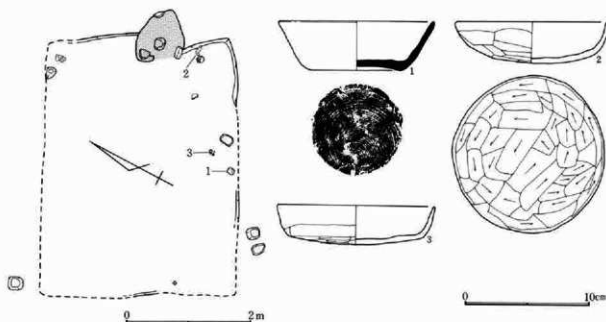
## 3. 遺跡と遺物



第13図 2号住居址出土遺物(2)

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
4	壺	口径 (19.0) 器高 — 底径 —	胴部短く直に立ち上がり、口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 縦刷毛目。 内面 頸部横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	
5	壺	口 (18.0) 高 — 底 —	口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 縦刷毛目。 内面 横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい黄褐色 —にぶい黄褐色	
6	S字壺	口 (13.3) 高 — 底 —	口縁部下位やや外傾し、上段外反する。	口縁部 横撫で。 外面 粗い刷毛目。 内面 匙撫で、縦指撫で。	砂粒・石粒を含む 良	暗赤褐色 —褐色。 内面褐色	
7	壺	口 — 高 — 底 9.1	厚みのある丸底から胴部丸みを持って立ち上がり、中位で最大径を持つ。	外面 一部磨き面が認められる。 内面 横刷毛目後指撫で。	砂粒・石粒を多量に含む 不良	褐色—黒褐色	器面荒れている
8	台付壺	口 — 高 — 底 (10.5)	胴中位で最大径を持ち、下部で締まる。台部は直線的に「ハ」の字に開く。	外面 胴部斜め刷毛目。台部も同様。 内面 胴部刷毛目後指撫で。台部指撫で。下部横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 普通	にぶい褐色—黄灰色 色退り	
9	壺	口 — 高 — 底 7.5	厚手の底部から外反して立ち上がる。	外面 刷毛目、底面磨き。 内面 刷毛目。	砂粒・石粒を少量含む 良	褐色、外面 面噴炭有り	底部のみ
10	壺	口 — 高 — 底 (7.5)	厚手の底部から外反して立ち上がる。	外面 刷毛目。 内面 匙撫で。	砂粒・石粒を混入 良	褐色	底部のみ
11	壺	口 — 高 — 底 8.4	平底から胴部外傾して開く。	外面 刷毛目。 内面 器面荒れて調整不明。	1-2mmの石粒を含む 良	褐色	底部のみ

### Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第14図 3号住居址・出土遺物

#### 3号住居址 (第14図)

48-50-B42-43グリッドに位置する。平面形状は隅丸長方形を呈すと思われるが、北、西および南側は削平を受けている。このため壁高については東壁で僅かに計測されたのみである。規模は(420)×(313)cmである。竈は東壁の中央やや南寄りに築かれているが遺存状態は極めて悪い。両輪部に竈の芯材に用いられたと思われる石が見られ、中央に小ピットが検出されている。竈内には全面に焼土が残る。柱穴、貯蔵穴等は検出されなかった。出土遺物は少なく、竈付近において須恵器杯1、土師器杯2点が出土しているのみである。時期は平安時代である。

表 4 3号住居址遺物観察表

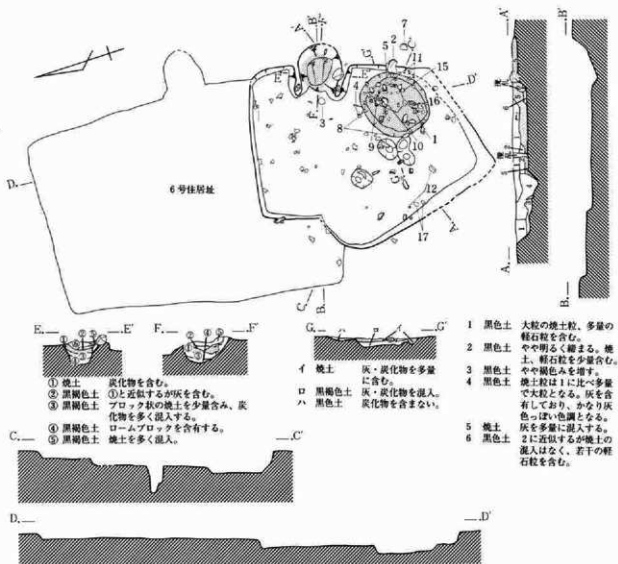
番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	成・整形の特 徴	粘土・焼成	色 調	備 考
1	須恵器杯	口径 12.5 器高 3.9 底径 7.2	やや上げ底状の底部から体部直線的に開く。	体部 横撫で。 底部 ロク右回転糸切り。	砂粒・石粒を含む 良	灰白色	
2	杯	口 12.0 高 3.3 底 —	底部やや丸みを持ち、口縁部内彎する。	口縁部 横撫で。 底部 手持ち彫削り。	砂粒・石粒を含む 良	ぶい燈色	
3	杯	口 12.6 高 3.1 底 10.2	底部ほぼ平らで体部わずかに丸みを持って立ち上がり、口縁部は直線的。	口縁部 横撫で。 底部 手持ち彫削り。	砂粒・石粒を含む 良	ぶい燈色	

#### 4号住居址 (第15図)

29-31-B46-47グリッドにて検出した。北側半分が6号住居址に重複する。形状は南および西側は掘乱等で確認が困難であったために結果的に不規則に張り出した不定形を呈している。現況での規模は(349)×(265)cmで壁高は最大で24cmである。床面はかなり荒れた状態で正確な面は検出されなかった。柱穴は確実なものは見られなかった。貯蔵穴と思われる掘り込みが竈右側に検出された。上面に焼土を伴う。規模は径90cm、深さ15cm程である。出土遺物は坏類を中心に散在した状況で出土している。時期は平安時代である。



3. 遺跡と遺物



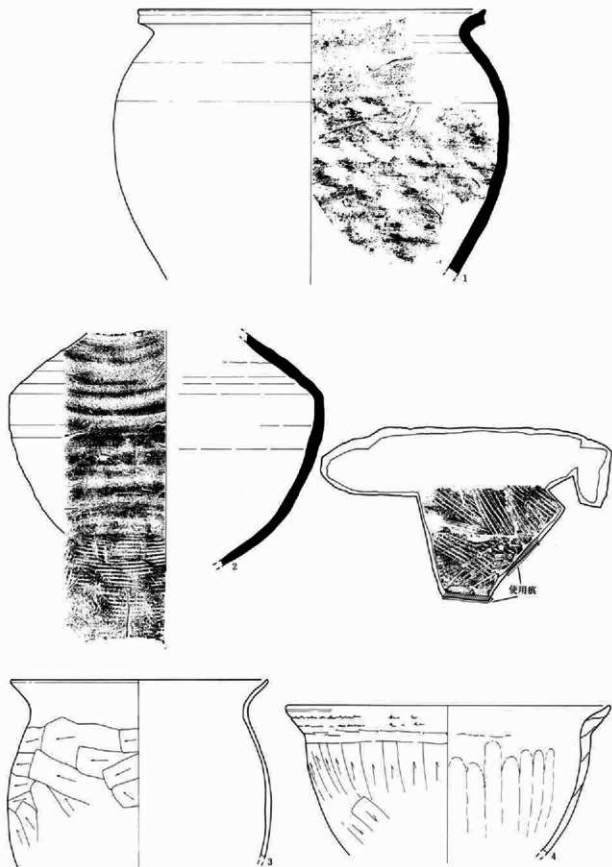
第15図 4号住居址

0 2m

表 5 4号住居址遺物観察表

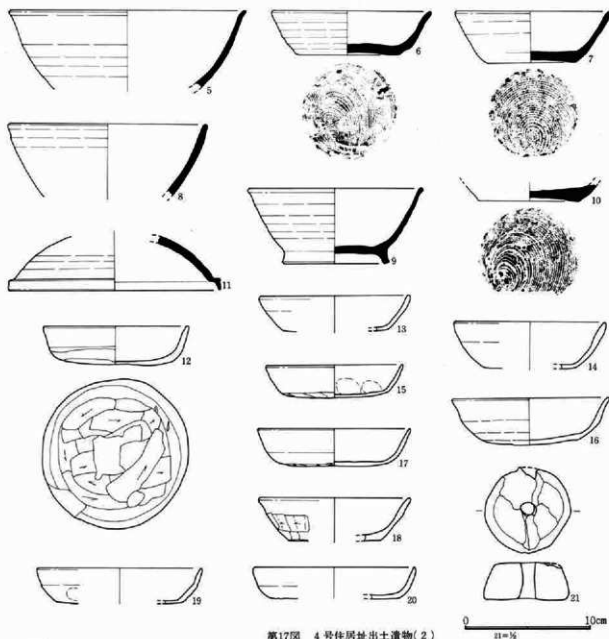
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	底・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	須恵器壺	口径 (27.7) 器高 — 底径 —	胴上位に最大径を持つ。頸部で縮まり、口縁部外反し、口唇部は断面三角形を呈す。	口縁部 横撫で、胴部ロクロ成形。 内面 胴部に指押え痕。	砂粒・石粒を多量に含む	黄灰色	
2	須恵器壺	口径 — 最大径 (25.1) 底 —	胴部丸みを持って立ち上がり、胴部で最大となり「く」の字に屈曲する。	外面 ロクロ痕、下半部平行明き目。 内面 上半部横撫で、下半部かき目。	砂粒をわずかに含む	灰白色	
3	壺	口径 (20.7) 器高 — 底 —	胴部わずかに膨らみ、口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 胴部削り。 内面 横撫で。	砂粒・石粒を含む	褐色	
4	壺	口径 (26.0) 器高 — 底 —	胴部わずかに膨らみを持って立ち上がり、胴部「く」の字にくびれ口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 胴部 削り、輪痕が見られる。 内面 横撫で。	砂粒・石粒を含む	にぶい暗一明赤褐色	
5	須恵器鉢	口径 (18.9) 器高 — 底 —	わずかに丸みを持って立ち上がり、口縁部やや外反する。	ロクロ成形。	砂粒・石粒を含む	灰白色	

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第16图 4号住居址出土遺物(1)

## 3. 遺跡と遺物



第17図 4号住居址出土遺物(2)

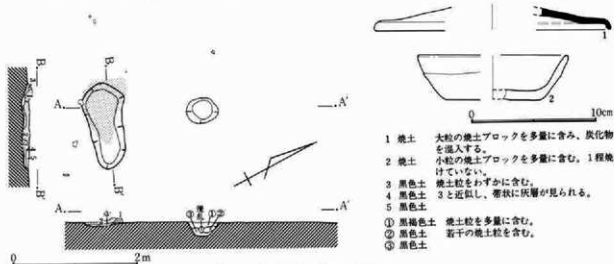
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
6	須恵器坏	口径 12.9 器高 3.5 底径 8.0	腰にわずかな屈曲を持って立ち上がる。口径部わずかに外反する。	体部 ロクロ水引き痕。 底部 ロクロ右回転切り放し。	砂粒・石粒を含む 良	灰白色	
7	須恵器坏	口径 12.4 高 4.0 底 7.1	平底から体部逆「ハ」の字に開く。	体部 ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転切り放し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	
8	須恵器坏	口径 (16.0) 高 — 底 —	わずかに丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。	砂粒・石粒を含む 良	黧灰色～ 灰黄褐色	
9	須恵器碗	口径 (14.0) 高 6.0 底 8.6	やや開く高台を持ち、体部ゆるく内彎気味に立ち上がる。口径部丸みを持って外反する。	ロクロ成形。 底部 糸切り後、匙調整か。	砂粒・石粒(2～4mm)混入 やや軟質	浅黄色	
10	須恵器坏	口径 — 高 — 底 8.0	やや上げ底の底部。	底部 ロクロ右回転切り放し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	底部のみ

Ⅳ. 下齊田・流川A遺跡

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
11	須恵器蓋	口径 (17.0) 器高 — 底径 —	体部内野気味に立ち上がり、 端部張り出して直に立つ。	体部 ロク口成形。 天井部 鋭削り。	砂粒・石粒 を含む 良	灰色	
12	坏	口径 11.6 高 3.0 底 9.0	ほぼ平底で腹部は丸みを持つ。 口縁部やや外傾して立ち上がる。	底部 手持ち鋭削り。 口縁部 横撫で。	砂粒・石粒 を含む 良	褐色	
13	坏	口径 (12.1) 高 (2.8) 底 (8.5)	丸みを持って立ち上がる。	口縁部 横撫で。 体部 鋭撫で。 底部 鋭削り。	細砂粒を含む 良	にぶい褐色	
14	坏	口径 (12.2) 高 (3.7) 底 (7.2)	体部やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部 横撫で。 体部 鋭撫で。	細砂粒をわずかに含む 良	褐色	
15	坏	口径 (11.0) 高 (2.6) 底 (8.5)	体部外傾して立ち上がる。	口縁部 横撫で。 底部 鋭削り。	細砂粒を含む 良	にぶい赤褐色	
16	坏	口径 (12.6) 高 (3.7) 底 (7.6)	ほぼ平底で、体部はやや丸み を持って立つ。口縁部やや外 反する。	口縁部 横撫で。 体部 鋭撫で。 底部 鋭削り。	砂粒・石粒 を含む 良	褐色	
17	坏	口径 (12.3) 高 (3.0) 底 8.4	平底から丸みを持って体部と なる。やや外傾して立ち上 がる。	口縁部 横撫で。 体部 鋭撫で。 底部 鋭削り、内面見込み部鋭撫で。	砂粒・細砂 粒を含む 良	褐色	
18	坏	口径 (12.2) 高 (3.5) 底 (7.4)	体部やや丸みを持って立ち上 がる。	口縁部 横撫で。 体部 鋭撫で。 底部 鋭削り。	砂粒をわず かに含む 良	褐色	
19	坏	口径 (13.2) 高 (2.8) 底 (10.0)	体部やや丸みを持って立ち上 がる。	口縁部 横撫で。 体部 鋭撫で。 底部 鋭削り。	細砂粒を含む 良	明赤褐色	
20	坏	口径 (13.0) 高 (2.5) 底 (10.2)	丸みを持って立ち上がる。口 唇部内野。	口縁部 横撫で。 体部 鋭撫で。 底部 鋭削り。	砂粒を含む 良	にぶい褐色	
番号	出土位置	器種	法量 (cm・g)	石材	備 考		
21	4号住居	紡錘車	4.6×4.5×2.0 43.9	流紋岩	一部破損。周辺に若干の製作用、孔の径9mm。		

5号住居址 (第18図)

焼土の範囲を確認したのみである。平面形状、規模共に不明である。焼土は南北に長く100×70cmの範囲で検出した。焼土下に120×80cm、深さ10cmの浅い掘り込みを検出。さらに北側1.2mの所に径40cm、深さ20cm程のピットが見られる。遺物は蓋と坏の破片が出土しているが本遺構に伴うものか確定は出来ない。住居

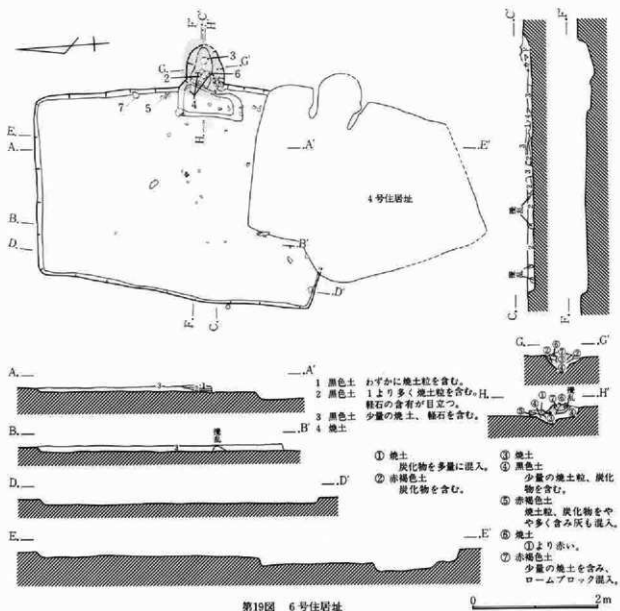


第18図 5号住居址・出土遺物

址としたが若干の疑問も残る。時期は不明。

表 6 5号住居遺物観察表

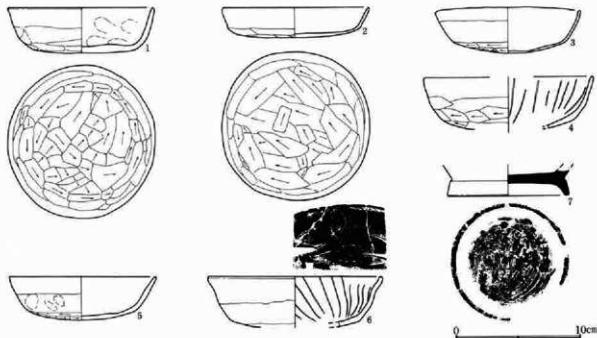
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	須恵器蓋	口径 (19.0) 器高 — 底径 —	体部やや直線的に開き、端部 屈曲して立つ。	口クロ成形。	砂粒・石粒 を含む 良	灰色	
2	杯	口 (12.0) 高 (3.6) 底 (7.5)	平底から体部外傾して立つ。	口縁部 横撫で。 体部 直撫で。 底部 削り。	砂粒を含む 良	にぶい靑 色	やや厚手



Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

6号住居址 (第19回)

28-31-C47-50グリッドに位置する。南側に4号住居址が重複する。平面形状は長方形を呈すが、南辺がやや広がる。規模は450×345cmである。壁高は最大で12cmと浅い。床面は平坦で、柱穴、貯蔵穴は見られない。竈は東壁中央やや南寄りに築かれている。焚き口幅約35cmで住居址外へ80cm程掘り出されている。焼土と若干の炭化物が見られた。また竈前面に長円形の落ち込みが検出されている。遺物は竈周辺に坏類が出土している。時期は平安時代である。

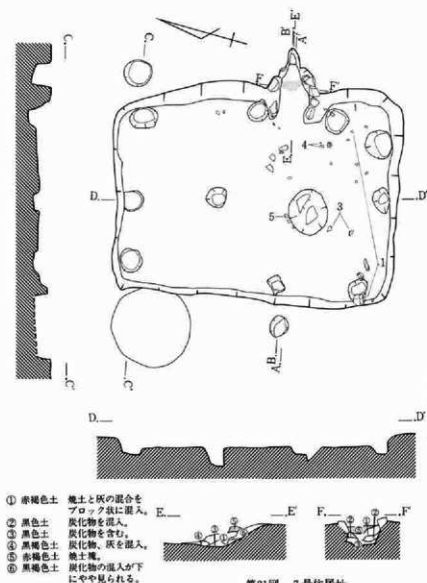


第20図 6号住居址出土遺物

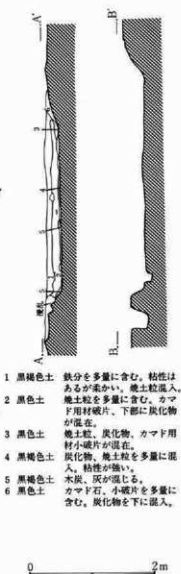
表 7 6号住居址遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	坏	口径 11.6 器高 3.6 底径 8.6	平底で口縁部やや丸みを持って立ち上がり口縁部外傾する。	口縁部 横撫で。 体部 丸撫で。 底部 豊削り。	砂粒を含む 良	褐色	定形
2	坏	口径 11.8 高 2.4 底 8.4	ほぼ平底で口縁部外傾して立ち上がる。	口縁部 横撫で。 体部 丸撫で。 底部 豊削り。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい 褐色	
3	坏	口径 11.6 高 3.6 底 —	底部やや丸みを持つ。口縁部やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部 横撫で。 底部 豊削り。	砂粒・石粒 を含む 普通	褐色	
4	坏	口径 (13.6) 高 — 底 —	底部やや丸みを持ち、体部から口縁にかけてやや丸みを持って立ち上がる。	口縁部 横撫で。 底部 豊削り。	砂粒・石粒 を含む 良	褐色	内面放射 状暗文有 り
5	坏	口径 (11.8) 高 3.5 底 —	底部やや丸みを持ち、口縁部外傾して立ち上がる。	口縁部 横撫で。 底部 豊削り。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい 褐色	
6	坏	口径 (13.8) 高 — 底 —	体部から口縁にかけて、ゆるくS字状になって立ち上がる。	口縁部 横撫で。 体部 丸撫で。 底部 豊削り。	砂粒を含む 良	褐色	細沈線に よる放射 状暗文
7	須恵器 高台付残	口径 — 高底 9.5	やや外傾、「ハ」の字に開く高台が付く。	底部 ロクロ右回転糸切り。	石粒 (5mm) を含む 良	灰黄一部 紫褐色	付け高台

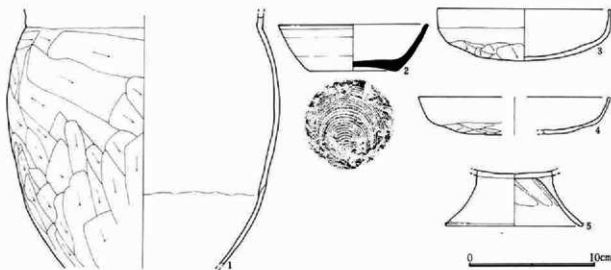
3. 遺構と遺物



第21図 7号住居址

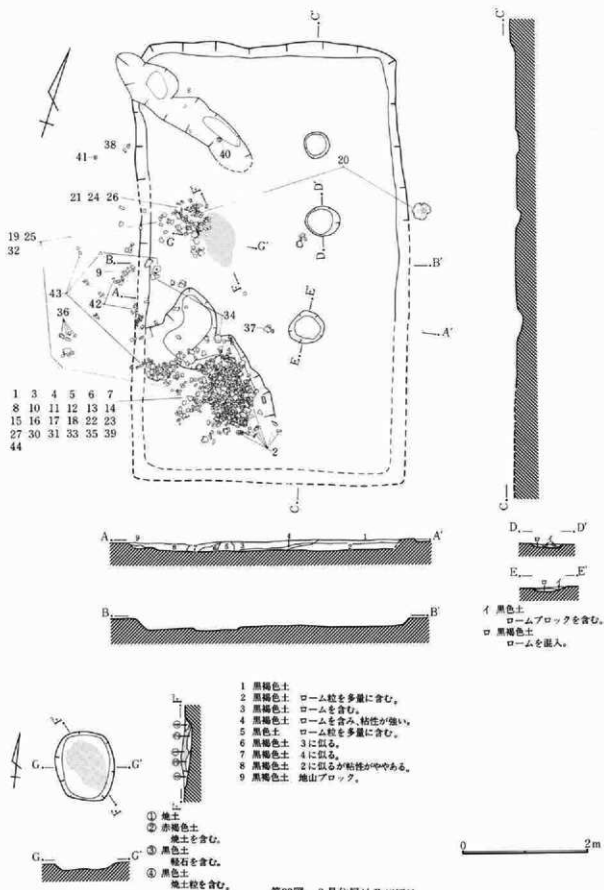


- 1 黒褐色土 鉄分を多量に含む。粘性はあるが柔かい。焼土粒混入。焼土粒を多量に含む。カマド用材破片、下部に炭化物が混在。
- 2 黒色土 焼土粒を多量に混入。粘性が強い。
- 3 黒色土 炭化物、灰を混入。カマド用材小破片が混在。
- 4 黒褐色土 炭化物、焼土粒を多量に混入。粘性が強い。
- 5 赤褐色土 木炭、灰が混じる。
- 6 黒色土 カマド石、小破片を多量に含む。炭化物を下に混入。



第22図 7号住居址出土遺物

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第23図 8号住居址及び炉址



## 3. 遺構と遺物

## 7号住居址(第21図)

35-37-D00-02グリッドに位置する。平面形状は隅丸長方形を呈し、規模は448×340cmで壁高は25cmである。各壁は比較的直に立ち上がる。柱穴は中央に並んで2本、各壁に沿って9本が検出されている。貯蔵穴らしきものは見られない。竈は東壁中央南寄りに築かれている。両袖部に石の芯材を用いている。焚き口幅は30cmで、住居址外へ約50cm掘り出している。竈の埋土中には炭化物が比較的多く、焼土は少なかった。出土遺物は少なく、壺1、坏3、脚台部片が1点である。時期は平安時代である。

表 8 7号住居址遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	壺	口径 — 器高 3.7 底径 —	胴部はやや膨らみを持ち、頸部は直気味に立つ。	頸部 横撫で。 胴部 磨削り。 内面 磨撫で。	石粒を含む 良	暗赤褐色	
2	須恵器坏	口 (12.0) 高 3.7 底 7.1	やや上げ底で、やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部 成形。 底部 ロクロ石回転糸切り。	石粒を含む 良	暗灰色	
3	坏	口 13.6 高 4.1 底 —	やや丸底で、口縁部内野気味に立ち上がる。	口縁部 横撫で。 底部 磨削り。	砂粒・石粒を含む 良	ぶい赤褐色	
4	坏	口 (15.0) 高 — 底 —	口縁部やや内野気味に立ち上がる。	口縁部 横撫で。 底部 磨削り。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	
5	台付壺	口 — 高 — 底 (11.0)	外反しながら「ハ」の字に開く。	外面 横撫で。 内面 胴部底面磨撫で。台部横撫で。浴槽之痕有り。	砂粒を含む 良	明赤褐色	脚部

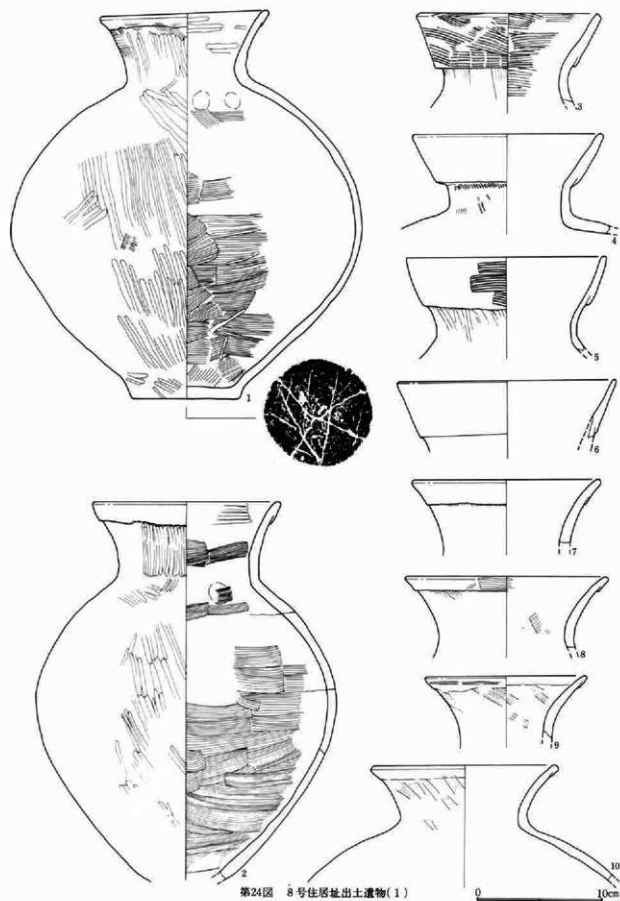
## 8号住居址(第23図)

30-33-D04-07グリッドに位置する。南北に長い長方形を呈すと思われるが南側半分は、攪乱等により壁、床面が削平されている。正確な範囲の確定はできないが、およその規模は(565)×420cmで、北壁で計測される壁高は約20cmである。床面は凹凸が目立ち、特に南側については顕著であった。主柱穴は不明であるが、径50cm程のピットが3本並んで検出されている。炉は中央やや西寄りに設けられている。60×50cm程の浅い円形の掘り込み中に焼土が検出されている。遺物はかなり多く、壺類を中心として南西部に集中して出土しているが、いずれも覆土上層からである。時期は古墳時代初頭である。

表 9 8号住居址遺物観察表

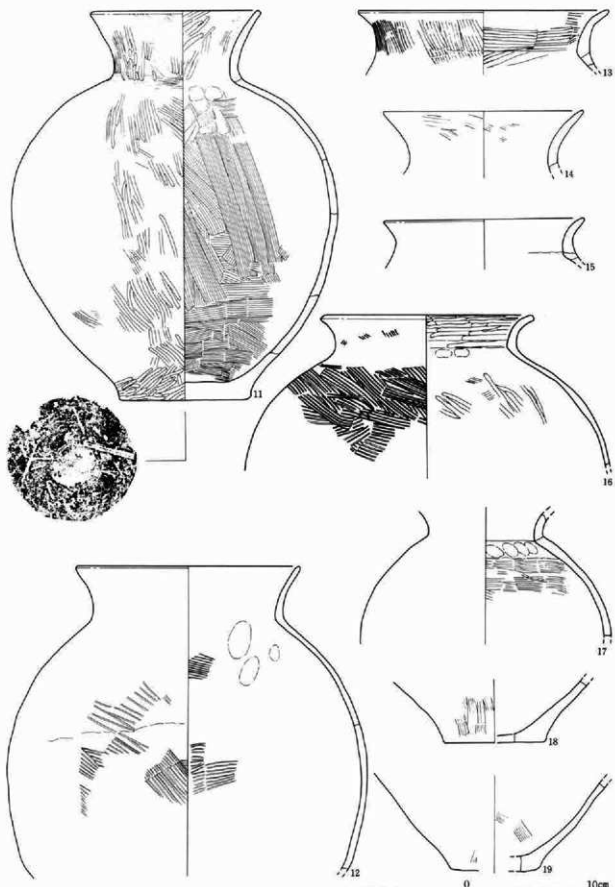
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	壺	口径 13.2 器高 30.1 底部 8.7	胴部膨らみ、中位に最大径を持つ。頸部は斜まり直立し、口縁部外反す。肩部折り返し。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目後版磨き。 内面 刷毛目。	砂粒を含む 良	褐色	底部木葉痕有り
2	壺	口 (14.9) 高 — 底 —	胴部膨らみ上半部に最大径を持つ。頸部直気味に立ち、口縁部外反し、肩部は折り返し。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目後版磨き。 内面 口縁上部磨き、胴部刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	褐色—黒褐色	胴部・肩部に黒痕
3	壺	口 14.7 高 — 底 —	頸部から口縁にかけてやや外傾して立ち上がる。二重口縁、口唇部や角張る。	外面 口縁、頸部ともに刷毛目、折り返し部下半に縷状文様の刷毛目。 内面 横刷毛目。	細砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色	
4	壺	口 (15.2) 高 — 底 —	二重口縁、頸部やや外傾して立ち上がり、口縁部開く。胴部は大きく開く。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目後版磨き。 内面 撫で。	砂粒・石粒を含む 良	褐灰色	
5	壺	口 (16.0) 高 — 底 —	口縁部やや内野して立ち上がる。二重口縁。	口縁部 外面横刷毛目、内面撫で。 外面 胴部横刷毛目。	石粒を含む 普通	褐色	

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第24図 8号住居址出土遺物(1)

3. 遺構と遺物

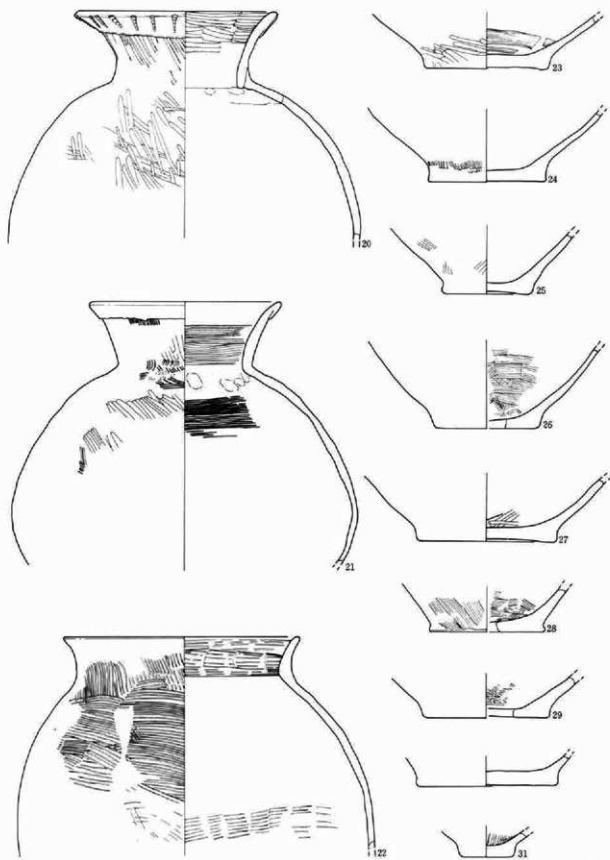


第25図 8号住居址出土遺物(2)

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

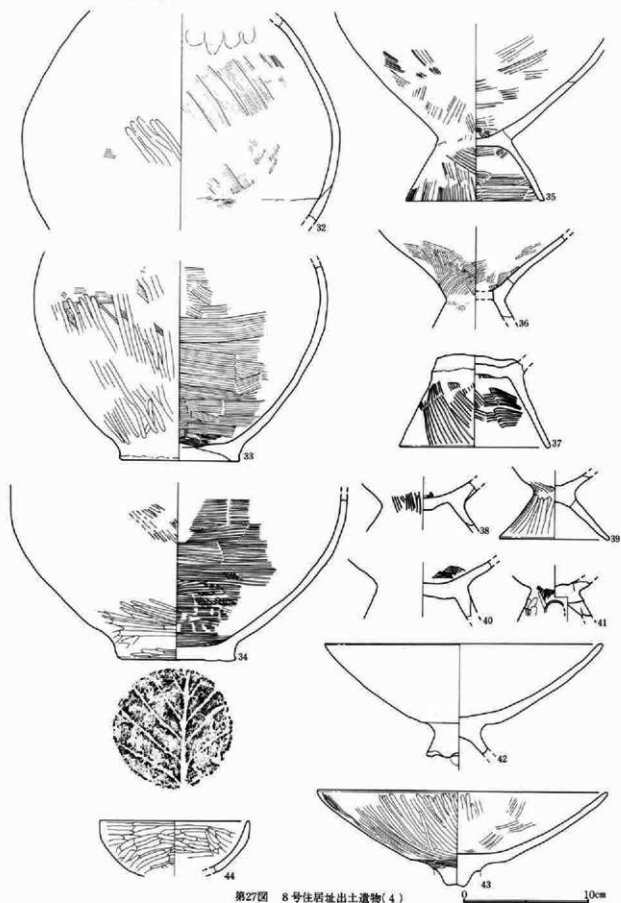
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
6	壺	口径 (17.6) 器高 — 底径 —	口縁部外傾して開く。二重口縁。	外面 刷毛目後磨き。 内面 刷毛目後磨き。	砂粒・石粒を含む やや不直	橙色	
7	壺	口 (15.0) 高 — 底 —	口縁部外傾して開く。折り返し口縁。	口縁部 端部横撫で。 外面 刷毛目後磨き。 内面 刷毛目後磨き。	砂粒・石粒を含む 良	橙色一部 灰色	
8	壺	口 (16.2) 高 — 底 —	頸部から口縁部にかけてやや外反する。口縁端部折り返し。	口縁部 折り返し部横刷毛目。 外面 頸部刷毛目後磨き。 内面 磨撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	にぶい橙色 一灰白色	
9	壺	口 (13.0) 高 — 底 —	外反して口縁端部折り返し。	口縁部 端部横撫で。 外面 斜め刷毛目。 内面 斜め刷毛目。	砂粒を含む 良	橙色	
10	壺	口 (15.0) 高 — 底 —	やや強肩部から、頸部は縋まり、口縁部外反する。口縁端部折り返し。	口縁部 端部横撫で。 外面 刷毛目後磨き。 内面 磨撫で。	砂粒を含む 良	灰褐色	
11	壺	口 13.1 高 30.8 底 10.5	胴部中位で最大径を持つ。頸部直立し、口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目後磨き。	砂粒・石粒(1-2mm)を含む 良	橙色一明 灰褐色	底部木葉痕あり
12	壺	口 (17.9) 高 — 底 —	胴部でやや膨らみ、頸部は縋まり、口縁部は外反。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 刷毛目後磨き。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	器面荒れ 胴部黒染
13	壺	口 20.1 高 — 底 —	頸部直に立ち、口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 頸部縦刷毛目。 内面 頸部横、肩部斜め刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色	
14	壺	口 (16.0) 高 — 底 —	外反して立ち上がる。	外面 横刷毛目。 内面 刷毛目後磨き。	砂粒を含む 良	橙色	
15	壺	口 (15.9) 高 — 底 —	口縁部外反、口唇部薄くなる。	口縁部 横撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい黄 橙色	
16	壺	口 17.0 高 — 底 —	肩部聞き頸部短く立ち、口縁部やや強く外反する。	口縁部 外面横撫で、内面磨撫で。 外面 刷毛目。 内面 磨撫で。	粗砂粒をわずかに含む 良	暗赤褐色 一明赤褐色	
17	壺	口 — 高 — 底 —	丸みを持った肩部から頸部直に立ち上がる。	外面 磨き。 内面 肩部横刷毛目、指押え痕。	砂粒・石粒多量に含む 良	橙色	
18	壺	口 — 高 — 底 ( 8.0)	胴部外反して立ち上がる。	外面 縦刷毛目。 内面 横刷毛目後磨き。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	
19	壺	口 — 高 — 底 ( 7.0)	胴部外傾して立ち上がる。	外面 器面荒れて不明。 内面 刷毛目。	粗い砂粒を含む 良	明黄褐色	
20	壺	口 16.0 高 — 底 —	胴部丸みを持つ。頸部で縋まり口縁部外反、端部折り返し。	口縁部 刷毛目状工具による連続刷毛目。 外面 刷毛目後磨き。 内面 頸、口縁部刷毛目、胴部磨撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色一部 灰褐色	胴部黒染
21	壺	口 14.8 高 — 底 —	胴部丸みを持つ。頸部直気味に立ち、口縁部外反、端部折り返し。	口縁部 横撫で。 外面 刷、頸部縦刷毛目後磨き。 内面 横刷毛目、肩部指押え痕。	砂粒を含む 良	橙色一部 黒褐色	
22	壺	口 (18.6) 高 — 底 —	胴部膨らみ、頸部でやや縋まり、口縁部は外反。	口縁部 端部横撫で。 外面 頸部縦、胴部斜め刷毛目。 内面 磨撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	灰色一部 にぶい橙色	
23	壺	口 — 高 — 底 9.6	平底から大きく外反して立ち上がる。	外面 磨撫で。 内面 刷毛目。 底面 磨き。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色 一部黒褐色	
24	壺	口 — 高 — 底 9.2	胴部外傾して立ち上がる。	外面 刷毛目後磨き。 内面 磨撫で。	石粒(2-3mm)を含む 普通	橙色	
25	壺	口 — 高 — 底 7.0	やや上げ底状の底部から胴部は外傾して立ち上がる。	外面 刷毛目後磨き。 内面 磨撫で。	砂粒・石粒を含む 普通	橙色	

3. 遺構と遺物



第26図 8号住居址出土遺物(3)

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

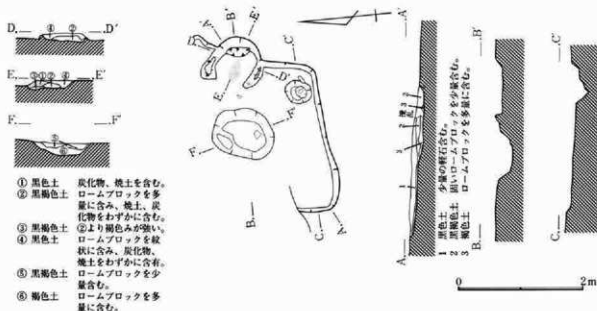


第27図 8号住居址出土遺物(4)

## 3. 遺構と遺物

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
26	壺	口径 — 器高 — 底径 (8.4)	厚手の底部からやや内彎気味に立ち上がる。	外面 肥磨き。 内面 刷毛目。	細砂粒をわずかに含む 良	褐色	
27	壺	口 — 高 — 底 11.0	大きめの平底から胴部内彎気味に立ち上がる。	外面 撫で。 内面 肥磨で。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	
28	壺	口 — 高 — 底 (9.2)	底部端が外へ張り出し、外傾して立ち上がる。	外面 刷毛目。 内面 刷毛目。 底面 肥磨で。	砂粒・細砂粒を含む 良	にぶい黄褐色	
29	壺	口 — 高 — 底 (10.0)	胴部外傾して立ち上がる。	外面 不明瞭。 内面 刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい黄褐色	
30	壺	口 — 高 — 底 11.0	大きめの平底から胴部外反して立ち上がる。	内・外面ともに器面荒れており、調整不明。	石粒(2-4mm)を含む 普通	にぶい褐色	
31	壺	口 — 高 — 底 4.0	小さく厚手の底部から胴部開く。	外面 肥磨き。 内面 肥磨き。	砂粒をわずかに含む 良	褐色	底部のみ
32	壺	口 — 高 — 底 —	胴部膨らみ、中位に最大径を持つ。	外面 肥磨き。 内面 刷毛目後撫で。	粗い砂粒を含む 良	明黄褐色	
33	壺	口 — 高 — 底 (9.6)	胴部丸く膨らみを持って立ち上がる。	外面 刷毛目後肥磨き。 内面 横刷毛目。	細砂粒をわずかに含む 良	褐色～にぶい褐色	胴下半部に黒斑
34	壺	口 — 高 — 底 9.4	厚みのある底部より胴部は丸みを持って立ち上がる。	外面 刷毛目後肥磨き。 内面 横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい褐色	底部黒染有り
35	台付壺	口 — 高 — 底 11.0	台座「ハ」の字に開き、胴部は直線的に外傾して立ち上がる。	外面 刷毛目。 内面 刷毛目。	砂粒を含む 良	褐色	
36	台付壺	口 — 高 — 底 —	台座「ハ」の字に開き、胴部は直線的に開く。	外面 斜め刷毛目。 内面 胴部刷毛目後肥磨き、台座刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい赤褐色	
37	台付壺	口 — 高 — 底 (12.0)	大型で「ハ」の字に開く。	外面 斜め刷毛目。 内面 刷毛目。	砂粒・石粒を含む やや不良	褐色	台部のみ
38	台付壺	口 — 高 — 底 —	接合部。	外面 刷毛目。 内面 胴部刷毛目後撫で。	砂粒・石粒(6mm)含む 良	明褐色	台部のみ
39	台付壺	口 — 高 — 底 (8.8)	胴部は「ハ」の字に開き、胴部外反する。	外面 肥磨き。 内面 肥磨で。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	台部のみ
40	台付壺	口 — 高 — 底 —	「ハ」の字に開く台座から胴部外反する。	外面 刷毛目。 内面 胴部刷毛目、台座横刷毛目。	砂粒・石粒(6mm)含む 良	褐色	台部のみ
41	高坏	口 — 高 — 底 —	「ハ」の字に開く脚部。 4箇の円形透し孔。	外面 刷毛目後肥磨き。 内面 脚部刷毛目後撫で。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色	
42	高坏	口 22.1 高 — 底 —	脚部は小さく、坏部弱い様を持って大きく開く。脚部に円形の透し孔。	外面 肥磨き。 内面 肥磨き。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	
43	高坏	口 23.0 高 — 底 —	坏部下位に弱い様を持って大きくやや内彎気味に開く。下部に「ほぞ」が見られる。	外面 肥磨き。 内面 肥磨き。	細砂粒を含む 良	明赤褐色～一部黒褐色	
44	甗?	口 (12.0) 高 — 底 —	体部やや内彎気味に立ち上がる。	外面 肥磨き。 内面 肥磨き。	細砂粒を含む 良	黒色	

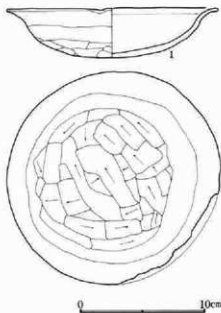
Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第28図 9号住居址

9号住居址 (第28図)

13-14-A11-12グリッドに位置する。北側半分以上を欠失しており正確な形状、規模は不明である。残存する南壁部分での壁高は10cm程である。床面の状態は余り良好ではない。南東隅に貯蔵穴と見られる掘り込みが検出されている。竈は東側に築かれている。馬蹄形に構築部分が残っており、壁外への掘り出しは少ない。若干の焼土、炭化物が検出されている。住居中央に径1m程の掘り込みが見られたが、本址に伴うものか否か断定できない。出土遺物は土師器坏が1点のみである。時期は奈良時代か。



第29図 9号住居址出土遺物

表 10 9号住居址遺物観察表

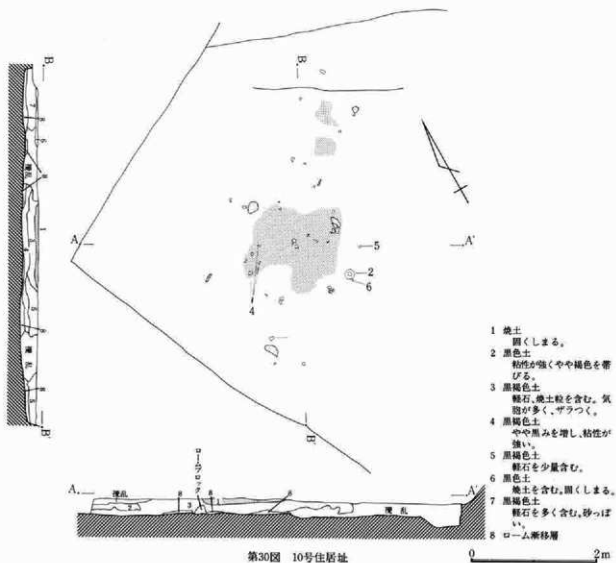
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	坏	口径 16.9 器高 — 底径 —	体部丸みを持ち、口縁部横へほぼ水平に開く。	口縁部 横腹で、外面 底部掘削り。内面 掘で。	砂土・石粒を含む	橙色	

10号住居址 (第30図)

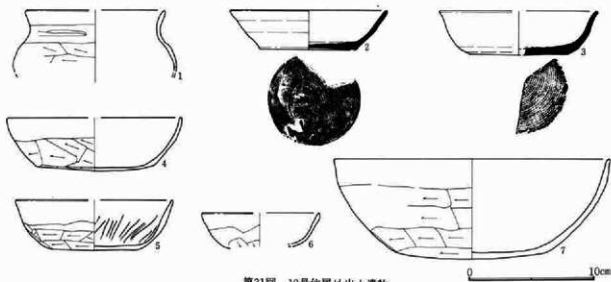
位置的には46-47-A46グリッドにあるが、北壁の一部を確認したのみで全体の形状、規模は不明である。床面も断面にてわずかに確認されたにとどまり、柱穴も検出されていない。焼土の広がりが不定形に見られる。遺物は焼土周辺に坏類を中心に7点が出土している。時期は平安時代である。



### 3. 遺構と遺物



- 1 焼土  
固くしまる。
- 2 黒色土  
粘性が強くやや褐色を帯びる。
- 3 黒褐色土  
軽石、焼土粒を含む。気泡が多く、ザラつく。
- 4 黒褐色土  
やや黒みを増し、粘性が強い。
- 5 黒褐色土  
軽石を少量含む。
- 6 黒色土  
焼土を含む。固くしまる。
- 7 黒褐色土  
軽石を多く含む。砂っぽい。
- 8 ローム層



Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

表 11 10号住居址遺物観察表

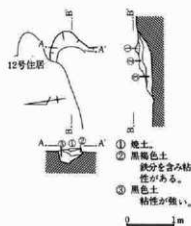
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	甕	口径 (11.0) 器高 — 底径 —	なだらかな肩部から口縁部直 気味に立つ。	口縁部 横撫で。 外面 肩部彫削り。 内面 撫で。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい橙 色	
2	須恵器坏	口径 12.6 高 3.1 底 7.3	体部丸みを持ち外傾して立ち 上がる。	体部 ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り。	砂粒を含む 良	黒灰色	
3	須恵器坏	口径 (12.6) 高 ( 3.6) 底 ( 7.7)	体部彫りを持って立ち上が り、口縁部外反する。	体部 ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り。	砂粒を含む 良	赤灰色	
4	坏	口径 (14.0) 高 ( 4.2) 底 ( 9.3)	平底に近い底部から体部やや 内彎気味に立ち上がる。	口縁部 横撫で。 外面 底部彫削り。 内面 撫で。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい橙 色	
5	坏	口径 (12.6) 高 ( 3.9) 底 ( 6.9)	平底から体部やや丸みを持っ て立ち上がる。	口縁部 横撫で。 外面 体部横彫削り、底部彫削り。 内面 撫で。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい橙 色	内面に放 射状暗文
6	小型坏	口径 ( 9.4) 高 — 底 —	体部やや丸みを持って立ち上 がる。	口縁部 横撫で。 体部 撫で。	砂粒を含む 良	にぶい橙 色	
7	鉢	口径 (21.9) 高 7.9 底 12.0	底部わずかに彫りを持つ。 体部やや内彎気味に立ち上 がる。	口縁部 横撫で。 外面 体・底部彫削り。 内面 撫で。	砂粒を含む 良	橙色	

11号住居址 (第32図)

12号住居址に切られて竈の残骸の一部が検出されたのみである。規模、形状共に不明で出土遺物も無い。時期は不明である。

12号住居址 (第33図)

44-46-A43-45グリッドに位置する。隅丸長方形を呈し、規模は325×(284)cm、壁高は12cmであるが各壁の残りは良くない。後世の浅い溝が南北に走っており、このため床面は良好な状態とは言えない。柱穴は見られず、貯蔵穴も検出されていない。竈は南東隅近くに築かれており、焚き口幅40cm長さ50cmを測る。竈の前面に小ビットがある。出土遺物は坏が4点と少ない。時期は平安時代である。

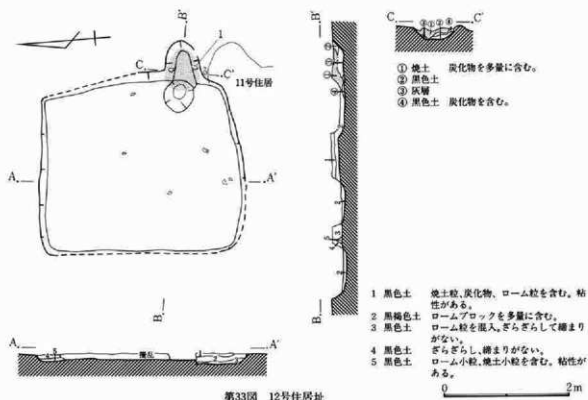


第32図 11号住居址竈

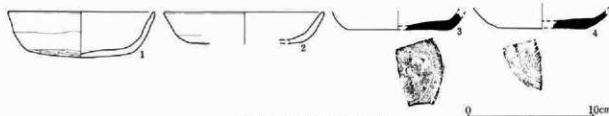
表 12 12号住居址遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	坏	口径 11.7 器高 3.6 底径 7.4	ほぼ平底を呈す。体部外傾して 立ち上がり、口縁部やや外 反気味。	口縁部 横撫で。 外面 体部撫で、底部彫削り。 内面 撫で、指押え痕有り。	砂粒・石粒 を含む 良	橙色	
2	坏	口径 (12.8) 高 — 底 —	底部から体部への屈曲部丸み を持つ。	口縁部 横撫で。 体部 彫削り。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい橙 色	
3	須恵器坏	口径 — 高 — 底 ( 8.2)	底部、中央が薄くなる。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り。	砂粒を含む 軟質 (酸化 気味) 良	黒色一部 黄灰色	
4	須恵器坏	口径 — 高 — 底 ( 7.0)	体部閉き気味に立つ。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り。	砂粒を含む 軟質 (酸化 気味) 良	体部黒色 底部灰色	

### 3. 遺構と遺物



第33図 12号住居址



第34図 12号住居址出土遺物

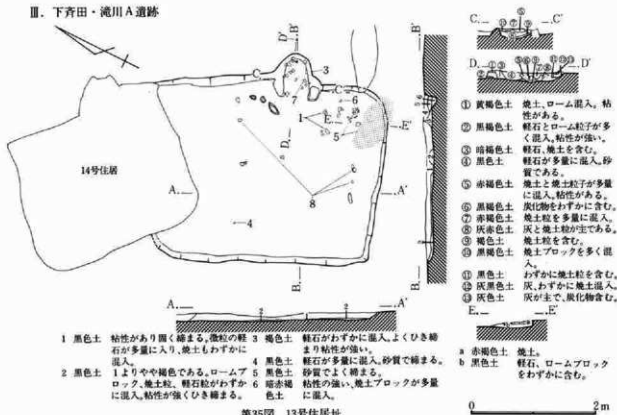
#### 13号住居址 (第35図)

45-46-A38-40グリッドにて検出した。北側部分に14号住居址が重複する。平面形状は隅丸長方形であるが東壁がやや長い。規模は(320)×300cm、壁高は最大で25cmである。床面は比較的平坦である。柱穴、貯蔵穴は検出されていない。竈は東壁の中央やや南寄りに築かれ、焚き口幅30cm、長さ40cmで右側に袖石が見られる。遺物は竈前面部を中心に散在して出土している。時期は平安時代である。

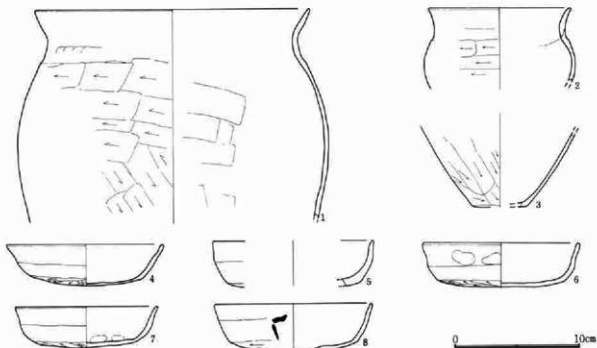
表 13 13号住居址遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	甕	口径 (22.0) 器高 — 底径 —	胴部膨らみ頸部でやや締まる。 口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 匙削り。 内面 荒物で。	細砂粒を混入 良	褐色	
2	小型甕	口径 (12.0) 高 — 底 —	なだらかな胴部から口縁部直立気味に立ち上がる。	口縁部 横撫で。 外面 横削り。 内面 撫で。	細砂粒を混入 良	褐色一暗褐色	
3	甕	口径 — 高 — 底 (4.5)	小さな底部より胴部は外傾して立ち上がる。	外面 胴部、底部匙削り。 内面 荒物で。	細砂粒を混入 良・堅緻	濃い褐色	

Ⅲ. 下齊田・流川A遺跡



第35図 13号住居址

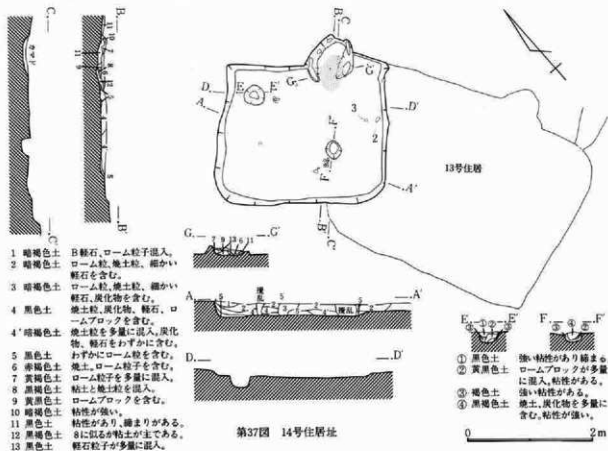


第36図 13号住居址出土遺物

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
4	坏	口径 12.5 器高 3.3 底径 —	底部やや丸みを持つ。口縁部外傾して立ち上がる。	口縁部 横撫で。 体部 距離で、内面撫で。 底部 斲削り。	砂粒をわずかに混入	褐色	
5	坏	口 (12.8) 高 — 底 —	口縁部は内傾気味に立ち上がる。	口縁部 横撫で。 体部 距離で、内面撫で。 底部 斲削り。	細砂粒をわずかに混入	いびい色	

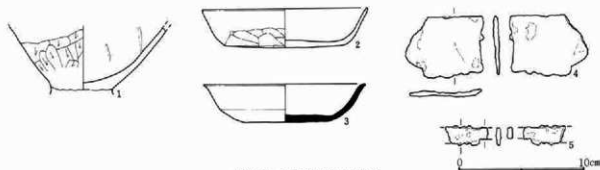
### 3. 遺構と遺物

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	粘土・焼成	色調	備考
6	坏	口径 (12.5) 器高 (3.5) 底径 (10.1)	平底に近い底部から口縁部丸みを持って立ち上がる。	口縁部 横撫で。 体部 造撫で、内面撫で。 底部 造削り。	細砂粒を混入 良	褐色	
7	坏	口 (11.4) 高 (3.2) 底 (7.8)	平底に近い底部から口縁部やや外傾して立ち上がる。	口縁部 横撫で。 体部 造撫で、内面撫で。 底部 造削り。	細砂粒を混入 良	にぶい褐色	
8	坏	口 (12.6) 高 (3.9) 底 (10.2)	底部やや丸みを持つ。口縁部丸みを持って立ち上がる。	口縁部 横撫で。 体部 造撫で、内面撫で。 底部 造削り。	砂粒を混入 良	褐色	側面に黒青「+」か?



- 1 暗褐色土 B 軽石、ローム粒子混入。
- 2 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、細かい軽石を含む。
- 3 暗褐色土 ローム粒、焼土粒、細かい軽石、炭化物を含む。
- 4 黒色土 焼土粒、炭化物、軽石、ロームブロックを含む。
- 4' 暗褐色土 焼土粒を多量に混入、炭化物、軽石をわずかに含む。
- 5 黒色土 わずかにローム粒を含む。
- 6 赤褐色土 焼土、ローム粒子を含む。
- 7 黄褐色土 ローム粒子を多量に混入。
- 8 黒褐色土 粘土と焼土粒を混入。
- 9 黄褐色土 ロームブロックを含む。
- 10 暗褐色土 粘性が強い。
- 11 黒色土 粘性があり、締まりがある。
- 12 黒褐色土 8に似るが粘土が主である。
- 13 黒色土 軽石粒子が多量に混入。

- ① 黒色土 強い粘性があり締まる。
- ② 黄褐色土 ロームブロックが多量に混入、粘性がある。
- ③ 褐色土 強い粘性がある。
- ④ 黒褐色土 焼土、炭化物が多量に含む、粘性が強い。



#### 14号住居址 (第37図)

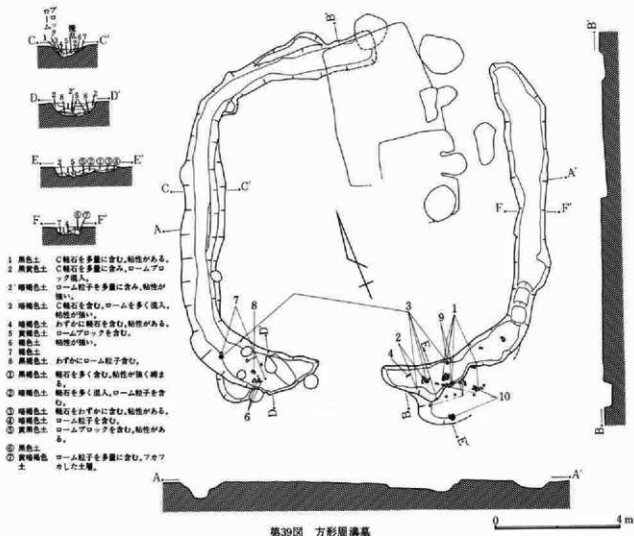
45-46-A40-41グリッドに位置し、13号住居址の北壁部分に重複する。形状は隅丸長方形で規模は271×218cm、壁高は12cmである。床面は比較的平坦であるが、余り良好な状態ではない。柱穴、貯蔵穴は見られず、

### Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

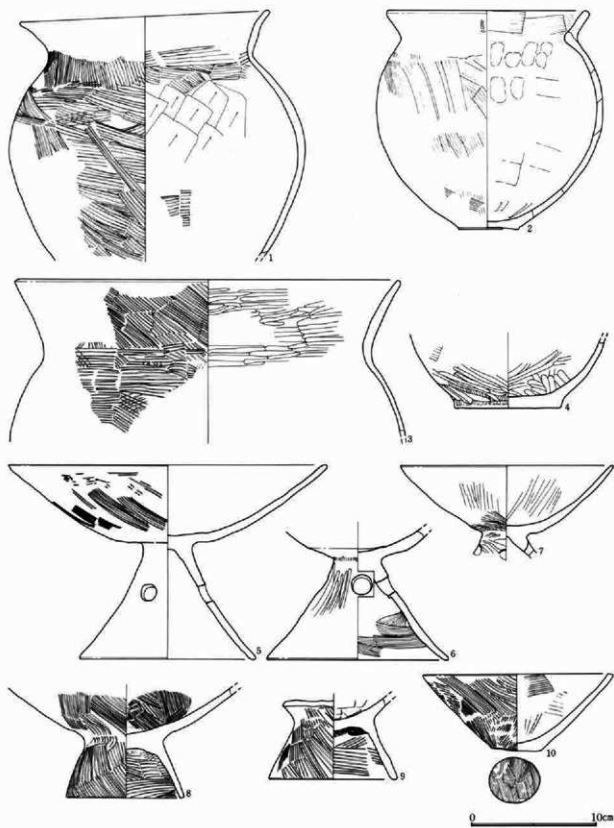
北東隅、中央やや南寄りに小ピットが検出されたのみである。竈は東壁中央やや南寄りに築かれている。焼き口幅30cm、長さ40cmでかなり丸みを持つ。出土遺物は少ないが土器の他に鉄製品が2点出土している。時期は平安時代である。

表 14 14号住居址遺物調査表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	台付甕	口径 — 器高 — 底径 —	胴部連「ハ」の字に開く。	外面 蹴削り、接合部撫で。 内面 蹴撫で。	砂粒・石粒(5~6mm)を含む 良	にぶい橙 色	
2	坏	口 (13.0) 高 3.1 底 (10.0)	ほぼ平らな底部から口縁部や丸みを持って立ち上がる。	口縁部 横撫で。 体部 蹴撫で、内面撫で。 底部 蹴削り。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい橙 色	
3	須恵器 坏	口 (13.0) 高 3.0 底 7.0	口縁部丸みを持って立ち上がる。口縁部外反。	口縁部 横撫で。 体部 蹴撫で。 底部 ロクロ右回転糸切り。	砂粒・石粒(7~8mm)含む 良	灰白色	
4	鉄器	長さ (6.1) 幅 4.9 厚さ 0.3	板状で刃と思われる部分は薄くなる。				
5	鉄器 (刀子)	長さ (3.4) 幅 1.3 厚さ 0.4	両部分か。				



第39図 方形周溝墓



第40図 方形周溝墓出土遺物

Ⅲ. 下齊田・池川A遺跡

(2) 方形周溝墓 (第39図)

西拉張区28-35-C44-D00グリッドに位置する。5号住居址精査中に周溝の一部を検出した。規模は東西11.6m、南北11.0mを測り、台状部は9.5×9.3m、主軸方位はN-40°-Eである。周溝の平面形状はほぼ方形を呈すが、南北部分に橋状に切れる部分がある。周溝の上幅は1.0~1.3mで、下幅は約0.5m、深さは0.2~0.3mである。南側の溝がやや深くなる。溝の断面形状はおよそ浅い「U」字状であるが、いずれも内側は垂直に近い掘り込みを示し、外側はやや緩やかに立ち上がる。台状部については後世の遺構が数多く重複しているために、方形周溝墓に伴うと思われる主体部等の検出は無かった。遺物は南側周溝内にて甕、甕類を中心に出土している。いずれも底から浮いた状態である。

表 15 方形周溝墓遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	粘土・焼成	色調	備考
1	甕	口径 20.0 器高 — 底径 —	胴部丸みを持ち、頸部でやや締まり、口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 胴部磨削り、肩部刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙 色	
2	甕	口径 16.1 高 17.1 底 4.9	胴部は丸く膨らみを持ち立ち上がる。頸部「く」の字にくびれ口縁部外反、底部丸くなる。	口縁部 横撫で。 外面 胴部斜め刷毛目。 内面 磨撫で、肩部指押え痕。	粗砂粒をわずかに混入 良	赤褐色一 橙色	
3	甕	口径 31.0 高 — 底 —	なだらかな肩部から頸部わずかに締まり、口縁部ゆるやかに外反する。	外面 刷毛目。 内面 口縁部横磨き、以下磨撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	大型品
4	甕	口径 — 高 — 底 8.4	胴部丸みを持って立ち上がる。	外面 刷毛目後磨き。 内面 磨き。	砂粒を含む 良	にぶい橙 色一部黒 褐色	
5	高 坏	口径 (25.2) 高 (15.1) 底 (7.0)	坏は下部に弱い稜を持ち、大きく開く。脚部は「ハ」の字に広がる。3個の円形透し孔。	外面 脚部、坏部ともに刷毛目後磨き。 内面 坏部磨き、脚部刷毛目後撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
6	高 坏	口径 — 高 — 底 14.4	脚部は「ハ」の字に開き、胴部はやや広がる。坏部に弱い屈曲、脚上に4個の円形透し孔。	外面 縦磨き。 内面 坏部磨き、脚部上部指撫で。下部刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	
7	高 坏	口径 (17.0) 高 — 底 —	坏部はやや丸みを持って立ち上がる。脚部に円形の透し孔4個持つ。	外面 脚部、坏部ともに磨き。 内面 坏部磨き。	砂粒を含む 良	橙色	
8	台付甕	口径 — 高 — 底 9.4	「ハ」の字に開く台部から胴部は大きく開いて立ち上がる。	外面 刷毛目。 内面 台部刷毛目、下部磨撫で、台部上面磨撫で、以下横刷毛目。	2~4mmの 石粒を含む 良	明赤褐色	台部のみ
9	台付甕	口径 — 高 — 底 (10.4)	台部「ハ」の字に開く。	外面 刷毛目。 内面 胴部磨撫で、台部磨撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	台部のみ
10	甕	口径 15.1 高 4.0 底 6.1	小ぶりの底部から直線的に開いて立ち上がる。口唇部平らに面取りされている。	口縁部 端部横撫で。 外面 胴部斜め刷毛目、底部刷毛目(密) 内面 刷毛目後撫で。	1~2mmの石 粒少量混入 良	にぶい橙 色一明赤 褐色	



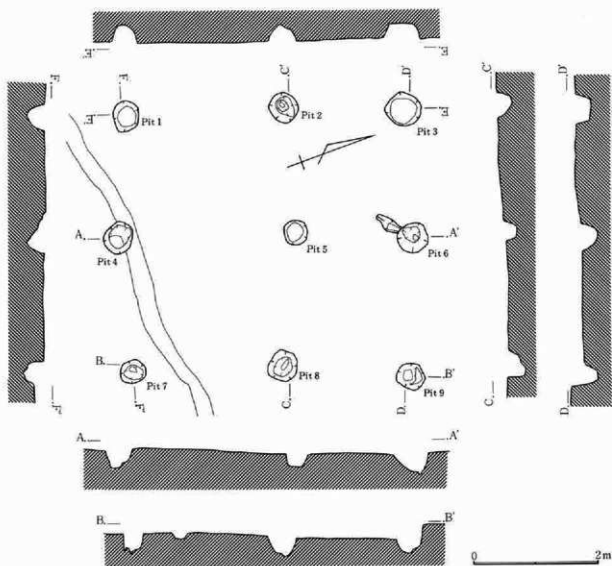
## 3. 遺構と遺物

表 16 1～14号住居址、方形周溝遺構観察表

番号	規模(m)	位置	形状	主軸方位	カマド・炉	柱穴	貯蔵穴	周溝	備考
1号住	長軸 830 短軸 725 壁高 23	49-54-C45-D00	長方形	N-5°-W	—	4本	なし	なし	炉は中央の未掘部分にあると推定される
2号住	長 345 短 335 壁 27	37-38-D03-D04	不明	N-36°-W	炉 中央東より	—	—	—	
3号住	長 (420) 短 (313) 壁 —	48-50-B42-43	長方形	—	カマド 中央やや南寄り	なし	なし	—	
4号住	長 (349) 短 265 壁 24	29-31-B46-47	不定形	N-90°-E	なし	なし	竈右側	—	北側半分が6号住居址に重複する
5号住	不明	29-C46	不明	—	—	—	—	—	
6号住	長 450 短 345 壁 12	28-31-C47-50	長方形	N-90°-E	カマド 東壁中央やや南寄り	なし	なし	—	南側に4号住居址が重複する
7号住	長 448 短 340 壁 25	35-37-D00-02	長方形	N-70°-E	カマド 東壁中央南	11本	なし	—	
8号住	長 (563) 短 (420) 壁 19	30-33-D04-07	長方形	N-20°-W	炉 中央やや西寄り	—	—	—	
9号住	長 (235) 短 — 壁 10	13-14-A11-12	不明	N-6°-E	カマド 東側	—	南東隅	—	
10号住	不明	46-47-A46	不明	—	—	なし	—	—	
11号住	不明	45-A43	不明	—	—	—	—	—	
12号住	長 325 短 (284) 壁 12	44-46-A43-45	長方形	N-2°-E	カマド 南東隅	なし	なし	溝 南東	
13号住	長 (320) 短 300 壁 25	45-46-A38-40	長方形	N-27°-W	カマド 東壁やや中央	なし	なし	—	北側部分が14号住居址が重複する
14号住	長 271 短 218 壁 12	45-46-A40-41	長方形	N-49°-W	カマド 東壁中央やや南寄り	なし	なし	—	13号住居址の北側部分に重複する

	規模(m)	位置	主軸方向	備考
方形周溝墓	11.6×11.0 台状部 9.5×9.3	28-36-C44-D00	N-40°-E	

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第41図 1号掘立柱建物址

(3) 掘立柱建物址

総数5棟を検出している。いずれも方2間以内の小規模のものである。時期は掘り込み面と掘り込み面上の遺物、周囲の遺構から判断して平安期に比定されると思われる。5号については中央に小殿治遺構が見られ、検討を要す。

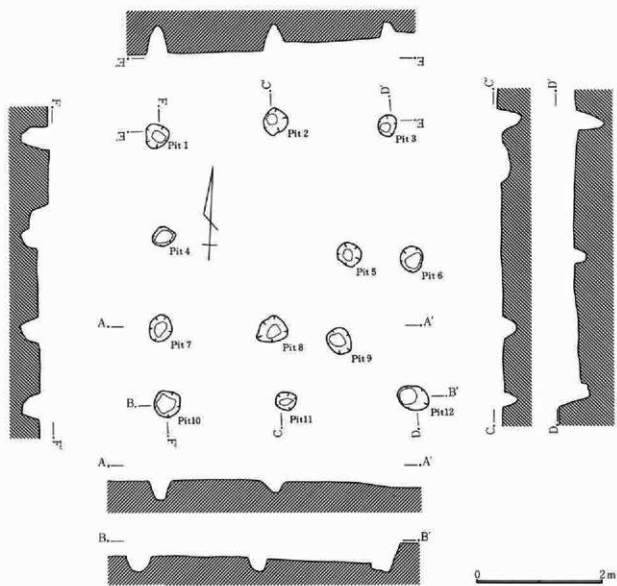
1号掘立柱建物址(第41図)

26-29-C44-47グリッドに位置する。2間×2間である。方形周溝基と重複。総柱である。

表 17 1号掘立柱建物址遺構観察表

		単位=cm							
1号	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9
	50×41×28	48×48×26	58×54×24	52×46×31	39×38×21	50×48×30	41×37×32	49×47×31	46×42×46

### 3. 遺構と遺物



第42図 2号掘立柱建物址

#### 2号掘立柱建物址（第42図）

27-30-C41-44グリッドに位置する。2間×2間で廂を持つ可能性もある。

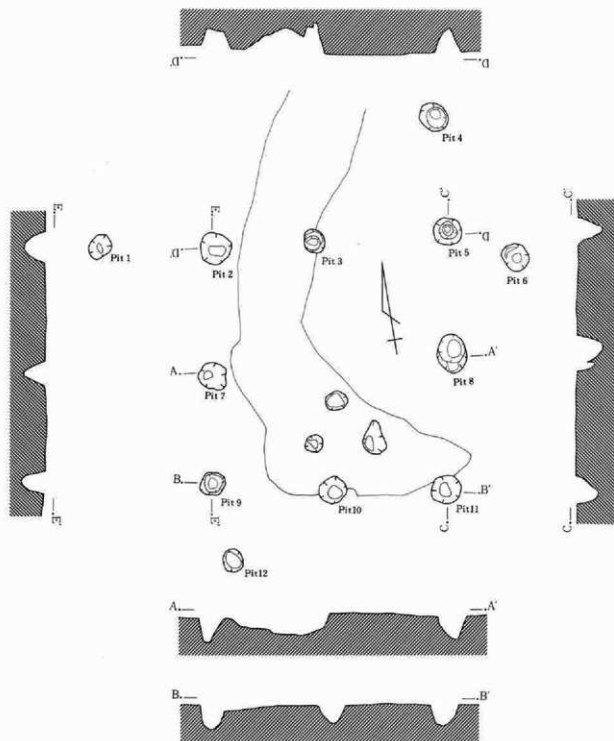
表 18 2号掘立柱建物址遺構観察表

		単位=cm									
		長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深
2号	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	Pit 10	
	39×37×45	44×39×43	34×29×43	36×31×27	39×38×21	42×36×17	42×36×30	46×42×22	42×39×10	41×41×28	
掘立	Pit 11	Pit 12									
	33×28×23	47×37×48									

#### 3号掘立柱建物址（第43図）

32-35-C46-49グリッドに位置する。2間×2間である。方形周溝墓、19号土壌と重複する。ややひしゃげた形となる。

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第43図 3号獨立柱建物址

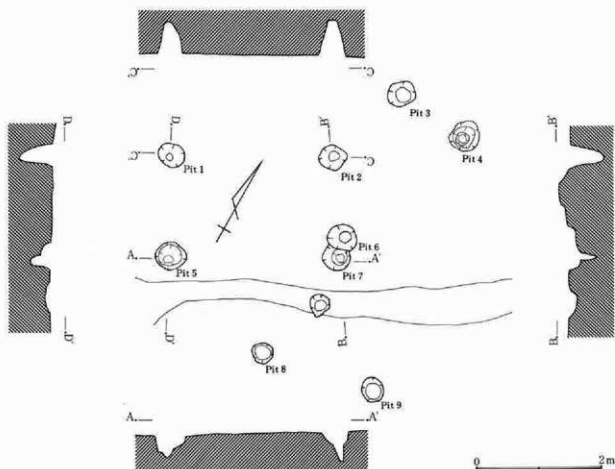
0 2m

表 19 3号獨立柱建物址遺構断面表

単位=cm

	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深
3号	Pit 1 38×37×47	Pit 2 50×49×32	Pit 3 37×33×48	Pit 4 47×45×19	Pit 5 45×42×38	Pit 6 43×42×35	Pit 7 44×41×37	Pit 8 62×47×37	Pit 9 42×36×37	Pit 10 44×43×27
	Pit 11 47×46×34	Pit 12 37×32×18								
獨立										

### 3. 遺構と遺物



第44図 4号掘立柱建物址

#### 4号掘立柱建物址 (第44図)

36-37-C43-44グリッドに位置する。1間×1間である。柱穴の位置がやや不規則で、それぞれの掘り方もばらつきが見られる。

表 20 4号掘立柱建物址遺構観察表

		単位=cm								
		長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深
4号	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	
掘立	42×37×54	46×41×55	44×38×23	48×47×32	50×44×33	47×40×13	45×(45)×46	34×33×14	39×36×20	

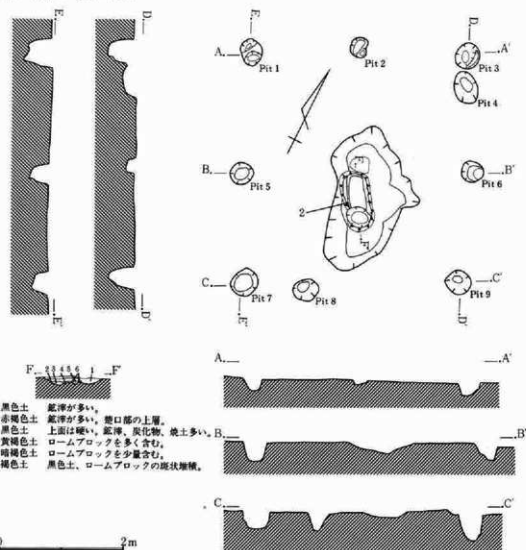
#### 5号掘立柱建物址 (第45図)

31-33-C01-03グリッドに位置する。2間×2間で中央に小竪治遺構を持つ。その規模は長軸2.3m 短軸1.1m、深さ15cmで中央が鍋底状にややぼんでいる。焼土、灰滓に混じり輪羽口が出土している。

表 21 5号掘立柱建物址遺構観察表

		単位=cm								
		長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深	長軸×短軸×深
5号	Pit 1	Pit 2	Pit 3	Pit 4	Pit 5	Pit 6	Pit 7	Pit 8	Pit 9	
掘立	43×35×45	33×25×8	42×39×47	50×38×21	39×35×30	36×34×25	45×45×28	42×36×28	42×38×41	

Ⅲ. 下芥田・流川A遺跡



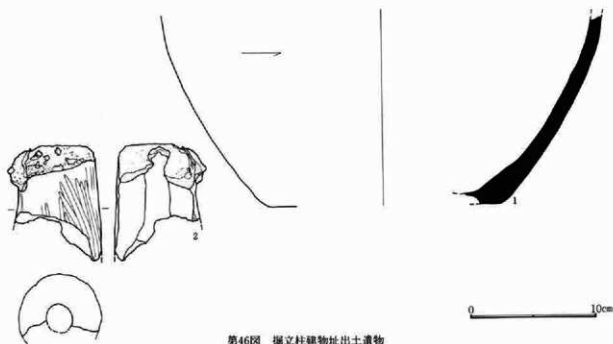
第45図 5号掘立柱建物址

表 22 掘立柱建物址遺構観察表

番号	様方向	位置	方位	規模(間)	柱間寸法 (cm)		柱間隔 (cm)		備考
					桁行	梁行	桁行	梁行	
1号	E W	26-29-C44-47	N-71'-W	2間×2間	(N) 425 (S) 400	440	(N)205+220 (S)200+200	(N)245+195	方形周溝基と重複
2号	E W	27-30-C41-44	N-96'-W	2間×2間 +施(?)	(N)360 (S)(?)	(W)300+125 (E)(?)	(N)180+180 (S)180+(?)	(W)125+150 +150	
3号	E W	32-35-C46-49	N-89'-W	2間×2間	(N)375 (S)370	(W)370	(N)160+215 (S)185+185	(W)185+185 (E)220+190	方形周溝基。19号 土壇と重複
4号	E W	36-37-C43-44	N-32'-W	1間×1間	270	165			
5号	E W	31-33-D01-03	N-30'-W	2間×2間	350	350	(N)100+250 (S)175+175	(W)175+175 (E)170+180	小竪治遺構と重複

表 23 掘立柱建物址遺物観察表

番号	器種	注量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	須恵器 甕	口径	胴部は内帯気味に立ち上がる。 底は平底。	外面 横撫で、左→右。 内面 撫で。	砂粒・石粒 を含む	に濃い橙 色一般色	
		器高					
		底径 (18.0)					
2	縄羽口	法量 (cm)		形整の特徴	備	考	
		全長 (9.2)	外径 (6.8)				



第46図 掘立柱建物址出土遺物

**(4) 土 甕**

総数35基を検出したが明らかに人為的なものと考えられるもののみを取り上げた。かなり浅いものや形状が不定なものについては一部取り上げていないものもある。時期が比定し得るものには古墳時代初頭のものが調査区西拡張区にて検出されており、以下個別に説明を加えてゆくこととする。

**1号土甕**

45-46-D05-06グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で径約40cm、深さ117cmを測る。断面の形状は「U」字状で底は平坦である。

**2号土甕**

45-C49グリッドに位置する。平面形は円形で、規模は径約70cm、深さ79cmで底は平坦である。覆土下層より甕の底部片が1点出土している。

**3号土甕**

45-46-C43グリッドに位置する。径50cm、深さ47cmを測り底部はやや狭くなり平坦となる。高坏が出土している。

**4号土甕**

46-47-C43-44グリッドに位置する。長円形で、規模は197×87cmで深さは10cmと浅い。そこは平らである。浮いた状態で土師器の坏1点が出土している。

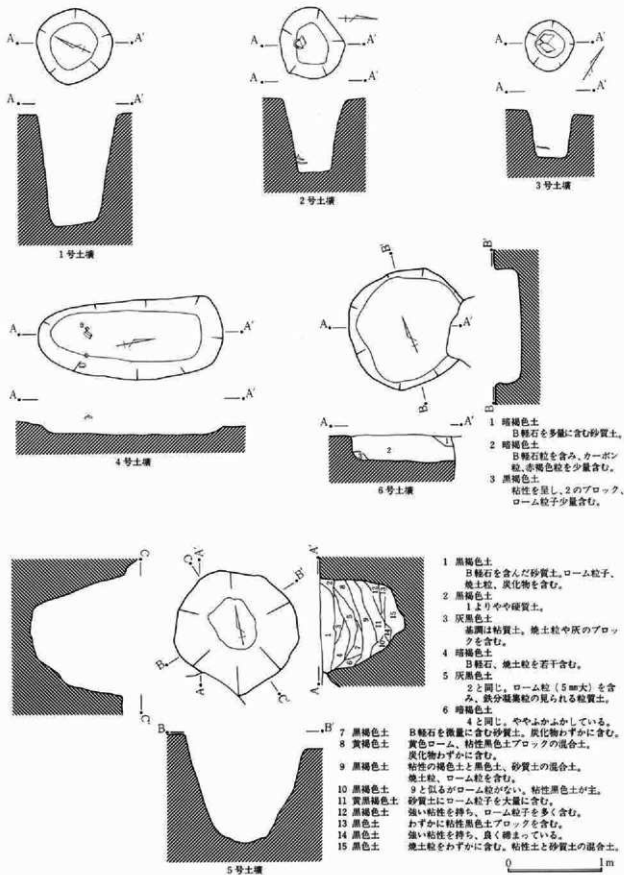
**5号土甕**

35-36-C49-D00グリッドに位置する。円形を呈し規模は径が約130cmで深さ100cmである。底はやや狭くなり丸みを持つ。

**6号土甕**

37-38-C49-D00グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、規模は129×(107)cm深さ27cmで、底は平らであ

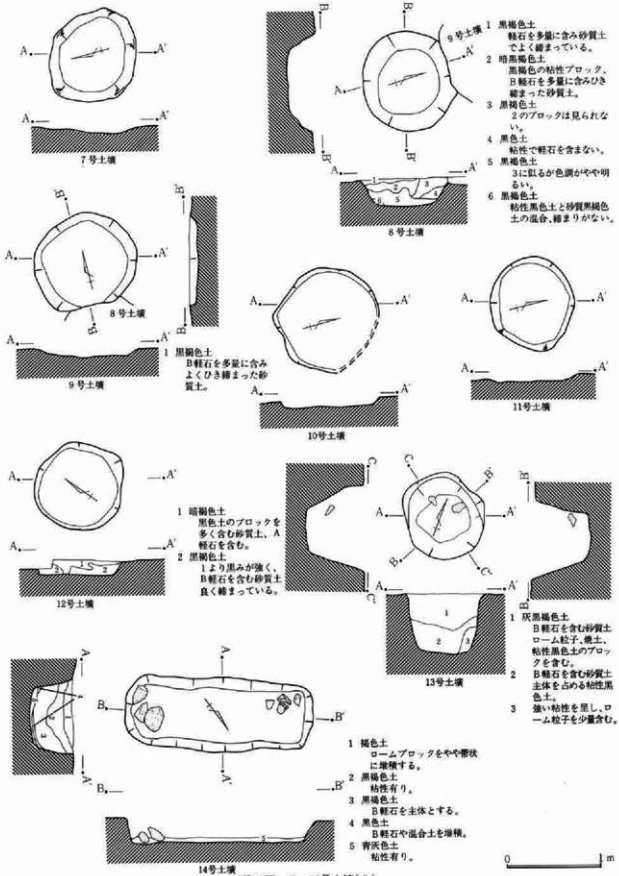
Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第47図 1～6号土壇(1)



### 3. 遺構と遺物



第48図 7-14号土壌(2)

### Ⅲ. 下斉田・滝川A遺跡

る。東側一部分を25号土壌により切られている。

#### 7号土壌

37～38-C47～48グリッドに位置する。径は約100cmで掘り込みは浅い。

#### 8号土壌

38～39-C48～49グリッドに位置する。規模は径100cmで、深さ30cmである。覆土はB軽石の混土層で北側に9号土壌が接する。

#### 9号土壌

38～39-C49グリッドに位置する。平面形状は円形で規模は径100cmで深さは10cmである。底は凹凸が見られる。

#### 10号土壌

35-C45～46グリッドに位置する。規模は113×100cm、深さ9cmである。

#### 11号土壌

35～36-C45グリッドに位置する。規模は100×90cmで、深さ6cmと非常に浅い。

#### 12号土壌

35-C43～44グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、規模は径約100cmで深さは16cmである。底は平坦である。

#### 13号土壌

37-C45グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は90×84cm、深さは63cmで底は平坦である。遺物は甕、壺、高坏がそれぞれ1点ずつ出土している。

#### 14号土壌

38～39-C42～43グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は80×20cm、深さ25cmである。底はほぼ平坦である。底部両側に石が置かれている。

#### 15号土壌

43～44-C46～47グリッドに位置する。平面形はほぼ円形で規模は147×146cm、深さは118cmである。壁は垂直に掘り込まれており、底は平坦である。

#### 16号土壌

43-C48～49グリッドに位置する。円形を呈し、規模は100×97cmで、深さは121cmである。上部がやや広がり、底はほぼ平らである。遺物は甕が1点出土している。

#### 17号土壌

36～37-D02グリッドに位置する。平面形状はほぼ円形を呈し、規模は121×117cm、深さ128cmである。

#### 18号土壌

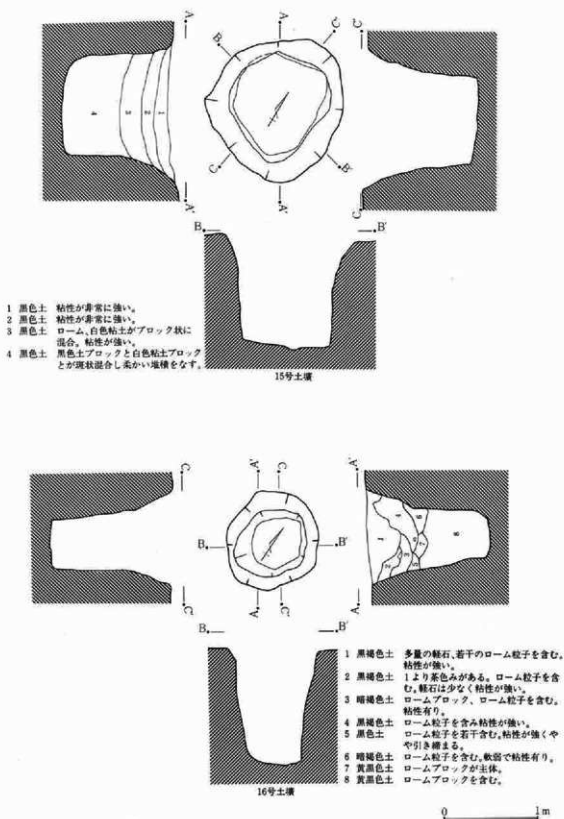
34-D01グリッドに位置する。平面形はやや長円形で規模は120×105cm、深さ130cmである。

#### 19号土壌

34-C46～47グリッドに位置する。南北に長い不正長方形を呈し、掘り込みは浅い。規模は114×45cm、深さ8cmである。

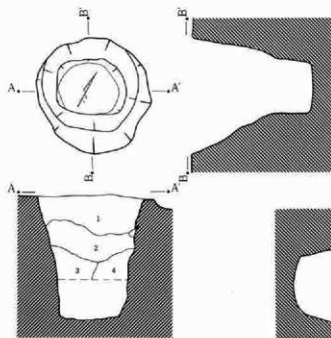
#### 20号土壌

28～29-C47～48グリッドに位置する。やや長方形で、規模は140×114cm、深さ23cmである。遺物は甕、壺、台付甕、甌、高坏、埴などがやや浮いた状態で出土している。

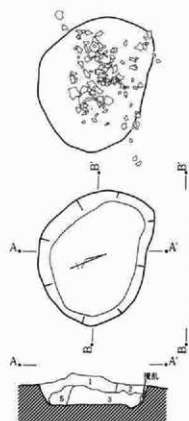


第49図 15-16号土壤(3)

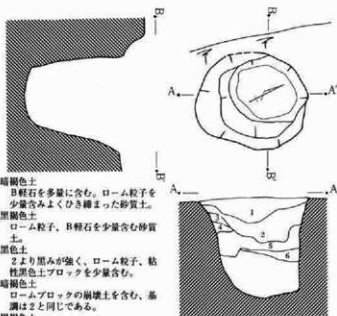
Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



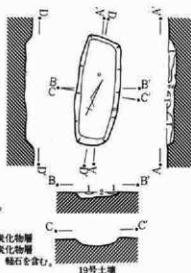
17号土壌



20号土壌



18号土壌

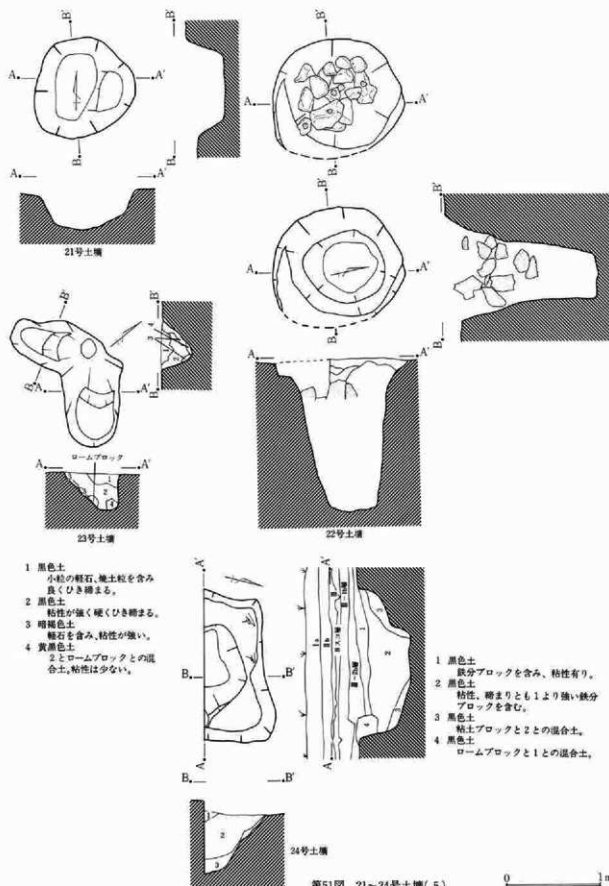


19号土壌

第50図 17-20号土壌(4)

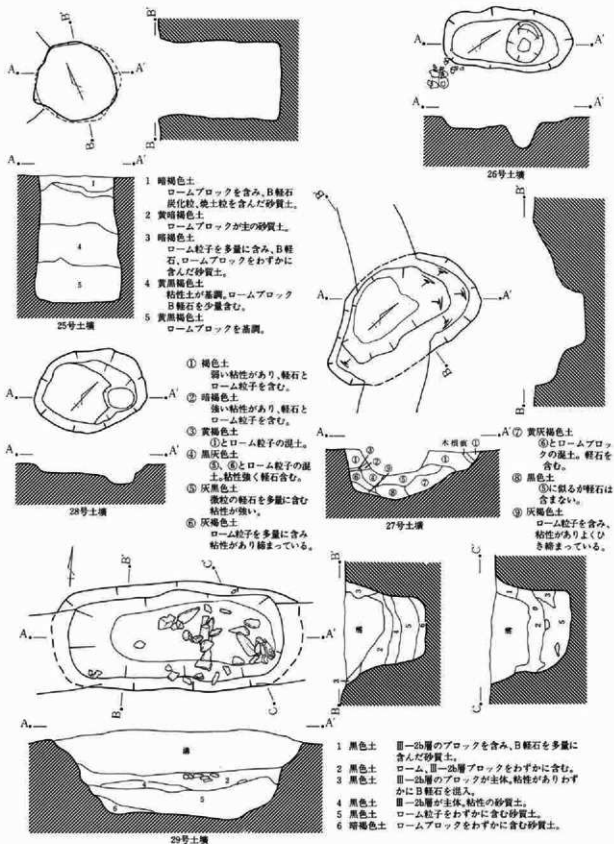
0 1 m

3. 遺構と遺物



第51図 21~24号土壌(5)

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第52図 25-29号土壇(6)

0 1 m

### 3. 遺構と遺物

#### 21号土壌

28-29-C48-49グリッドに位置する。ほぼ円形で規模は113×103cm、深さ35cmである。時期は縄文時代。

#### 22号土壌

36-C49グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、規模は184×(113)cm、深さ150cmである。かなり掘り込みは深く、下に行くに従ってやや狭まる。上層から中層にかけて角礫が出土している。井戸と思われる。

#### 23号土壌

32-33-C49グリッドに位置する。不正形を呈し、規模は140×54cm、深さ38cmである。2基以上の重複か。

#### 24号土壌

39-40-C42グリッドに位置するが、西側半分は調査区外となるために未調査である。平面形は長円形を呈すと思われる。規模は159×(64)cm、深さ55cmである。

#### 25号土壌

37-C48グリッドに位置する。ほぼ円形で、規模は85×79cm、深さ133cmで掘り方は垂直である。底はほぼ平坦となる。6号土壌を切っている。

#### 26号土壌

32-33-C47グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は138×63cm、深さ33cmで底にピットを持つ。遺物は壺が1点出土している。

#### 27号土壌

34-35-C44グリッドに位置する。不正長円形を呈し、規模は137×(107)cm、深さ56cmである。3号溝と重複する。

#### 28号土壌

37-38-C44グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は120×56cm、深さ15cmである。

#### 29号土壌

14-15-A22-23グリッドに位置する。長方形を呈し、規模は267×(115)cm、深さ86cmである。20-30cm大の礫に混じって南東隅で馬形埴輪の頸部片が出土している。上部に同方向に走る溝が重複している。

#### 30号土壌

17-18-A23-24グリッドに位置する。不正円形を呈し、規模は124×106cm、深さ43cmである。溝と重複する。

#### 31号土壌

11-A22-23グリッドに位置する。長円形を呈す大形の土壌で、規模は363×274cm、深さ43cmである。最上層に若干の焼土が見られる。34号土壌と東側で接している。

#### 32号土壌

12-13-A17-18グリッドに位置する。平面形状は長円形で、規模は256×129cm、深さ63cmである。

#### 33号土壌

42-A43-44グリッドに位置する。平面形状は円形を呈し、規模は112×88cm、深さ45cmである。

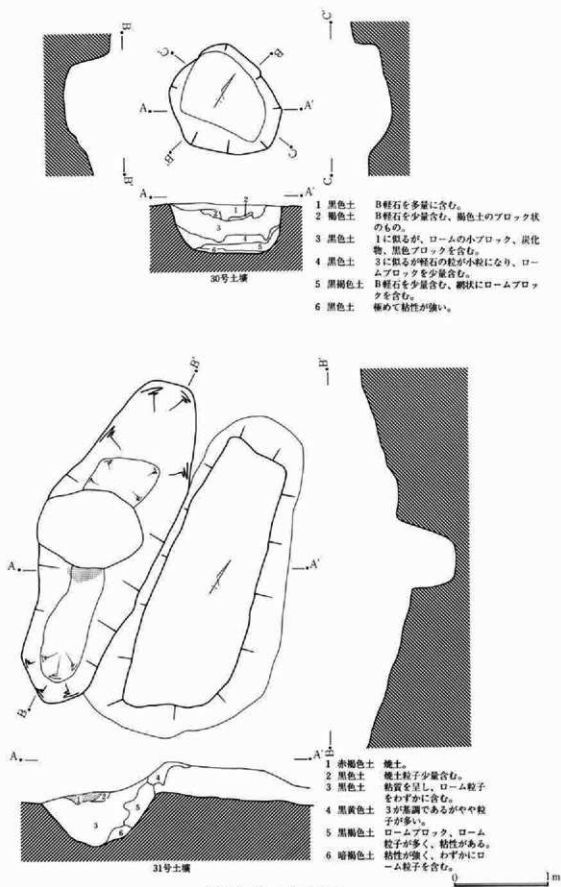
#### 34号土壌

11-A22-23グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は113×84cm、深さ134cmである。31号土壌を切る。

#### 35号土壌

46-A43グリッドに位置する。平面形状は円形を呈し、規模は105×100cm、深さ110cmである。ほぼ垂直に

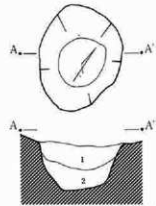
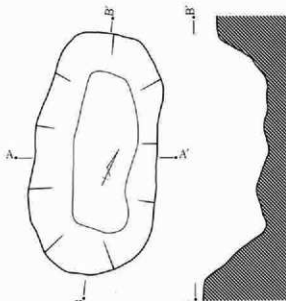
Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第53図 30-31号土壌(7)



3. 遺構と遺物



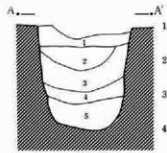
- 1 黒色土 (目層) により埋められる。
- 2 黒色土 ロームブロックをやや含んでいる。

33号土壇



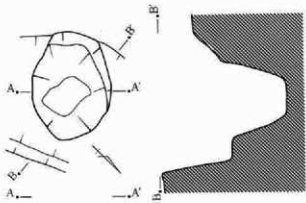
- 1 黒色土 微量のローム粒子を含み、強い粘性が有り、ひき締まっている。
- 2 黒色土 多量のローム粒子を含む。軽石をわずかに含み、粘性が強い。
- 3 黄黒褐色土 大形のロームブロックを多量に含む。軽石を含み粘性が有り締まっている。
- 4 灰黒色土 ローム層様の色調呈し、粘性が強い。
- 5 黒褐色土 ローム粒子を少量含み粘性に富む。
- 6 黒褐色土 ロームブロックを多く含む。

32号土壇



- 1 褐色土 ローム小ブロックを含む。
- 2 黒褐色土 ロームブロックを多量に含む。
- 3 黒色土 大小のロームブロックを含む。
- 4 黒色土 ロームブロックを多量に含む。
- 5 黒色土 ロームブロックを含む。

35号土壇



- 1 黒色土 B軽石をふくみ、締まりにかける。
- 2 黒色土 1に貼るが砂質で礫を含む。

34号土壇



第54図 32-35号土壇 (8)

Ⅲ. 下斉田・滝川A遺跡

掘り込まれている。溝と重複する。

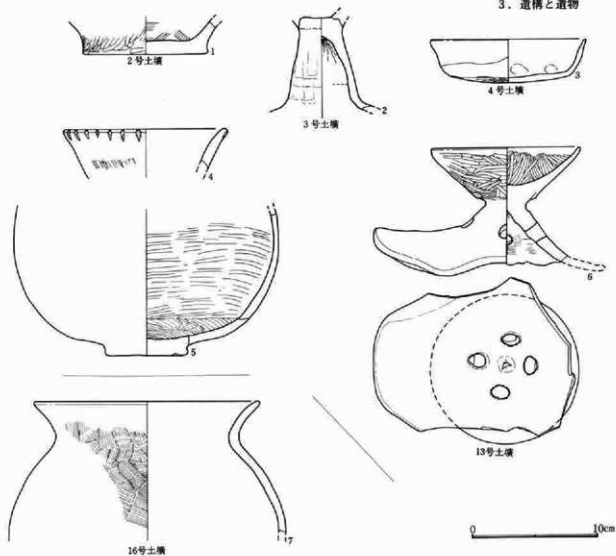
表 24 土壌計測値

番号	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	位置 (グリッド)	形状	方位	出土遺物	備考
1号土壌	44×40×117	45-46-D05-06	円形			
2号土壌	76×70×79	45-C49	円形		壺1	
3号土壌	52×50×47	45-46-C43			高坏1	
4号土壌	197×87×10	46-47-C43-44	長円形		坏1	
5号土壌	132×130×100	35-36-C49-D00	円形			
6号土壌	129×(107)×27	37-38-C49-D00	円形			25号土壌に切られる
7号土壌	110×94×13	37-38-C47-48				
8号土壌	100×100×30	38-39-C48-49				9号土壌に切られる
9号土壌	98×38×10	38-39-C49	円形			8号土壌を切る
10号土壌	113×100×9	35-C45-46		N-4°-E		
11号土壌	100×90×6	35-36-C45				3号溝を切る
12号土壌	102×97×16	35-C43-44	円形			
13号土壌	90×84×63	37-C45	円形		高坏1 壺1 壺1	
14号土壌	80×20×25	28-29-C42-43	長円形			
15号土壌	147×146×118	43-44-C46-47	円形			
16号土壌	100×97×121	43-C48-49	円形		壺1	
17号土壌	121×117×128	36-37-D02	円形			溝を切る
18号土壌	120×105×130	34-D01	長円形			
19号土壌	114×45×8	34-C46-47	不正長方形	N-1°-E		溝を切る
20号土壌	140×114×23	28-29-C47-48	長方形		壺1 壺1 高坏1 付着土 壺1 壺1	
21号土壌	113×103×35	28-29-C48-49	円形			縄文時代
22号土壌	184×(113)×150	36-C49	円形			
23号土壌	140×54×36	32-33-C49				
24号土壌	159×(64)×55	39-40-C42	長円形			
25号土壌	85×79×133	37-C48	円形			6号土壌を切る
26号土壌	138×63×33	32-33-C47	長円形	N-3°-W	壺1	
27号土壌	137×(107)×56	34-35-C44	不正長円形	N-3°-W		3号溝を切る
28号土壌	120×56×15	37-38-C44	長円形			
29号土壌	267×(115)×86	14-15-A22-23	長円形	N-26°-W	埴輪1	溝を切る
30号土壌	124×106×43	17-18-A23-24	不正円形			溝を切る
31号土壌	363×274×43	11-A23-23	長円形	N-230°-E		34号土壌に切られる
32号土壌	256×129×63	12-13-A17-18	長円形	N-3°-E		
33号土壌	112×88×45	42-A43-44	円形			
34号土壌	113×84×134	11-A22-23	長円形			31号土壌を切る
35号土壌	105×100×110	46-A43	円形			溝を切る

表 25 土壌遺物観察表

番号	器種	流量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	粘土・焼成	色調	備考
1	壺	口径 — 器高 — 底径 9.9	厚手でしっかりした底部。	外面 磨岩き。 内面 刷毛目。	細砂粒わずかに混入 良	褐色	2号土壌 底部片
2	高坏	口 — 高 — 底 —	仕部下手でやや膨らみ底部は開く。	外面 磨擦で。 内面 縦指撫で、上部に絞り目。	細砂粒を混入 良	褐色	3号土壌 脚部
3	坏	口 12.3 高 3.3 底 9.4	やや丸みを持つ底部から体部やや外傾して立ち上がる。口縁部ごく外反する。	口縁部 横撫で。 外面 体部磨擦で、底部磨削り。	砂粒を含む 良	褐色	4号土壌
4	壺	口 (12.2) 高 — 底 —	やや反する口縁部。	口縁部 横撫で、口唇部に連続刷目。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	13号土壌
5	壺	口 — 高 — 底 6.6	胴部下部が膨らみ底部は丸く肥厚する。	外面 胴部磨削り。 内面 横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	13号土壌 底面に縦 痕有り
6	高坏	口 11.8 高 10.2 底 (18.4)	坏部下部に鋭い稜を持って開き、口縁部内傾。脚は二次焼成で大きく重む。円孔4。	外面 坏部磨擦き、脚部磨擦き。 内面 坏部磨擦き、脚部刷毛目。	細砂・石粒(1-6mm)含む 良	にぶい褐色一部明赤褐色	13号土壌

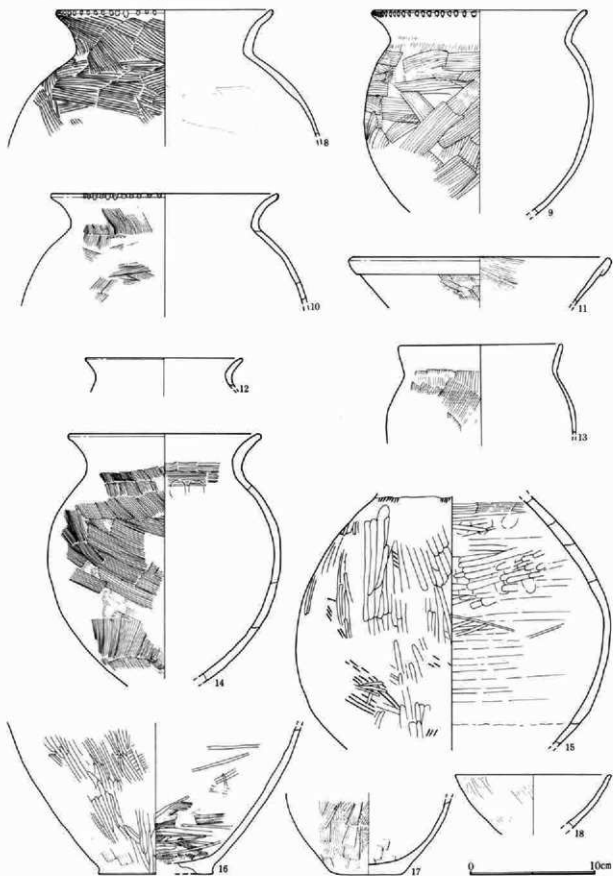
## 3. 遺構と遺物



第55図 2・3・4・13・16号土壘出土遺物

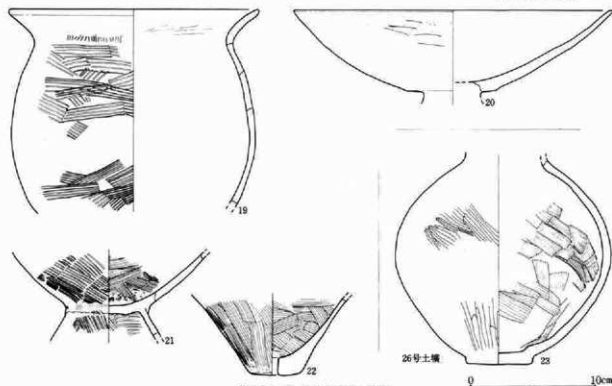
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
7	壘	口径 (18.0) 器高 — 底径 —	なだらかな肩部から腹部やや締まり、口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 横刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	16号土壘
8	壘	口径 17.2 高 — 底径 —	肩部なだらかに立ち上がる。腹部やや締まり、口縁部外反する。	口縁部 端部横撫で、口唇部連続刷み。 外面 頸部斜め、肩部以下横刷毛目。 内面 肩部以下匙撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい褐色	20号土壘
9	壘	口径 17.0 高 — 底径 —	胴部丸みを持ち、なだらかな肩部から腹部やや締まり、口縁部外反する。	口縁部 横撫で、口唇部連続刷み。 外面 肩部以下不定方向刷毛目。 内面 頸部横撫で、肩部以下匙撫で。	砂粒・石粒を含む 良	褐色一部 黒褐色	20号土壘 胴部黒斑
10	壘	口径 (18.0) 高 — 底径 —	肩部丸みを持ち、口縁部外反する。	口縁部 端部横撫で、口唇部連続刷み。 外面 刷毛目。 内面 匙撫で。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	20号土壘
11	壘	口径 (21.0) 高 — 底径 —	口縁部直線的に開く。口縁端部折り返し。	口縁部 端部横撫で。 外面 刷毛目。 内面 斜め刷毛目。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	20号土壘
12	壘	口径 (12.5) 高 — 底径 —	口縁部外反する。	口縁部 横撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい褐色	20号土壘
13	壘	口径 (13.0) 高 — 底径 —	肩部なだらからで頸部斜め、く字に折れ、口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目、肩部横撫。 内面 撫で。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	20号土壘

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第56図 20号土壙出土遺物

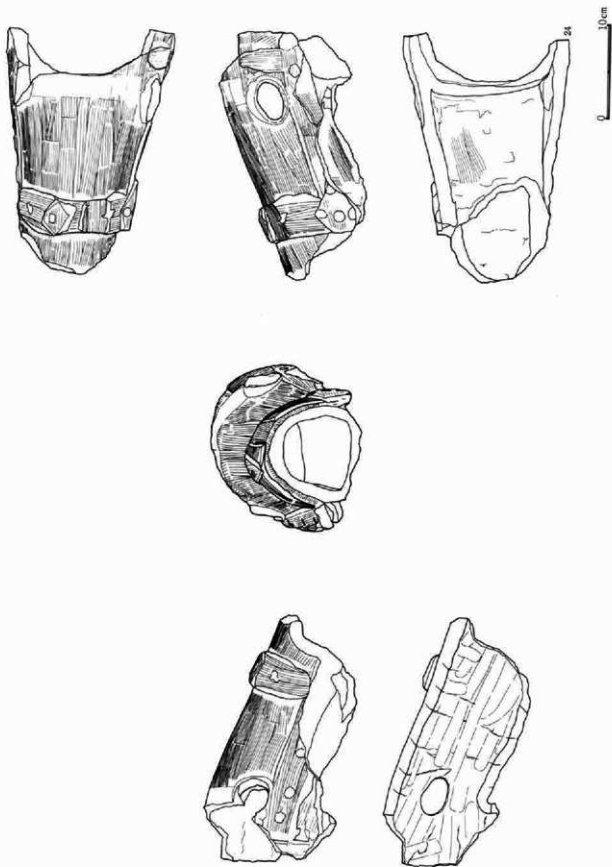
## 3. 遺構と遺物



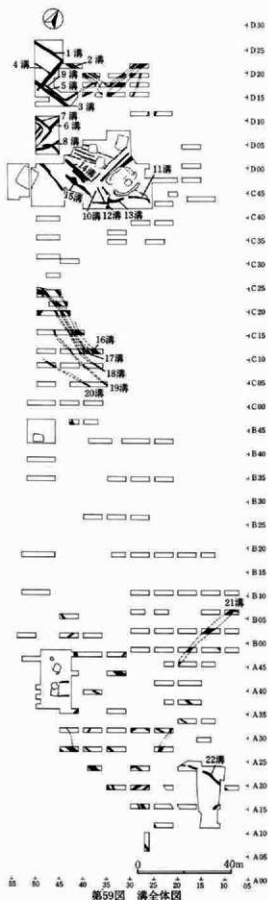
第57図 20-26号土壙出土遺物

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
14	甕	口径 15.4 器高 — 底径 —	胴部断らみ中位に最大径を持つ。頸部「く」の字に折れ、口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 斜め刷毛目。 内面 肩部横刷毛目。胴部横撫で。	砂粒をおわずかに混入 良	橙色-灰褐色	20号土壙
15	壺	口 — 高 — 底 —	胴部中位で最大径を持つ。肩部はなだらかに立つ。	外面 刷毛目後施磨き。 内面 上半部刷毛目後施磨き、下半部横撫で肩部に密押え痕。	砂粒を含む 良	にぶい橙色一部黒褐色	20号土壙
16	甕	口 — 高 — 底 (9.0)	底面端部外へ張る。胴部やや内彎気味に立ち上がる。	外面 横刷毛目後施磨き。 内面 施磨き。	砂粒・石粒を含む 良	明赤褐色	20号土壙
17	甕	口 — 高 — 底 5.6	底部からやや内彎気味に立ち上がる。	外面 縦刷毛目。 内面 施撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	20号土壙
18	甕	口 (12.4) 高 — 底 —	やや内彎気味に立ち上がる。	外面 刷毛目後施磨き。 内面 施磨き。	砂粒・石粒を含む 良	明褐色一部黒褐色	20号土壙
19	甕	口 (20.0) 高 — 底 —	なだらかな肩部から頸部で「く」の字に折れ、口縁部外反する。底部丸くなる。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 施撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙色	20号土壙
20	高坏	口 (25.0) 高 — 底 —	やや断らみを持って開く。	外面 刷毛目後施磨き。 内面 施磨き。	砂粒・石粒多く含む 良	橙色	20号土壙 坏部のみ器蓋や束れている
21	台付甕	口 — 高 — 底 —	台部「ハ」の字に開き、胴部はやや直線的に立ち上がる。	外面 刷毛目。 内面 体部刷毛目(密) 台部天井部指撫で、以下刷毛目(横)。	細砂粒わずかに混入 良	にぶい褐色	20号土壙
22	甕	口 — 高 — 底 4.0	ほぼ直線的に開いて立ち上がる。孔は1個中央にあげられている。	外面 縦刷毛目。 内面 横刷毛目。	砂粒・石粒を混入 堅緻	橙色	20号土壙 胴下部
23	壺	口 — 高 — 底 5.2	胴部丸みを持って立ち上がり、胴上半で最大径となる。	外面 施磨き。 内面 刷毛目後指撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙色	26号土壙
24	馬形埴輪 頸部	長さ 26.4 幅 17.5	口、後頸部分に欠く。	目より口にかけては輪埴成形、首の付け根部分は横方向の輪埴。表面刷毛状工具による成形。内面輪埴、指撫で甕。	砂粒・石粒口5mm混入 堅緻	橙色	29号土壙 赤彩痕

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第58図 29号土壘出土遺物



## (5) 溝

溝については、時期不詳また近世以降のものが数多く、トレンチ調査時点で確認されたものは、平安期、または近世に比定され覆土中にはB軽石、A軽石が確認されるものが多かった。A区、B区では全体を確認しえたものは無く、トレンチにおいて幅、走行方向を確認したにとどまったが、いずれも近世以降に比定される。ここでは時期的な認定がある程度可能なもの、検出状況が良好なものを取り上げ説明を加えることとする。

1～8号溝は拡張区の北側において検出した。東西、南北に走るものが多く、トレンチ部分については遺構の重複が多く、部分的な検出に終わったものが多い。覆土にA軽石を含むものが多く、時期的には近世のものが主体を占める。

10～13号溝は拡張区の南側で検出されている。部分的に検出されており走行も不規則である。14・15号溝はほぼ平行するように東西に走るが形状、掘り込み面共に不明瞭である。14号溝の北側で平行して東西方向に走る細い数条の溝状遺構を検出した。覆土中にC軽石を含み、畑跡の可能性はある。

16～20号溝はいずれもC区のトレンチで確認されたものである。ほぼ東西に平行して走るが、やや曲がっている。時期的には近世以降のものである。

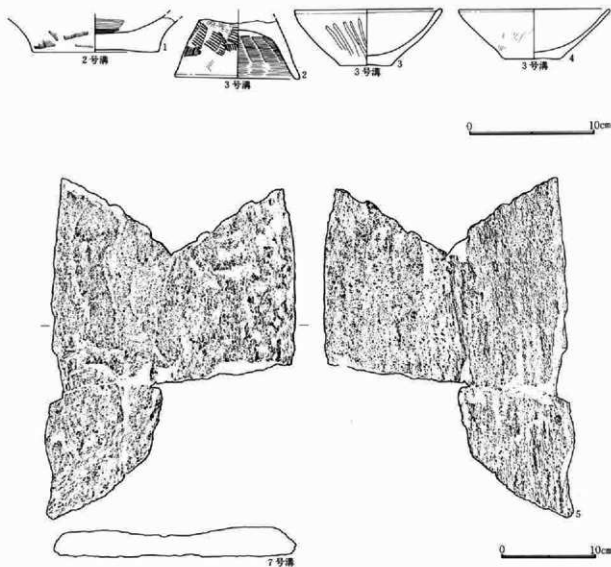
21号溝はB区のトレンチで検出されている。南北に走り幅は1m程である。

22号溝は東西に走り、途中に土壌が重複している。その他A区のトレンチでは、南北に走ると思われる溝が検出されているが掘り込み面の確認が難しく、またつながりが不明なものが多い。

## (6) 水田址

低地部分の各トレンチにおいて、浅間B軽石層下に粘性黒色土層を認めているが、調査時点では面的な拡張も行っていないこともあり、水田址の存在は確認し得なかった。調査時点では景区内においても水田址の調査例は殆ど無く、調査においても水田についての認識が不十分であった事にもよる。後日行われた、周辺遺跡の調査では浅間B軽石層下の水田址が確認されており、下斉田遺跡においても水田が存在していた可能性は十分に考えられる。

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

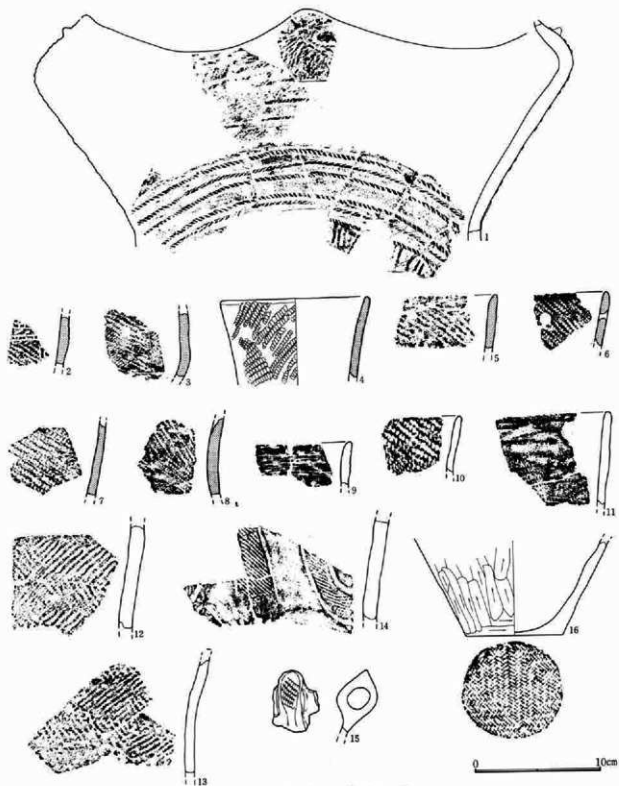


第60図 2・3・7号溝出土遺物

表 26 溝出土遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	壺	口径 — 脚高 — 底径 10.0	厚手でしっかりした造りの平底、脚部は外反して立ち上がる。	外面 刷毛目後磨き。 内面 鈍磨で。	砂粒・石粒を含む 普通	黒色	2溝
2	台付壺	口 — 高 — 底径 10.0	「ハ」の字に開く台部、端部やや丸みを持つ。	外面 刷毛目。端部横撫で。 内面 上面指撫で、側面横刷毛目。端部横撫で。	砂粒・石粒を含む 良	黒色一部 にぶい黄 褐色	脚部 3溝
3	坏	口 11.8 高 4.2 底 4.5	底部小さくやや膨みを持って逆「ハ」の字に立ち上がる。	外面 磨磨き。 内面 鈍磨き。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	3溝
4	坏	口 12.0 高 4.0 底 4.4	体部やや膨みを持って開く。	外面 体部、底部とも磨磨き。 内面 鈍磨き。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	3溝 内面磨れている
5	出土位置	器種	法量 (cm・g)	石 材	備 考		
	7号溝	板 碑	35.5×26.5× 3.5 3480.0	緑色片岩			



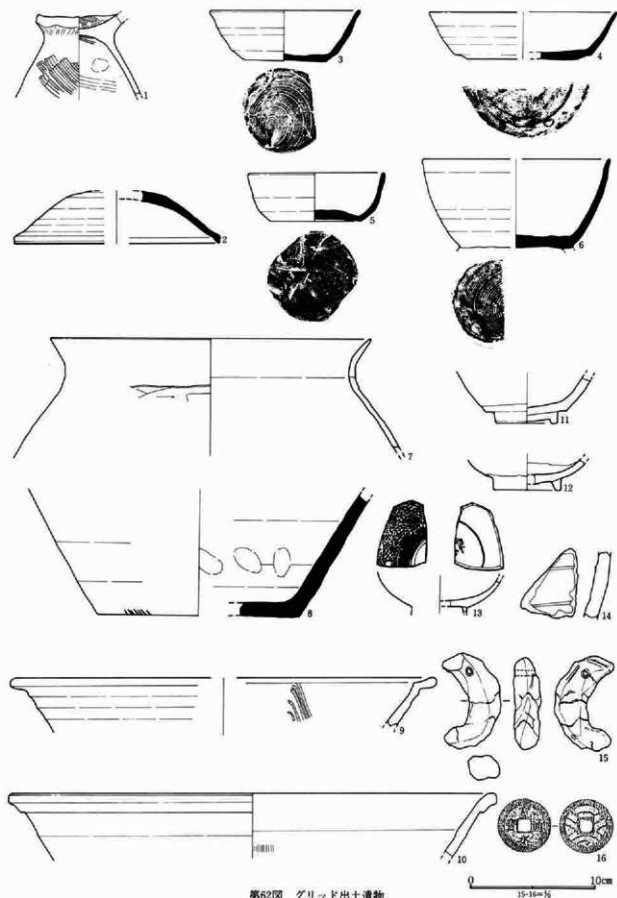


第61図 グリッド出土縄文土器

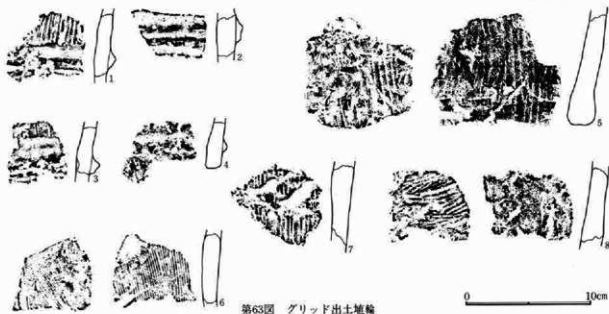
## (7) グリッド出土遺物 (第61～63図)

縄文時代から近世にかけての遺物が出土している。多くはC区からで縄文土器はややまとまって出土している。(第63図) 埴輪はいずれも小破片である。

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



第62図 グリッド出土遺物



第63図 グリッド出土土輪

表 27 グリッド出土縄文土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	特 徴
1	深鉢	最大径 (42.8) 口 径 (36.0)	キャリパー状を呈し、口唇部内屈し、四単位の波状を呈す。波頂下に貼付文を持つ。胴部、縦筋あり。胴上部から口縁にかけて、横位の浮線文。浮線文上には矢羽根状の刻みを付す。口縁波頂部にはやはり浮線文で波状のモチーフを描く。地文にはR Lの縄文を施文するが、口縁部は無筋Lを施文している。
2	深鉢	—	縦線を含む。連続爪形文を横に2条、直行するように平行沈線を描く。施文はR L。
3	深鉢	—	縦線を含む。「T」状に平行沈線を描き、地文にR Lを施文している。
4	深鉢	口 径 (11.6)	縦線を含む。L Rが施文される。方向がやや不規則である。
5	深鉢	—	縦線を含み無筋Rが横位に施文される。
6	深鉢	—	縦線を含む。R Lが横位に施文される。補修孔を持つ。
7	深鉢	—	縦線を含む。R Lを横位に施文する。
8	深鉢	—	縦線を含む。R Lを横位に施文するが、不規則である。
9	深鉢	—	口縁に沿って3本の平行沈線を横に走らす。
10	深鉢	—	口唇以下にR Lを横位に施文する。
11	深鉢	—	下部に浅い平行沈線を横位に付す。
12	深鉢	—	L R、R Lを用いて羽状縄文を施文。
13	深鉢	—	R L、L Rで羽状縄文が施文される。
14	深鉢	—	L Rを地文に縦位施文。縦の磨消帯を持つ。
15	深鉢	—	把手片、肩部がやややなり、肩部外面に浅く縄文が施文されている。
16	深鉢	底 径 7.7	胴部、縦筋あり。底面網代圧痕。

表 28 グリッド出土土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	台付甕	口径 — 器高 — 底径 —	「ハ」の字に開く。	外面 斜め縦毛目。 内面 縦毛目、撫で、体部縦毛目保型磨き。	砂粒を含む 良	赤褐色	
2	須恵器 壺	口 (1.64) 高 — 底 —	なだらかに広がり肩部でわずかに折れる。	外面 ロクロ成形、天井部回転調整。	砂粒を含む 良	灰黄色	
3	須恵器 杯	口 (12.1) 高 4.0 底 6.5	体部やや内彎気味に立ち上がり、口縁部やや外反する。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転切断切り。	細砂粒を含む やや軟質	灰黄色	
4	須恵器 杯	口 (15.0) 高 — 底 —	体部外傾して立つ。口縁部薄くなる。	ロクロ成形。 底部 回転切断切り、外周撫で調整。	砂粒を含む 良	灰色	
5	須恵器 杯	口 (11.0) 高 3.9 底 7.1	体部下手にゆるい屈曲を持って立ち上がる。底部内側へ盛り上がる。	ロクロ成形。 底部 静止切断切り。	細砂粒を含む 良 堅緻	灰色	

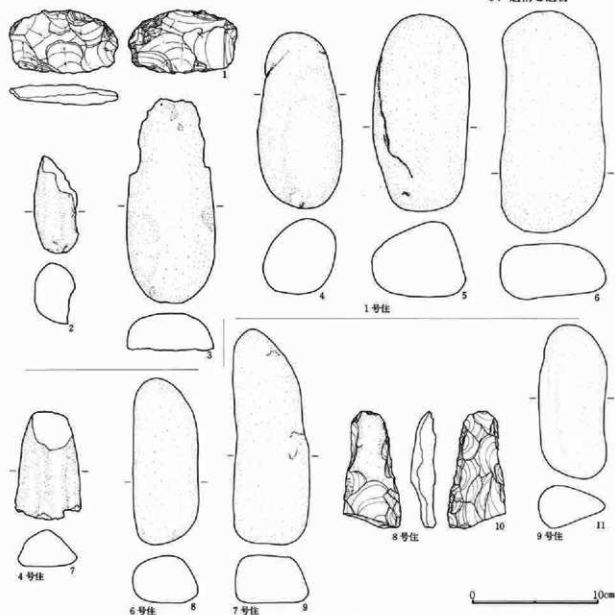
Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
6	須恵器鉢	口径 (15.0) 器高 — 底径 —	内脚気味に立ち上がる。やや深めの体部。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転承切り。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	高台部欠損
7	甕	口 (25.5) 高 — 底 —	なだらかな肩部から頸部やや締まり口縁部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 荒削り。 内面 荒撫で。	砂粒を含む 良	褐色	
8	須恵器甕	口 — 高 — 底 (16.0) —	胴部やや外傾して立ち上がる。	内・外面撫で成形。 底部 荒削り。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	
9	鉢	口 (34.0) 高 — 底 —	厚手で、やや屈曲を持つ。内面に浅い段を持つ。		砂粒を含む 良	にぶい黄褐色	
10	すり鉢	口 (39.0) 高 — 底 —	口縁部外側へ折り返し、口唇部肥厚しやや角張る。	ロクロ成形。	石粒を含む 良	淡黄褐色	
11	甕	口 — 高 — 高台径 5.0	胴に稜を持ち、体部外反して立ち上がる。	ロクロ成形。 削り出し高台。	精製砂 良	灰白色 釉薬塗 暗褐色	天目軸
12	甕	口 — 高 — 高台径(5.4)	体部やや丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。 削り出し高台。	石粒を含む 良	灰白色	天目軸
13	甕(染付)	口 — 高 — 底 —	体部丸みを持って立ち上がる。		精製砂 良	白色	伊万里系
14	鉢	口 — 高 — 底 —	内稜を持ち、口縁部外反する。 口唇端部肥厚する。		狭頸物無し 良	灰白色 釉は黒茶色	体部片軸は黒茶色
15	土製勾玉	長さ 4.9 幅 2.9 厚さ 1.5	やや縦長のC字状を呈し、土の接合面が見られる。孔はやや不正で径2mm程である。	製作時の指痕が顕著に見られる。	細砂粒を含む	にぶい褐色	
16	寛永通寶	径 2.8 厚さ 0.12	銅製 裏面に波文有 1769 (明和6) 年鑄造		保存状態 良		

表 29 グリッド出土埴輪類調査表

番号	出土位置	厚さ (cm)	成・整形の特徴	突起	胎土	焼成	備考
1	20-21-A11-14	1.7	外面 縦刷毛目。 内面 荒撫で。		砂粒含む	良	
2	48-C34-36	2.2	外面 — 内面 荒撫で。	断面ややだれた「コ」の字状	小石を含む	普通	
3	42-C26	2.0	外面 縦刷毛目。 内面 荒撫で。	断面ややだれた「コ」の字状	砂粒を含む	良	
4	19-A31	1.6	外面 — 内面 荒撫で。	断面ややだれた三角	砂粒を若干含む	良	底部か
5	43-C46-48	2.4	外面 縦刷毛目。 内面 横荒撫で。		小石を含む	普通	底部片
6	01-B36	1.4	外面 縦刷毛目。 内面 刷毛目。		石粒を若干含む	良	
7	15-D41-45	1.7	外面 縦刷毛目。 内面 荒撫で。		砂粒を含む	良	
8	48-A16-18	1.9	外面 刷毛目。 内面 刷毛目。		石粒を含む	普通	刷毛目無い

## 3. 遺構と遺物



第64図 1・4・6・7・8・9号住居址出土石器

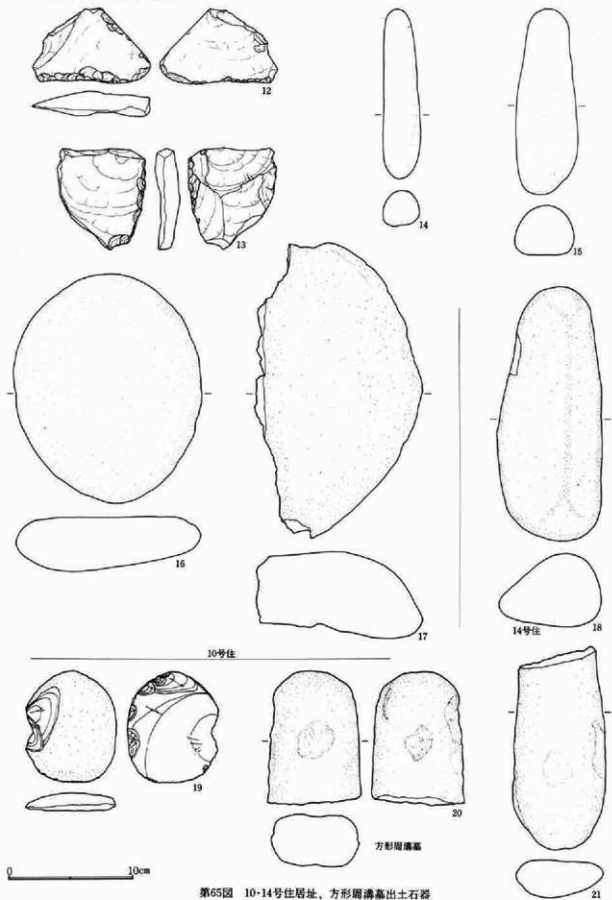
## 出土石器 (第64~70図)

石器は総点数70点で各遺構から出土している。出土した遺構の時期に比定されるものもあるが縄文時代のものも多く混入していると考えられる。器種的には石鏃2点をはじめ、自然礫を利用した敲石の他、石斧、スクレイパー等の打製石器類が多い。砥石片3点、軽石製の紡錘車も1点出土しているが古墳時代以降のものであるとしか判らない。以下各出土遺構ごとに記載して説明を行う。

表 30 住居、土塚、溝出土石器観覧表

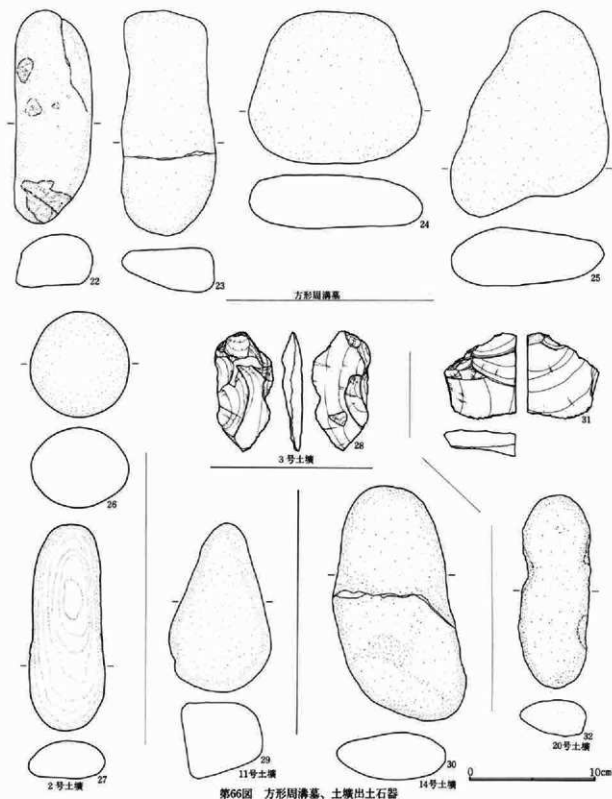
番号	出土位置	器種	法量 (cm・g)	石材	備考
1	1号住居	スクレイパー	8.7×5.0×1.6 66.2	黒色頁岩	両側縁に鋭い刃部を作る。
2	1号住居	敲石	7.7×3.4×4.8 (131.6)	輝石安山岩	破損品。
3	1号住居	敲石	16.2×7.0×3.7 (506.0)	ひん岩	片面大きく破損する。
4	1号住居	敲石	13.9×6.8×5.8 840.0	輝緑岩	端部に使用痕。
5	1号住居	敲石	15.1×7.5×6.2 1248.0	石英閃緑岩	端部に若干の磨滅痕。
6	1号住居	敲石	17.5×8.3×5.2 1281.0	石英閃緑岩	両面が平直をなす。

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



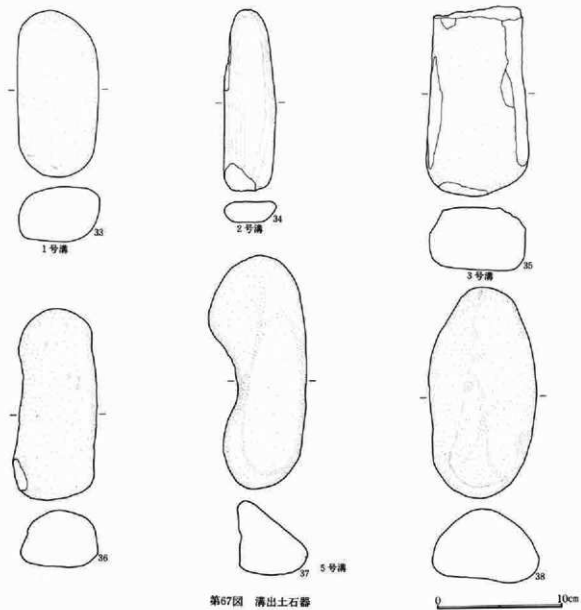
第65図 10・14号住居址、方形周溝墓出土石器

3. 遺構と遺物

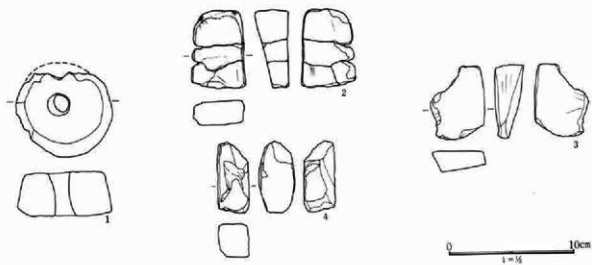


番号	出土位置	器種	法量 (cm・g)	石材	備考
7	4号住居	磨石	8.6×5.2×2.9 180.3	緑色薄片岩	断面三角形を呈し、両端を破損する。
8	6号住居	磨石	13.2×5.2×4.2 448.0	石英燧岩	両端部に若干の磨減痕。
9	7号住居	磨石	17.1×6.2×4.9 747.0	輝石安山岩	両端部、片面に使用痕。
10	8号住居	打製石斧	9.3×4.7×2.0 83.2	黒色頁岩	基部やや細く段形を呈し、片面に自然面を持つ、刃部欠損。

Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡



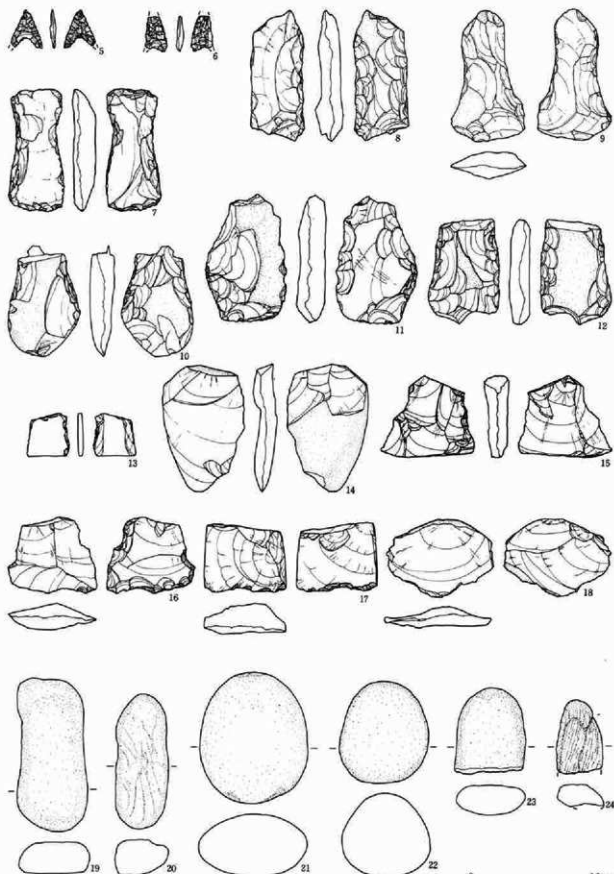
第67図 清出土石器



第68図 グリッド出土遺物



3. 遺構と遺物



第69図 グリッド出土石器(1)

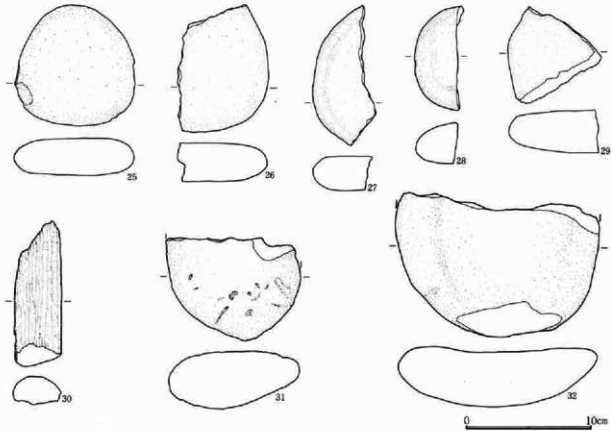
Ⅲ. 下齊田・滝川A遺跡

番号	出土位置	器種	法量 (cm・g)	石材	備考
11	9号住居	磁石	12.1×5.2×3.7 377.0	ひん岩	中央片縁が薄くなる。
12	10号住居	スクレイバー	9.4×6.0×1.8 78.3	黒色頁岩	三角形を呈し、長辺部に粗い刃部を持つ。
13	10号住居	スクレイバー	8.0×8.7×1.6 124.0	黒色頁岩	厚手の屈状を呈し、一側縁に粗い刃部を持つ。
14	10号住居	磁石	13.4×3.0×2.8 188.3	雲母石英片岩	棒状を呈す。
15	10号住居	磁石	14.7×4.9×3.3 468.7	輝石安山岩	端部側縁に使用痕。
16	10号住居	台石	18.0×15.2×4.5 1614.0	輝石安山岩	偏平な円盤、一面が使用により摩耗している。
17	10号住居	台石	23.4×13.2×6.7 2876.0	輝石安山岩	片面平直で、約半分を欠損する。
18	14号住居	磁石	20.1×8.3×5.9 1379.0	石英閃緑岩	端部に若干の打痕が認められる。大型品である。
19	方形周溝墓	スクレイバー	7.2×8.8×1.5 98.7	黒色頁岩	一時割片、片面に自然面を持つ。方の作りは細い。
20	方形周溝墓	磁石	10.7×7.5×4.4 592.0	輝石安山岩	両面に使用による浅い凹穴を持つ。半分を欠く。
21	方形周溝墓	磁石	16.1×7.5×3.2 558.0	雲母石英片岩	端部に使用痕。
22	方形周溝墓	磁石	16.9×6.2×4.2 721.0	ひん岩	端部の一部を欠損する。
23	方形周溝墓	磁石	17.8×7.4×5.1 960.0	輝石安山岩	一方の端部が薄くなり、使用痕を持つ。
24	方形周溝墓	台石	12.1×13.8×4.5 1225.0	輝石安山岩	両面平直をなす。
25	方形周溝墓	台石	16.3×12.6×4.7 1086.0	輝石安山岩	不定形、自然面か。
26	2号土壇	丸石	8.3×7.9×6.5 569.5	輝石安山岩	球形を呈し、表面は平滑である。
27	2号土壇	磁石	16.4×6.0×3.3 510.0	雲母石英片岩	端部に打痕。
28	3号土壇	スクレイバー	9.5×4.7×1.6 57.0	黒色頁岩	不定形を呈し、刃部もやや打つ。
29	11号土壇	磁石	13.4×8.3×6.3 838.0	輝石安山岩	三角形を呈す。
30	14号土壇	磁石	18.5×10.7×4.8 1100.0	輝石安山岩	自然面か。
31	20号土壇	スクレイバー	6.3×5.7×2.1 60.0	黒色頁岩	屈状を呈し、凸状の刃を持つ。
32	20号土壇	磁石	15.3×5.4×3.3 382.0	輝石安山岩	端部、側縁に使用痕。
33	1号溝	磁石	13.1×6.5×4.4 620.0	輝石安山岩	端部に若干の使用痕。
34	2号溝	磁石	14.3×4.1×1.8 197.3	緑色片岩	棒状を呈し、端部僅かに欠く。
35	3号溝	磁石	15.0×8.2×5.5 118.7	輝石安山岩	端部に使用痕、両面平直で平滑、一端を欠損する。
36	5号溝	磁石	15.6×6.8×4.7 642.0	輝石安山岩	端部側面に使用痕。
37	5号溝	磁石	18.4×7.7×6.9 1174.0	滑結凝灰岩	中央でえぐれる不定形を呈す。
38	5号溝	磁石	16.7×8.5×6.8 988.0	輝石安山岩	端部に使用痕。

表 31 グリッド出土石器類等表

番号	出土位置	器種	法量 (cm・g)	石材	備考
1	33-C45	紡錘車	5.1×(5.0)×2.4 28.8	輝石	両面、周辺部磨かれている。鉄状を呈す。
2	48-C42	磁石	6.2×4.3×2.6 85.9	流紋岩	4面を使用、中央は薄くなる。
3	46-A7-C49-50	流石	5.8×4.3×2.2 55.5	流紋岩	4面を使用、かなり磨減している。
4	23-24-C34	磁石	5.7×2.6×2.9 55.7	流紋岩	断面方形で、2面に使用面を持つ。
5	45-46-D01	石鏝	2.1×1.7×0.3 0.7	閃輝石	凹基縁、基部の挟りは深く先端部、脚端部を欠く。
6	32-D06	石鏝	1.8×1.2×0.4 0.7	閃輝石	凹基縁、先端部、片側縁を欠損している。
7	26-29-C50	打製石斧	9.7×4.4×1.8 91.8	黒色頁岩	両端縁が傾かずに付れる。
8	15-A26	打製石斧	10.4×4.3×2.2 100.6	黒色頁岩	刃部を欠く、両側縁は粗く歯状がなされる。
9	18-19-A33	打製石斧	10.3×5.8×2.2 109.8	黒色頁岩	楕形を呈す、刃部の作りは粗くかなり磨耗している。
10	21-A41	打製石斧	8.7×5.7×2.0 100.0	黒色頁岩	刃部丸みを持ち、かなり磨耗している。基部欠損。
11	28-29-C42-43	打製石斧	10.1×6.4×2.3 175.3	黒色頁岩	作りは粗く、片面一部に自然面。
12	西松原区	打製石斧	8.3×5.2×1.6 101.3	黒色頁岩	刃部はかなり磨耗している。基部欠損。
13	07-A19	打製石斧	3.4×3.4×0.4 8.4	頁岩	両面、端部に磨痕。
14	11-A11	スクレイバー	10.0×6.5×1.9 106.8	黒色頁岩	片面に自然面、一側縁に粗い刃部。
15	36-C43	スクレイバー	6.5×7.5×2.0 68.7	黒色頁岩	不定形を呈し一側縁に刃部を有する。上端に自然面。
16	西松原区	スクレイバー	7.0×6.0×2.1 77.3	黒色頁岩	不定形を呈し、刃部の作りは粗い。
17	36-C46	スクレイバー	6.4×5.4×2.5 87.7	黒色頁岩	四辺形を呈し、下辺に刃部を持つ。片面は平ら。
18	46-49-C04	スクレイバー	8.5×6.2×1.8 56.0	黒色頁岩	明確な刃部を持たない。一側縁に自然面を持つ。
19	30-C46	磁石	12.2×5.7×2.6 321.4	石英片岩	両面平直でかなり平滑である。
20	28-29-C42-43	磁石	10.6×4.3×3.1 237.5	変輝緑岩	一面に若干の使用痕。
21	14-A19	磨石	10.4×8.7×4.9 606.0	輝石安山岩	端部に打痕を持つ。
22	30-C44	丸石	8.1×7.2×6.7 453.3	輝石安山岩	若干の使用痕を欠く。
23	34-C48	磁石	6.9×5.5×2.4 160.7	石英閃緑岩	やや偏平で、一端を欠いている。
24	30-42-43	磁石	5.8×3.6×1.7 53.6	黒色片岩	欠損品。
25	西松原区	磁石	9.6×9.6×3.0 410.0	輝石安山岩	やや偏平な石で、側縁に打痕を持つ。
26	29-C38	台石	10.0×7.3×3.1 360.3	輝石安山岩	両面は平直、欠損品である。
27	33-34-C44-45	台石	11.1×5.0×2.8 217.9	輝石安山岩	偏平な石で半分以上欠損している。
28	41-A42	流石	8.2×3.4×3.7 129.5	流紋岩	円形を呈すと思われるが、半分は以上を欠く。
29	48-50-C46	台石	7.6×7.4×3.4 201.3	輝石安山岩	偏平な石、破損品である。
30	28-29-C42-43	磁石	11.5×3.7×2.3 143.4	黒色片岩	棒状を呈すと思われるが、両端を欠く。
31	2区	磁石	8.2×10.4×4.6 430.5	輝石安山岩	不定形な石で、欠損している。
32	西松原区	石鏝	11.3×15.6×4.5 1287.0	石英閃緑岩	使用面やや凹み、約半分を欠いている。

3. 遺構と遺物



第70図 グリッド出土石器(2)

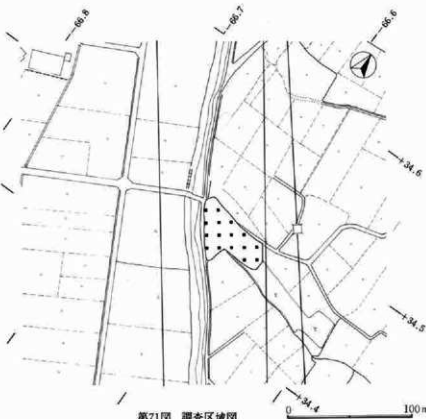
#### Ⅳ. 滝川B遺跡

### Ⅳ. 滝川B遺跡

#### 1. 調査の方法と経過

本遺跡は、分布調査を行った際、少量の土器片を採集したため、遺跡として登録されたものである。下斉田・滝川A遺跡・同C遺跡の調査終了後、発掘調査に入ることになり、昭和51年6月19日から30日まで実施した。遺跡地の面積が狭いため、全体にグリッドを設け掘削を行う。遺構、遺物が検出されないため、試掘調査をもって終了することとした。

路線が滝川を含んでおり、発掘対象地は、左岸の微高地にある。面積が1,900㎡と少ないため、グリッド調査を実施することになった。台地の南東隅にグリッドの原点を置き、南北をX軸、東西をY軸とし、2m単位に数字を配した。発掘調査は10m単位の大グリッドに対し2×2mのグリッドを開けるように設定した。



第71図 調査区域図

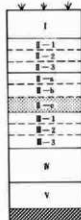
#### 2. 基本土層

本遺跡の層序は基本的には大きくⅠ～Ⅲの3層に分けられ、さらにⅡ層は6層に、Ⅲ層は3層に細分可能である。以下に各層の説明を示す。

Ⅰ. 表土。Ⅱ-1 黒褐色土。Ⅱ-2 灰色を帯びた褐色土、粘性が有り、鉄分(黄色)の凝集塊を含む。Ⅱ-3 鉄分凝集の黄褐色土、やや砂質である。Ⅱ-a 鉄分凝集の赤黄色土、B軽石混入。Ⅱ-b 黒色土でB軽石混入。Ⅱ-c B軽石層。Ⅲ-1 粘質黒色土であるがやや灰色を呈す。Ⅲ-2 灰色粘質土、黄褐色鉄分凝集粒を混入。Ⅲ-3 粘質黒色土鉄分凝集を多く混入、やや灰色を帯びる。地山ブロックを若干混入する。Ⅳ ローム漸移層。Ⅴ ローム層

#### 3. 遺跡の概要

下斉田遺跡に続いてトレンチ調査を行ったが、遺構遺物に関しては検出されなかった。



第72図 基本土層図

## V. 滝川C遺跡

### 1. 調査の方法と経過

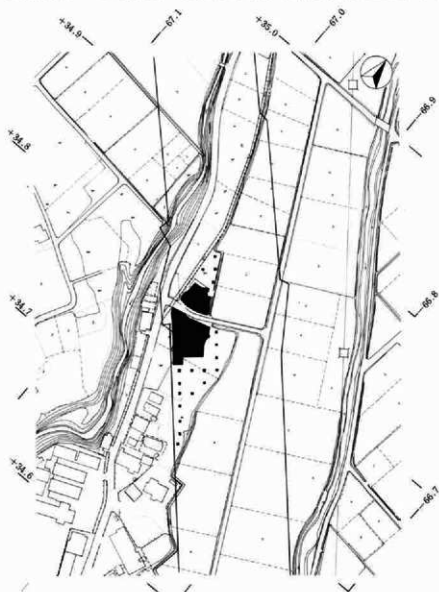
下斉田遺跡調査終了後の昭和51年3月1日から6月19日まで実施した。

本遺跡は、滝川と広沢川に挟まれた桑畑の微高地上に立地する。広沢川の左岸を南北に延びる台地上に展開するものであるが、開越道の路線が、台地西側の縁辺から水田地帯を通過することになったため、微高地に対する発掘のみ実施した。従って、グリッド調査で試掘を行うこととした。グリッドの原点を南東隅に置き、南北をX軸、東西をY軸とし、呼称は(X軸、Y軸)とした。試掘は、10m単位の大グリッドに対し2×2mの1グリッドを開けることとし、微高地全体に設定した。その結果、主な遺構として土塼30基、溝19条その他の性格不明のピット、落ち込みを検出した。遺物は古墳時代初頭の土器類が多く出土したが遺構に伴うものは少なかった。遺構、遺物の検出した部分を

中心に順次拡張を行った。

### 2. 基本土層

本遺跡の基本土層は大きくI～V層に分けることができるが、さらにII層は3層に、III層は5層に細分でき、部分的には僅かではあるがニツ岳の軽石(F・P)も確認されている。土器は主にIII層中より出土している。



第73図 調査区域図

0 100m

## V. 湖川C遺跡

### I層 表土

### II層 B軽石層混入土

II-a B軽石混入の褐色土層、鉄分を含み褐色みが強い。

II-b B軽石混入の黒色土。

II-c B軽石層4層に細分可能な部分もある。

### III層 黒色土層

III-1a 黒色粘土層。

III-2a 灰色粘土層。

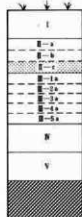
III-3a 灰褐色粘土層。

III-4a 灰色粘土層（鉄分含有）。

III-5a 黒色粘土層（非常に黒みが強い）。

### IV層 ローム漸移層

### V層 ローム層



第74図 基本土層図

## 3. 遺構と遺物

### (1) 土 竪

本遺跡で検出した土竪は総数30基である。時期的には古墳時代前期に比定されるものが多い。分布の状況は特に規則性は無く、規模、形状共に多種多様である。

#### 1号土竪

31-B06グリッドに位置する。平面形は円形を呈し断面漏斗状となる。規模は117×(110)cm、深さ63cmである。溝と重複する。遺物はS字甕2点が出土している。

#### 2号土竪

24-25-B05-06グリッドに位置する。長方形を呈し規模は266×76cm、深さ58cmである。掘り込みは比較的垂直に近い。底はやや凹凸が見られる。S字甕と高坏の破片が出土している。

#### 3号土竪

29-31-B11-13グリッドに位置し、形状は不定長円形を呈す。規模は(315)×120cm、深さ74cmを測る。底は凹凸が目立つ。南西隅を1号溝が切る。

#### 4号土竪

30-31-B12-13グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は133×84cm、深さ25cmである。浅いすり鉢状である。壺片1点が出土している。

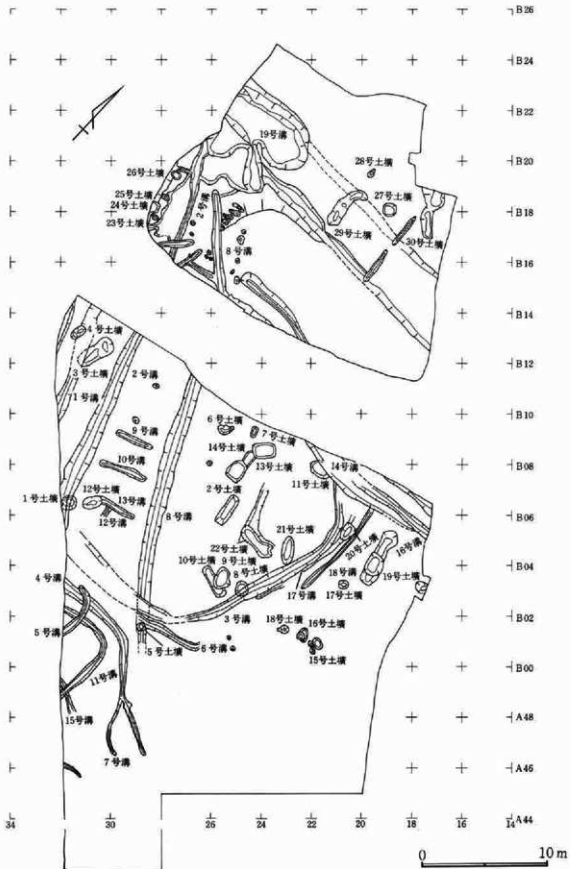
#### 5号土竪

28-B01グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し規模は43×43cm、深さ60cmを測る。垂直に掘り込まれており、底は平坦である。中位や上層よりS字甕、ほぼ完形の小型壺・器台が出土、さらにその下位には扁平な石が検出されている。

#### 6号土竪

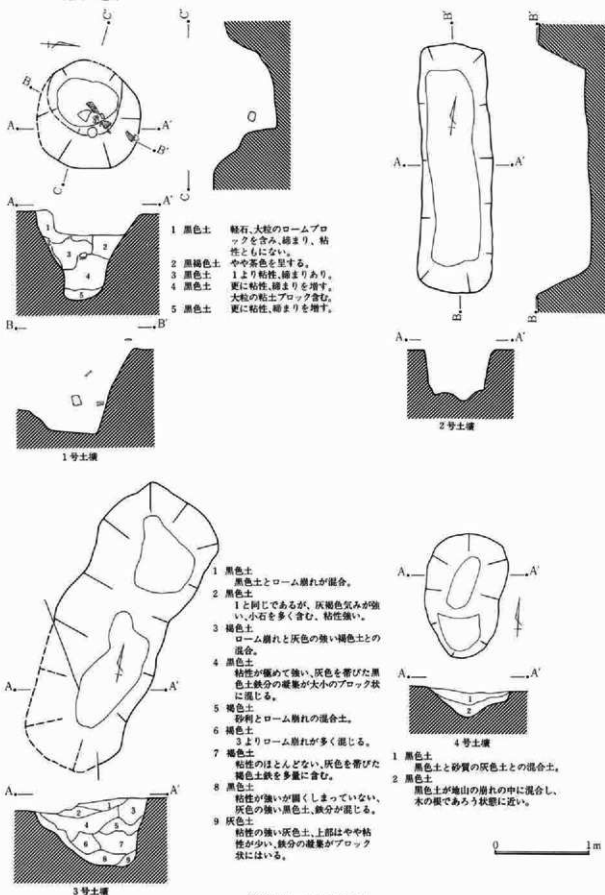
25-B09グリッドに位置する。半月形を呈し、規模は114×60cm、深さ40cmである。掘り込みは不規則で、底は狭まる。

3. 遺構と遺物



第75図 遺構全体図

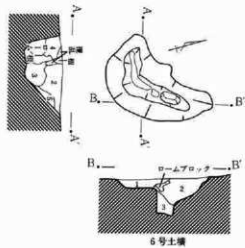
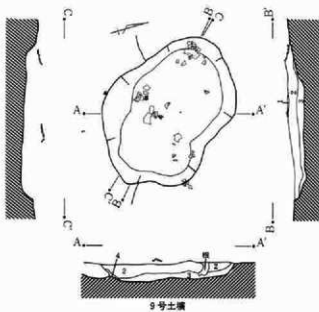
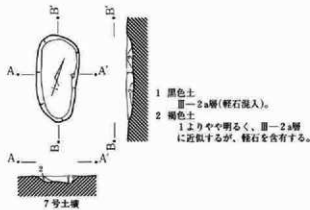
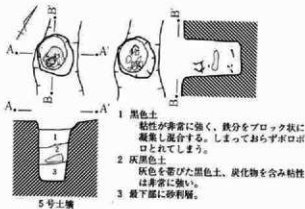
V. 流川C遺跡



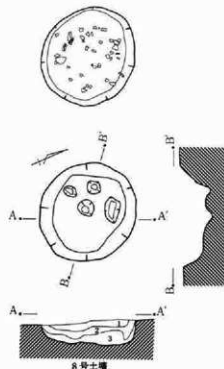
第76図1～4号土壌(1)



### 3. 遺構と遺物

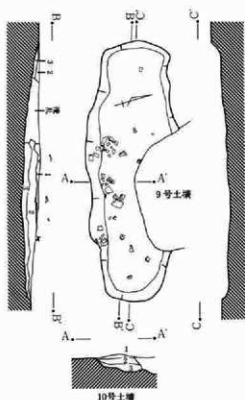


- 1 黒褐色土 若干の炭化物を含み、2より褐色みが強い、軽石の含有あり。
- 2 黒色土 炭化物の含有多し、1より黒い軽石の含有も少ない。
- 3 黒色土 炭化物の含有がきわめて多い、1,2よりフカフカしている。
- 4 黄色土 ロームを混入する、締まりがない、細かい炭化物を含む。
- 5 黒褐色土 黒色土を含むローム層、壁面からのくずれと思われる。

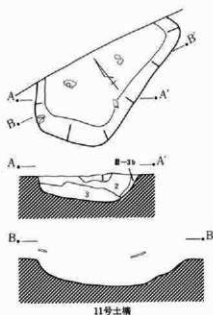


第77図 5～9号土壌(2)

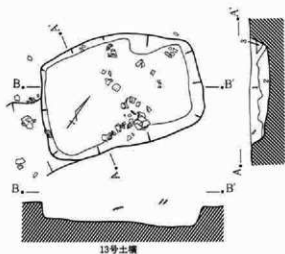
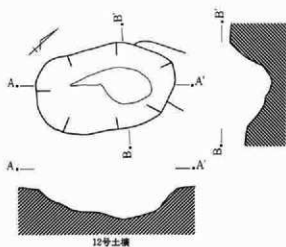
V. 滝川C遺跡



- 1 黒褐色土 鉄分を含みやや茶色、軽石を含み層1-2ヶ層が主体であると考えられる。やや粘性あってしまう。軽石をごく少量混入する。粘性はあるがあまりがない。
- 2 黒色土 やや褐色を帯びる。堆山の混合であると思われる。粘性あってややしまっている。
- 3 黒褐色土



- 1 黒色土 軽石を混入し2に比べ非常に砂っぽい。
- 2 黒色土 軽石混入の黒色土に比定される。軽石の含有多し若干のロームブロック混入。
- 3 黒褐色土 ようし大位までのロームブロックを多量に含む。基本的には2との混合である。軽石の含有は少ない。

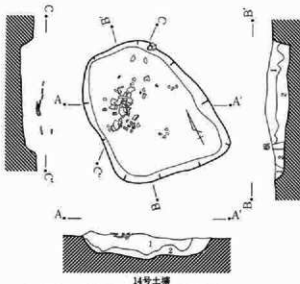


- 1 黒色土 軽石混入の黒色土にロームブロック混入。
- 2 黒褐色土 1にようし大位までのロームブロックを多量に含む。
- 3 黒色土 1に近似、軽石を少量含む。

0 1 m

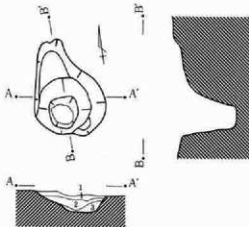
第78図 10~13号土壇(3)

3. 遺構と遺物



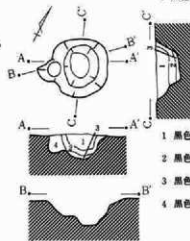
14号土溝

- 1 黒色土 Ⅲ-2 a層(軽石混入の黒色土)、軽石混入の黒色土より褐色みが強い、こぶし大位までのロームブロックを含む、1より軽石の含有少ない。
- 2 黒褐色土

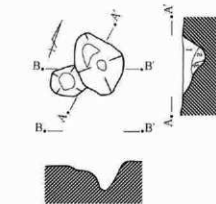


15号土溝

- 1 黒色土 Ⅲ-5 a層に近似軽石少量含むが色調はⅢ-5 a層より黒い。
- 2 黒色土 1と近似するが軽石は含まない。
- 3 褐色土 2と似ているが粘土ブロックを含む。やや黄色みがかる。

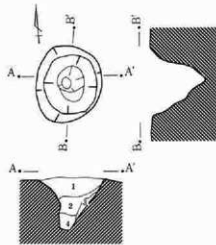


16号土溝



17号土溝

- 1 黒色土 Ⅲ-5 a層に近似軽石を少量含む、色調はⅢ-5 a層より黒い。
- 2 黒色土 非常に砂質に富む黒色土、小粒の粘土ブロックを含む。
- 3 黒色土 2に紋状に粘土ブロックを含む。



18号土溝

- 1 黒色土 粘性が強い、上部に鉄分、C軽石を含むⅢ-5 a層のくずれであろう。
- 2 黒色土 灰色を帯びた黒色土、粘性は強い、地山のシルト化したロームを混ざっている。
- 3 黒色土 地山の崩れ混入。
- 4 黒色土 地山のシルトと黒色土がブロック状に凝結する。

- 1 黒色土 粘性黒色土層、鉄分ブロック凝状を含む。
- 2 黒色土 1に大粒の粘土ブロックを含む、南側のみ存在しない。
- 3 黒色土 1よりも粘性の強い更に黒みを増す、小粒の粘土ブロック含む。
- 4 黒色土 1に近似するが粘性は弱い、鉄分ブロックは小粒となり多量を含む。

0 1m

第79図 14-18号土溝(4)

## V. 徳川C遺跡

### 7号土壌

24-B09グリッドに位置する。長円形を呈し、規模は90×43cm、深さ8cmと浅い。3号溝に切られる。

### 8号土壌

24-25-B02-03グリッドに位置する。ほぼ円形を呈し、規模は106×100cm、深さ33cmである。底は凹凸が目立つ。遺物はS字甕の破片が2点出土している。

### 9号土壌

25-B03グリッドに位置する。平面形状は不正円形で南側は10号土壌と重複する。規模は173×120cm、深さは15cmである。底はやや凹凸が認められる。S字甕片2点が出土している。

### 10号土壌

25-26-B02-04グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、規模は226×(97)cm、深さ15cmを測る。底は中央に向かって緩やかに落ちる。遺物は上層よりS字甕片5点、壺片1点が出土。

### 11号土壌

21-22-B07-08グリッドに位置する。北側の一部が未調査である。不正方形を呈すと思われる。現状での規模は155×(95)cm、深さ32cmである。掘り込みはレンズ状を呈す。遺物はS字甕、壺、小型壺等である。

### 12号土壌

30-31-B06グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し、規模は152×88cm、深さ32cmである。13号溝と重複する。

### 13号土壌

23-24-B08グリッドに位置する。平面形は長方形を呈し、規模は175×120cm、深さ21cmである。遺物は底から20cm程浮いた状態でS字甕6点、壺1点が出土している。

### 14号土壌

24-25-B07-08グリッドに位置する。平面形は不定方形を呈し、規模は150×120cm、深さ14cmである。遺物はS字甕が浮いた状態で出土している。

### 15号土壌

21-22-B00-01グリッドに位置する。平面形は不定円形を呈し、規模は79×71cm、深さ31cmで小ビット状を呈す。人為的なものとは考えがたい。

### 16号土壌

22-B00-01グリッドに位置する。平面形はやや長円形を呈し、規模は100×74cm、深さ60cmである。

### 17号土壌

20-B03グリッドに位置する。平面形はやや長円形を呈し、断面ロート状を呈す。規模は81×65cm、深さ60cmである。

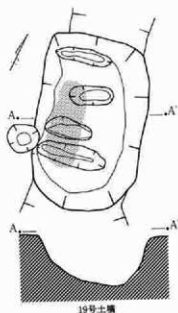
### 18号土壌

22-23-B01グリッドに位置する。平面形はほぼ円形を呈し、底面凹凸が目立つ。規模は77×62cm、深さ26cmである。

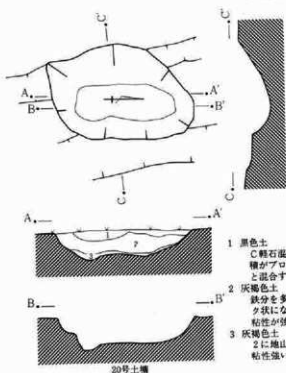
### 19号土壌

19-B03-04グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し、規模は185×97cm、深さ52cmである。覆土中に焼土の堆積が見られる。遺物は小型壺が1点出土している。

### 3. 遺構と遺物

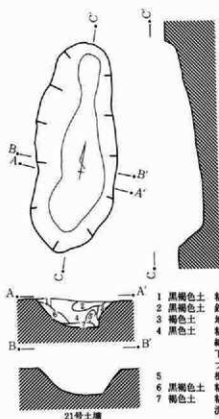


19号土坑



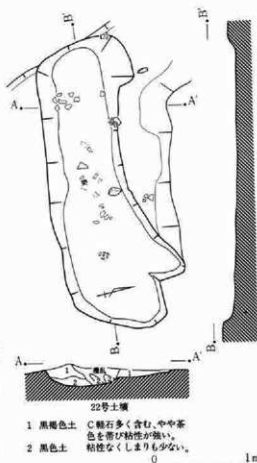
20号土坑

- 1 黒色土  
C 軽石混入の黒色の再堆積がブロック状になり、2と混合する。
- 2 灰褐色土  
鉄分を多量に含み、ブロック状になり塊状に凝結し、粘性が強い。
- 3 灰褐色土  
2に地山のロームを含む、粘性強い。



21号土坑

- 1 黒褐色土 粘性あり全体的に茶色を帯びる。
- 2 黒褐色土 鉄分多めに含み、褐色土が混入。
- 3 褐色土 地山ローム较多量に含む。
- 4 黒色土 粘性強いが気泡が多量にあり、締まりがない。やや灰色を帯び下に黒い堆積がある。褐色状にブロック(根の跡)散在す。
- 5 黒褐色土 粘性の強みの強い褐色土。
- 6 黒褐色土 粘性の強い褐色土。下のロームとの混合と考えられる。
- 7 褐色土



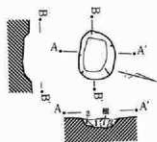
22号土坑

- 1 黒褐色土 C 軽石多く含む、やや茶色を帯び粘性が強い。
- 2 黒色土 粘性なくしりも少ない。

0 1m

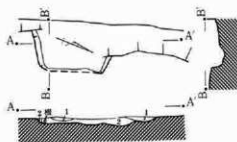
第80図 19~22号土坑(5)

V. 流川C遺跡



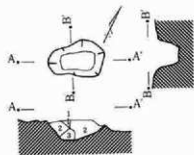
23号土壌

- 1 淡黒色土 層-2a層に近似、粘性、締まり有り小粒の粘土ブロック含む。
- 2 淡黒色土 1と性質は近似するが、粘土ブロックの含有が多い。



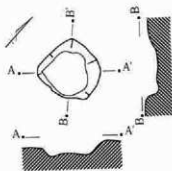
24号土壌

- 1 黒色土 層-1a層近似、軽石を若干含む。
- 2 褐色土 1に比べ、軽石の含有なし、小粒のロームブロック、鉄分ブロックを含む。

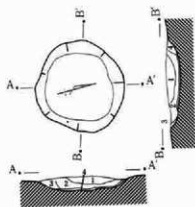


25号土壌

- 1 淡黒色土 層-1a層に類似、軽石含有、鉄分ブロック(小粒)を含む、粘性、締まり有む。
- 2 淡黒色土 1に近似するが、軽石の含有が少なくなる。大粒の粘土ブロックを大量に含む。粘性、締まりあり、色調は1より白くなる。
- 3 淡黒色土 2に近似するが、やや黒っぽい。小粒の粘土ブロックを含む。締まりがなく砂質っぽいが粘性はある。

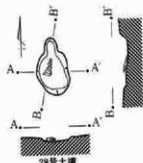


26号土壌



27号土壌

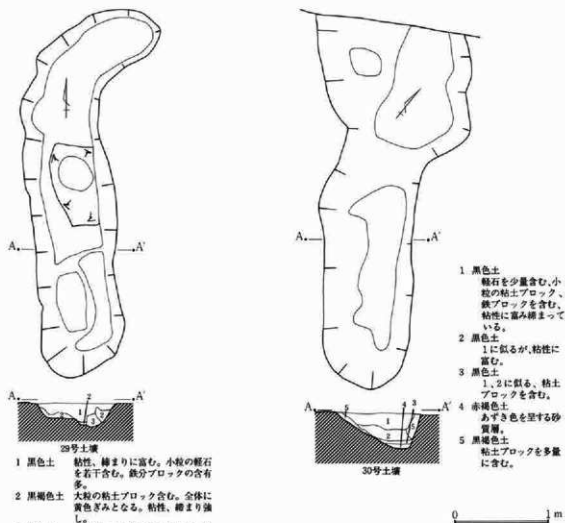
- 1 黒色土 粘性、締まりは強いが2程ではない。小粒の焼土粒を含む。下部に薄く炭化物層が存在する。
- 2 黒色土 1より粘性、締まりに富む。焼土、ブロック等の混入は認められない。
- 3 黒色土 2より黒く、小粒の粘土ブロックを含む。
- 4 黒褐色土 砂層、基盤の粘土層の上に薄く存在する。



28号土壌

0 1m

第81図 23~28号土壌(6)



第82図 29・30号土坑(7)

**20号土坑**

20-B05グリッドに位置する。平面形は不定長円形を呈し、規模は148×100cm、深さ30cmである。18号溝と重複する。

**21号土坑**

22-23-B04-05グリッドに位置する。平面形は長円形を呈す。規模は223×90cm、深さ30cmである。

**22号土坑**

23-24-B04-06グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し、規模は310×80cm、深さ12cmで規模の割に浅い土坑である。

**23号土坑**

24号土坑の南に近接、28-B17グリッドに位置する。平面形は長円形である。規模は52×37cm、深さ8cmである。

**24号土坑**

28-B17-18グリッドに位置する。平面形は長方形で、規模は(80)×(33)cm、深さ13cmである。西側約半

V. 滝川C遺跡

分は未調査である。

25号土壌

27-B18グリッドに位置する。平面形は不定長円形で、規模は60×29cm、深さ24cmである。

26号土壌

27-B19グリッドに位置する。平面形は円形を呈し、規模は68×62cm、深さ14cmで底面は凹凸がある。

27号土壌

18-19-B17-18グリッドに位置する。平面形は円形で掘り込みはややなだらかである。規模は96×95cm、深さ9cmである。

28号土壌

19-B19グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し北側部分が突出する。規模は62×35cm、深さ6cmである。馬の下面および下顎骨の一部が出土している。

29号土壌

19-21-B17-18グリッドに位置する。平面形は溝状を呈し一端が折れる。規模は288×89cm、深さ25cmである。大溝と重複する。

30号土壌

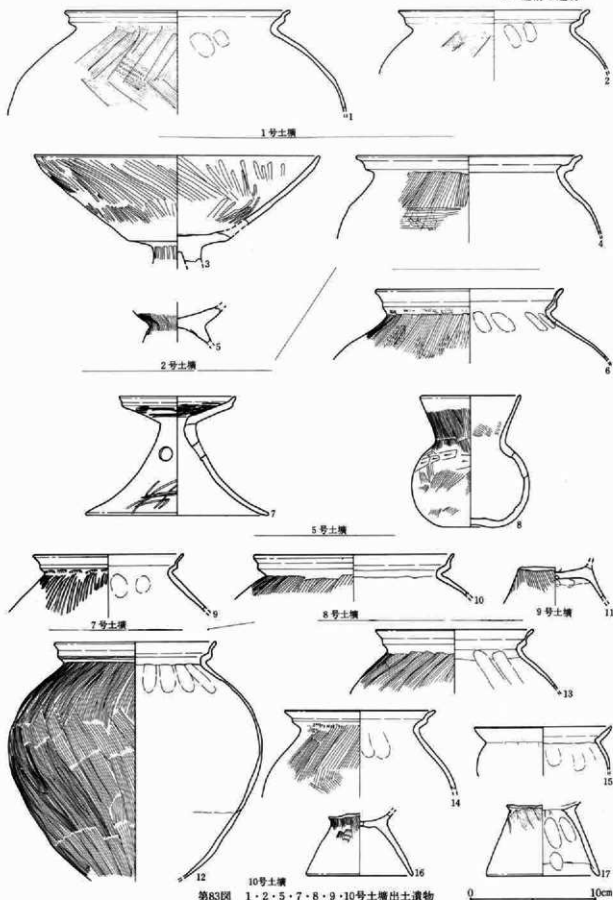
16-17-B16-18グリッドに位置する。平面形は長円形を呈し、規模は393×90cm、深さ35cmである。

表 32 土壌計測値

番号	規模 (cm) 長軸×短軸×深さ	位置	形状	方位	出土遺物	備考
1号土壌	117×(110)×63	31-B06	円形		S字壺2	2号溝に切られる
2号土壌	266×76×58	24-25-B05-06	長円形	N-2°-E	S字壺2 高杯1	
3号土壌	(135)×120×74	29-31-B11-13	不正長円形	N-12°30'-W		1号溝に切られる
4号土壌	133×84×25	30-31-B12-13	長円形	N-1°-E	壺1	1号溝を切る
5号土壌	43×43×60	28-B01	円形		S字壺1 小型壺1 器台1	8号溝を切る
6号土壌	114×60×40	25-B09	—			
7号土壌	90×43×8	24-B09	長円形	N-1°30'-E	S字壺1	
8号土壌	106×100×33	24-25-B02-03	円形		S字壺2	3号溝に切られる
9号土壌	173×120×15	25-B03	不正円形		S字壺2	10号土層を切る
10号土壌	226×(97)×15	25-26-B02-04	長方形	N-13°-E	S字壺5 壺1	9号土層に切られる
11号土壌	155×(95)×32	21-22-B07-08	不正方形		S字壺1 壺1 埴1	14号溝に切られる
12号土壌	152×88×32	30-31-B06	長円形	N-42°-W		13号溝を切る
13号土壌	175×120×21	23-24-B08	長方形	N-44°-W	S字壺6 壺1	溝を切る
14号土壌	150×120×14	24-25-B07-08	不正方形	N-1°30'-E	S字壺1	溝を切る
15号土壌	79×71×31	21-22-B00-01	不正円形			
16号土壌	100×74×60	22-B00-01	長円形			
17号土壌	81×65×60	20-B03	長円形			
18号土壌	77×62×26	22-23-B01	円形			
19号土壌	185×97×52	19-B03-04	長円形	N-18°-E	埴1	16号溝を切る
20号土壌	148×100×30	20-B06	不正長円形	N-0°		18号溝を切る
21号土壌	223×90×30	22-23-B04-05	長円形	N-2°30'-E		
22号土壌	310×80×12	23-24-B04-06	長円形	N-91°-E		溝を切る
23号土壌	52×37×8	28-B17	長円形			
24号土壌	(80)×(33)×13	28-B17-18	長方形	N-19°-E		
25号土壌	60×29×24	27-B18	不正長円形	N-119°-E		
26号土壌	68×62×14	27-B19	円形			
27号土壌	96×95×9	18-19-B17-18	円形			
28号土壌	62×35×6	19-B19	長円形	N-7°-E		
29号土壌	288×89×25	19-21-B17-18	溝状	N-0°		大溝を切る
30号土壌	393×90×35	16-17-B16-18	長円形	N-37°-E		

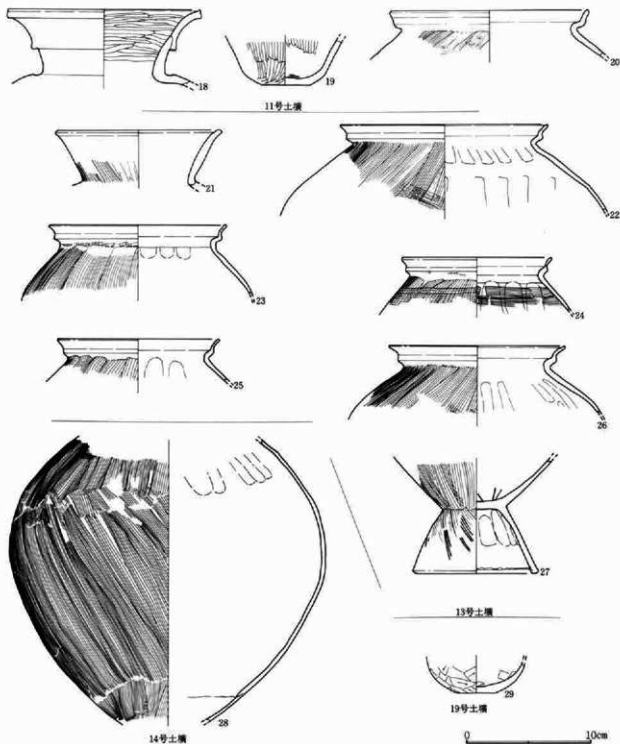


3. 遺構と遺物



第83图 1・2・5・7・8・9・10号土器出土遺物

V. 滝川C遺跡



第84図 11・13・14・19号土壇出土遺物

表 33 土壇遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	S字甕	口径 (18.0) 器高 — 底径 —	胴部でやや張る。胴部「く」の字に屈曲し、口縁部下段はやや外傾。上段は大きく外反。	口縁部 横撫で。 外面 斜の刷毛目。 内面 撫で。	砂粒・石粒を含む 良	暗褐色～ 灰褐色	1号土壇
2	S字甕	口 (15.0) 高 — 底 —	胴部くびれ。口縁部下段は外傾。上段は直から外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 撫で。	砂粒・石粒を含む 良	黒褐色	1号土壇

## 3. 遺構と遺物

番号	器 種	法量 (cm)	器 形 の 特 徴	成・整形の特 徴	胎土・焼成	色 調	備 考
3	高 坏	口径 (22.7) 器高 — 底径 —	坏部下部に弱い屈曲を持ち口縁に向かってやや内彎気味に立ち上がる。	外面 甕磨き。 内面 甕磨き。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	2号土壌
4	S字壺	口 (17.9) 高 — 底 —	肩部やや屈曲する。頸部「く」の字に折れ、口縁部下段外傾し、上段は外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目、肩部横撫。 内面 撫で。	石粒を含む 普通	にぶい褐色～灰褐色	2号土壌 8号土壌と接合
5	S字壺	高 — 底 —	台部との接合部、「く」の字に屈曲。	外面 刷毛目。 内面 胴部横撫で、台部指撫で。	石粒を含む 普通	黒褐色	2号土壌
6	S字壺	口 (15.0) 高 — 底 —	頸部「く」の字に折れ、口縁部下段外傾し上段は直から外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 頸部横撫で、肩部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	灰黄褐色	5号土壌 口縁接合面で割離
7	器 台	口 9.3 高 9.4 底 14.6	脚は幅が大きく開く。器受け部は逆「ハ」の字に広がり端部は短く立ち、外側に凹縁。	外面 甕磨き、口縁端部横撫で。 内面 器受け部甕磨き。 脚部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい赤褐色	5号土壌 通し孔3個
8	小型壺	口 8.1 高 10.4 底 4.4	底部は凹み、脚部丸みを持ち、頸ややつまり口縁部はやや外傾して長く立つ。	口縁部 端部横撫で。 外面 口縁部刷毛目。胴部刷毛目後撫で。 内面 甕磨で、肩部刷毛目。	砂粒を含む 良	にぶい褐色	5号土壌
9	S字壺	口 (12.1) 高 — 底 —	肩部やや直線的で、口縁部下段は短かく開く。上段は外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目、単位粗い。 内面 撫で。	砂粒を含む 良	にぶい褐色	7号土壌
10	S字壺	口 (16.2) 高 — 底 —	頸部強く「く」の字に折れ、口縁部下段は水平に近く開き、上段は直から外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 頸部横撫で。撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい褐色	8号土壌
11	S字壺	口 — 高 — 底 —	「ハ」の字に開く台部。	外面 刷毛目。 内面 胴部横撫で、台部指撫で。	砂粒を含む 良	にぶい褐色	9号土壌 台部片
12	S字壺	口 12.9 高 — 底 —	肩部に最大径、口縁部下段はやや上向きに立ち、上段は直から外反する。	口縁部 横撫で。 外面 斜め刷毛目、下から上への順。 内面 刷、頸部横撫で、肩部縦指撫で。	砂粒を含む 良	褐色	9号土壌 10号土壌 台部を欠く
13	S字壺	口 12.6 高 — 底 —	頸部「く」の字に折れ、口縁部下段は外傾して立つ。上段は外反する。端部やや肥厚する。	口縁部 横撫で。 外面 斜め刷毛目。 内面 肩部指撫で。	砂粒を含む 良	にぶい褐色	10号土壌
14	S字壺	口 (12.0) 高 — 底 —	肩部などからで頸部ゆるく「く」の字に折れる。口縁部の屈曲は弱い。口管内側に凹縁。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 甕磨で。	砂粒を含む 良	にぶい黄褐色～暗褐色	10号土壌
15	壺	口 (10.8) 高 — 底 —	肩部丸みを持ち、頸部「く」の字に折れる。口縁部内彎気味に外傾して開く。	口縁部 横撫で。 外面 肩部縦撫で。 内面 指撫で。	砂粒を含む 良	褐色～にぶい褐色	10号土壌
16	S字壺	口 — 高 — 底 8.6	「ハ」の字に開く台部。	外面 刷毛目後撫で。 内面 撫で。	砂粒を含む 良	にぶい赤褐色	10号土壌 台部
17	S字壺	口 — 高 — 底 9.0	「ハ」の字に開く台部。端部内側へ折り返し。	外面 斜め刷毛目後撫で。 内面 指撫で、折り返し部指押え振。	砂粒・石粒を含む 良	淡黄褐色	10号土壌 台部
18	壺	口 (15.4) 高 — 底 —	二重口縁、下段は直気味に立ち、上段は外反、端部上下に尖る。	口縁部 横撫で。 外面 撫で後甕磨き。 内面 横甕磨き。	細砂粒多く含む 普通	褐色	4号土壌 11号土壌と接合
19	小型壺	口 — 高 — 底 3.6	平底から丸みを持って立ち上がりやや外反する。	外面 甕磨き。 内面 甕磨き。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい褐色	11号土壌
20	S字壺	口 16.0 高 — 底 —	頸部「く」の字に折れる。口縁外側の屈曲は丸みを持ち、内側は明瞭、口縁上段に外反。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目、肩部横撫。 内面 撫で。	砂粒・石粒多量を含む 普通	にぶい褐色	11号土壌
21	壺	口 (13.6) 高 — 底 —	口縁部やや外傾し、口唇部外反して端部は丸みを持つ。	口縁部 端部横撫で、下部刷毛目。 外面 刷毛目。 内面 撫で。	石粒を含む 普通	褐色	13号土壌
22	S字壺	口 (16.5) 高 — 底 —	肩部などからで、頸部「く」の字に折れる。口縁部下段やや外傾し、上段は外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 甕磨で、肩部指押え。	砂粒を含む 良	にぶい褐色～暗褐色	13号土壌

## V. 滝川C遺跡

番号	器種	量量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
23	S字壺	口径 (14.0) 器高 — 底径 —	肩部直線的、頸部で「く」の字に折れ、口縁部下段外傾して立ち、上段は直から外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目、単位は粗い。 内面 撫で。	石粒を含む 良	にぶい黄 褐色～黒 褐色	13号土壌
24	S字壺	口 (12.0) 高 — 底 —	肩部張り出す、頸部で「く」の字に折れ、口縁部下段外傾し、外側丸みを持って上段は外反。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目、肩部直線的。 内面 鹿撫で後指押え。	砂粒を含む 良	にぶい橙 色	13号土壌
25	S字壺	口 (13.0) 高 — 底 —	頸部で「く」の字に折れ、口縁部下段は外傾、上段は外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目、単位は粗い。 内面 肩部指撫で。	砂粒・石粒 を含む 普通	褐色	13号土壌
26	S字壺	口 (14.0) 高 — 底 —	肩部張り出す、「く」の字に折れて口縁となる。上段は大きく外反。口唇内側に凹線。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 鹿撫で。	砂粒を含む 良	にぶい橙 色～暗褐色	13号土壌
27	S字壺	口 — 高 — 底 10.0	台部「ハ」の字に開く。胴部は外傾して立ち上がる。台端部折り返し。	外面 刷毛目。 内面 胴部鹿撫で。台部指撫で、折り返し部横撫で。	砂粒を含む 良	にぶい黄 褐色～灰 褐色	13号土壌
28	S字壺	最大径25.1	胴部中位上で最大径を持つ。下部はやや縮まる。	外面 刷毛目、下から上への順。 内面 下部鹿撫で、肩部指押え。	細砂粒を含む 普通	暗赤灰色	14号土壌 外面灰化跡 内面有機物
29	埴 高 底	口 — 高 — 底 3.0	平底から内側気味に立ち上がる。	外面 鹿撫で。 内面 鹿撫で。	砂粒・石粒 多量に含む 普通	にぶい橙 色～黒 褐色	19号土壌

### [2] 溝

検出した溝の総数は時期不詳のものを含めて20条程であるが、沖積地のために掘り込み面の検出は困難を極め、正確な掘りかたを露呈せしめたものはほとんど無かった。また他の遺構との重複も甚だしく整理番号を付けたものの、実際の全体像は把握仕切れなかったのが現状である。

#### 1号溝

道路南側の調査区西端で検出した。長さは10mほどで幅80cm、深さ15cmである。溝の走行方向はN-25°-Wである。出土遺物は無い。3号土壌よりも新しく、4号土壌よりも古い。

#### 2号溝

1号溝の東側2m程離れてほぼ平行する。幅120cmで、深さ60cm程である。断面形は「V」字状を呈し、覆土中にB軽石の堆積が見られる。走行方向はN-20°-Wである。

#### 3号溝

28-B02グリッドから東へ延び、やや曲がって北に方向を変え、さらに西に向きを変えて14号溝にぶつかる。幅は50～80cmで深さは10cm程である。掘り込みが不明確で時期的には新しいと考えられる。

#### 4号溝

調査区西壁31-B03グリッドから東に延び先は狭くなり二又になる。近世以降のものである。

#### 5号溝

西壁から北に延びるが先は西に振れる。幅40cm程で4・11号溝を横切っている。

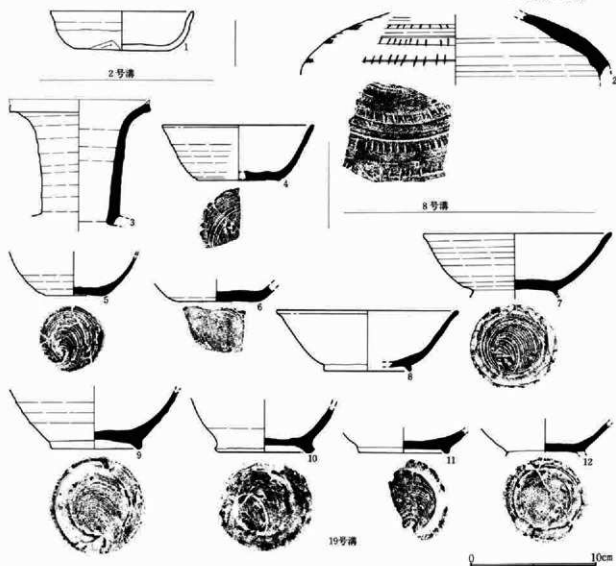
#### 6号溝

28-B01グリッドから東に延びるが検出した長さは5m程度である。幅80cm程の浅い溝である。B軽石を堆積する。

#### 7号溝

4号溝に交わる。幅25cm程の小さな溝である。

### 3. 遺構と遺物



第85図 2・8・19号溝出土遺物

#### 8号溝

28-B01グリッドから北に向かって延びる。幅1.3mで深さは40cm程である。走行方向はN-30°-Wであるが僅かに右に曲がっている。覆土中にB軽石を堆積する。

#### 9・10・13号溝

2号・8号溝の間にあって3条が東西に並列する。いずれも長さ3m、幅50cmほどで短い。

#### 11号溝

西壁から出て「く」の字に曲がり再び西壁に入る。幅40cmで深さは約15cmである。

#### 12号溝

13号溝の南に接して位置するが、極めて短く、溝とするには疑問がある。

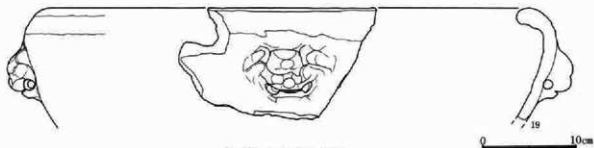
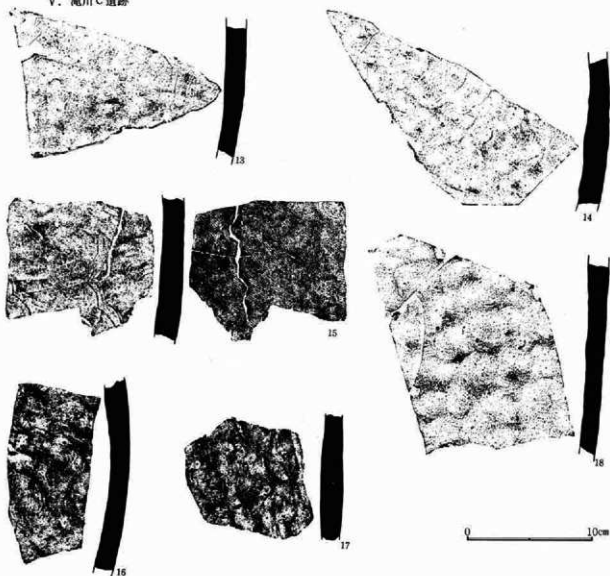
#### 14号溝

道路に平行するように東西方向に走る。何条かの溝が重複するものと思われるが断面からは判断できない。覆土中にA軽石を含む。

#### 15号溝

西壁から東に僅かに延びている。掘り込みは不明瞭である。

V. 滝川C遺跡



第96図 19号溝出土遺物

16号溝

調査区東側に位置する。長さは4m、幅70cmで19号土壌が重複する。

17・18号溝

ほぼ平行して南北に走る。幅40cm深さ8cmで時期的には新しい。

19号溝

道路北側の調査区に在り、東西に走る。走行方向はN-85°-Wである。幅は約5mで西壁際は広がる。深さ20-30cm程である。出土遺物は西壁寄り須恵器の坏、甕、壺などが若干出土している。

## 3. 遺構と遺物

表 34 溝遺物観察表

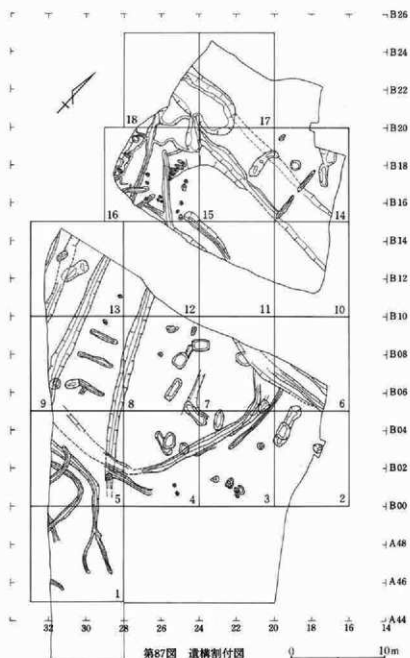
番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	坏	口径 11.4 器高 3.0 底径 7.5	ほぼ平底で丸みを持って立ち上がる。口縁部は外傾する。	口縁部 横無で、 体部 凹無で、底部寛削り。 内面 無で。	砂粒を含む 良	褐色	2号溝
2	須恵器 長頸壺	口 — 高 — 底 —	なで肩の前部でやや丸みを持って。	ロクロ成形。 外面 平行沈線、連続斜目文を多段に廻らす。	砂粒を含む 良	灰色	8号溝
3	須恵器 長頸壺	口 (11.4) 高 — 底 —	頸部長く立ち上がり、口縁部外反する。	ロクロ成形。 内面 頸部無で。	砂粒・石粒を含む 良	灰白色	19号溝 頸部から口縁部
4	須恵器 坏	口 (12.0) 高 4.4 底 6.6	口縁部外傾して立ち上がる。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り。	砂粒を含む 良	褐色	19号溝
5	須恵器 坏	口 — 高 — 底 4.7	体部丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り。	砂粒・石粒を含む 良	暗褐色	19号溝
6	須恵器 坏	口 — 高 — 底 ( 6.6)	体部丸みを持って立ち上がる。	ロクロ成形。 底部 糸切り後手持ち攪削り。	砂粒を含む 良	灰白色	19号溝
7	須恵器 高台付坏	口 (14.8) 高 — 底 —	体部丸みを持って立ち上がる。高台縁部は細くなる。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り、付け高台。	石粒を含む 普通	灰色	19号溝 内面裏ね焼き痕。
8	須恵器 高台付坏	口 14.6 高 ( 4.8) 底 ( 7.3)	体部丸みを持って外へやや大きく開く。高台の断面三角。	ロクロ成形。 付け高台。	石粒を含む 普通	褐色	19号溝
9	須恵器 高台付坏	口 — 高 — 底 7.2	体部やや内彎気味に外へ開く。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り、付け高台。	砂粒を含む 良	灰白色— 明褐色	19号溝
10	須恵器 高台付坏	口 — 高 — 底 8.0	体部僅かに内彎して立つ。高台端部潰れて外へ開く。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り、付け高台。	石粒を含む 普通	浅黄色— 暗灰黄色	19号溝
11	須恵器 高台付坏	口 — 高 — 底 ( 7.0)	低い高台から体部やや丸みを持って開く。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り、付け高台。	石粒を含む 普通	黄灰色	19号溝
12	須恵器 坏	口 — 高 — 底 —	体部僅かに内彎気味に外へ開く。高台を欠く。	ロクロ成形。 底部 ロクロ右回転糸切り、付け高台。	砂粒を含む 良	灰白色	19号溝
13	須恵器 壺	口 — 高 — 底 —	僅かに丸みを持つ、厚さ1.4cm。	外面 無で。 内面 青海波文様の当て目後無で消し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	19号溝
14	須恵器 壺	口 — 高 — 底 —	僅かに丸みを持つ、厚さ1.9cm。	外面 無で。 内面 青海波文様の当て目後無で消し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	19号溝
15	須恵器 壺	口 — 高 — 底 —	僅かに丸みを持つ、厚さ1.7cm。	外面 平行印き後無で。 内面 青海波文様の当て目後無で消し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	19号溝
16	須恵器 壺	口 — 高 — 底 —	僅かに丸みを持つ、厚さ1.4cm。	外面 無で。 内面 青海波文様の当て目後無で消し。	砂粒・石粒を含む 良	褐色	19号溝
17	須恵器 壺	口 — 高 — 底 —	板状で厚さ1.5cm。	外面 無で。 内面 青海波文様の当て目後無で消し。	砂粒・石粒を含む 良	黄灰色	19号溝
18	須恵器 壺	口 — 高 — 底 —	僅かに丸みを持つ、厚さ1.3cm。	外面 無で。 内面 青海波文様の当て目後無で消し。	砂粒・石粒を含む 良	灰色	19号溝
19	火鉢	口 (52.0) 高 — 底 —	口縁部内側へ彎出し、端部やや肥厚する。胴部に獅子頭を持つ。4ヶ所か？	無で成形。器外面割落痕目立つ。 内面 無で。	砂粒・石粒を含む 普通	黒色	19号溝

## V. 滝川C遺跡

### 4. グリッド出土遺物

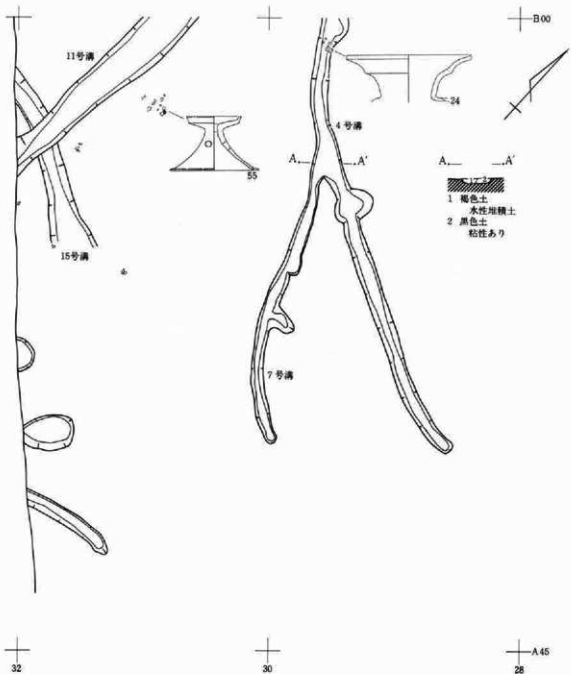
本遺跡内で検出した遺構は前述した通りであるが、各遺構の掘り込み面の確認が困難であったこともあり、これらの遺構に伴わずに出土した遺物も多く、また遺構の掘り込み面が黒色土中に在ったために遺構の検出状況は極めて悪く、このために多くの遺物がグリッド出土として記載せざるを得ない状況である。そのためここでは調査区を縦5グリッド(10m)、横4グリッド(8m)の大きさを基本に1～18の遺構図に区分けして図示することとし(第87図)、出土遺物はそれぞれ区分けしたグリッド毎に取りあげ説明を行うこととする。なお土壌の出土遺物については各土壌の項で説明しているために除いてある。

なお調査区の呼称については東西に走る道路を境にして、南側をⅠ区、北側をⅡ区とする。(第87図)





4. グリッド出土遺物



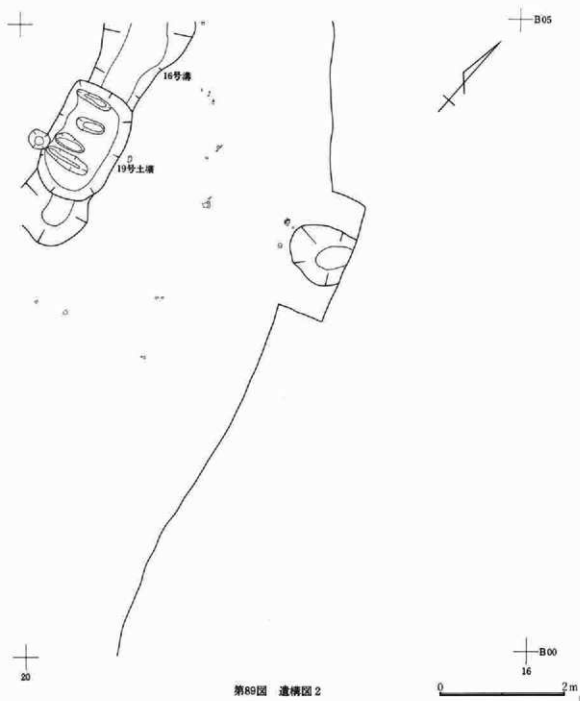
第88図 遺構図1

遺構図1 (28-32-A45-00グリッド) (第88図)

I 区の南部分にあたる。7号溝が4号溝と交わるが新旧関係は不明である。南壁際には15号溝が11号溝と重複している。その他壁際に掛かってピット2、および浅い溝が検出されている。

遺物は11号溝の東側で器台が、4号溝の肩部で甕の口縁部片が出土している。その他にはあまり遺物の出土は見られない。

V. 滝川C遺跡

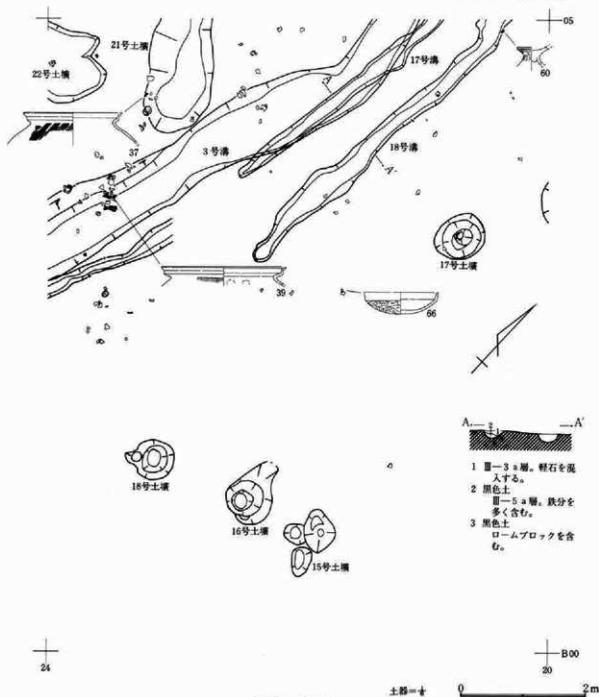


第89図 遺構図2

遺構図2 (16-20-B00-05グリッド) (第89図)

I区東壁際で、16号溝と19号土壇が重複している。19号土壇が在ったところに16号溝が切って作られたものである。東壁際に落ち込みが見られる。遺物は破片が若干見られたのみである。

4. グリッド出土遺物

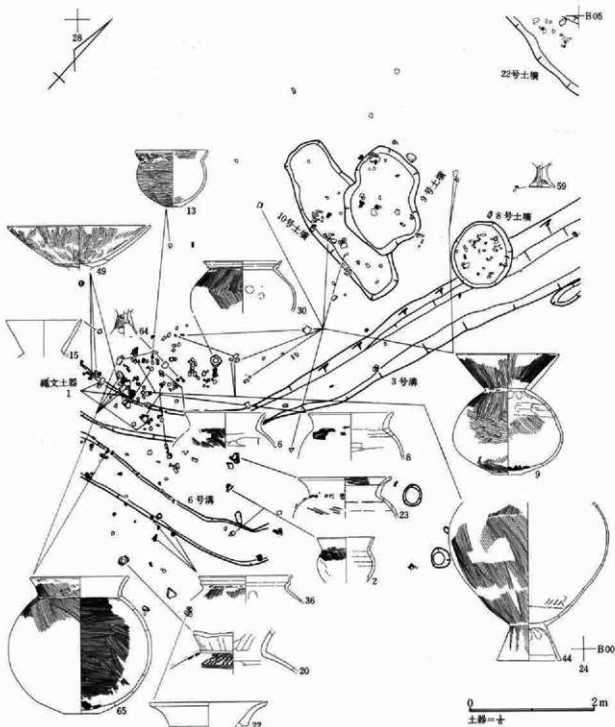


第90図 遺構図3

遺構図3 (20~24-B00-05グリッド) (第90図)

3号溝、17・18号溝が平行してほぼ南北に走る。3号・17号溝は重複しており、あまり明確な掘り方は確認しえなかった。いずれの溝も非常に浅く、かつ幅も不揃いである。恐らく溝の底の部分であって上部を既に掘り下げてしまったものであろうと思われる。3号溝の西には21・22号土塚が近接している。また溝の東側に15~18号土塚が見られるがいずれも規模は小さく出土遺物も見られない。遺物は溝および土塚の周辺からS字変の口縁部片、17号土塚の南に坏が、さらに18号溝の肩部より高坏の脚部片が出土している。

V. 滝川C遺跡

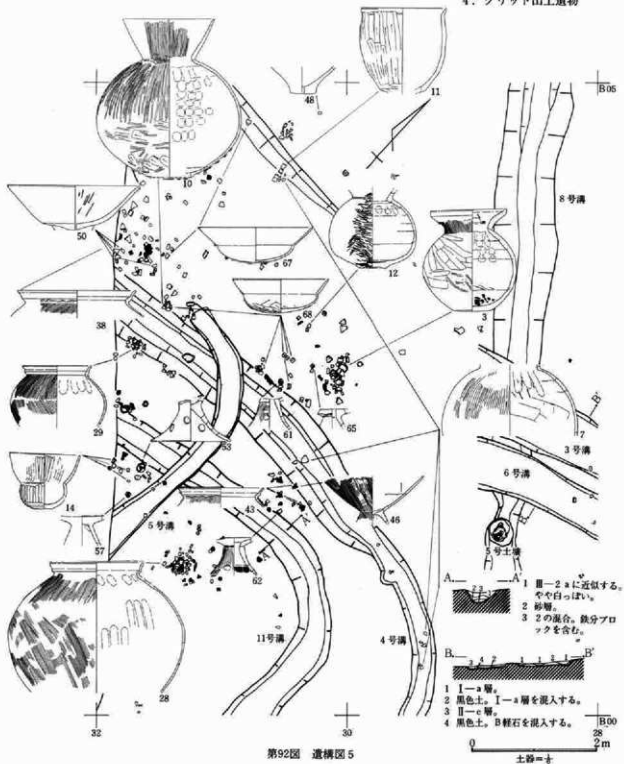


第91図 遺構図4

遺構図4 (24-28-B00-05グリッド) (第91図)

I区のはは中央部にあたる。3号溝が曲がりながら南北に走るが西端部分は掘り込みが不明瞭となる。本溝はセクションの観察より、下部のみが残ったものと考えられ覆土の状況、地形に沿って走る事などから近世の水路と考えられる。さらに溝に重複して8号土壌が、その西側には9・10号土壌がやはり重なって検出されている。3号溝の下に6号溝が在るが、浅く両端が途切れている。時期的にも新しいものである。遺物は3号溝が曲がる当たりの周辺にかなり集中して出土している。多くは壺、甕の口縁部片であるが、9・13・

4. グリッド出土遺物



65は定形に近い。その他高坏、器台片、S字甕等も見られる。遺物はいずれも黒色土中よりの出土ではっきりと遺構に伴うと判断されるものは見られない。

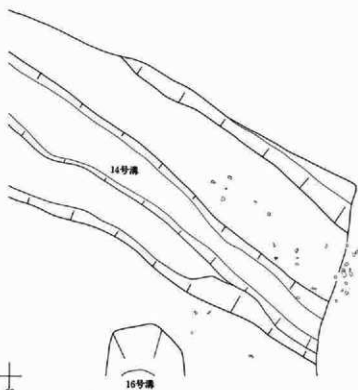
遺構図 5 (28-32-B00-05グリッド) (第92図)

I区の中央西側部分にあたる。3-6・8・11号溝が集中して重なっているためにそれぞれの掘り方等は極めて不明瞭である。1・4号溝は西壁から東に弧を描いてほぼ平行に走り、東西に走る3号溝はその掘り

V. 滝川C遺跡



— B10



— 20

— B05  
16

第93図 遺構図6

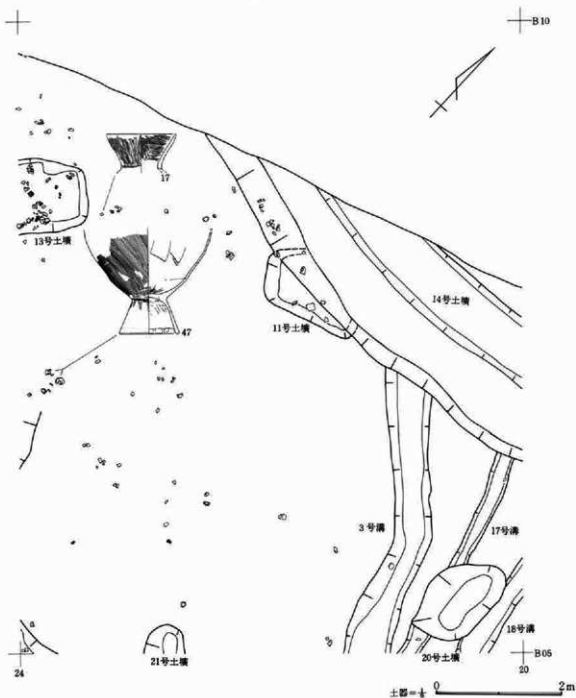
0 ————— 2m

込み面、形状共に確認できない状況である。5号溝は4・11号溝を横切る形であるが極めて新しいと判断される。遺物は溝の集中する壁際付近に多く見られ、壺、S字壺、器台等が出土している。いずれも黒色土中からの出土で遺構に伴って出土したものは無い。

遺構図6 (16-20-B05-10グリッド) (第93図)

I区の北隅にあたる。14号溝が壁に平行して走る。段をもって北に落ち込んでいるがあまり深くない。溝の東側に土器の破片が見られたが量的には少なく、器形を復元し得るようなものは見られなかった。

4. グリッド出土遺物

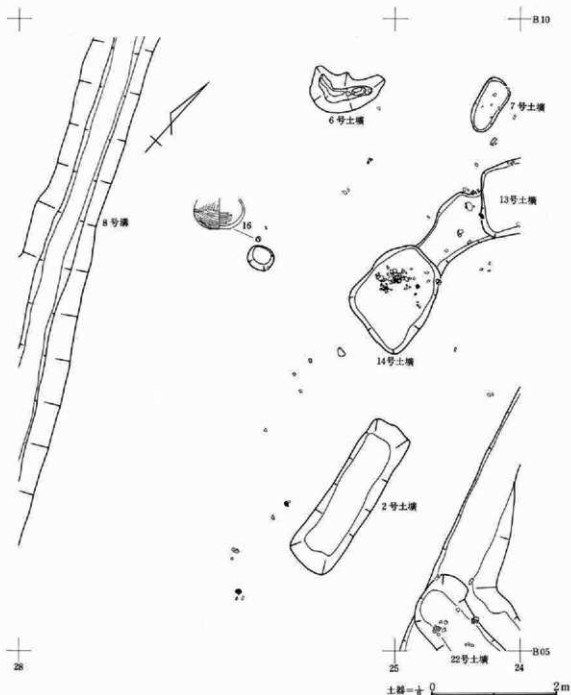


第94図 遺構図 7

遺構図 7 (20-24-B05-10グリッド) (第94図)

I区をやや北東寄りにあたる。北壁際に14号溝があり、これにぶつかる形で3・17・18号溝が平行している。14号溝の縁には11号土壌が掛かっており、また17・18号溝と20号土壌が重複する。北西部には13号土壌が見られる。遺物は破片が散在する程度で、主なものとして壺の口縁部、S字甕の胴下半部片などが出土している。

V. 滝川C遺跡



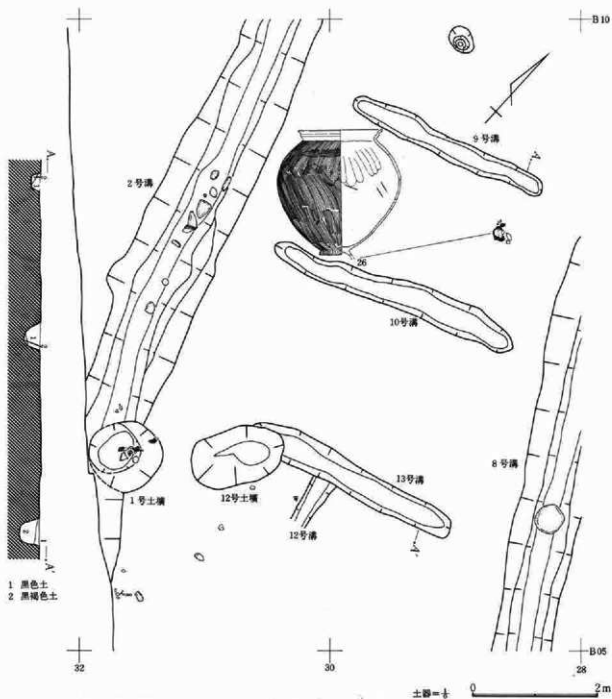
第95図 遺構図8

遺構図8 (24-28-B05-10グリッド) (第95図)

I区の中央北より西部にあたる。8号溝が北西から南東に走る。断面は下部が「U」字状で上部が外へ開く。溝の北と南におけるレベル差は殆ど見られない。その東側には2・6・7・13・14号土坑が見られる。6・7号土坑は掘り方もはっきりせず、人為的な土坑とは考えにくい。遺物はこれらの土坑周辺に僅かに見られたに過ぎず、主なものとしては小型壺の胴部が出土している。



#### 4. グリッド出土遺物

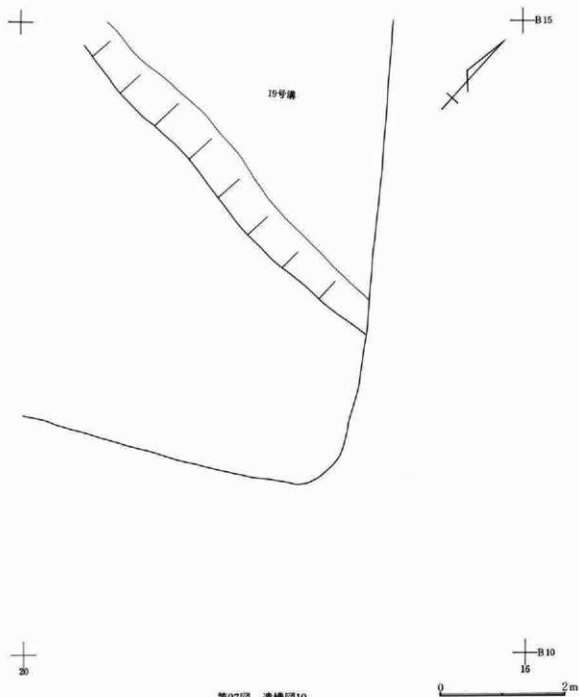


第96図 遺構図9

#### 遺構図9 (28-32-B05-10グリッド) (第96図)

I区西側部にあたる。2号溝と8号溝が平行して走りその間に9・10・13号溝が平行して見られるが、いずれも長さ4m程度で、幅は約50cmである。いずれも正確な掘り込み面はつかめなかった。出土遺物は13号溝中よりS字甕の口縁部片が見られるのみで他には無い。西壁際に1号土層が在り、2号溝と重複する。その東側に12号土層があるが期的に新しいと考えられる。2・8号溝の中には多くの礫が出土しており、特に8号溝中には偏平な石が底面に置かれた状態で出土している。遺物は殆ど見られなかったが、台部を欠くS字甕が1点出土している。

V. 滝川C遺跡

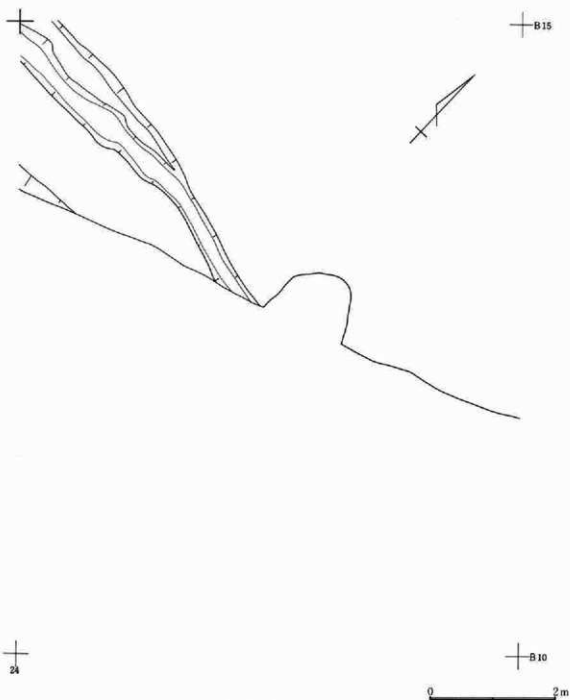


第97図 遺構図10

遺構図10 (16-20-B10-15グリッド) (第97図)

Ⅱ区の東隅にあたる。19号溝が北に向かって緩やかに落ち込んでいる。他に遺構は検出されず、出土遺物も見られない。

4. グリッド出土遺物

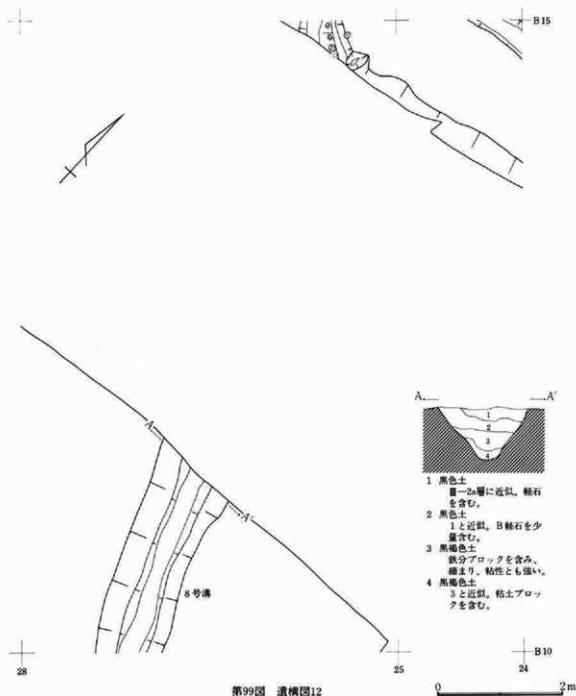


第98図 遺構図11

遺構図11 (20~24-B10~15グリッド) (第98図)

Ⅱ区の南壁寄りにあたる。東西に走る溝状の遺構が見られる外には遺構は検出されていない。この溝は掘り込みがやや不明瞭である。

## V. 滝川C遺跡



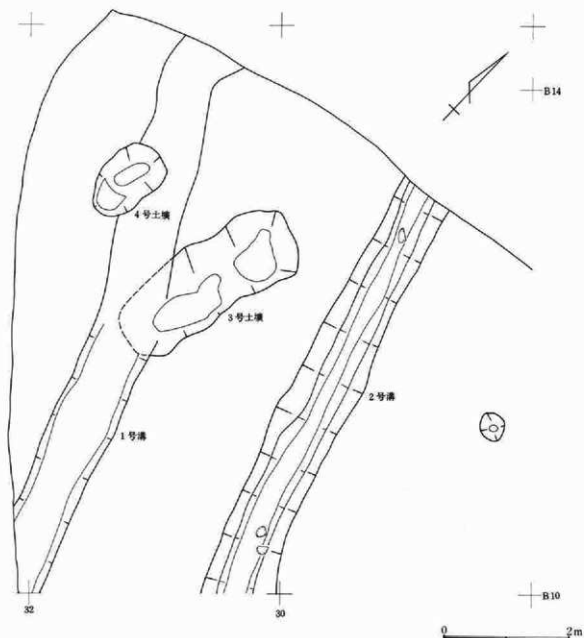
遺構図12 (24~28-B10~15グリッド) (第99図)

中央に道路が東西に走る。南側で検出された8号溝は道路下部分については未調査であるが、北側の調査区に北側部分が検出されている。溝の覆土上層には、B軽石の堆積が認められている。周辺に出土遺物は殆ど見られない。

遺構図13 (28~32-B10~15グリッド) (第100図)

I区の西隅部分にあたる。1・2号溝が平行して南北に走るが、1号溝は覆土中にB軽石がレンズ状に堆積する。また途中で掘り方が不明瞭となり、その部分に3・4号土塊が位置する。3号土塊は形状、覆土の

#### 4. グリッド出土遺物



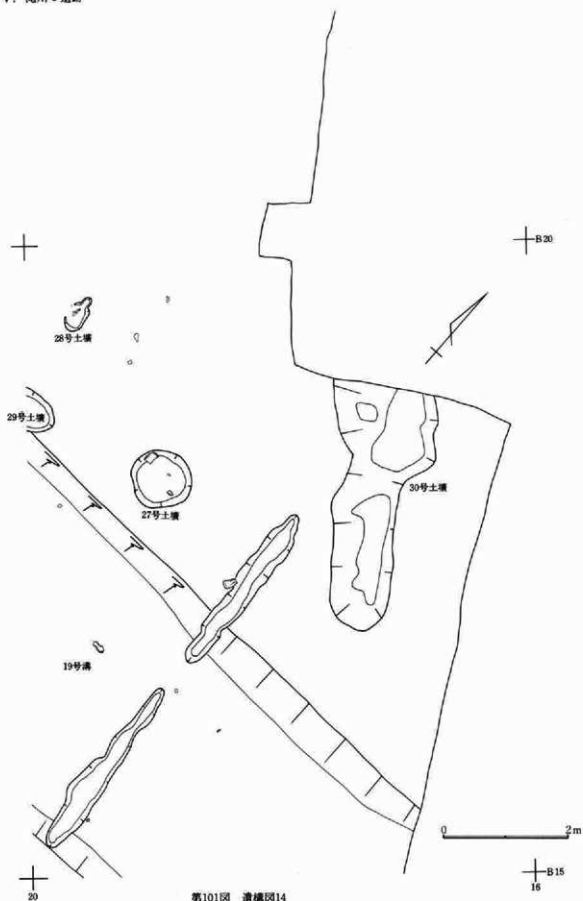
第100図 遺構図13

様子などから見て人為的なものとは考え難い。2号溝は断面「U」字状で上幅がやや広くなる。中位に段を有している。土師器の坏が1点出土した他には出土遺物は殆ど見られない。周辺部にも出土遺物は殆ど見られず、破片が僅かに見られた程度である。

#### 遺構図14 (16~20-B15~21グリッド) (第101図)

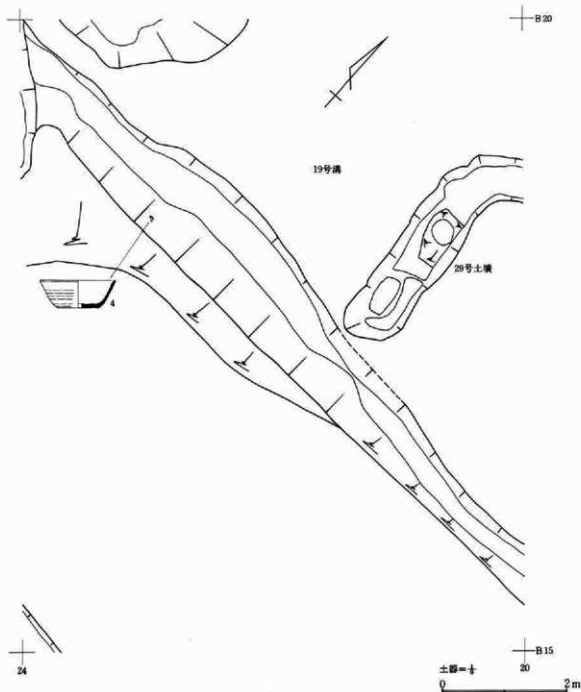
Ⅱ区の東壁跡にあたる。19号溝が東西に走るが落ち込みの様子は緩やかで底は平坦である。この溝を横断するように幅50cm、長さ8m程の溝状の落ち込みが見られるが新しいものである。また19号溝の北側には27~30号土塼が見られる。30号土塼は大形で不定形を呈す。他はいずれも径1m以内である。28号土塼からは馬の歯が出土している。

V. 滝川C遺跡



第101図 遺構図14

4. グリッド出土遺物

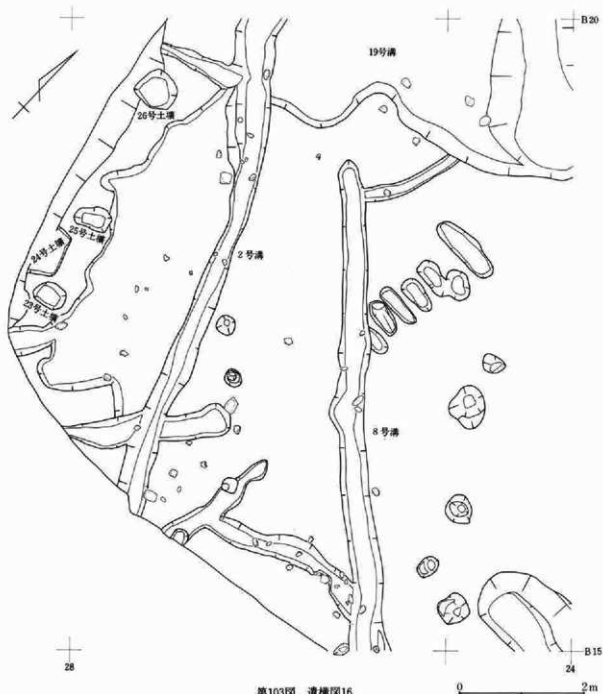


第102図 遺構図15

遺構図15 (20~24-B15~20グリッド) (第102図)

Ⅱ区のはほぼ中央にあたる。19号溝が東西に走るが、その落ち込みは殆ど確認されない状況である。南側の肩部分に沿って落ち込みが続くが19号溝の一部なのか、極めて不明瞭である。29号土壇が溝に重複するが形状、掘り方共に不自然である。遺物は少なく、溝の上端付近に須恵器坏の破片が出土している。

V. 滝川C遺跡



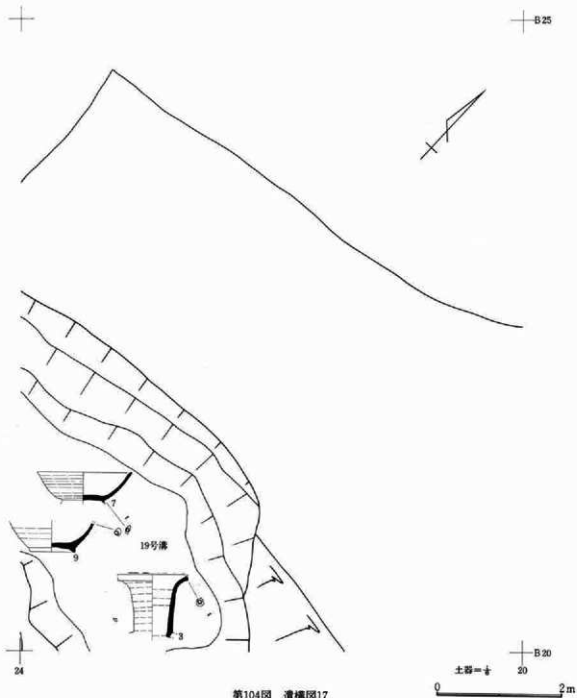
第103図 遺構図16

遺構図16 (24-28-B15-20グリッド) (第103図)

Ⅱ区の西端部分にあたる。南から続く2・8号溝が延びる。土壇は壁際に23-26号土壇が見られる他、グリッド中央の8号溝の北側に並んで7基の土壇群が検出されている。いずれの覆土も砂利質の灰色土である。その他性格不明の落ち込みや、溝状の遺構が検出され、かなり荒れた状況を示している。また北側には19号溝に向かって緩やかに下る部分が認められる。土器は余り多くは検出されず、礎の出土が目立つ。



4. グリッド出土遺物



第104図 遺構図17

遺構図17 (20-24-B20-25グリッド) (第104図)

Ⅱ区の北端にあたる。19号溝の北側肩部分が見られる。2～3段になって落ち込んでいる。底の部分は東側に比べれば下がっているが、溝の両上端ははっきりと捉えられず、かなり攪乱した状況を示している。溝の底近くより須恵器の環、長頸壺などが出土しているがいずれも破片で、かなり摩滅しているものも見られる。

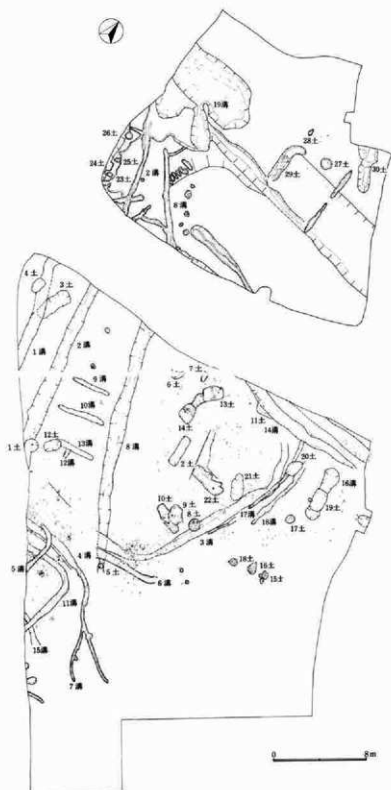
V. 滝川C遺跡



遺構図18 (24-28-B20-25グリッド) (第105図)

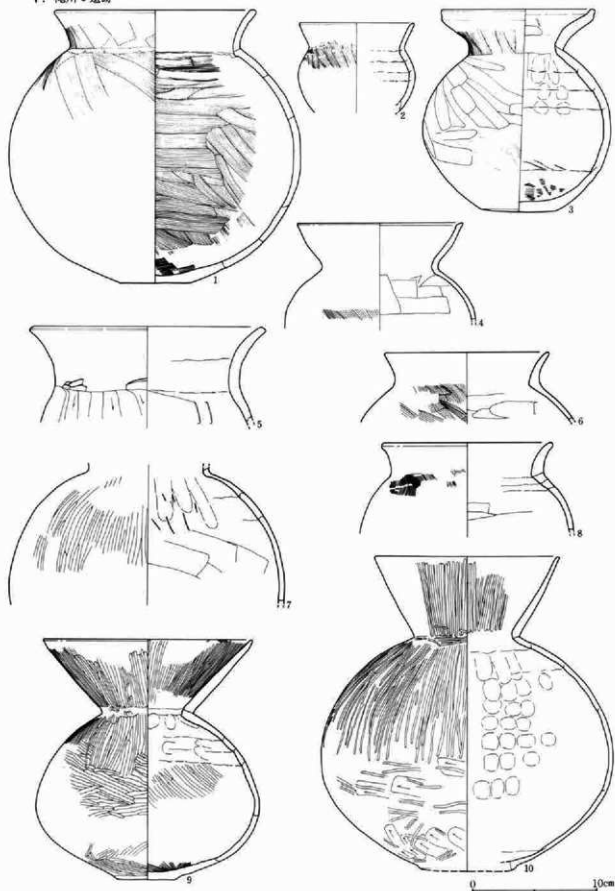
Ⅱ区の西壁寄りにあたり、19号溝が壁に接する部分である。溝の上端は両側へ不自然に広がり、はっきりとしなくなるが、掘り込み自体はやや深くなる。覆土中からは多くの礫に混じり須恵器の坏類が出土しているが、かなり摩滅しており底部片が多い。

4. グリッド出土遺物



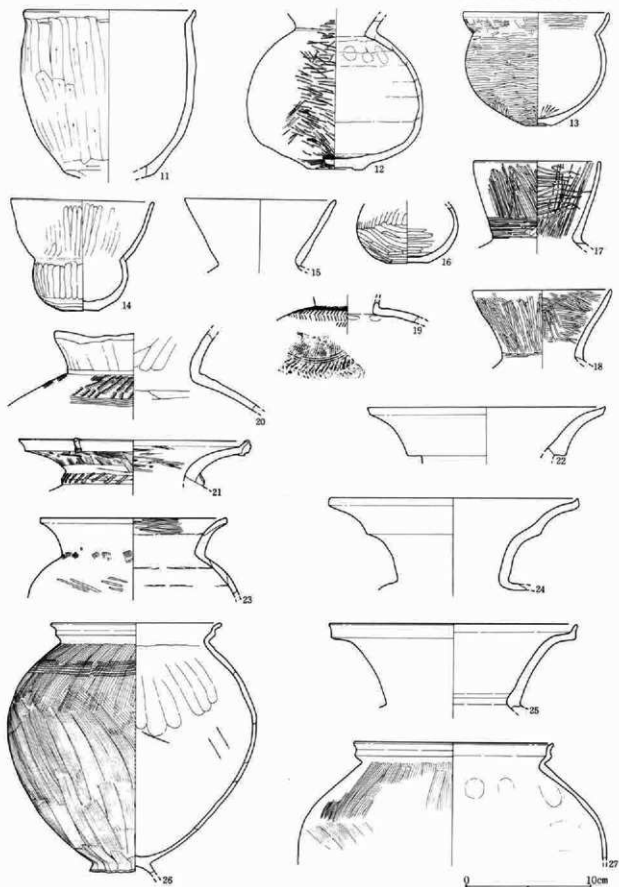
第106図 遺物分布図

V. 滝川C遺跡



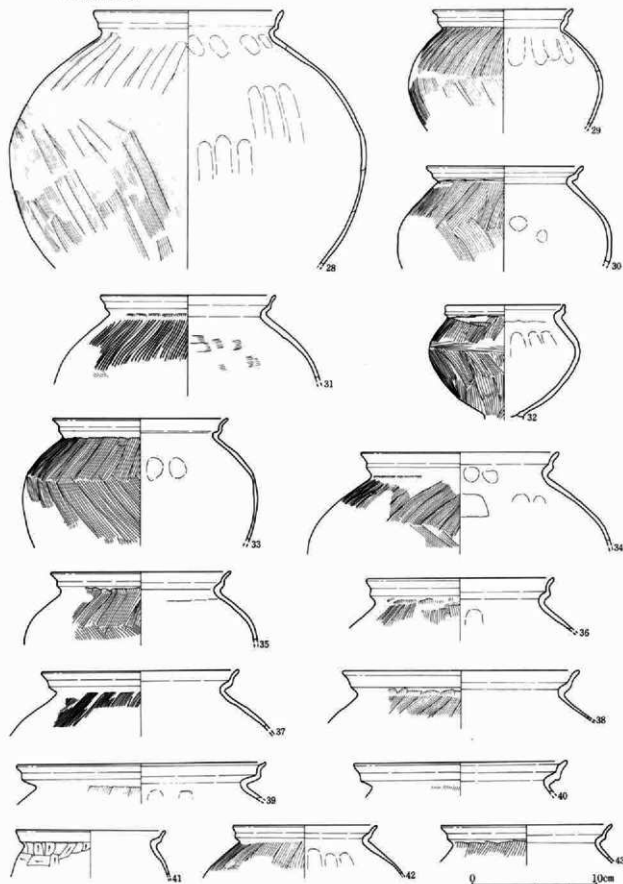
第107図 グリッド出土遺物(1)

4. グリッド出土遺物



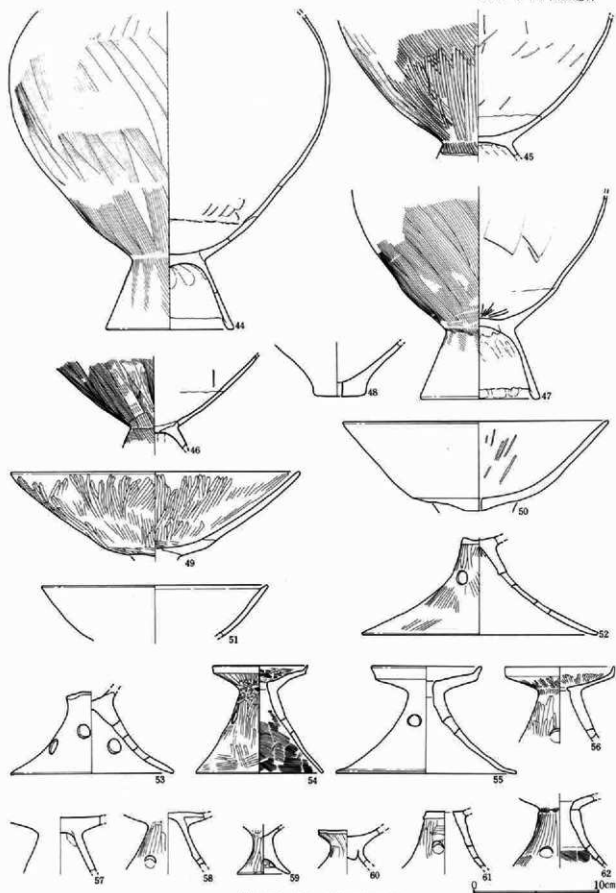
第108図 グリッド出土遺物(2)

V. 滝川C遺跡



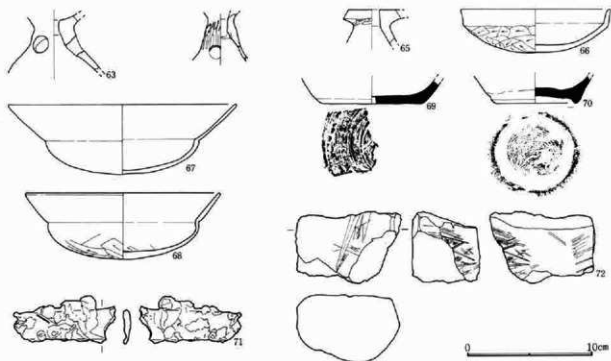
第109図 グリッド出土遺物(3)

4. グリッド出土遺物

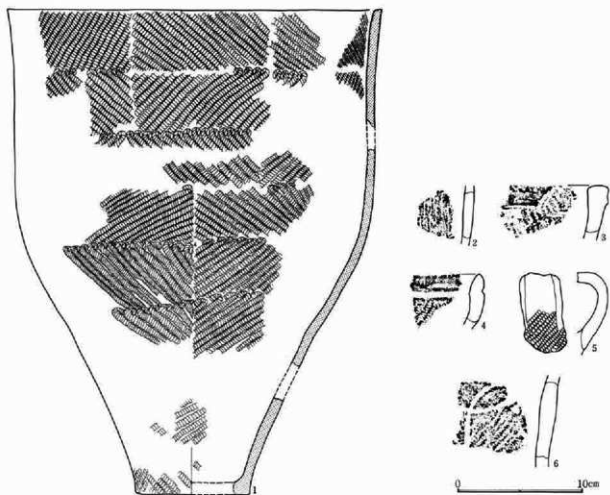


第110図 グリッド出土遺物(4)

V 滝川C遺跡



第111図 グリッド出土遺物(5)



第112図 グリッド出土縄文土器



## 4. グリッド出土遺物

表 35 グリッド遺物観察表

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	壺	口径 16.0 器高 21.5 底径 5.5	胴部丸みを持って胴み、中位に最大径を持つ。口縁部はやや外反する。平底。	口縁部 端部横撫で。 外面 肩部刷毛目、胴下半部撫で。 内面 刷毛目。	砂粒・石粒 多量に含む 普通	灰黄および 黒褐色	
2	小型壺	口 (9.2) 高 — 底 —	胴中位で丸く膨み、頸部でゆるく「く」の字にくびれる。口縁部は外傾する。	口縁部 横撫で。 外面 頸部から肩部刷毛目以下腹撫で。 内面 指撫で、接合痕明瞭。	砂粒・石粒 少量含む	褐色	胴部に黒 斑
3	壺	口 12.2 高 6.5 底 16.0	球形の胴部を呈し、口縁部外反する。肩部は直気味に立ちやや外反する。平底。	口縁部 横撫で。 外面 頸部刷毛目、胴部腹撫で。 内面 下部刷毛目、中、上部腹撫で。	細砂粒・石 粒を含む 良	にぶい黄 褐色	定形 胴下部に 黒斑
4	壺	口 (13.2) 高 — 底 —	肩部丸みを持つ。頸部「く」の字に折れ、口縁部内彎して開く。口唇部平らで内側に張る。	口縁部 横撫で。 外面 肩部横撫で、斜め刷毛目。 内面 胴部縦筋削り。頸部腹撫で。	石粒を混入 良 堅緻	明褐色一 層褐色	布留式
5	壺	口 18.0 高 — 底 —	頸部ややくびれ口縁部外反する。口縁端部角張る。	口縁部 横撫で。 外面 肩部縦筋削り。 内面 肩部腹撫で。	石粒を含む 良	明褐色	
6	壺	口 (13.0) 高 — 底 —	肩部丸みを持ち頸部がやや締まる。口縁部直気味に立ち、肩部は外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目。 内面 腹撫で。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい褐 色	
7	壺	口 — 高 — 底 —	肩部は丸みを呈す。	外面 縦筋磨き。 内面 腹撫で、肩部縦指撫で。	砂粒・石粒 を含む 良	褐色	
8	壺	口 13.6 高 — 底 —	なだらかな肩部から「く」の字に折れて立ち上がり、口唇部部外反する。	口縁部 横撫で。 外面 刷毛目後腹撫で。 内面 腹撫で。	砂粒・石粒 を含む 普通	褐色一に ぶい褐色	
9	壺	口 16.6 高 18.9 底 4.6	胴部やや扁平で中位で膨む。胴部は締まり、口縁部は大きく開く。	外面 口縁部縦筋磨き。胴部上半腹下半横筋磨き。底部腹磨き。 内面 口縁部縦筋磨き。胴部刷毛目。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい黄 褐色一部 灰色	
10	壺	口 (14.8) 高 (24.9) 底 (7.7)	胴部は下折れ、頸部で締まり口縁部外傾して立ち上がる。	外面 口縁部、胴上半部縦筋磨き。下半部、削り後腹磨き。 内面 口縁部腹磨き。胴部腹撫で。	粗砂粒混入 良	赤褐色	
11	壺	口 13.8 高 (13.4) 底 (7.2)	胴部僅かに膨みを持って立ち上がり口縁部下でゆるく「く」の字に折れ口縁部は内彎する。	口縁部 横撫で。 外面 胴部縦筋削り。下部は横筋削り。 内面 腹撫で。	細砂粒・石 粒を含む 良	暗褐色	
12	壺	口 — 高 — 底 4.5	下折れの胴部。口縁は外傾する。底部外面が高まる。	外面 刷毛目後腹磨き。 内面 腹撫で。肩部指押え痕。	細砂粒・赤 色石粒混入 良	褐色一に ぶい褐色	
13	小型壺	口 (11.6) 高 9.0 底 2.2	底部は小さく中央が凹む。胴部は丸みを持って胴み中位上半で最大径。口縁部内彎気味。	口縁部 刷毛目後腹撫で。 外面 横筋磨き。 内面 胴上半部腹磨き。下半部腹撫で。	砂粒混入 良 堅緻	にぶい黄 褐色	胴下半に 黒斑
14	壺	口 11.4 高 8.7 底 2.7	平底から丸みを持って立ち上がりゆるく「く」の字に折れて口縁部内彎気味に立ち上がる。	外面 腹磨き。底部腹撫で。 内面 口縁部腹磨き。胴部腹撫で。	細砂粒混入 良 堅緻	にぶい黄 褐色	胴部黒斑
15	壺	口 (12.0) 高 — 底 —	口縁部 逆「ハ」の字に開く。	器内外面荒れており、調整は不明。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい褐 色	
16	小型壺	口 — 高 — 底 3.0	平底から胴部丸みを持って立ち上がる。胴中位に最大径。	外面 胴上位腹磨き。 内面 横筋磨き。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい褐 色	
17	壺	口 (10.0) 高 — 底 —	口縁部やや内彎気味に開く。	外面 縦筋磨き、口縁下部横筋磨き。 内面 腹撫で。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい褐 色	
18	壺	口 (11.0) 高 — 底 —	口縁部やや内彎気味に開く。	口縁部 端部横撫で。 内面 縦筋磨き。 外面 刷毛目後腹磨き。	砂粒・石粒 を含む 良	明赤褐色	
19	壺	口 — 高 — 底 —	やや丸みを持った肩部から頸部締まり口縁部は直気味となる。	外面 肩部に櫛状工具による、放射状文、横線文、矢羽根状の櫛曲刺突文を施す。内面 指撫で。	細砂粒を含 む 良	明赤褐色	
20	壺	口 — 高 — 底 —	肩部開き、頸部から口縁にかけて外傾して立ち上がる。	外面 口縁部腹撫で、肩部に櫛状刺突文を施す。 内面 指撫で。	砂粒を含む 良	にぶい褐 色	

V. 滝川C遺跡

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
21	甃	口径 (18.2) 器高 — 底径 —	大きく外傾して、肩部屈曲して立ち、端部外平する。口唇部に細みを持った準伏洋文。	口縁部 横無で。 外面 刷毛目、磨磨き。 内面 刷毛目後磨磨き。	砂粒を含む良	橙色-灰黄褐色	
22	甃	口 19.0 高 — 底 —	二重口縁。口縁上段のみ、大きく外反し、肩部やや尖る。	口縁部 横無で。 外面 磨磨き。 内面 磨磨き。	石粒を含む普通	橙色	二重口縁器面荒れている
23	甃	口 (15.0) 高 — 底 —	肩部やや丸みを持つ。口縁部直立気味に立ち上がり、端部外反する。	口縁部 横無で。 外面 刷毛目後磨磨き。 内面 磨無で、輪積直残る。	石粒を含む普通	にぶい黄褐色	
24	甃	口 (20.0) 高 — 底 —	二重口縁。上段、下段ともに大きく外反する。口唇部はやや尖り気味に短く立つ。	口縁部 横無で。 外面 磨磨き。 内面 磨磨き。	砂粒・石粒を含む良	橙色	二重口縁
25	甃	口 (19.5) 高 — 底 —	外反して立ち上がり、上端部は大きく開き、端部は外反気味に短く立つ。	口縁部 横無で。	細砂粒混入軟質	にぶい黄褐色	
26	S字甃	口 13.6 高 — 底 —	胴部帯花果形を呈し、口縁部下段は外傾し上段強く外反する。台部を欠く。	口縁部 横無で。 外面 刷毛目、肩部横線磨き。 内面 磨無で、肩部縦指無で。	砂粒・石粒を含む良	暗褐色	胴下平窪付着
27	S字甃	口 15.8 高 — 底 —	肩部やや屈曲、頸部「く」の字に折れ、口縁部上段は直立気味に立ち端部外反。	口縁部 横無で。 外面 刷毛目。 内面 無で。	砂粒・石粒を含む良	黒褐色	
28	S字甃	口 15.3 高 — 底 —	胴部は球形を呈す。口縁部下段は短く立ち、上段は外反。	口縁部 横無で。 外面 胴部斜め刷毛目。 内面 縦指無で。	砂粒・石粒を含む普通	にぶい褐色	
29	S字甃	口 11.2 高 — 底 —	肩部やや丸みを持つ。頸部「く」の字に折れ、口縁部下段短く外傾して立ち上段は外反。	口縁部 横無で。 外面 斜め刷毛目。 内面 無で、肩部縦指無で。	砂粒・石粒を含む良	灰白色-黄褐色	
30	S字甃	口 12.4 高 — 底 —	肩部に最大径を持つ。口縁部下段は短く横へ張り、上段はやや外反して立ち上がる。	口縁部 横無で。 外面 斜め刷毛目。 内面 磨無で。	砂粒・石粒を含む良	灰褐色	
31	S字甃	口 14.0 高 — 底 —	ゆるやかな肩部から「く」の字に折れ、口縁部下段は外傾、上段外反して開く。	口縁部 横無で。 外面 斜め刷毛目、肩部横無で。 内面 無で。	砂粒を含む良	暗赤灰色	
32	S字甃	口 (9.4) 高 — 底 —	脚上部で細み最大径を持つ。口縁部の屈曲は弱い。口唇部は薄くなる。	口縁部 横無で。 外面 刷毛目、肩部に横線。 内面 磨無で、磨所無で。	細砂粒を含む良	にぶい褐色	
33	S字甃	口 (14.0) 高 — 底 —	肩部で張る。口縁部内側の段が顕著。上段は外反する。	口縁部 横無で。 外面 刷毛目。 内面 無で、肩部縦指無で。	砂粒を含む良	暗褐色	
34	S字甃	口 (15.7) 高 — 底 —	肩部丸みを持つ。ゆるく「く」の字に折れ、口縁部、上段、下段の屈曲は弱い。	口縁部 横無で。 外面 細い刷毛目。 内面 無で。	砂粒・石粒を含む良	灰白色-一部にぶい黄褐色	
35	S字甃	口 14.2 高 — 底 —	肩部で張り、頸部はゆるく「く」の字に屈曲、口縁部下段は短く外傾、上段は外反する。	口縁部 横無で。 外面 刷毛目。 内面 無で。	砂粒を含む良	暗褐色	
36	S字甃	口 (15.0) 高 — 底 —	頸部ゆるく「く」の字に折れ、口縁部下段は短く立ち、上段は外反する。	口縁部 横無で。 外面 刷毛目。 内面 無で。	砂粒・石粒を含む良	にぶい橙褐色	
37	S字甃	口 (15.8) 高 — 底 —	胴部屈曲部やや丸みを持ち口縁部下段は外傾、上段は外反する。	口縁部 横無で。 外面 刷毛目。 内面 無で。	砂粒・石粒を含む良	明赤褐色	
38	S字甃	口 (19.0) 高 — 底 —	頸部「く」の字に屈曲し、口縁部外傾して立つ。口縁部の曲がりは弱い。口唇部外反する。	口縁部 横無で。 外面 斜め刷毛目。 内面 磨無で。	砂粒を含む良	浅黄褐色	
39	S字甃	口 (20.0) 高 — 底 —	胴部強く屈曲し、口縁部下段は水平に開き、上段は直立気味に立ち、端部外反する。	口縁部 横無で。 外面 刷毛目。 内面 無で。	砂粒・石粒を含む良	灰褐色	
40	S字甃	口 (17.0) 高 — 底 —	口縁部、上段、下段ともに幅を持つ。上段は外反する。	口縁部 横無で。 外面 胴部刷毛目。 内面 無で。	粗砂粒を混入良	灰黄褐色	

## 4. グリッド出土遺物

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
41	S字壺	口径 12.0 器高 — 底径 —	頸部「く」の字に折れ、口縁下段短く外傾、上段はやや外反気味に立ち上がる。	口縁部 横撫で、 外面 縦磨り、 内面 磨撫で。	砂粒を含む 良	にぶい橙 色	
42	S字壺	口径 11.6 器高 — 底径 —	肩部は「ハ」の字に開く。頸部「く」の字に縦曲し、口縁部下段は短く、上段外反して開く。	口縁部 横撫で、 外面 研毛目、 内面 頸部研毛目後撫で。胴部撫で。	砂粒を多く含む 良	にぶい濁 色	
43	S字壺	口径 13.6 器高 — 底径 —	頸部「く」の字に折れ、口縁部下段は外傾、上段は外反する。	口縁部 横撫で、 外面 研毛目、 内面 磨撫で。	砂粒を含む 良	明褐色	
44	S字壺	口径 — 器高 — 底径 10.0	胴部は無花果形を呈す。台部「ハ」の字に開き、下縁折り返し。	外面 胴部研毛目。台部研毛目後縦撫で。 内面 胴部磨撫で、台部指撫で。	石粒(2mm)を含む 良	黒褐色	胴上半部 灰化物付着
45	S字壺	口径 — 器高 — 底径 —	胴部やや内彎気味に立ち上がる。台部は上部のみで、欠け口は磨滅している。	外面 研毛目、 内面 胴部磨撫で、台部指撫で。	砂粒・石粒を含む 良	灰褐色	
46	S字壺	口径 — 器高 — 底径 —	台部から「く」の字に折れて外傾する胴部となる。	外面 研毛目、 内面 胴部磨撫で、台部指撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙 色	
47	S字壺	口径 — 器高 — 底径 (9.6)	胴部やや内彎気味に開く。台部「ハ」の字に開き、肩部内側へ折り返し。	外面 研毛目、台部研毛目後撫で。 内面 胴部磨撫で、台部指撫で、折り返し部に指押え痕。	砂粒を含む 良	にぶい橙 色	
48	甌	口径 — 器高 — 底径 4.2	小さな底から胴部外反して立ち上がる。孔の径8mm。	外面 磨撫で、 内面 磨撫で。	細砂粒を含む 良	にぶい赤 褐色一部 黒色	
49	高 杯	口径 23.0 器高 — 底径 —	杯部下半で、ゆるく折れ、大きく開く。	口縁部 横撫で、 外面 磨磨き、 内面 磨磨き。	砂粒を含む 良	にぶい橙 色一部黒 色	杯部のみ
50	高 杯	口径 21.2 器高 — 底径 —	杯部のみ、下部でゆるく折れて大きく逆「ハ」の字に開く。底部に径3mmの焼成後穿孔。	外面 磨磨き、 内面 磨磨き、器面荒れている。	砂粒・石粒を含む 良	橙 色	
51	高 杯	口径 (18.0) 器高 — 底径 —	やや内彎気味に逆「ハ」の字に開く。口唇部内側が状となる。	外面 磨磨き、 内面 磨磨き。	細砂粒を含む 普通	橙 色	
52	高 杯	口径 — 器高 — 底径 (18.9)	脚部筋が大きく開く。円形の透し孔3個。	外面 縦磨磨き、 内面 撫で。	砂粒・石粒 少量含む 普通	橙 色	
53	高 杯	口径 — 器高 — 底径 (12.9)	杯部大きく外へ開く。円形の透し孔6個。	外面 磨磨き、 内面 研毛目後撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙 色黒褐色 有り	脚部
54	器 台	口径 7.6 器高 8.5 底径 10.2	脚部は「ハ」の字に開き、杯部は浅く、大きく横へ開く。端部薄くなる。	口縁部 横撫で、 外面 研毛目後縦磨磨き、 内面 杯部研毛目後磨磨き、脚部研毛目。	細砂粒を含む 良	橙 色	
55	器 台	口径 (8.8) 器高 8.5 底径 14.4	脚部は縦が大きく開く、杯部はほぼ水平に横へ開き、端部がやや外反して短く立つ。	口縁部 横撫で、 外面 磨磨き、 内面 杯部磨磨き。	砂粒・石粒 (2mm)含む 良	赤褐色	
56	器 台	口径 (8.6) 器高 — 底径 —	器受け部大きく横へ開き、端部は短く立つ、脚部に円形の透し孔。	外面 器受け部端部は横撫で、以下磨磨き、 内面 器受け部磨磨き、脚部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	橙 色	
57	高 杯	口径 — 器高 — 底径 —	杯部は横へ開く。脚部はやや「ハ」の字に開く。	外面 磨磨き、 内面 杯部磨磨き、脚部指撫で。	砂粒・石粒 多量に含む 良	にぶい橙 色または 灰白色	
58	高 杯	口径 — 器高 — 底径 —	脚部は「ハ」の字に開く。杯部は大きく横へ開く。	外面 磨磨き、 内面 杯部磨磨き、脚部撫で。	砂粒・石粒を含む 良	にぶい橙 色	
59	高 杯	口径 — 器高 — 底径 (4.2)	小型の脚部、杯部は短く開く、中央が凹む。	外面 縦磨磨き、 内面 脚部指撫で。	細砂粒を含む 良	にぶい橙 色	ミニチュ ア土器
60	高 杯	口径 — 器高 — 底径 —	杯部やや内彎気味に立ち上がる。	外面 縦研毛目後磨磨き、 内面 杯部磨撫で、脚部縦に縦磨される。	砂粒・石粒 少量含む 良	灰黄褐色 一部橙 色	

V. 滝川C遺跡

番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	成・整形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
61	器台	口径 — 器高 — 底径 —	「ハ」の字を呈し、裾部やや開く。円形の透し孔3個。	外面 縦筋磨き。 内面 指撫で。	砂粒・石粒 少量含む 良	にぶい黄 褐色	
62	器台	口 — 高 — 底 —	脚部は「ハ」の字を呈し、裾はやや開く、円形の透し孔3個。	外面 縦筋磨き。 内面 上半部指撫で、下半部刷毛目。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい橙 色	
63	器台	口 — 高 — 底 —	脚部「ハ」の字に開く。円形の透し孔3個。	外面 磨き。 内面 撫で。	細砂粒を含む 良	褐色	
64	器台	口 — 高 — 底 —	小型の脚で開きは弱い。円形の透し孔。	外面 縦筋磨き。 内面 指撫で。	砂粒・石粒 少量含む 良	にぶい黄 褐色	
65	器台	口 — 高 — 底 —	器受け部、水平に開く。	外面 磨き。 内面 器受け部撫で。 脚部撫で。	砂粒・石粒 を含む 良	にぶい橙 色	
66	坏	口 11.9 高 3.4 底 —	丸底を呈す体部から口縁部直立気味に立ち端部やや内反。	口縁部 横撫で。 外面 体部磨削り。 内面 撫で。	砂粒を含む 良	褐色	
67	坏	口 18.2 高 5.5 底 —	浅く丸底から「く」の字に屈曲して口縁部やや内脚気味に大きく開く。	口縁部 横撫で。 外面 体部磨削り。 内面 撫で。	砂粒・石粒 を含む 良	明赤褐色 黄褐色	
68	坏	口 15.5 高 5.2 底 —	浅い丸底から強く内脚して屈曲し、口縁部に外傾して開く。	口縁部 横撫で。 外面 体部磨削り。 内面 磨き。	砂粒・小石 粒多量を含む 良	にぶい橙 色または 褐色	
69	埴土器 坏	口 — 高 — 底 (8.0)	体部やや丸みを持って立ち上がる。	口縁部 横撫で。 底面 回転磨削り。	砂粒・石粒 を含む 良	黄灰色	
70	埴土器 坏	口 — 高 — 底 6.5	かなりくずれた高台が付く。	ロク口成形。 底部ロク口右回転磨削り。	砂粒・石粒 を含む 良	灰黄色	かなり磨 減してい る。

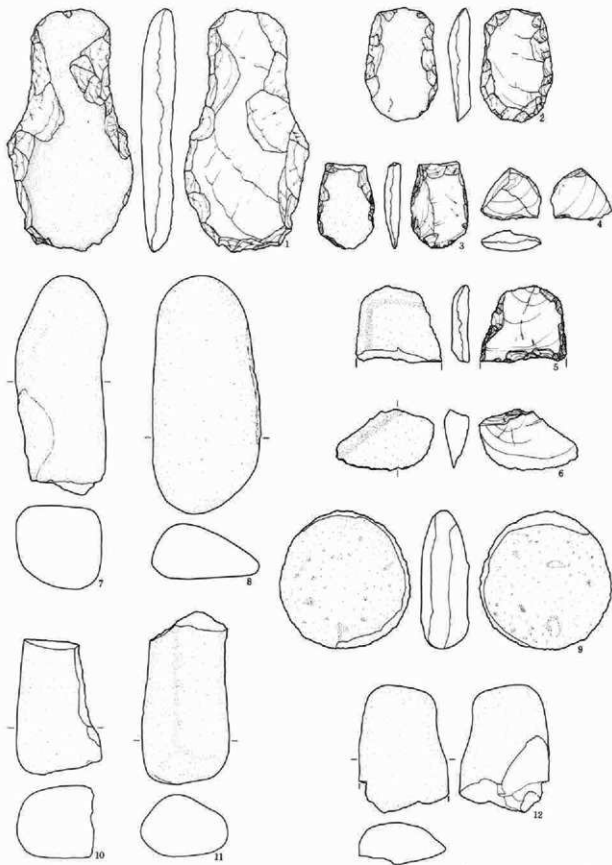
番号	出土位置	器種	法量 (cm・g)	備考
71	表	刀子	7.8×2.5×0.3 34.0	錆化がかなり進んでいる。先端はやや鈍くなる。

番号	出土位置	器種	法量 (cm・g)	石材	備考
72	23-B04	砥石	5.7×8.4×5.4 189.7	黒色頁岩	破損品、表面に研ぎ溝あり。

表 36 グリッド出土陶土器観察表

番号	器種	法量 (cm)	特徴	胎土・焼成	色調	備考
1	深鉢	口径 30.3 器高 (38.2) 底径 (9.0)	底部平底、胴下部から外反して立ち上がり中位で丸みを持つ。口縁部はほぼ垂直に立つ。口料部やや内脚が状を呈す。施文は0段多条の閉端環付R L・L Rで菱形羽状を全面施文する。	小石を含む 普通	淡赤褐色	織物土器
2	深鉢	口 — 高 — 底 —	細いR Lが施文される。	砂粒を含む 普通	赤褐色	
3	深鉢	口 — 高 — 底 —	口縁部平らで外側に肥厚し凹線が彫る。以下R Lの縄文。	砂粒を含む 普通	赤褐色	
4	深鉢	口 — 高 — 底 —	口縁部片。横に沈線、以下L Rの縄文を施文。口唇部やや薄くなる。	砂粒を含む 普通	黄褐色	
5	把手	口 — 高 — 底 —	楕状を呈す深鉢型土器の把手であろう。外面L Rの縄文が施文され一部磨り消されている。	砂粒を含む 普通	黄褐色	
6	深鉢	口 — 高 — 底 —	円形の沈線内にR Lを縦線施文する。	砂粒を含む 普通	黄褐色	

4. グリッド出土遺物



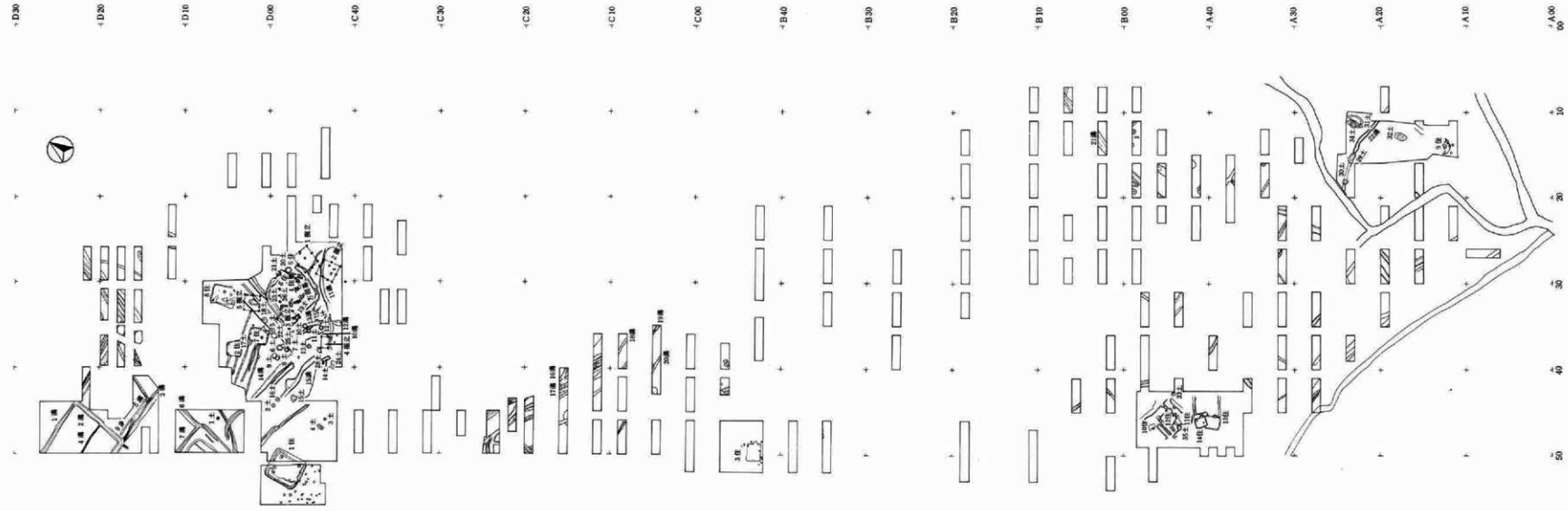
第113図 グリッド出土石器

0 10cm

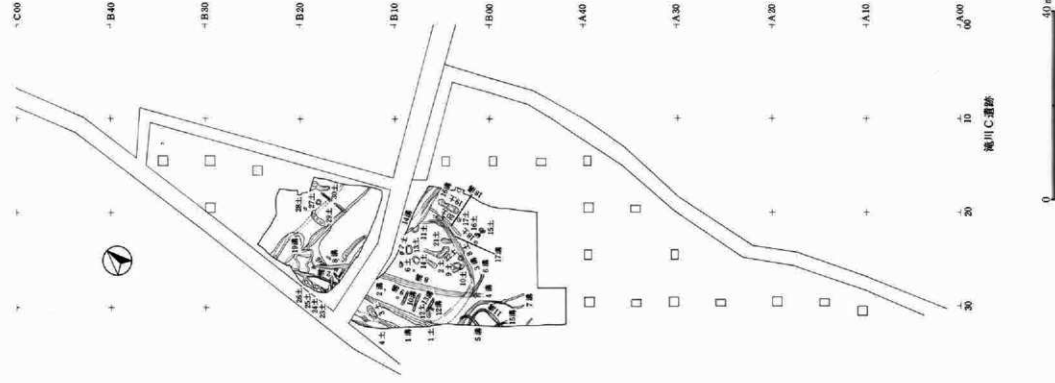
V. 滝川C遺跡

表 37 グリッド出土石器観察表

番号	出土位置	器種	法量 (cm・g)	石材	備考
1	16-B19	石鏃	19.2×10.0× 2.6 630.0	実質安山岩	大形で刃部広がる。片面に自然面を持つ。
2	20-B18	打製石斧	9.0× 5.7× 1.8 119.9	黒色頁岩	厚手で歯は鈍角、片面に自然面を持つ。
3	19-B18	打製石斧	6.8× 4.5× 1.3 46.4	黒色頁岩	楕円形打製石斧、刃部丸みを持ち磨耗している。基部欠損。
4	08-D02	スクレイパー	4.8× 4.0× 1.6 26.9	黒色頁岩	三角形を呈し、一側縁に刃を作り出す。
5	22-B05	スクレイパー	6.1× 6.9× 1.4 69.5	黒色頁岩	片面に自然面を持つ。下部を欠いている。
6	27-B02	スクレイパー	7.8× 4.9× 2.0 55.6	黒色頁岩	片面に自然面を持つ。側縁に弧状の刃部を作り出す。
7	27-A45	礫石	17.3× 6.8× 6.7 1500.0	輝石安山岩	一端を欠き、側縁に刻溝。
8	23-B07	礫石	18.8× 8.6× 4.4 923.0	デイサイト	両端に使用痕。
9	25-B00	礫石	10.9×10.4× 3.8 572.8	凝灰岩質砂岩	円形を呈す。側縁に打痕。
10	31-B03	礫石	10.7× 6.8× 6.3 668.4	石英閃緑岩	断面隅丸方形となるが、側面、端部を欠いている。
11	30-31-B05	礫石	13.7× 7.0× 5.3 687.0	輝石安山岩	端部に使用痕、一端を欠く。
12	20-B17-19	礫石	10.1× 7.1× 3.4 324.6	黒色頁岩	一端を欠いている。



下野田・滝川入道跡



0 20 40 60 80 100 120 140 160 180 200 220 240 260 280 300 320 340 360 380 400 420 440 460 480 500 520 540 560 580 600 620 640 660 680 700 720 740 760 780 800 820 840 860 880 900 920 940 960 980 1000

0 20 40 60 80 100 120 140 160 180 200 220 240 260 280 300 320 340 360 380 400 420 440 460 480 500 520 540 560 580 600 620 640 660 680 700 720 740 760 780 800 820 840 860 880 900 920 940 960 980 1000





## VI. ま と め

### 1. 遺 構

下斉田遺跡及び滝川C遺跡では、縄文時代から中世までの遺構と遺物が出土している。時代毎に若干の考察を行いたい。

#### 1. 縄文時代

縄文時代の遺構は下斉田遺跡で土壇を1基(21号土壇)確認したのみである。土壇内からは中期加曾利E式終末期の破片が数片出土したのみであった。しかし、D地区の1号住居址周辺からは、縄文前期諸式を中心に黒浜式と中期加曾利E式の土器が、石器とともに遺構を伴わず出土している。また、滝川C遺跡からは黒浜式の土器が台地の縁辺部から遺構を伴わず一括出土した。

前橋台地における縄文時代の遺跡の実態は明らかになっていない。本遺跡を中心とする当地域でも、発掘調査で明らかなのは、烏川左岸の高崎市八幡原遺跡(註1)から出土している中期の遺物と、下郷遺跡(註2)の前期から中期にかけての僅かな遺物群、及び八幡原A遺跡(註3)の前期諸式の住居址の検出例等があるのみである。群馬県の縄文時代は、赤城山の南麓及び西麓に広がる台地上の遺跡群で代表されるが、実は下斉田遺跡が存在する前橋台地にも潜在的に多くの遺跡があるものと考えられる。特に烏川等の前橋台地の縁辺部を流れる大きな河川だけでなく、台地上を流れる滝川や広沢川等の小河川の縁辺でも縄文時代の遺跡が存在することが判明したことは重要であると言えよう。赤城山の台地上に築かれる大集落との関係を考える意味においても、本遺跡をはじめとする周辺の縄文時代の遺跡は貴重なものといえる。

#### 2. 弥生時代から古墳時代初頭

弥生時代から古墳時代初頭の遺構のひとつに、下斉田遺跡D地区の微高地から検出された溝群がある。

この溝群は形態によって2種類に分類できる。1つは7号住居址の西で発見された小溝群である。幅30cmの溝が1~1.5m間隔で6本平行して走っている。溝のなかの土壌は、浅間C軽石混入の黒色土である。発見当時は、他遺跡に類似遺構が無かったため、単純に溝状遺構として処理したが、現在の研究水準から弥生時代の畑跡であった可能性が強い。他の3本の溝の内3号溝からは浅鉢が出土している。(第60図3・4)小溝群の覆土と同様に浅間C軽石を含む黒色土を主体としており、同時期のものである可能性が強い。

この時期のD地区の微高地に展開する遺構群の中心となるものは、方形周溝墓1基と、1・2・8号住居址の3軒、13・15・16・20号土壇の4基である。遺構の配置は、微高地の中心部に方形周溝墓を1基配し、縁辺の北から西にかけて住居址群、西から南にかけて土壇群という展開を示す。なお、20号土壇は、方形周溝墓の北辺に位置しており、方形周溝墓の一部を形成するものと考えられる。周辺からは、本遺跡と同時期に形成された遺跡群がいくつか見られる。南1.7kmに位置する玉村町の下郷遺跡は(註2)、烏川の左岸につくられた遺跡で、27基の方形周溝墓を中心に前方後円墳(天神塚古墳)や土壇等を検出している。また、北西2.5kmには4世紀初頭の全長90mを測る前方後方墳である榊塚古墳(註4)と、石田川式の集落が発見された上滝遺跡があり、北西4kmの広沢川の左岸にある高崎市の鈴ノ宮遺跡(註5)でも11基の方形周溝墓と同時期の集落跡を検出している。更に、北7kmの染谷川の両岸に展開する高崎市新保遺跡(註6)でも、弥

## VI. ま と め

生時代後期から古墳時代前期にかけての方形周溝墓と大集落跡が発見されている。いずれも複数の方形周溝墓を検出しているものであり、本遺跡のように、1基の周溝墓に数軒の住居址を展開するというパターンではない。その意味でも特異性のあるものと言えよう。また、他の遺跡は、各々主要河川の縁辺部に立地しているのに対し、本遺跡は、滝川という小河川はあるものの、狭い微高地上に展開している点でも特異性を持っていると言える。

### 3. 奈良・平安時代

奈良・平安時代は、下斉田遺跡のA地区から検出された5軒の住居址群と、C・D地区の竪穴住居址を中心とする遺構群がある。A地区の住居址群は微高地の西側に4軒、東側に1軒発見されたが、微高地の中心部には無く、井戸や土塼があるのみであった。C・D地区の遺構群は、竪穴住居址3軒と、同時期に比定される掘立柱建物址が5棟検出された。特に5号掘立柱建物は棟内部に小鍛冶遺構があり、一体のものと考えられるものであり、特異なものと言える。下斉田遺跡の東側を流れる滝川は、前橋市下新田町付近で利根川から分岐し、玉村町で再び利根川に合流する小河川であるが、江戸時代初期慶長15年(1610)に河川改修されたものである。改修以前はかなり蛇行していたことが想像でき、周辺を微高地と低地の複雑な地形につくりあげている。周辺の古墳時代から平安時代にかけての遺跡は、井野川の左岸段丘面上に灰塚遺跡(註7)をはじめ天神山古墳や諏訪甲341号古墳などがある。両遺跡は、井野川の左岸段丘面の東側のはずれにあたり滝川及び広沢川の氾濫等の影響を受けながら微高地上に作られた集落跡であると言える。浅間B経石下の水田遺構の状況とあわせて、前橋台地の中心部に向けての開発状況を考える上での好資料と言えよう。

- |             |                |                     |
|-------------|----------------|---------------------|
| (註1) 八幡原遺跡  | 高崎市文化財調査報告書第3集 | 1974(昭49)           |
| (註2) 下塚遺跡   | 群馬県教育委員会       | 1980(昭55)           |
| (註3) 八幡原A遺跡 | 群馬県埋蔵文化財調査事業団  | 1981(昭56)           |
| (註4) 榎塚古墳   | 高崎市教育委員会       | 1981(昭56)           |
| (註5) 鈴ノ宮遺跡  | 高崎市教育委員会       | 1978(昭53)           |
| (註6) 新保遺跡   | 群馬県埋蔵文化財調査事業団  | 1977(昭52)~1980(昭55) |
| (註7) 灰塚遺跡   | 高崎市教育委員会       | 1975(昭50)           |

## 2. 遺 物

群馬県西部域における弥生時代後期は、北信系土器である櫛式土器によって代表される土器文化圏である。一方、同時期の地方様相は、赤城山麓東南部地帯における赤井戸式、北武蔵地方においては縄文とすなわち岩鼻式土器群、相模湾、東京湾西部における久ヶ原式、弥生町式土器文化圏が当地方と直接的な関係を持っている。

下斉田遺跡の周辺における弥生時代遺構の状況は、先に触れられているが、櫛式土器を出土する遺跡は、新保田中、新保遺跡、日高遺跡、宿大類村西遺跡、大類村相寺遺跡、矢島鈴ノ宮遺跡、矢島竹ノ内遺跡と遺構を伴った遺跡である。櫛式土器を散布する地域は、上記の遺跡の分布が示すように染谷川、井野川流域には極めて多くの地点に認められる。下斉田遺跡は、櫛式土器文化圏の中にすっぽり入っている。この櫛式文化と異質な土器群文化が、どの様な理由で存在するのであろうか。そして同種の遺跡は少ない。上大類北宅地に一例が認められるに過ぎないのである。また、弥生時代に続いて行く古墳時代の土器様相は、下斉田や北宅地遺跡とも、櫛式文化とも異なるいわゆる石田川式という近畿地方の庄内式や布留式土器の強い影響下に成立する土器群であって、下斉田遺跡とは直接的な関係は見いだされない。

この様に、前にも後にも周辺の土器文化と全く関係が見いだされない下斉田遺跡の意味はなにを示してい

## 2. 遺物

るのであろうか。旧来の弥生末から古式土師への変遷観に従えば、樽式文化と石田川式文化の対峙する(註1)中に偶然的に登場する遺跡として簡単に片付けてしまうであろう。しかし近年、群馬県を含めて関東、天竜川地方における、弥生後期後半代に属する伊勢湾系土器や大和盆地系土器の調査例が増加し、この時期の文化の交流が思ったより豊かで遠距離の移動を相互に行っている実態が明らかになりつつある。かつ、これら文化が各地の初期古墳成立と深い関係にある点注目されていて研究も進んでいる。(註2)この研究動向の中において、樽式文化から初期古墳への過渡期における、伊勢湾系、大和盆地系土器以外の土器文化の移動も注意をして取り扱わなければならない多くの課題を提示している。具体的に言えば、弥生後期末頃に発生をする赤井戸式文化の成立と経過は、この下斉田遺跡の経緯を考える上で重要な参考資料となるであろう。また下斉田遺跡の母胎となる東海東部域から東京湾西岸域に及ぶ土器文化圏は、近畿地方の文化の波及を受けても群馬県の樽式、茨城県の十王台式土器文化の様に急速に消滅してしまうということは無く、継続して行く特色を持つ強い性格を有する点も留意して行かねばならない。弥生後期樽式土器文化から石田川式土器文化へ変遷する過程を索る上で、下斉田遺跡、上大類北宅地遺跡の意味を再点検する必要がある。

### I. 下斉田遺跡出土遺物の点検

下斉田遺跡出土の遺物は、多少性格を異にする群より成立している。1号住居址出土遺物は石田川式土器と平行関係にある土器群であろう。これを下斉田遺物Ⅱ群と称する。方形周溝墓、2号住居址、8号住居址、20号土壇を下斉田遺物Ⅰ群と称しておきたい。

#### 1. 壺型土器(表38)

##### (1) 遺物Ⅰ群の壺型土器の特色

壺型土器の特色は、口縁部状況と胴部状況に集約される。口縁部の形状は、折り返し口縁と単口縁に大別ができる。また折り返し口縁は、口縁部を受け口状に設定する型と外反させた口縁外面に折り返しを付ける2種類に細分ができる。一方、胴部の特色は、最大径を下半に設定するa種と、中位程に設定するb種として区分が可能である。また、単純な折り返し口縁の内に、樽式土器に共通する壺と壺の中間土器も含まれているので壺型土器c種として設定して置く。以上の特色を体系的に分類すると2種6器形に分類可能である。単口縁壺型土器にa種とc種が存在するとすれば2種9器形になる。

##### 1. 受け口状口縁壺型土器の特徴(第115図、1~4)

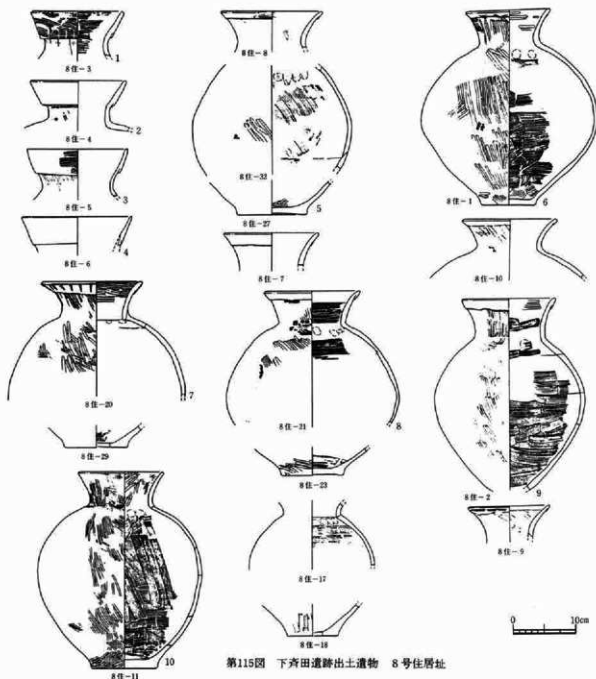
受け口状口縁壺型土器において普遍的に存在する器種である。(第24図、8住3-6)の壺型土器の様に幅を大きく持たせ垂直に近い角度で持ち上げる手法は、東海西部、東部、関東南部における弥生時代後期後半代に顕著なものである。最大径を下位に置く器種は、古い型であり、最大径を中位や上位に置く球型壺は後出的要素である。また、下斉田における壺型土器が無文である点については、施文の極めて少ない東海東部、駿河湾岸の弥生末頃の土器手法に共通性が認められる。通常、弥生町式土器にしろ、伊勢湾岸域の欠山式や元屋敷土器に認められる受け口状口縁壺は、口縁部・胴上半分櫛描文・櫛による刺突列点文・また山型文と刺突列点文等の装飾性の強い土器群がある。但し、駿河湾岸土器にしても、口縁の外平坦面には横積線文や、棒状貼付文が多いことを考えると、下斉田受け口状壺が、駿河湾土器そのものでは無い点は留意して置きたい。また、受け口状と称する口縁部内側に受け部の稜を造らない点は、やや後出的要素であるが問題も残している。

##### 2. 単純折り返し口縁壺型土器の特徴(第115図、5~10)

この器種は、壺型土器の主流を成す器種である。13個体中の9体を占める。この器種で土器の系列や時期を検討するのは、胴部の形状である。3種の特色は概略次の様に整理できる。

折り返し口縁a種は、口縁部の8住-8、と胴部8住-32と底部8住-27の合成図(第115図-5)に示す

V. まとめ



第115図 下齊田遺跡出土遺物 8号住居址

ことができるように、ゆるく外反する口縁、頸部径が比較的大さい、胴最大径を下半に持って来る。底部径が比較的大さい器形をなすこの器種は弥生後期密型には共通する器形であって、関東南部域の土器分類では久ヶ原期の形状をまだ残していると言えよう。手法的にも地は櫛状工具により、仕上げを篋状工具による平滑化を基調とするが、内壁は刷毛目を残す手法や、口縁・胴・底部を三区別して造る手法等にその特色が示されよう。

折り返し口縁b種は、この器種の主体的な土器である。8住-20(第115図-7)、8住-21(第115図-8)、8住-1(第115図-6)に示す器形と手法をなす。胴部最大径を中位程に置き球形の胴をなし、底部は絞って径の小さい底をつける。頸部は、低くやや立ち上がり気味で張った肩に接続する。調整手法はa類と同様

## 2. 遺物

に櫛状工具と篋状工具であるが、内面外面ともに平滑化し刷毛目が残らなくなる傾向が強い。折り返し口縁平面に施文する8住-20例は、これ等b種内においても後出的器種と指摘できる。

折り返し口縁c種は8住-2(第115図-9)の一例のようである。頸部径が比較的大きい。胴最大径が中～上位にありながら下半が極めて長く長胴型をなす。外面は丁寧に磨き研磨するが内面は刷毛目を残している。この器種については壺と甕の中間的土器で、櫛式土器や岩鼻式土器の同種器種に共通する器形であろう。

単口縁壺型土器b種(8住-11、第115図-10)球形に近い胴で頸部も比較的小さいが底部は平底で大きい。かつ内壁に刷毛目を残す手法をとっている、完全に球形壺に変化していない状況であろう。

下齊田I群の壺型土器の形状の概略は上記の通りである。単純折り返しc種やa種に認められる特色は関東南部の弥生時代後期の土器の中に類例を求めるとすれば、弥生町式土器群の内において、より古い形状を残す系列にある土器群に含まれると考えられる。(註3) 一方、主体的な土器群である単純折り返しb種は、胴下半に重心を移しながら球形胴化している弥生町期の動向と同じであろうと考えられる。一方、弥生町期のこの動向は、一方において口縁部及び胴部に櫛状工具による施文が定着化する時期に当たる点において、差異を示している。下齊田I群は全くといって良い程無文手法である。

これは、受け口状壺型土器の口縁の状況が受け口の基本型を停どめていず、外反気味である点において、その形式上後出的要素が強いように思えるが、弥生町式土器に続く弥生末の二重口縁系手法壺型土器の影響を強く受けない時期に限定できる土器群であろう。無文化の著しいのは、駿河湾岸の弥生後期後半にその特色とするところである点、また前野町期にも同傾向が認められる共通的な要素であろうか。

### (2) 遺物II群の壺型土器の特色

壺型土器として認められる例は明確ではない。受け口状口縁壺1住-1と単口縁壺型土器1住-3・6の中型球形壺と、1住-7～9の小型丸底壺型土器である。

その他、2号住居址では折り返し口縁b種壺型土器2住-1・7、20号土壌では単口縁系と思われる球形胴の壺型土器20号土壌-15が見いだせる。20号土壌例は器壁内面も篋状工具による丁寧な仕上げ痕が残り、頸部内側に刷毛目痕を残すもので、下齊田遺跡I群遺物の中にあっても最終的な要素の土器であると言える。分類の視点と傾向概略は表38「壺型土器の分類とその特徴」に示した。

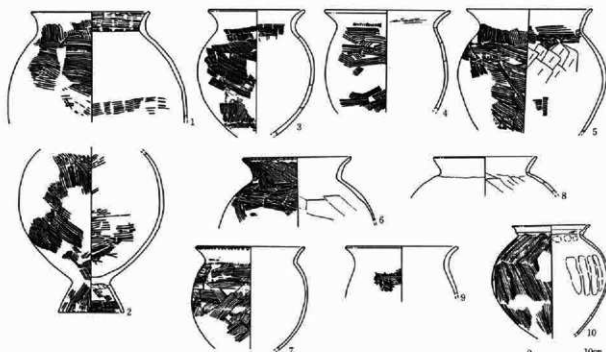
## 2. 壺型土器(表39)

壺型土器は、1号住居址・2号住居址・8号住居址・20号土壌・方形周溝墓から出土している。壺型土器についても、壺型土器と同じくS字口縁台付甕を出土した1号住居址の壺群をII群に、それ以外はI群と設定した。この分類は大型壺についてのみ行った。I、II群の各壺を細部にわたり点検を行うと、第1は口唇部に施文の有無の差が存在すること、第2は口縁部径が胴径に比して大小の差があって、小さい器種はやや長胴化であり、大きい広口の甕の場合には球形の胴をなしていることであろう。この視点に従って分類すると、2群3系で6器種となる。

### (1) 壺型土器の特色

I群は、器形・調整方法等によって2系4器種に分類できた。その中で8号住居址及び2号住居址出土遺物群と、20号土壌及び方形周溝墓出土遺物群に大別できる。8号住居址及び2号住居址の遺物は、口唇部無施文a種(第116図-1・2)に限られるに対して、20号土壌は無施文b種と施文a種とb種(第116図-3～7)の3種の土器を含んでいる。この内20号土壌の甕の特色とするところは、器形のb種が核となっていることと、大型化とともに内壁の平滑化手法と一部に板状工具による削りが認められる点である。(第116図

## VI. まとめ



第116図 下斉田遺跡出土遺物 8住(1), 2住(2), 20土(3・4・6・7), 方周(5), 1住(8~10)

—20土—8、方形—1・2 この球形で広口のズングリした甕型は、いわゆる前野町式の特徴を示すことと、板状工具出現は東海地方に認められる手法(註4)の伝播を示していて、欠山期にその出現が認められるのであるから、20号土甕の甕は弥生時代末頃から古式土師の初頭頃に位置付けられて良いであろうし、埋土中にC軽石の混入する所見と時間的不一致さを感じさせない。これに対して8号及び2号住居址の甕は器形、刷毛目状調整痕を内外面に残している状況は、関東南部の弥生町式土器群に共通するところであろう。但し、口唇部の手法は櫛状工具等での刺突文が普遍的であるのにそれが認められない点問題がある。

甕Ⅱ群はS字甕を含み、長胴型の平底甕の器種(第116図—9)も登場する様である。

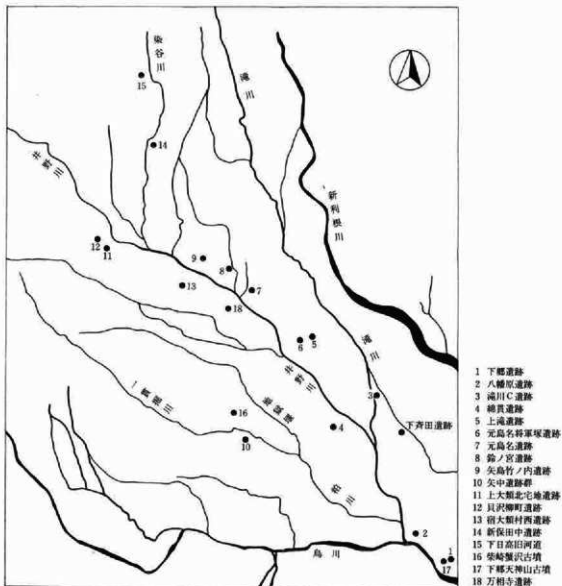
### 3. その他の遺物特徴

高坏型土器は方形周溝墓、8号住居址、1号住居址に検出されている。1号住居址では裾の大きく開く駒形大塚墳頂出土高坏(註5)例に類似する例(1住—36・39・42・43)や小型鼓状高坏(1住—16・20)の混在に注意したい。方形周溝墓、8号住居址例はやや深めで接合部に稜線を少し意識し、ハ状脚で有孔を特色としている。これをA種とするとA種は東海地方の元屋敷期(古)に相当させることが可能である。例(1住—42)をB種とするとB種高坏は、元屋敷期(中)以降で、脚を絞った大和系高坏(C種高坏、新田中河遺資料・第130図4~7)を混合する時期に当てられよう。

なお、器台、丸底小型壺等の古式土師器を代表するセットは、1号住居址に含まれている。1号住居址は器種のバラエティーに富んでいる特色を示し、その土器の斉一化とともに多様な交流を示す資料である。(註6)

### 4. 下斉田遺跡出土土器の特色とその意味

出土遺物を器種を中心に点検してきたが、その特色とする所は、各々の遺物が弥生後期末頃から古式土師



第117図 遺跡位置図

初期の時代に連絡する遺物であり、その遺物の特色は関東南部から東海東部域系統の単独の遺物であることになろう。しかし土器細部を点検すれば、その土地の土器様相のものではないことも明らかである。従って、下斉田土器群の母胎、また強い影響の元は、関東南部から東海東部にあるとしても、少なからず、その母胎の文化及び周辺の櫛式文化からも適当な間隔をおいて独自に展開した土器文化であると言えよう。

下斉田の土器群を時期的にみると、C軽石を含む20号土壇及び方形周溝墓の遺物を基準としなければならない。20号土壇と方形周溝墓は壘型土器と高坏型土器で、他の遺構との対比に弱さを感じるが、口唇部に刺突を持つ広口台付甕は形態、手法の特色において、古式土師器に属する段階と判断して良いであろう。また、1号住居址のセットに認められるS字甕、小型丸底甕、器台、高坏C種の存在を考えると、1号住居址は群馬県でいう石田川式土器の完成期に対比できることであるから、20号土壇及び方形周溝墓は、その直前に位置付けることが可能であろう。また、C軽石を混在させない8号住居址、2号住居址においては、壘型土器に示せる無花果状器種と球型器種との混在が示すように弥生時代後期終末に近い時期であると考えられよう。

## VI. ま と め

ここでも、器種、器形の全体的感じは、関東南部から東海東部の土器様相であるが、やはり独自性が強いと考えられる。緩やかな曲線で表現する無花果状の器種は、弥生中期の壺型土器の伝統を残すものであり、8号住居址、2号住居址がまだ弥生時代に属させるべき根拠となろう。

この様に下斉田遺跡の遺物の変遷が示す事実は、当地方が弥生時代後期の櫛式土器文化圏の中で弥生時代末から古墳造りという斉一性の強い統一的社会に入るまでの年月を独自に歩み続けた小規模な集落社会であったことを明らかにすることとなった。

### II. 井野川下流域における土器様相から見た下斉田遺跡出土遺物群の意味

井野川及び谷染川という榛名山東南麓地方の平坦地を潤す二大河川は、弥生時代中期以降のこの地方の文化を担う重要条件である。弥生時代中期の文化は諏訪、松本平の粟林式土器の強い影響下に発展する意見町式土器文化がこの平坦地を開墾するのに始まる。後期櫛式土器文化は、時として丘陵、扇状地帯の高地に文化圏の中心を置きつつも、この両河川域は櫛式土器文化の支根的な地帯となり中部山岳系の弥生文化を展開する。一方、この地域は群馬県西部域の古墳時代墓開けを告げる元鳥名將軍塚古墳、柴崎蟹沢古墳、下郷天神山古墳等の古式古墳を成立させる。この古墳文化の定着した時代を代表するのは石田川式土器文化であって、この平坦地に定着し多くの遺跡を展開する。

この様な弥生時代末から古墳文化への変遷状況から、例えば茨城県地方の弥生時代後期十万台式土器文化に木に竹を継いだ様に土師式文化が登場するという様な概論的展開、即ち櫛式土器文化から石田川式土器文化へと、異質な文化が継続するという変遷観が大勢を占めていた。しかし、下斉田遺跡及び上大類北宅地遺跡のような、関東南部、東海東部土器文化の進出、また貝沢柳町遺跡のような伊勢湾岸土器文化の進出は、従来の簡便な変遷図式では、この時期の複雑な社会変化は表現できないことを良く示している。特に無視されがちであった関東南部域からの土器文化の在り方を再点検する必要がある。この点において下斉田遺跡の在り方は、北武蔵から上野東南部域の利根川兩岸の同種遺跡の動向を背景にしつつ井野川中、下流域の開発の在り方を示す重要な資料であると言えるのである。

そこで、まず第一に、元鳥名將軍塚古墳で示される様な石田川式土器文化の定着がどの様な土器文化の変遷の結果として現れるのかを分析しておかねばならない。そのために周辺遺跡の土器様相をまず示さねばならない。

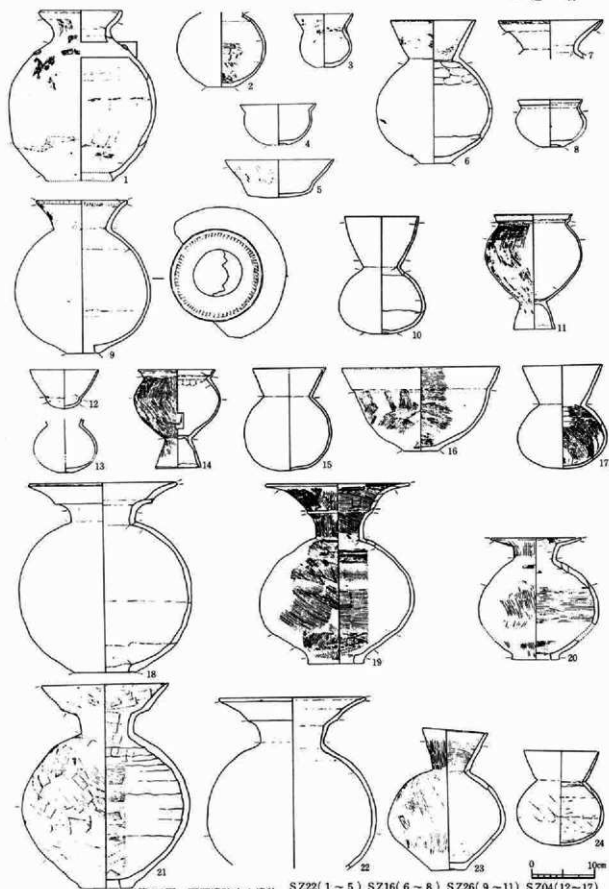
#### 1. 井野川下流に点在する各遺跡における土器様相

##### (1) 下郷遺跡における土器様相 (第118図-1~23) (第119図-1~6)

下郷遺跡は、佐波郡玉村町下郷(旧群馬郡八幡原村)に所在する方形周溝墓と古墳を中心とした遺跡である。井野川が烏川に合流する地点、井野川左岸にあたる。S字状口縁台付壺と複合口縁壺の組み合わせによる。いわゆる石田川式土器文化中心に属する遺跡地である。本稿ではその内SZ22(第118図-1~5)、SZ16(6~8)、SZ26(9~11)、SZ04(12~14)、SZ01(18~20)、SZ09(24)、SZ42(21~23)、前方後方状周溝墓、及びSK39(特種器台と壺 第119図-1~3)、SZ46(天神山古墳 第119図-4~6)を取り上げている。SZ04は溝下部にF・A堆積層が認められ、かつ東に接し、SZ04に先行するSZは封土に葎石を築いているようだ。また、SZ46、SK39の遺物は特種器台と複合口縁壺の組み合わせであって、SK39は壺を乗せたまま転倒した状況であり、内に長頸壺を入れ重石に使用していた状況であり、明らかに墓域を画する埴輪である。当遺跡西側約0.5kmが八幡原遺跡群であるが、当遺跡と一連と考えて良いであろう。



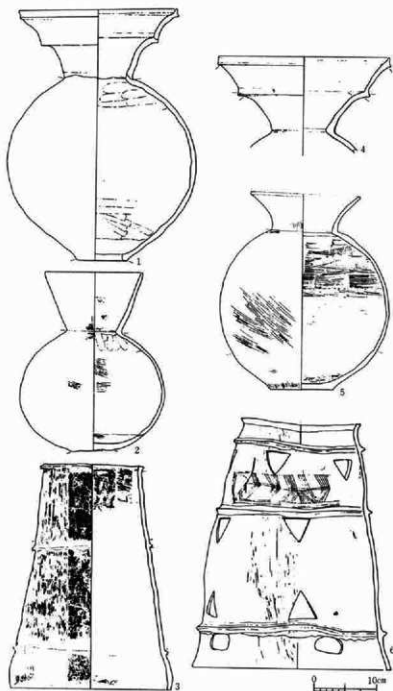
2. 遺物



第118図 下郷遺跡出土遺物

SZ22(1-5) SZ16(6-8) SZ26(9-11) SZ04(12-17)  
SZ01(18-20) SZ42(21-23) SZ09(24)

## VI. まとめ



第119図 下郷遺跡古墳関連遺物 SZ39(1-3)SZ46(4-6)

りS字壺が埋納されていた。また、内髷させて口唇部端をやや肥厚した小型壺(第121図-13)は明らかに布留式土器(新)に属するものであって、S字壺の下限を示す資料にもなる。

### (4) 綿貫遺跡(第122図)

綿貫遺跡は井野川が烏川に合流する地点より奥に約2.5km程入った地点である。東西幅約1.1kmの沖積地内自然堤防上微高地にある。両岸は3~5mの段丘崖をなしている。八幡原遺跡の西北約2km程である。この微高地は綿貫観音山古墳、不動山古墳(大型前方後円墳、箱型石棺、造り出し)、二子山古墳(竪穴系主体部、前方後円墳、平夾)を核とする大古墳群域にあたる。古墳の間をぬって、集落址が点在している。本稿は観音山古墳の北側を土地改良事業した折りの調査資料である。(註8)方形周溝墓2001、住居址0909とも

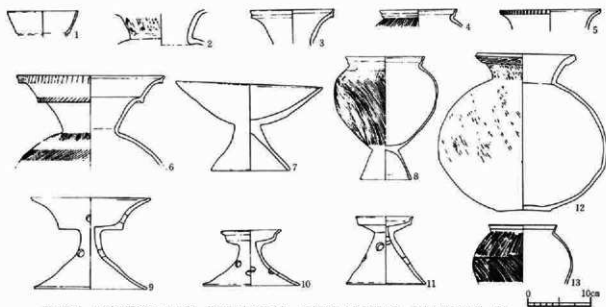
### (2) 八幡原遺跡(第120図)

八幡原遺跡は、下郷遺跡に続く烏川左岸崖上の古墳群と、その西井野川左岸崖上の古墳群と集落址等の遺跡群を言う。本稿で扱う資料は、井野川左岸にある遺跡で、滝川南部土地改良事業で調査した資料(註7)である。若宮北古墳東西トレンチとは、若宮神社北にある小型の前方後円墳の墳丘断面割り資料で墳丘下黒色土中より出土したもの。当古墳は舟形石棺を主体部としていて小型造り出しを有する。土壌Ⅲは、同古墳周溝内で検出したものである。また掘り込み遺構とは、この若宮北古墳より北約400m地点において検出された。土器放棄、土器溜りの如き遺構で、一部にローム層への掘り込みが認められたが性格不明。掘り込み内に土壌も検出されている。

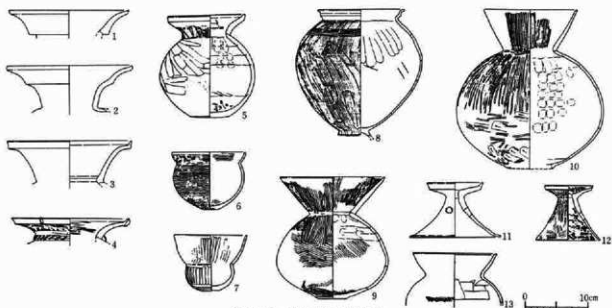
### (3) 滝川C遺跡(第121図)

これは、本書において報告するので詳細は省くが、注意すべき点について列挙しておきたい。遺物の多くはF・A堆積層下の黒色土表面に散在した資料である。一部には小型土壌があり

2. 遺物



第120図 八幡原遺跡出土遺物 若宮北古墳下(1~5)掘り込み遺構(6~11)土壇目(12~13)

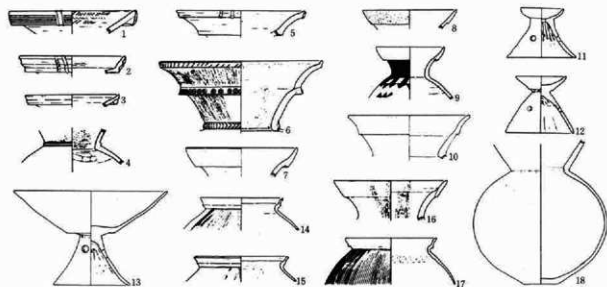


第121図 滝川C遺跡出土遺物

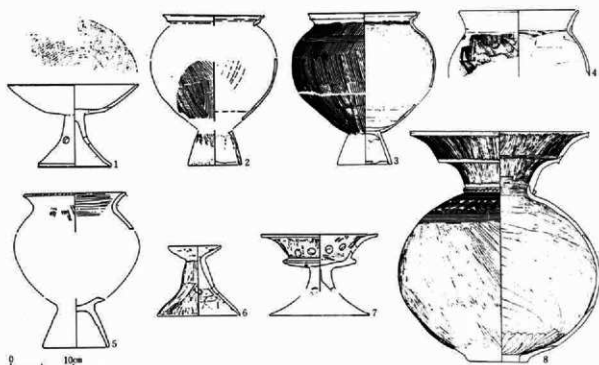


第122図 徳貫遺跡出土遺物 SX2001(1~2)S10908(3)

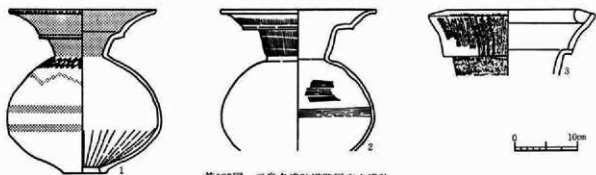
VI.まとめ



第123図 上滝遺跡出土遺物 包含層(1~15)3号住居址(16~18)



第124図 元島名将塚古墳出土遺物(K-L)トレンチ



第125図 元島名遺跡道路区出土遺物

## 2. 遺物

に親音山古墳より北方約70m程の地点で、井野川右岸崖上に当たる。

集落址、方形周溝墓ともにS字甕を伴う石田川式土器の時期である。3号住居址内に(第122図-3)の様な口唇部内側を肥厚させる特殊な壺型土器を含んでいる。駿河湾岸の古墳時代初期遺物(註3)に含まれていることから、即断は許されないが、布留式土器の影響を受けたものではなからうか。

### (5) 上滝遺跡(第123図)

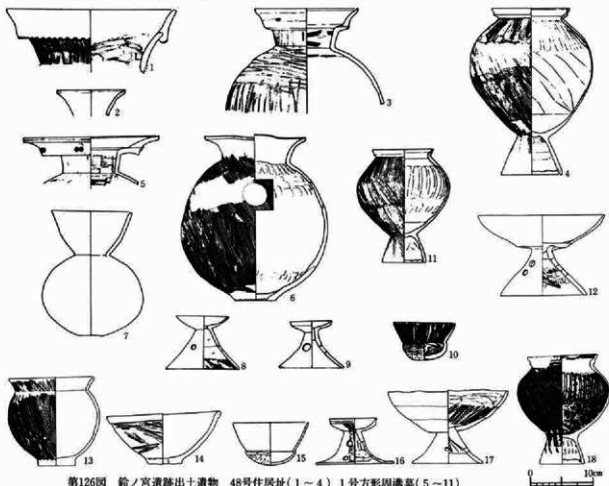
上滝遺跡は、元鳥名將軍塚古墳の東約100mの地点である。この遺構は遺物包含層と住居址、溝遺構とであった。溝遺構は鬼高Ⅰ式土器群を多量に入れている。包含層及び住居址の一部は石田川式土器を含めて、その多少前後の時期に属する土器が混在している。関越自動車道用地内の遺跡である。(註10)

### (6) 元鳥名將軍塚古墳(第124図)

元鳥名將軍塚古墳は、昭和54年に周濠部を含めた小規模園場整備事業の折りに、周濠と墳丘の一部について発掘調査を実施した。(註11)前方後方墳の墳形の確認とともに、不規則な周溝を確認し、周溝外に溝や土壘等古墳に付属すると思われる遺構も検出している。本稿の資料は、周溝に設置したトレンチ出土遺物に限り提示した。なお、主体部はすでに掘られ、遺物は東京国立博物館に、遺骨は岩鼻町観音寺に納められたというが今は紛失して無い。

### (7) 元鳥名遺跡(第125図)

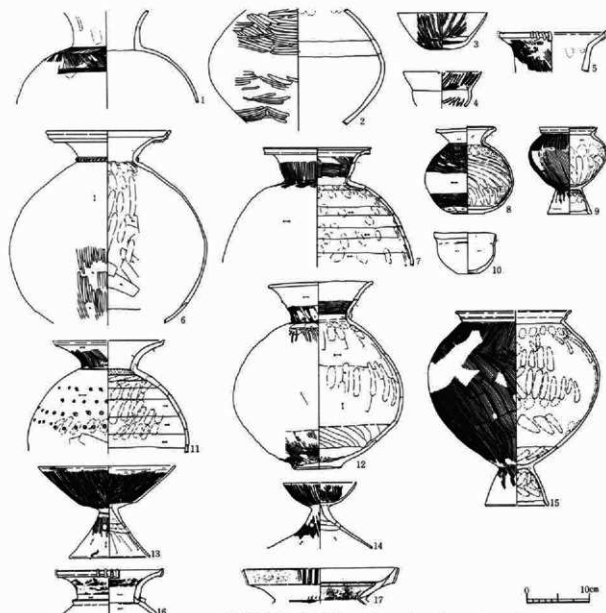
井野川左岸、元鳥名將軍塚古墳北西約1.2km付近に位置する。4～5m程の段丘崖直上の遺跡である。対岸は縄文時代、弥生時代後期、古墳時代の各遺構の存在する万相寺遺跡である。元鳥名土地改良事業関連の発



第126図 鈴ノ宮遺跡出土遺物

48号住居址(1～4) 1号方形周溝墓(5～11)  
4号方形周溝墓(12) 7号方形周溝墓(13～18)

V. まとめ

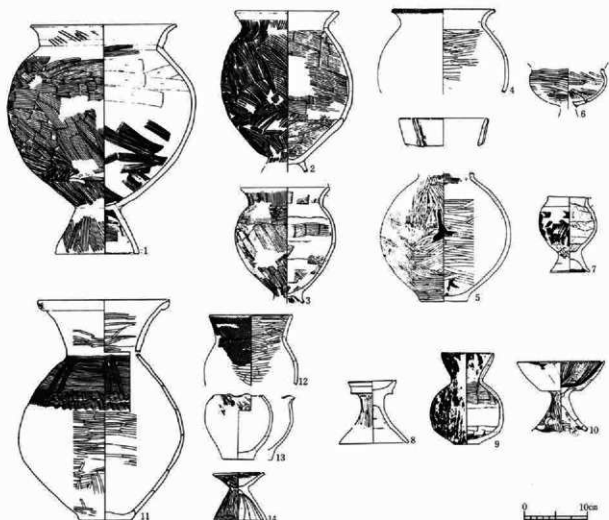


第127図 矢中村東遺跡出土遺物S Z02(1~5)S Z01(6~10)S Z03(11~15)  
矢中下村北遺跡出土遺物(16-17)

掘調査資料である。(註12) 道路Ⅰ区調査区における掘り込み状遺構内出土の遺物であるが、掘り込み状況を考えて大形の前方後方状周溝墓ではないかと考えられる。大和盆地系壺型土器と受け口口縁と口唇部を肥厚する壺型土器が出土している。鈴ノ宮遺跡の方形周溝墓群に続くのかも知れない。

(8) 鈴ノ宮遺跡(第126図)

井野川左岸で元鳥名遺跡の西約0.4kmにある。5m程の段丘崖上に展開する。この遺跡は弥生時代後期樽式住居址を始め、平安時代までの複合集落である。また、これ等住居址と重複しながら多数の方形周溝墓群が発見された。その内には、円形周溝墓、古墳址及び前方後方状周溝墓(1基)が含まれている。重要な遺跡であるが本報告書が未刊であるので、概報に提示された遺物で検討資料とする。(註13) 48号住居址(第126図)はS字壺と大和盆地系壺型土器(第126図-2、3)と折り返し系壺型土器の口縁よりなる。1号方形周溝墓(第126図-5~11)は、埴、器台型土器、複合口縁壺の組み合わせに代表される。壺型土器の装飾性と器台



第128図 上大類北宅地遺跡 3 X 1

型土器の複合口縁化しない状況と瓢型壺（第126図-7）は時期決定上注意を必要とする。4号方形周溝墓は、高环型土器一例である。但し、周溝中にC軽石の混入が指摘されている点に注意したい。7号方形周溝墓（第126図-13-18）は、前方後方周溝墓である。埴、器台型土器の儀器化が進んだ状況を示す資料であり、各器種の口縁部はS字口縁か複合口縁か判別不可能な型（第126図-16）が定着した時期にも当てられる。

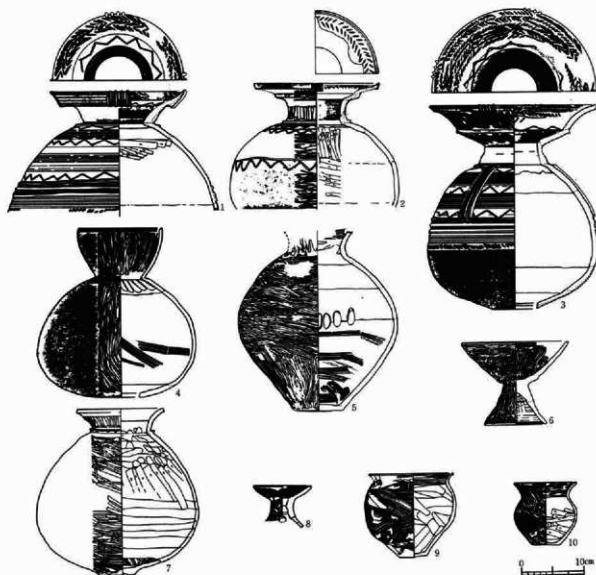
#### (9) 矢島竹ノ内遺跡（註14）

矢島竹ノ内遺跡は、鈴ノ宮遺跡より段丘崖に沿って約250mさか昇った地点にある。都市計画道路の16m幅内に方形周溝墓群の一部3基が検出できた。方形周溝墓は、井野川段丘崖直上の自然堤防状微高地（幅20～30m）上に弥生時代中期住居址等の遺構と重複して存在する。いずれも石田川式土器に分類できるものである。

#### (10) 矢中遺跡群（第127図）

矢中遺跡群は、井野川沖積地右岸に存在する。河岸段丘は2m前後と小規模なものになっていて、この付近から川の侵食が目立つ地形となる。沖積地を横断すると約1.5kmに元島名袴塚古墳がある。この段丘上は、正始元年銘銅鏡を出土した柴崎賀沢古墳を始めとする小形古墳群となっている。検出遺構は方形周溝墓のみで約13基が確認できている。この内土地改良事業によって調査したものが9基であった。（註15）市立矢中中学校東側（註16）で発見された方形周溝墓の資料を提示した。その後確認できた方形周溝墓の遺物は、

Ⅵ. ま と め



第129図 貝沢柳町遺跡出土遺物 1号方形周溝墓(1~4)3号方形周溝墓(5)2号方形周溝墓(6~8)

ノ宮7号方形周溝墓、下郷SX04相当の遺物を伴出している。本稿資料のSX03あたりの時期の方形周溝墓の数が多くようである。遺物はS字甕を中心としながら、伊勢湾岸の弥生時代末から古墳時代初期の土器群の影響下にあると認められる(第127図-3、4、6、7)遺物群と、大和盆地系というよりは、古墳時代初期に位置する土器(第127図-2、8、10、11)が認められる。

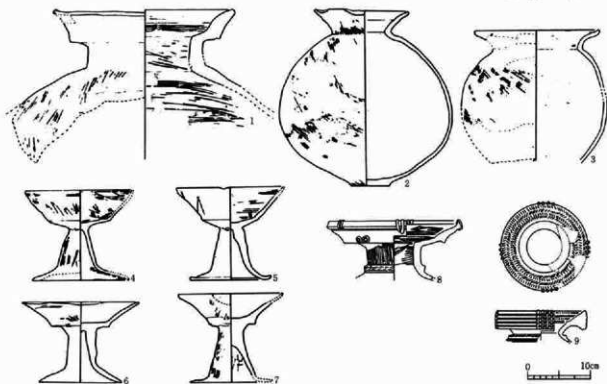
(1) 上大類北宅地遺跡(第128図)

当遺跡は、井野川右岸、即ち井野川沖積地の北端の堤防上微高地に位置する。井野川左岸段丘は、この付近で消えてしまう。この微高地は南東の宿大類遺跡、下大類万相寺遺跡へと続いている。北は貝沢遺跡群へ続いて行き、当遺跡は地形からの区分をすれば、貝沢遺跡群の南限と考えても良いであろう。貝沢遺跡群は井野川右岸の自然堤防状微高地に位置するもので、5世紀代の聖天山古墳、前方後円墳五霊神社等の小形古墳群、貝沢柳町遺跡(方形周溝墓と埴輪棺墓)、上大類薬師遺跡(註17)及び当遺跡における弥生時代末頃より奈良・平安時代に及ぶ集落址が点在する。

当遺跡は市営住宅建築に際し偶然に発見され調査した遺跡である。古墳時代から平安時代の集落(これは



## 2. 遺物



第130図 新保田中遺跡出土遺物 右岸旧河道(1~7), 左岸小型水田址下資料(8・9)

上大類薬師遺跡に続く)とその南の方形周溝墓と弥生時代後期住居址に別れる。本稿では弥生末から古墳時代初期に係る方形周溝墓3X01を使用した。(註18)

### 03 貝沢柳町遺跡(第129図)

上大類北宅地遺跡の北約380mで聖天山古墳に近接する。貝沢遺跡群のはほぼ中央に位置すると言える。この付近の自然堤防状微高地は東西50~60mで、一番高い西寄りの土地に当遺跡は営まれている。16m都市計画道路に4基の方形周溝墓と2本の円筒埴輪棺墓が検出された。(註19)各方形周溝墓から発見された遺物は伊勢湾岸における弥生時代末の土器様相に酷似する。特に1号方形周溝墓の壺型土器(第129図-1)は、施文及び器形が欠山期における大和盆地の複合口縁壺型土器との混合、中間土器としての形状を良く示す資料といえる。また、瓢型壺(第129図-2)高坏(第129図-3)も指標となると思える。また頸部に凸帯を巡らし櫛状工具による刺突をつける単口縁(口縁部端に平面をつける)壺(第129図-8)もその代表器種となる。また、これ等の壺型土器のフォルムや器台型の形状等は未だ弥生時代の状況を良く示している。但し、注意しなければならないのは、台付寛が共存していない点と、1号方形周溝墓の壺型土器(第129図-4)、3号方形周溝墓の小型壺型土器(第129図-5)は、当地方の樽式土器の要素に共通する部分が認められることであろう。

### 03 宿大類村西遺跡(註20)

井野川右岸の沖積地内自然堤防上微高地に位置する。この付近から右岸の低地段丘が発達する様になる。右岸万相寺遺跡、上大類北宅地遺跡、左岸矢島竹ノ内遺跡、鈴ノ宮遺跡とはほぼ2kmの等距離内にある。土地改良事業によって調査できた遺跡であるが、石田川式期に属する方形周溝墓が2基及び樽式土器伴出住居址、古墳時代住居址等が存在する。

### 04 新保及び新保田中遺跡(第130図)

榛名山体より流出する染谷川が、山麓及び扇状地帯を流れ下り、平坦地へ流れ出て氾濫地帯を形成し始め

## VI. ま と め

る地点が、日高、新保、新保田中町付近である。

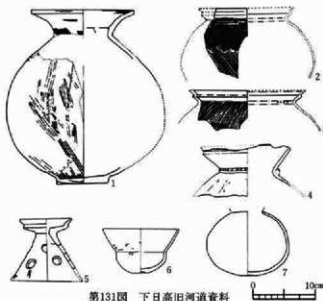
旧河道や開析谷及び小規模な低い沖積地と自然堤防が複雑に入り組んでおり、低地を水田に、微高地を居住域、墓域にしている。この地域が生活の場を利用され始めたのは中期末(註21)頃よりで後期になると方形周溝墓群、水田等が出現する。引き続いて古墳時代初期の村落へ続いてゆくが、6世紀初頭の榛名山二ッ岳爆発によるF・Aの厚い降下と続発する洪水によるF・A泥流はこの扇状地先端の氾濫低地をほとんど埋め尽くしてしまうのである。遺跡は開越自動車道(註22)、染谷川改修工事(註23)、土地改良事業(註24)で競合しており、土地改良以外は報告書が刊行されていないので不明な点も多い。方形周溝墓は、土地改良新保田中遺跡の資料(註25)が示すように樽式土器の時期である。また、F・A被覆小型水田土壌となっているC軽石混合又はC軽石堆積上の黒色土に包含される遺物群は染谷川右岸の旧河道出土遺物(第130図-1~7)及び左岸小型水田下包含層出土資料(第130図-8・9)で概略示されてであろう。旧河道出土遺物は、S字裏の多数の破片と高坏型土器と器形復元の無理な壘型土器群(西岸)と受け口状口縁大型壘破片(東岸)は、F・A降下にも近い、和泉期にも入る遺物であろう。が、左岸小型水田址下では、伊勢湾岸の弥生時代末から古墳時代初期(欠山期~元屋敷期)及び畿内第V様式後半期から庄内式時期に比定できる円形貼付文をつけた複合口縁壘及び手焙形土器破片等が相当数出土している。

### 09 下日高旧河道資料(第131図)

日高弥生水田、集落の東南約0.2kmに位置する。染谷の旧河道と推定され、C軽石堆積層上に薄い黒色土層を挟んで土器、木材等多数を検出。F・A降下堆積層は厚い黒色土帯を挟んで上部に堆積する。日高遺跡水田址と同様。小型丸底壘、埴、B種器台のセットがある。壘は土師の単口縁系(第131図-1)に混じり、伊勢湾系固焼きの壘(第131図-4)を含んでいる。(註26)

以上の、15事例の出土遺物を観察すれば、いわゆる大和盆地にその母胎を見いだせる土器群(大和盆地系土器群)と、東海西部から伊勢にかけての伊勢湾岸城土器群(伊勢湾岸土器群)及び東海東部、関東南部域の特色を示す土器群に大別できる。が、各々の地区の土器は多少の差はあっても互いに混在する傾向があり、それが石田川式土器で示せる斉一性の高い土器セットに近付けばその混合度が高い傾向にある。その中でS字裏と単口縁台付壘は相隣する文化圏に共通するセットとして存在してしまっている器種である。

これらの条件を整理し土器様相を概念的に整理したのが表40である。



第131図 下日高旧河道資料

大和盆地系土器群では、壘型土器A種(二重口縁壘型土器)壘型土器B種(二重口縁の上段を取り除いた型で、口唇部をつまみ上げ、立ち上がり面を造る。外面に凹みが認められる)、小型丸底壘型土器、埴と二重口縁台型土器に代表させ、やや後出的要素である特種高坏型土器を含めた。伊勢湾岸系土器としてはS字型口縁台付壘A種(肩部に横線のないもの)とS字型口縁台付壘B種(肩部に横線を付けるもの)、壘A(パレス壘型を示す。A種土器は口縁部の状況から更に2種に細分できる。第一は口縁を緩く外反させ端部に粘土帯を付け外平坦面に沈線をつけ、棒状浮文を

## 2. 遺物

3本程度張り付け、口縁内側に櫛刺突による羽状文また頸部下位に凸帯を付け、上面に櫛による刺突文を付ける。第二は大和盆地系二重口縁型壺と伊勢湾パレスとの混合中間型である)、壺型土器B種(壺AのIのパレス型口縁を基本としているが、口縁部をそのまままみ上げて小さい平面を作り、棒状浮文を貼付する。全体的に固焼きで無文傾向にあり小型器が多い様である。後出的壺型土器か否かは検討の余地がある)。そして甗型土器の組み合わせを代表させておきたい。東海東部(この分類は、考古学ジャーナル「入門講座弥生土器」また、1986年第3回東海埋蔵文化財研究会「欠山式土器とその前後」シンポジウムによる用語を利用)と関東南部は弥生後期土器様相の類似する点もあり広い意味での同一文化圏とした。台付甗は、単口縁台付甗(長胴、球胴)で東海西部の伊勢湾でも認められ、S字甗とも共存している。大和盆地系、樽系土器と対比できる器種である。壺型A種は、受け口状口縁壺をもって示す。幅広い直立する口縁を特色とする。南関東での弥生町時期以降に平行関係にある土器群。壺型B種は、折り返し口縁壺を代表的に取り上げた。壺A種には、口唇部端を内側に肥厚する特殊な器種(註27)も含めている(表40▲記号)。

この土器組み合わせの表の傾向を前述したように「石田川式土器文化の完成」という最終段階に至る経過を理解する資料とするには幾つかの視点とその特色を挙げねばならない。

まず、第一に挙げるのは、S字甗の存在状況である。出土遺物の各数が大和盆地系遺物という現状にあって、それに匹敵する量が大和盆地系土器群に混ざって出土するのがS字甗である。S字甗は、伊勢湾岸の中期末高麗式土器の派生発展した器種であり、本来的に伊勢湾岸の土器とセットとすべきであるが、現実の土器混入傾向にあっては、S字台付甗のみが非常に多量に出土するのである。それは、尾崎が設定した石田川式セットがS字甗と大和盆地系土器の混合体であるように、(註28)群馬県西部におけるS字甗は、伊勢湾岸土器群としてセットで伝播したのではなく、「大和盆地系土器+S字甗」というセット関係において伝播したものと理解するのが妥当と考える。S字甗と大和盆地系土器の混在については、すでに昭和49年の考古学雑誌(第60巻第2号)等において安達、木下の整理発表しているところであり、接触上限は庄内式土器の古段階と欠山式土器の新段階を結ぶ資料として提示されている。

第二に挙げるのは伊勢湾岸系土器群の動向である。まずS字甗は、大和盆地系土器群に吸収されていて論外にして置かねばなるまい。次ぎは壺型土器B種の混在度が高いということと、その一部において伊勢湾岸系土器群を代表する壺型土器A種が混入している特色である。壺型土器A種とB種を見比べると、壺型B種は小型器種が多いこと、固焼き仕上げ、球形胴、全体的な無文化現象、口唇部手法がS字口縁なのか二重口縁なのかパレス型口縁の退化型なのか不明確、等の特徴が見られ器種自体の母胎は伊勢湾岸にあったとしても大和盆地系の強い影響下に成立しているという後出的要素がある土器である。次ぎに、壺型A種は伊勢湾岸のパレス型壺の特色をよく残している。そしてA種は伊勢湾本来型との中間型土器の混在が認められる時期があることも特徴である。但し、この系統の内に含まれた貝沢御町出土遺物は第129図で示すようにその壺型土器は、伊勢湾岸の特色を良く出しているし、高坏型土器、甗型土器等の組み合わせは大和盆地の強い影響力は認め難い。一口に伊勢湾系の土器と言うが、その組み合わせに微妙な差異が認められることに注意せねばならない。

第三に指摘するのは、関東南部、東海東部土器に類似する土器群である。群馬県においては、東部の太田市、邑楽郡域に出土例が認められるが伊勢崎市以西においては激減してしまっている。但し、いわゆる関東南部の土器文化は、近畿からの土器文化伝播の中にあっても独自性を守りながら前野町、五領式という土器文化を造りあげ、石田川式の様に近畿地方の土器様相に全面的に属さない傾向があろう。また弥生町期土器と北武蔵の吉ヶ谷、岩鼻式土器群との関係、また赤井戸式土器の成立等、関東地方における弥生時代後期の動向

## VI. ま と め

も注意しなければならない。

この状況を類別化し、該当する遺跡を挙げると

I類……大和盆地系土器+S字甕を基本として、少量の折り返し口緑壺を含む。

下郷遺跡(古墳)、八幡原遺跡、將軍塚古墳トレンチ、元島名遺跡、鈴ノ宮遺跡、下芥田遺跡1号住居址

I類亜種……大和盆地系土器+S字甕+伊勢湾系壺B種の組み合わせを基本として、少量の折り返し口緑壺を含む。

下郷遺跡(方形周溝墓例)、矢中遺跡(方形周溝墓)、下日高河遺資料

II類……大和盆地系土器+S字甕+伊勢湾系土器を基本として、少量の折り返し口緑壺を含む。

滝川C遺跡、上滝遺跡、矢中下村北遺跡、新保田中遺跡及び新保遺跡

III類……伊勢湾系土器セット、一部土器に岩鼻系また樽系土器と共通する要素が認められる。

貝沢柳町遺跡

IV類……東海東部また関東南部系土器を基本として、一部に岩鼻式土器、樽式土器を含む。

上大類北宅地遺跡、下芥田遺跡(I群)2号住居址、8号住居址、20号土壇

この遺物群の分類は下芥田遺跡が当地方の弥生時代後期の変動期に突入する時期に当たる重要遺跡であることを示している。そして、近畿系土器文化の急激な進出と発展の谷間で、20号土壇、方形周溝墓を造り、石田川式土師の成立期には1号住居址が存在するように細々と伝統を守り、継続してゆく意味は何であろうか。

### 2. 弥生時代末から古墳時代への過渡期における下芥田遺跡の位置付け

下芥田遺跡における土器の状況は前節で示したように、弥生時代の伝統を強く残しているI群と、古墳時代初期の様相を示すII群に大別できた。が、根底には、折り返し口緑壺型土器と、単口緑壺口台付甕の組み合わせによる土器文化は変化していないという独自性を保持しつつ変化している特質を持っている。大和盆地系土器群が優勢を誇るこの変遷期においてこの遺跡が単独に歩んでいる状況を理解するには、この時期の社会変化のある部分を投影する土器様相の変化を理解して対比する必要がある。

前節で示したように井野川下流域の、土器様相はI類、I類亜種、II類、III類、IV類の5種に大別できる。この分類の内、I類、I類亜種は、次代の古墳時代へ直接接続して行く、というよりは、古墳時代社会へ突入してしまった時代の土器群にはかならない。遺跡数と遺跡の内容を考えてもこの地方が大和盆地系土器が代表する文化が極めて強い力で広範囲に定着していることを示すものであって、墓制に限定して各遺跡の状況を検討しても、元島名將軍塚古墳や、下郷天神山古墳及び柴崎蟹沢古墳が示すような大小の首長墓を頂点とする方形周溝墓群を成立させるほどに氏族内が充実していることが認められ、その発展の基盤はその土器が示す大和地方の強大な政治力を推定せざるを得ない。F・A降下までにはまだ幾らかの時間的な空白期が存在する時期である。I類やI類亜種の土器文化に対してII群、III群が示す伊勢湾系土器の混在は東国開発に係わる大和盆地系文化が単独の力ではその事業の遂行が不可能であり、伊勢湾系文化との結合を持って初めて成立したとの経緯を反映していると思われることが可能であろう。即ち東国の開発に際して伊勢湾系地域が基地として重要な位置を占めていたことを示すものである。但し、II類に該当する遺跡がいずれも包含層という、土器セットを分析する上での欠点を持っていることを忘れてはならない。が、次に示すIII類の内容のように大和盆地系土器文化と伊勢湾系土器の融合した中間土器が存在せず両土器文化がそのままの形で一団となっている状況は、大和盆地系土器群の絶対的優位性は存在するとしても、まだ伊勢湾系土器文

化を吸収する形でないと東国の経営が成立しないことを物語る。

一方、貝沢柳町遺跡における遺物セット（Ⅲ群）では、その文化母胎が伊勢湾岸土器文化にあることは明らかである。貝沢柳町の土器は、壺A種において、純粋なパレス型壺型土器（第129図-1）と大和盆地系壺型にパレスの施文を施す中間型土器（第129図-3）が認められて伊勢湾岸系土器文化に大和盆地系文化の影響が及んで伊勢湾のそれと同化する時期、壺型土器に見るならば欠山式後半頃から元屋敷式の古段階に比定することが可能であろう。（註29）また、当遺跡がC軽石降下時に極めて近い状況を示している点留意して置かねばならないし、一部に樽式土器文化の影を見いだせる土器（第129図-5・10）に注意したい。

この5種の土器群の様相は、浅間山が爆発してC軽石が降下する時期よりやや古い時期に、伊勢湾岸系土器造りの極めて強い影響下にある人々によって井野川中流に開発が開始され、古墳造りが本格化する時期までの井野川流域の開発史を投影していると言える。

その概念的な変遷を示すとすれば、

#### ◇ 最終段階

大和盆地系土器群の圧倒的な増加と遺跡の広がり、それに伴って初期的古墳が各地に営まれる。この時期にS字甕が必ず伴出するが、これは大和盆地へ移入したS字甕が、大和盆地土器群を構成する一器種として同化されてしまった段階であると理解するのが妥当であろう。この段階では大和盆地政権の直接的指導下に古墳造りの様な具体的行為を通して井野川流域の社会が再編成され、大和盆地政権の支配下へ各々が組み込まれて行く時期であろう。

#### ◇ 前段階

圧倒的な大和盆地系土器群を核としながらも、伊勢湾岸系土器の混在が認められる時期、伊勢湾岸系と言っても壺B種が主であって、装飾性の低い壺型土器と見え、大和盆地系複合口縁壺に比べて精神的価値感は低いものであろう。大和盆地系政権による東国経営において、伊勢湾岸系地方が果たしてきた役割の一部が未だ残っている段階を示す。即ち大和盆地系政権が東国経営を行うに当たり、その門戸である伊勢湾岸地域の人々の力を借り、東国進出の基地とする価値が減少してきたと考えられる。

#### ◇ 前々段階

大和盆地系土器群と伊勢湾岸系土器群の混在時期であるが、土器文化の混在ではなく、大和盆地系土器群に伊勢湾岸系土器群が共伴する形をとっており、東国経営に当たり、伊勢湾岸系文化を取り組んで、その地を基地化しての結果と考える。弥生時代末の関東地方は、各文化圏が安定した相互関係を保っていて、大規模な移動の認められない社会状況である中に、大和盆地系勢力が進出するには、伊勢湾岸文化の力を利用しなければならない状況にあったと解せよう。貝沢柳町遺跡の例はその先触れとして理解しておきたい。

#### ◇ 初期段階

樽式土器文化圏に接する土器文化の進出時期。下斉田遺跡の8号住居址、2号住居址が示す土器様相である。が、弥生前期の土器その物でも無く、静岡県地方の土器その物でも無い。井野川流域に至る間に容容する時期と場所が存在したことを想定しなければならない。

貝沢柳町遺跡に代表される新顔の開墾者が井野川流域に進出する要因は、関東地方の弥生時代後期後半頃の内部的要因と、近畿地方の文化が地方へ進出してゆく要因の二面を考えねばならない。その内後者である要因は近畿地方、瀬戸内内部地方における統一国家成立という政治的活動による地方進出でもあった。その進出は群馬県西部への進出を含めて、東京湾東岸、常総台地へも同様な進出を試みているのである。（註30）

## VI. ま と め

では、関東地方において近畿地方の土器文化を受け入れざるを得ない地方的要因は何であろうか。それは当然、下斉田遺跡を含めた、弥生後期の各文化圏の動向と性格を考えねばならない。

関東南部地域の久ヶ原、弥生中期の影響を、利根川、赤城南麓地域がどの様に受けているかの概観をしておかねばならない。

### 1. 利根川中流域

利根川左岸の沖積平野部における弥生後期後半期よりの土器様相の特色は、S字壺と大和盆地系土器群の強い進出が特色で、当地域と類似した状況を示し、古墳時代へと同様な歩調を示す。これに先行する状況は、境町西林遺跡例、新田町重殿遺跡4号住居址の様にS字壺と折り返し口縁、口唇部に刻みを持つ台付壺、複合口縁壺型土器等を組み合わせて持つ混合形の状況を示す時期が設定できる。またこれに先行する状況としては、S字壺を含まず、関東南部系様相を示す大泉町御正作遺跡23号住居址、関東南部系土器と伊勢湾岸系壺B種を組み合わせる太田市運動公園遺跡6号住居址の例の様な、各遺跡に独自性を持つ時期が設定可能であろう。

### 2. 赤城山麓東部域

新里村天笠南遺跡、笠懸村神社裏遺跡例が示すように赤井戸式土器圏を形成する。赤城山麓扇状地上に展開する赤井戸式土器様相は、北武蔵を中心とした吉ヶ谷式土器の強い影響下に成立する土器であるが、土器の形状と論文の特色を分類すると、吉ヶ谷式系土器群を代表する縄文の有段施文を特色とする共通点は存在するものの、器種、器形を分類すれば、久ヶ原系の形状を示すもの、櫛式系、近畿系土器の形状を示すものが混在する。

北武蔵に展開する弥生時代後期の岩鼻式土器は長野県の箱清水式土器の南進の結果としての土器様相とする考え(註31)もあるように、この観点から、赤井戸式土器をみれば、久ヶ原式系文化を母胎とした吉ヶ谷式文化を基として、後出的な近畿系土器の混入体と表現できるがS字壺を含まないことには注意が必要であろう。また、西大室上綱引遺跡の方形周溝墓群の一部にC軽石が認められるので時期設定の基準になろう。

### 3. 荒砥川流域

赤井戸式土器圏の西に接して荒砥川流域は、一部赤井戸式の影響を受けながらも、やや独自の展開をしている。S字壺を含む前橋市鶴谷遺跡においては、赤井戸式土器は他遺跡と共通しながらも、複合口縁、受け口状口縁、折り返し口縁壺型土器が混在し、上大類北宅地に近い状況を示している。S字壺を含まない場合は、単口縁台付壺があって、赤井戸系土器(櫛式土器を含む)を組み合わせて持つ様で、荒砥上ノ坊遺跡2区89号住居址例のように伊勢湾系壺A種も含む。

下斉田遺跡、上大類北宅地、貝沢町遺跡に始まり、C軽石降下期を経て元鳥名將軍塚古墳、柴崎蟹沢古墳築造時期に至る時代と並行する時期に該当する状況を概観したが、赤井戸式土器文化圏を除き、S字壺の進出を契機にその様相に差があることが指摘できる。S字壺の進出時期以降は、器種セット型は各種混合タイプ時期(鶴谷遺跡例)を経て齊一性の強い大和盆地系土器群に統一されてしまう。

S字壺進出以前は折り返し口縁+台付壺(口唇部に刺突タイプ)御正作遺跡23号住居址、重殿遺跡4号住居址と、櫛式土器+伊勢湾岸系壺型土器+台付壺(口唇部無施文タイプ)荒砥上ノ坊2区89号住居址、太田運動公園6号住居址の2系列に分類可能かもしれない。遺跡例が少なく、かつ広範囲である。体系的に把握することは避けねばならないが、その動向は把握可能であろう。

一方、赤井戸式土器群域は、赤城山麓の小地域であるが、その土器様相からみれば、久ヶ原式土器文化が吉ヶ谷式土器文化に変化定着し、赤城南麓へ移動し一形式を成立させていると推定できる。

弥生中期後半から伝統的な文化圏を形成しない群馬県東部域における弥生後期末の土器様相は、櫛式土器、久ヶ原式、弥生町式土器、また岩鼻式土器文化の影響を直接的に受けない時間と地域を内在させて進行していき、元屋敷式に属させるべきパレス系土器が関東南部に進出する時期に至り、新たな斉一の変化が認められるのである。この地方の土器様相の在り方が示すことは、弥生後期における関東南部域の文化圏の緩衝地帯として不斉一で弱小の独自性を継続し続けることを示している。

この変化の時期は、井野川流域の展開に対比すれば、開発第2段階になり、下斉田遺跡20号土壇の成立期に概略は当てはめることができよう。S字甕を含んだ土器群が進出する時期に極めて近い時期に当たり、C軽石降下時期に接する時期を設定できるのである。

そこで、再び下斉田遺跡の土器様相の変遷を、櫛式土器文化圏周辺部における、東海、関東南部系土器群遺跡としての様に位置付けたら良いかということになろう。

まず、下斉田遺跡土器群が、櫛式土器と並行期にあたる弥生町式土器様相そのものかを問題としなければならぬ。8号住居址、2号住居址の変型土器、壺型土器は前述した通り、弥生町式土器を含まない。静岡県地方の後期中頃の登呂式～目黒身式時期の特色を残している、関東南部の土器様相その物ではない。独自性の強い弥生町、岩鼻式土器群の先端部の土器群として判定はできない。また、箱清水系の櫛式土器でもない。

視点を変えて、箱清水土器文化圏と近畿系文化圏との交渉のうちに、この下斉田遺跡土器群を置くことが可能ではなかろうか。即ち、長野県における箱清水式土器文化は、久ヶ原、弥生町期に南下し、その土器文化を各地に展開してゆく反面、南信地域における土器様相は、天竜川流域の土器様相が示すように東海地方やそれに続く近畿地方の文化の窓口という性格を有するからであろうと判断できるからである。このことは櫛式土器文化圏の周辺部においては、それに接する文化圏とのバランスの上に変動、変容せざるを得ない地域性を持つようである。井野川流域はまさに櫛式土器文化圏の周辺部に当たるのである。そして、櫛式文化圏にあって、強い影響を受けるのは、関東南部の土器文化ではなく、東海地方及び近畿地方の土器文化である。従って、櫛式文化圏の周辺部に東海系土器群が関東南部の土器を介在させずに展開するとしても何の不自然さは無いと考えるのである。

この様に仮説立てを行えば、下斉田遺跡を始め周辺部の土器様相の変遷の在り方に解決の糸口が得られるのである。

1. 井野川域、烏川流域に、櫛式土器文化圏における、南信地域土器の混入する遺跡が出現する。(註32)
2. 南信に接する東海東部域の土器文化の影響のある土器文化が櫛式土器文化圏の周辺部に出現する。下斉田遺跡
3. 伊勢湾系土器と大和盆地系土器の組み合わせ形態が櫛式土器文化圏の周辺部に出現する。貝沢柳町遺跡、上大類北宅地遺跡、新保・新保田中遺跡等
4. S字甕と大和盆地系土器群の進出とともに土器様相の斉一化が始まる。石田川式土器の成立ということになるであろう。

以上の様に、下斉田遺跡の一例の土器群の分析という点において多少の問題は残るものの、弥生後期の土器様相の変遷を見渡して見るならば、井野川流域の開発と、古墳時代の発展を支える第1段階としての重要な位置づけがなされるのがこの下斉田遺跡ということになろう。

VI. ま と め

表38 壺型土器の分類とその特徴  
下青田遺物1群

器種	特徴	形 状	口縁部の特徴	体部の特徴	土 器 分 類 の 分 析 視 点		
折 り 返 し 口 縁	受け口状口縁	a 種	8住3、5、6	①垂直に立ち上がる受け口状であるが、内面は無段。	下部に最大径。肩はなで肩、下部を急にしぼる。	I. 折り返し口縁の分類 1. 受け口状口縁系—受け口状口縁は、弥生時代後期後半代に東海地方から関東南部に至るまでに普遍的に存在している。内側に段を有しない器種は、やや依存的、目黒身、尾ノ上式に共通する。施文しないのは伊勢湾岸の影響があまり強くないことを示すか。 2. 単純な折り返し口縁—この手法は、弥生後期の壺型土器及び甕型土器に普遍的に認められた手法である。	
		b 種	8住4	②粘土帯を幅広く貼付け受け口状口縁を覆す。	中位に最大径。肩が張り胴部直立さみ。		
	単純折り返し口縁	a 種	8住7、8、9	①緩く外反する口縁に粘土帯を折り返す。やや幅広く取り、歯の刺突の例もある。	下部に最大径。なで肩、下部は急にしぼる。		II. 胴の形態の分類 1. a 種の胴 緩く絞った頸部から緩く開いた胴と、その下腹を急に絞り込んだいわゆる甕型または無果実型の胴である。この形態は、弥生後期の壺型土器に共通する。 2. b 種の胴 肩が張って、口径に比して大きい胴径を有する。a 種胴を上下から圧縮した型で、ソロバン玉風にした型。この球形胴器種は、本来的に近畿地方の第V様式に認められ後期中畿以降に顕著に認められる(西ノ辻1-D)。また、長野県天竜川流域(聖光寺原、中島島)や弥生前期に一部認められる。 3. c 種の胴 壺式土器、岩鼻式土器に共通する。壺型と甕型との中間タイプ土器である。
		b 種	8住1、10、20、21 2住1	②外反する口縁部端に少量の粘土帯で折り返しをつける。	中位に最大径。やや肩が張りさみ。		
		c 種	8住2		長胴形、胴径が口径に比してさほど大きくない。		
	単口縁	b 種	8住11	口縁は小さく緩く外反。	丸みを持つ胴。内面は刷毛目、底部が大きい。		

表39 単口縁系壺型土器の分類とその特徴

器種	特徴	形 状	口縁部の特徴	体部の特徴	土 器 分 類 の 分 析 視 点	
I 群 単 文 口 縁 台 付 壺 型	無 文	a 種	8住12、13、14、15、16、22 2住3、8	低く外反 口径が小規模 刷毛目仕上げ	やや長胴、小型台、内外面に刷毛目を残す	I. 口縁部無施文群 1. 口縁部が低く小さく外反するタイプ 口縁径が胴径に比して小さい。口縁は立ち上がり気味で端部で外反する。胴外面は刷毛目を残すが、内面は平滑化が進む。口縁内面は、横刷毛目を残す。台は絞られていて小さい。 2. 「く」の字型に大きく外反するタイプ 口縁部径は、胴部径に等しくなる程に大型化する。大型、中型に区分できる。刷毛目を消す手法が大部分を占め、胴内面に板状削りの出現がある。胴は球形となり大型化する。台部も大型。 1と2のタイプは、セットとして共存する傾向にある。弥生前期には存在する。板材による調整は後出的特徴である。 II. 口縁部に刷毛目を施文する土器群 口縁部に刷毛目をつけるのは、広口で球形胴の器種に認められる。また、内面の板状削りによる仕上げ方法は後出的要素である。この器種は、「く」の字に外反する広口壺が主体となっている。関東南部資料は前野町期の遺物として確認できる。東海東部域では、浜松市榑野遺跡での穴山期遺物に含まれ退化したバラス型壺に属している。また、東三河穴山遺跡ではS字壺と共存するようになる。
		b 種	20土14 方周1、3	大きく外反 広口形壺 研磨、すり消し	球形胴、大型台、肩を張る、外面へつ、内面平滑化	
	口 唇	a 種	20土8	低く外反 口唇部に刺突 研磨、すり消し	やや長胴、 外面刷毛目 内面板状工具	
		b 種	20土9、10 11	大きく外反、広口 形壺、口唇部刺突 研磨、平滑	球形胴、大型台、 内面平滑	
II 群 S 字 壺 共 存	無 文	1 種	1住3、6	広口形壺、無施文、 すり消し	内面ケズリ 外面平滑	
		2 種	1住4、5	長胴型、平底中間 型	内面平滑	



## 2. 遺物

表40 井野川下流域における関連遺跡での土器組み合わせ状況

内容		大和盆地系土器群				伊勢湾岸系土器群				東海東部・関東南部土器群		その他				
		壺A	壺B	埴器台	特高环	S壺A	S壺B	壺A	壺B	瓢箪壺	白壺		壺A	壺B		
下郷遺跡	SZ22			○					○							
	SZ16													○		
	SZ26									○				○		
	SZ04			○		○										
	SZ01 SZ42(前方後方) SK39・46	○ ○ ○														F・A 特器台
八幡原遺跡	○	○	○	○	○						○			○		
滝川C遺跡包含層 縄貫遺跡 SX2001 同上 SI 0909	○		○		○	○		○	○				○▲		F・A	
上滝遺跡包含層 同上 3号住居址	○	○			○		○	○	○					○ ○		
将軍塚古墳周濠Tr	○		○	○	○	○				○					前方後方	
元島名遺跡(道路1)	○										○▲				前方後方	
鈴ノ宮遺跡	○	○			○						○				C軽石 前方後方	
4号方形周溝墓 1号方形周溝墓 7号方形周溝墓	○		○		○		○									
矢島竹ノ内遺跡			○													
矢中遺跡	方形周溝墓02 同上 01 同上 03 同上 下村北遺跡(包)		○	○	○	○			○							前方後方 前方後方
上大瀬北宅地 3 X 1			○							○	○				C軽石 岩鼻	
貝沢町	1号方形周溝墓 2号 同上 3号 同上							○	○						C軽石 C軽石 C軽石	
宿大瀬村西																
下日高田河道			○		○	○		○							C軽石	
新保田中河道					○	○					○				C軽石	
新保遺跡包含層		○		○	○	○	○			○		○			C軽石	

## VI. ま と め

- (註1) 弥生時代末から古墳時代への過渡期間は、尾崎吉左衛門が樺の瓶、石田川の台形壺と対比し田利根川流域をその境界とした説を踏襲する例が多い。ニューサイエンス社刊弥生土器入門の「北国東編」においても同様である。また、昭和58年再録の折井上・杜沼は、西大塚遺跡群、富田遺跡群出土土器をもって「弥生時代から古墳時代へと移行する時期の土器の相相、地域的在り方を分析検討する事案にきている」とするが、赤井戸の発出の要素をみての判断であって妥当ではない。
- (註2) 「関東における古墳出現期の諸問題」 1981 日本考古学会  
「三—四世紀の東国」 1983 八王子郷土資料館  
「古墳出現期の地域性」 1983 第5回三好シンポジウム
- (註3) 頸部が緩く、胴最大径を中位程に置く、久ヶ原期から弥生中期への器種は中期の形状を残す。頸部が鋭られるが肩が張らず、胴下位に最大径を置く弥生中期を代表する。
- (註4) 副産物として、①愛知県春日井郡清洲町、朝日遺跡、名古屋塚2号墳、SZ02溝産楽遺物S字壺を含む。②静岡県浜松市 橋野遺跡 溝出土広口台形壺（口唇部）内面調整手法に認められる。欠山期
- (註5) 駒形大塚古墳 栃木県那須郡小川町所在 前方後方墳 墳頂より多量の古式土師出土 三木文雄他 「駒形大塚駒形大塚古墳出土の土師器」 大塚考古10 1972
- (註6) 特にS字壺を含む土器群が大和盆地土器群に類似する状況を前提にすれば、受け口縁口縁を持つ丸型小型壺のあり方についても、これを山脈系と単純に解するよりは、古式土師器の多様性の一現像として理解する必要があるであろう。
- (註7) 鬼形芳夫 田島桂男 「八幡原遺跡」 高崎市教育委員会 1974
- (註8) 田口恵子 金子智一 「綿貫遺跡」 高崎市教育委員会 1985
- (註9) 東海地方では(註4)の橋野遺跡跡土層遺物でB類S字壺を混入している。畿内では瀬川遺跡地区土層4(5F8W)下層資料に認められ、口縁部S字形態の退化した器種(赤塚分口期、安達分口期)と共に伴する。
- (註10) 群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 「上滝、八幡原A・B、元島名」 1981
- (註11) 田口一郎他 「元島名葎草塚古墳」 高崎市教育委員会 1981
- (註12) 五十嵐至 白石静 「元島名遺跡」 高崎市教育委員会 1979
- (註13) 飯塚志子 五十嵐至 田口一郎 「鈴ノ宮遺跡」 高崎市教育委員会 1978
- (註14) 都市計画道路西八幡宮ヶ島工事に係る事前調査 1986
- (註15) 高橋 淳 結城千尋 「矢中遺跡群Ⅱ」 高崎市教育委員会 1986  
白石静他 「矢中遺跡群Ⅰ矢中村東遺跡」 高崎市教育委員会 1984
- (註16) 白石静他 「矢中村東遺跡」 高崎市教育委員会 1984
- (註17) 久保泰博 藤原幹夫 「上大塚美降遺跡」 高崎市教育委員会 1986
- (註18) 渡辺典幸 久保泰博 「上大塚北宅地遺跡」 高崎市教育委員会 1983
- (註19) 久保泰博 藤原幹夫 「貝沢神町遺跡」 高崎市教育委員会 1986
- (註20) 神戸幸雄 福田啓一 「前大塚遺跡群 村西、村北遺跡」 高崎市教育委員会 1987
- (註21) 関越自動車道内 新保遺跡 末報告
- (註22) 群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 「新保遺跡」 1977—1980 「新保遺跡」① 弥生、古墳時代大塚編 1985
- (註23) 集谷川河川改修に伴わる発掘調査 高崎市教育委員会 昭和58年 群馬県埋蔵文化財調査事業団 昭和60—62年
- (註24) 横倉興一他 日高土地改良事業関係 「日高遺跡Ⅱ」 高崎市教育委員会 1982  
中村 茂 藤原幹夫 西高土地改良事業関係 「西高遺跡群Ⅱ」 高崎市教育委員会 1987
- (註25) 横倉興一他 「日高遺跡Ⅱ」 高崎市教育委員会 1982
- (註26) 横倉興一他 「日高遺跡Ⅱ」 F区市立新高小学校東側 高崎市教育委員会 1981
- (註27) 直雄土器は、東海地方及び関東地方において散見できる。出土遺物の時期判定の指標になる土器である。
- (註28) S字壺は伊勢湾地方における欠山期に内蔵する手法が発展し完成し、元屋敷式土器群の壺型土器として定着するものである。元屋敷期は、大和盆地においてはA種の出土例がない。このS字壺の動向と、群馬県西部域におけるS字壺と他の器種の組み合わせを具体的にみると小型丸底壺、器台、B種S字壺と複合口縁大型壺(裝飾性の高い儀飾的)という器種の共通性を持つもの、元屋敷期の土器群とは相相が異なり、大和盆地内の瀬川遺跡にみえる土器組成に近いものである。従ってS字壺が混在するから伊勢湾、または東海系と簡単に判断すべきではない。尾崎の設定する石田川式土器は、尾塚地方においてはすでに元屋敷式の中期7・8C(宮崎健治分類—第3回東海埋蔵文化財研究会「欠山式土器とその前後」)以降に相当するが、大和盆地においては、瀬川地方の壺型土器と対比するならば、すでに元屋敷期(古)段階に比定すべきであり、その点でも石田川式土器は大和盆地土器群とすべきである。
- (註29) 貝沢神町遺跡報告書という「変形二重口縁バレストイル壺」は、明らかに大和盆地における二重口縁壺型土器の影響下に成立している。この器種を伊勢湾在地のものとする可否問題はあがあるが、S字壺A種の大和西域へ混出する時期(欠山期)に派生する土器と判断しておきたい。
- (註30) 小型丸底壺、小型器台、複合口縁壺の組み合わせに示すことのできる古式土師の関東地方における展開を基準とする。が、近年の東海西部域における欠山期、また元屋敷期のバレストイル壺型土器の発見例の増加は、新たな展開をみせている。
- (註31) 石川重雄 「古ヶ谷式と若菜式土器について」 埼玉県立歴史資料館研究紀要第4号 1982
- (註32) 群馬県教育委員会 群馬県埋蔵文化財調査事業団 「野野堂遺跡第Ⅱ地区 雨宮遺跡」 1984 雨宮遺跡67号住居址

## 結 び

本書に報告した「下斉田・滝川A遺跡、滝川B・C遺跡」を調査してから、すでに十数年を経過した。この十年余の間に新たに加わった考古学上の知見は数多くある。特に、浅間山、榛名山という二つの火山による火山噴出物の堆積がみられる本県にあっては、その活動期にあたる弥生時代末から平安時代にかけての遺構については、新たな知見が相次ぎ、それに伴って調査方法もまた年々変化しつつあるのが現状である。

下斉田・滝川地区の各遺跡の調査時点にあっては追求のおよばなかった水田址の調査も、現状ではその有無の確認は調査の必要条件の1つとなり、その調査方法も確立されている。また、以前は、検出されても性格不明の遺構として処理されていたものも、現在では、その後の調査での類似遺構の増加、そして研究者の観察・追求の目によってその性格が明らかにされてきたものも多い。本報告書中にある下斉田遺跡D地区の小溝群もその1つである。すなわち、調査時点では、小溝群として処理したものが、現在の研究水準に照らして見ると、弥生時代の畑跡であった可能性が強いことが指摘されている。(Ⅵまとめ、1-2)。

このように進歩・発展の著しい状況をみまえつつ、ここに報告した4遺跡についてみると、概略次のような特色をあげることができよう。

1. 遺跡地の面積に比して、住居址など集落に関する遺構、および方形周溝墓、古墳などの検出件数が少ない。
2. 下斉田・滝川A遺跡にあっては、検出された14戸の住居址のうち3戸が古墳時代初頭、9戸が奈良・平安時代のものであることに象徴されるように、検出された遺構・遺物も古墳時代初頭および平安時代の頃に集中し、古墳時代最盛期の時期に属するものがほとんどみられない。
3. 滝川C遺跡にあっては、土壌内出土遺物・遺構に直接結びつかないもの、黒色土中からの出土遺物の大半が古墳時代初頭のものであり、隣接地域に同時期の遺跡の存在が考えられる。
4. 下斉田・滝川A遺跡の微高地上には、平安期の住居址の確認が多く、この時期に至って再び微高地上が集落地として利用されはじめている。

井野川下流域にあたるこの地域には、先に記されているように、古墳時代初頭の集落地、方形周溝墓群、そして、元鳥名將軍塚古墳をはじめとする古式古墳などの分布が認められ、この地域一帯が古墳時代初頭からの開発が盛んであったことを示している。さらに、本遺跡周辺には、若宮古墳群、角湖古墳群をはじめとして多くの古墳が分布しており、古墳時代を通してこの地が重要な生活区域であったことを示している。にもかかわらず、本遺跡地内で検出された遺構・遺物は、古墳時代初頭の時期に集中し、それ以降のものほとんど見い出せないところに、この地域での古墳時代における本遺跡地の特色があり、ここが、この時期にあっては生産の場として機能していたのではないかと推定されるのである。しかし前述のとおり、昭和49年の調査時点にあっては水田址の確認までは至っていない。それ故に資料を根拠とした明確な証明は困難であるが、遺跡地内における弥生時代末の畑跡の存在の可能性、および、その後の周辺遺跡での水田址の調査例と本遺跡地内でのトレンチによる土壌確認から、浅間B軽石下ではあるが水田址の存在の可能性も推測されており(Ⅱ-3)その可能性も全く否定されるものでもないと考えられる。

謹啓の事情もあり調査後十年余を経過して刊行の運びとなった本報告書が、ここに記した報告事項とともに、明言し得ない上記のようなことも含めて、今後この地域の歴史を解明していく資料として活用され、これからの本遺跡地隣接地域の調査機会には、これらのことを念頭におきつつその調査がすすめられ、その追及に役立ててもらえれば幸いである。



# 写 真 图 版





下齊田遺跡全景 東より西を臨む



同上 第1次から第2次調査地区を臨む



下斉田遺跡 第2次調査地区全景(北より)



同上 全景(南より)

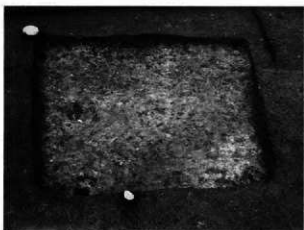




1号住居址



同左 遺物出土状態



2号住居址



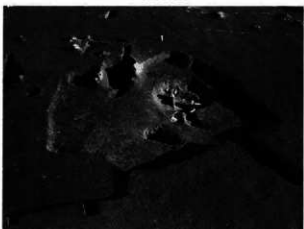
同左 遺物出土状態



3号住居址



同左 竈



4号住居址



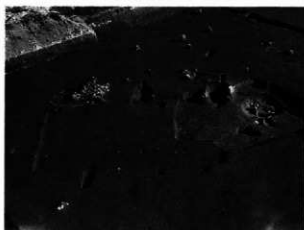
同左 竈



5号住居址セクション



同左 炉址



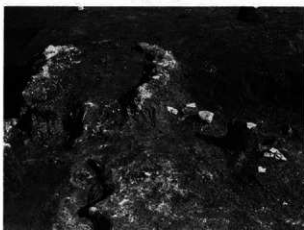
6号住居址



同左 竈



7号住居址



同左 竈



8号住居址



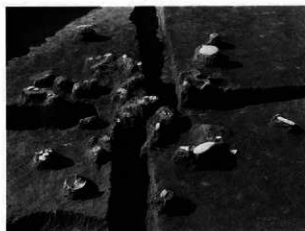
同左 遺物出土状態



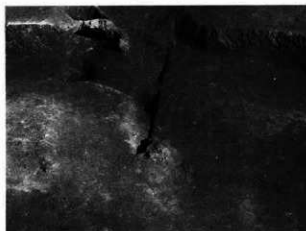
9号住居址



同左 竈



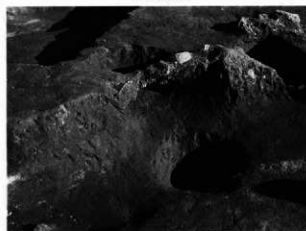
10号住居址



11号住居址



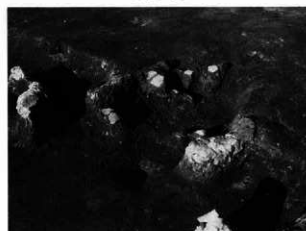
12号住居址



同左 竈



13号住居址



同左 竈



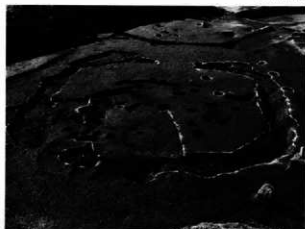
14号住居址



同左 遺物出土状態



方形周溝墓全景（南より）



同上 全景（北より）



同上 遺物出土状態



1号掘立柱建物址



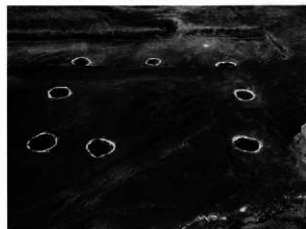
2号掘立柱建物址



3号掘立柱建物址



4号掘立柱建物址



5号掘立柱建物址



同左 小鍛冶遺構



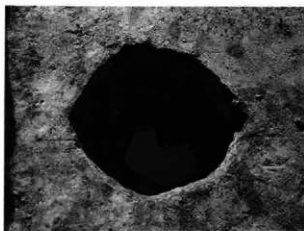
同上 小鍛冶遺構



同左 遺物出土状態



1号土壇



2号土壇



3号土壇



4号土壇



5号土壇



6号土壇



7号土壇



8号(右)・9号土壇



10号(手前)・11号土壇



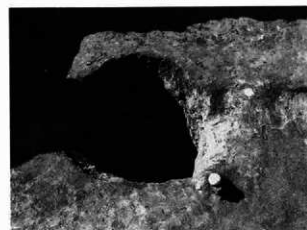
12号土壇



13号土壇



14号土壇



15号土壇



16号土壇



17号土壇



18号土壇



19号土坑



20号土坑



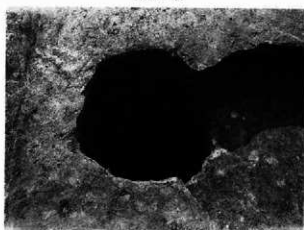
22号土坑



23号土坑



24号土坑



25号土坑



26号土坑



27号土坑

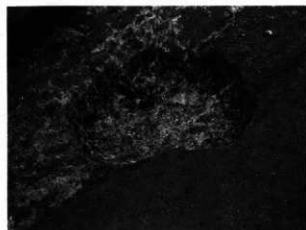




29号土坑



同左 遺物出土状態



30号土坑



31号土坑



32号土坑



34号土坑



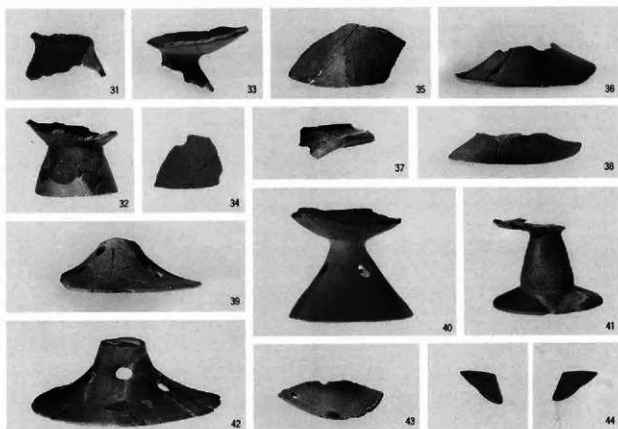
35号土坑



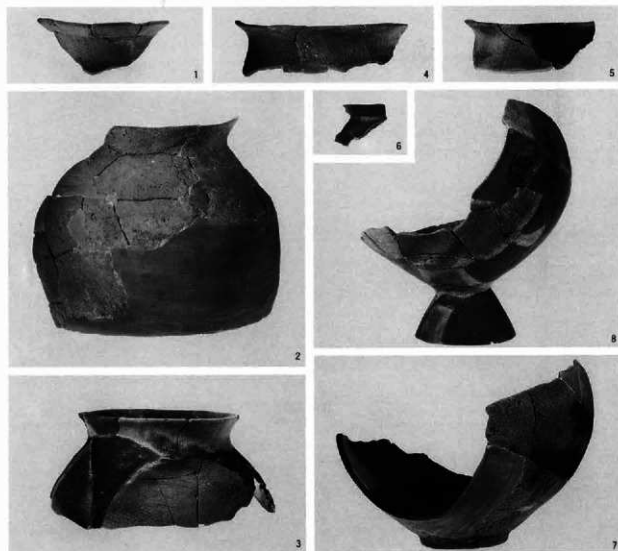
3号溝



1号住居址出土遺物



1号住居址出土遺物



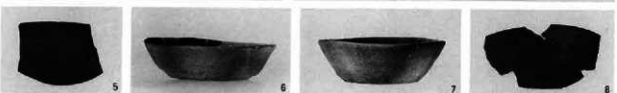
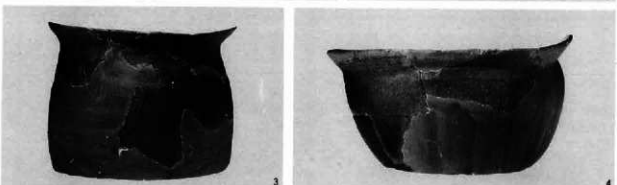
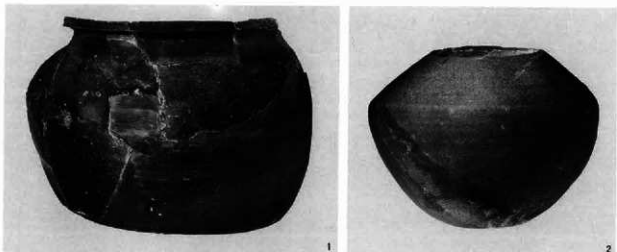
2号住居址出土遺物



2号住居址出土遺物



3号住居址出土遺物

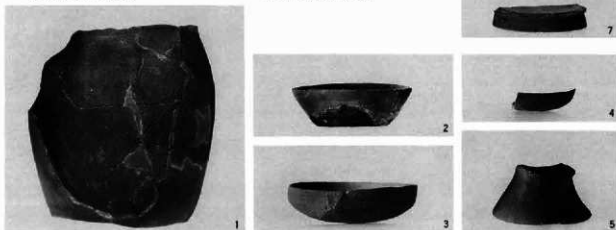


4号住居址出土遺物



5号住居址出土遺物

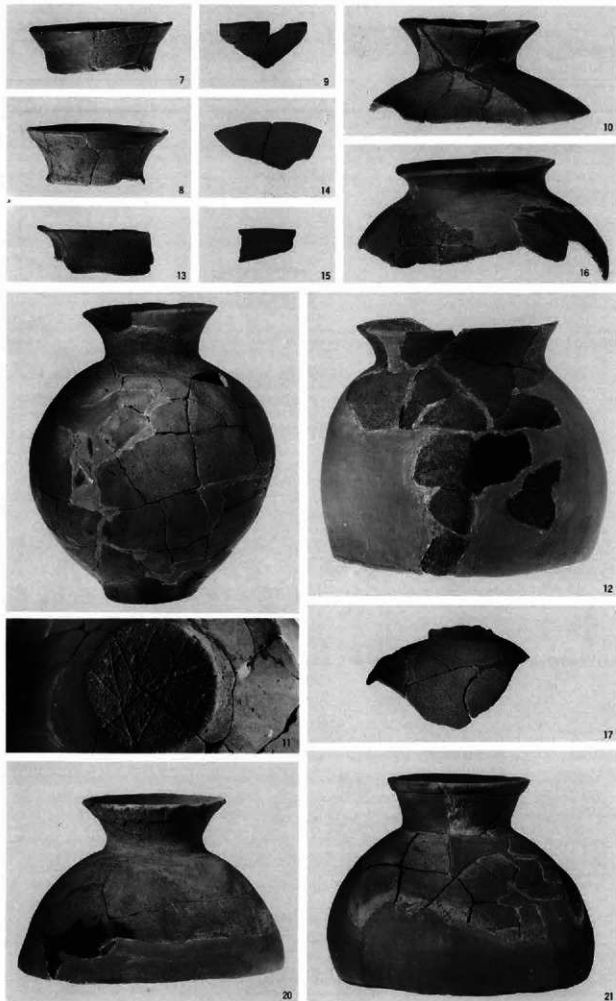
6号住居址出土遺物

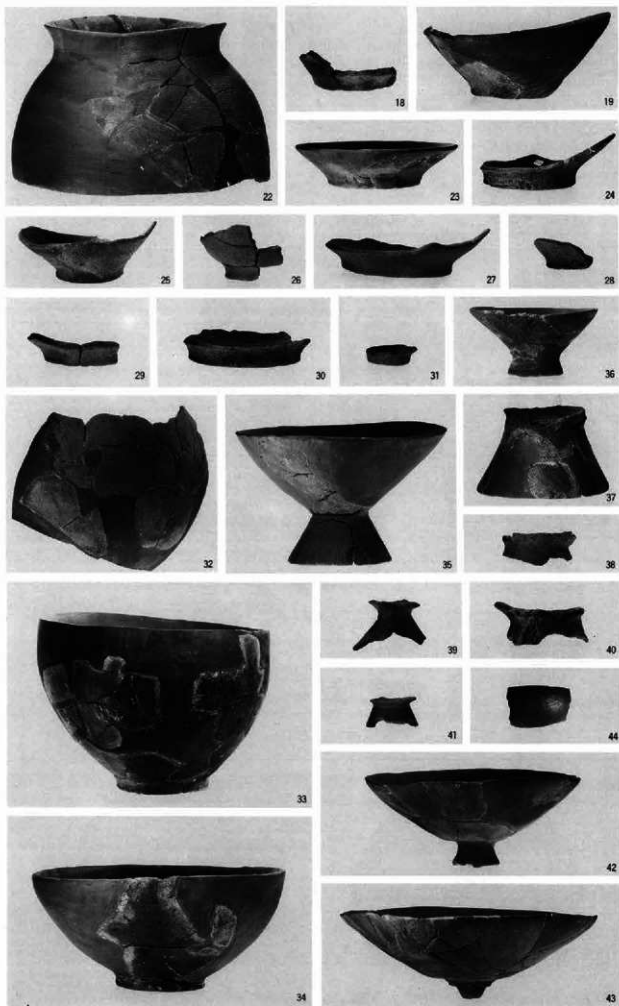


7号住居址出土遺物



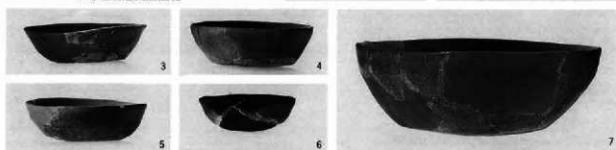
8号住居址出土遺物







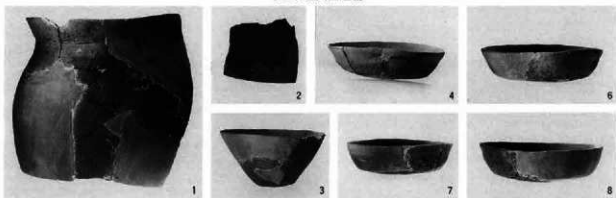
9号住居址出土遺物



10号住居址出土遺物



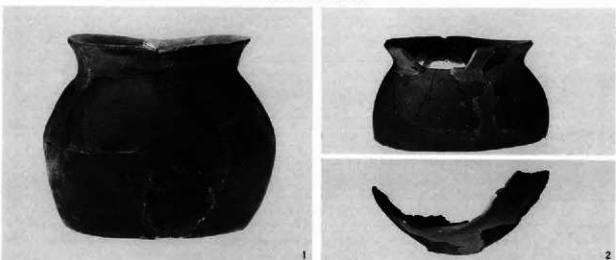
12号住居址出土遺物



13号住居址出土遺物

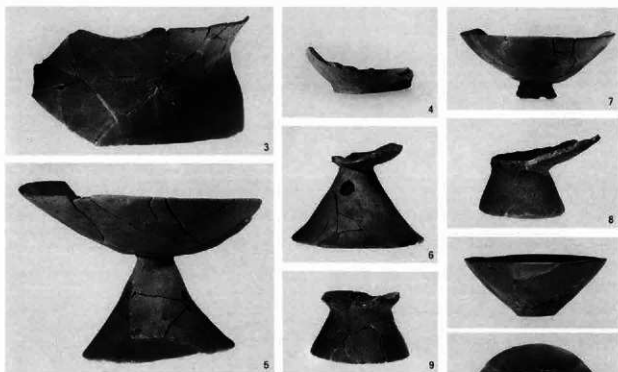


14号住居址出土遺物

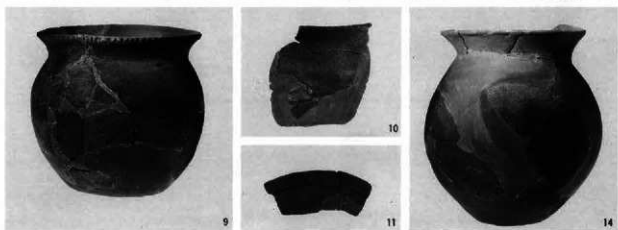
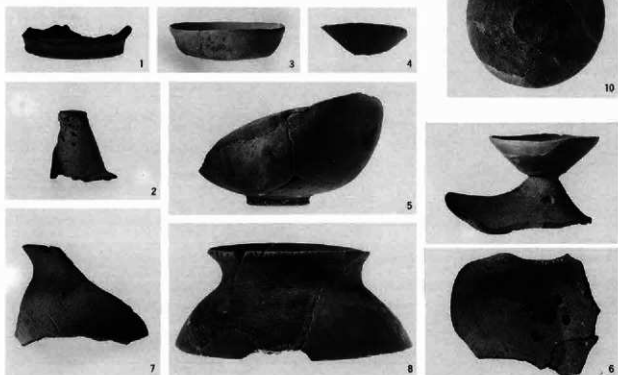


方形岡墳墓出土遺物

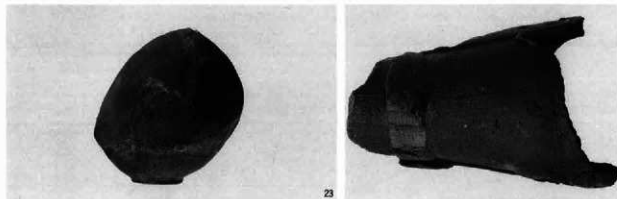
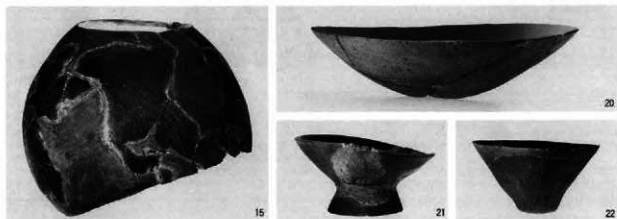
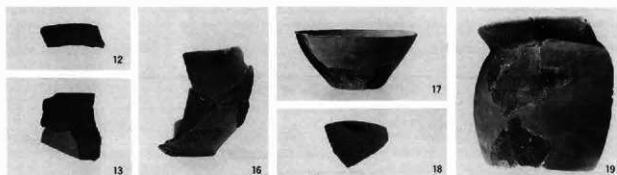




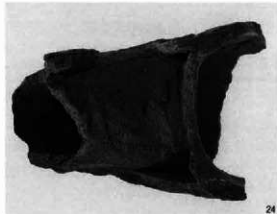
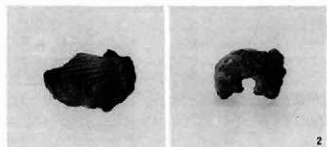
方形岡溝墓出土遺物



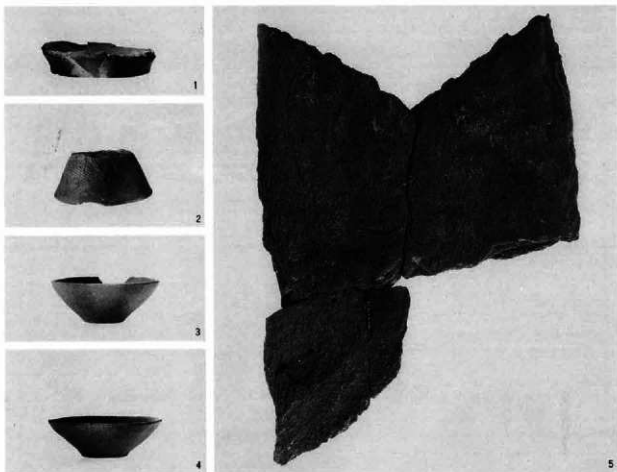
土壙出土遺物



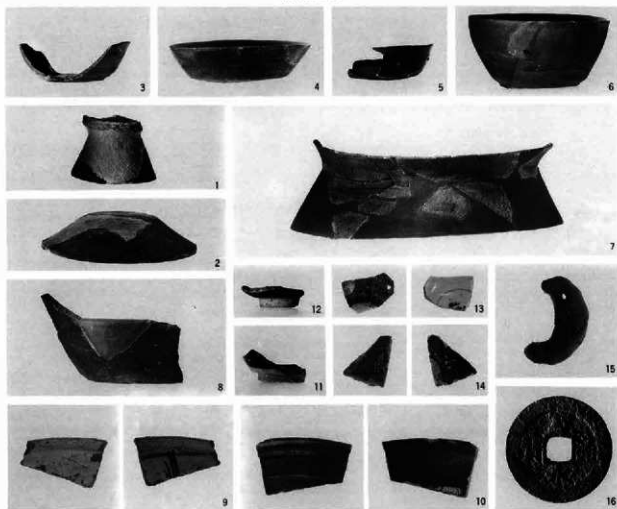
土壙出土遺物



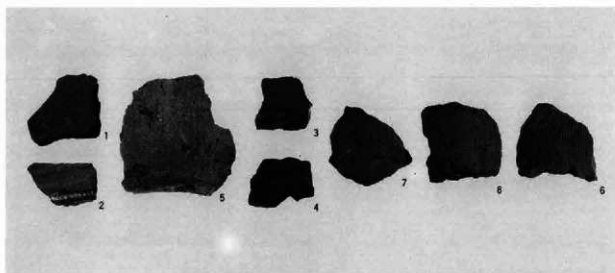
掘立柱建物址出土遺物



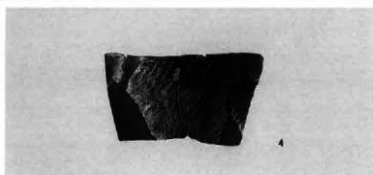
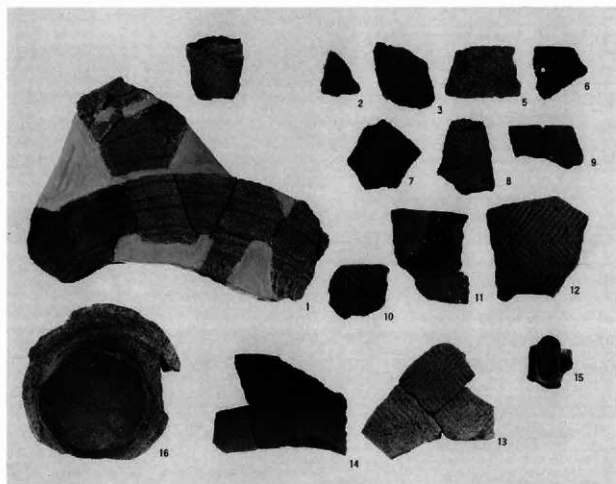
溝出土遺物



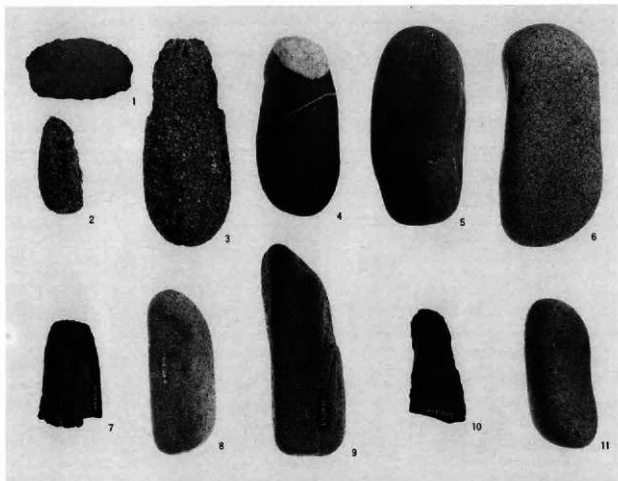
グリッド出土遺物



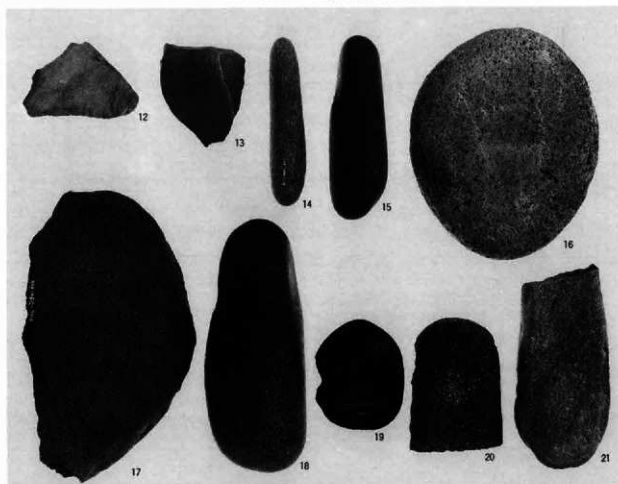
グリッド出土埴輪



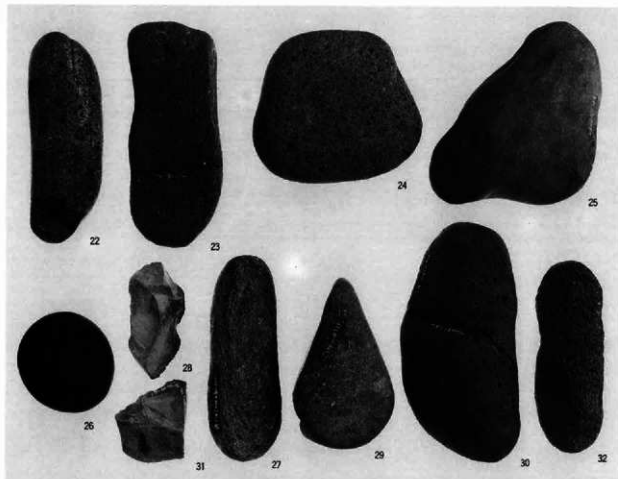
グリッド出土縄文土器



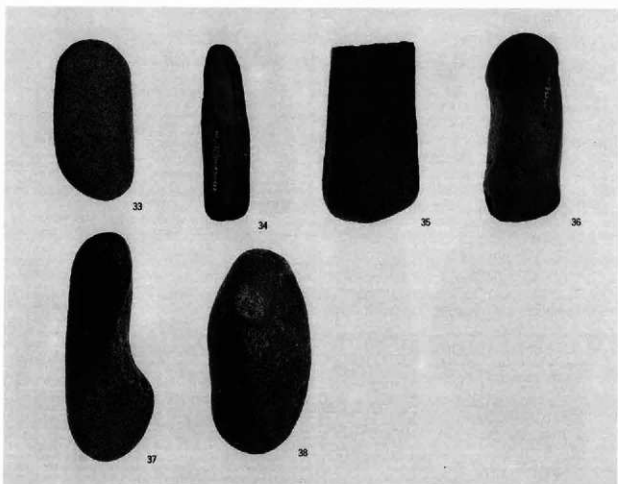
1・4・6・7・8・9号住居址出土石器



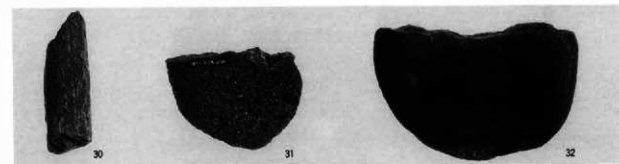
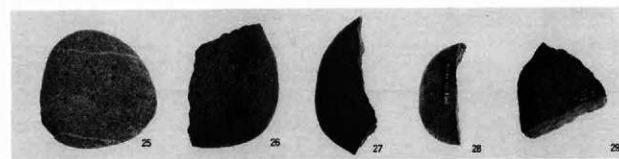
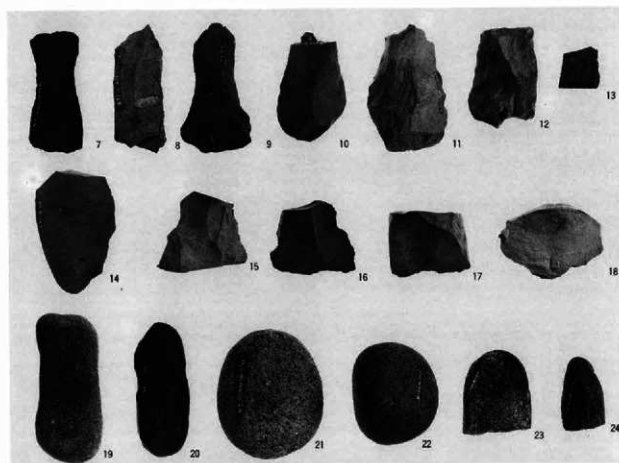
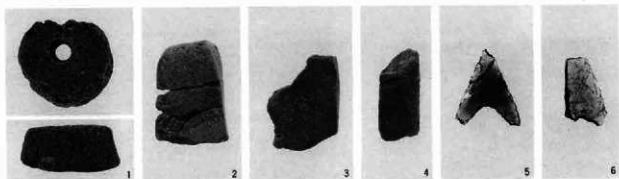
10・14号住居址、方形周溝墓出土石器



方形周溝墓、土壇出土石器



溝出土石器





滝川B遺跡



滝川B・C遺跡遠景





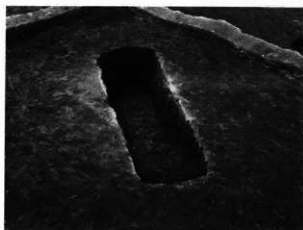
滝川C遺跡調査区 I区



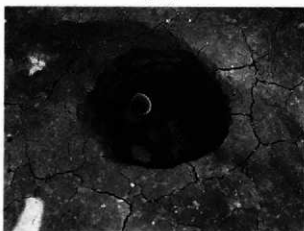
滝川C遺跡調査区 II区



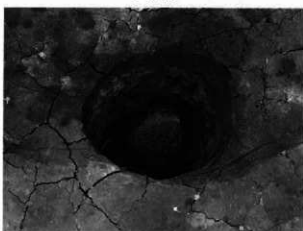
1号土坑



2号土坑



5号土坑



同左 遺物出土状態



同上 遺物出土状態



6号土坑



7号土坑



8号土坑



9号土壌



10号土壌



11号土壌



12号土壌



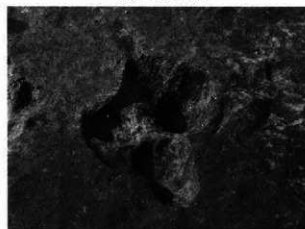
13号・14号(手前)土壌



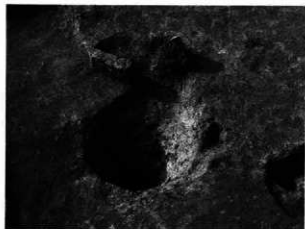
13号遺物出土状態



14号遺物出土状態



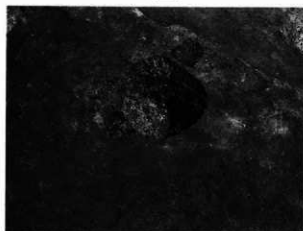
15号土壌



16号土塊



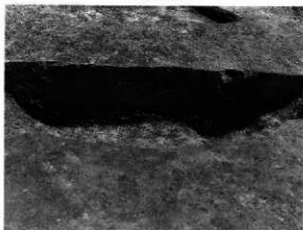
17号土塊



18号土塊



19号土塊



20号土塊



21号土塊



27号土塊



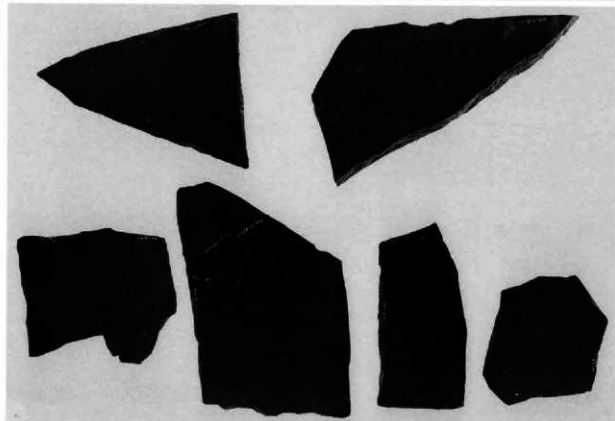
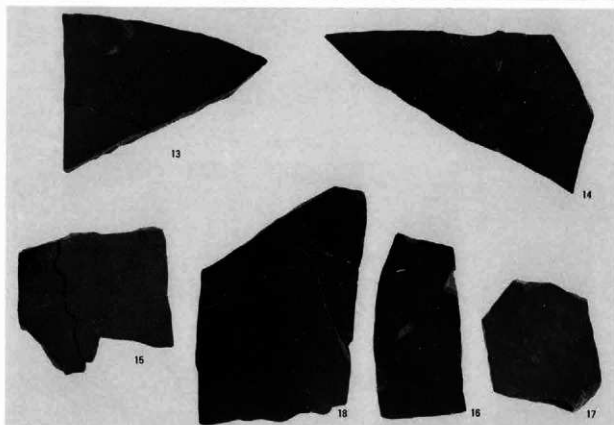
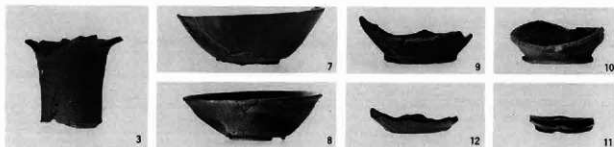
28号土塊



土壙出土遺物



溝出土遺物





19



2



7

溝出土遺物



1



3



4



6



5



9



10



8



11



12



13



14



15



16



17



18



19



20

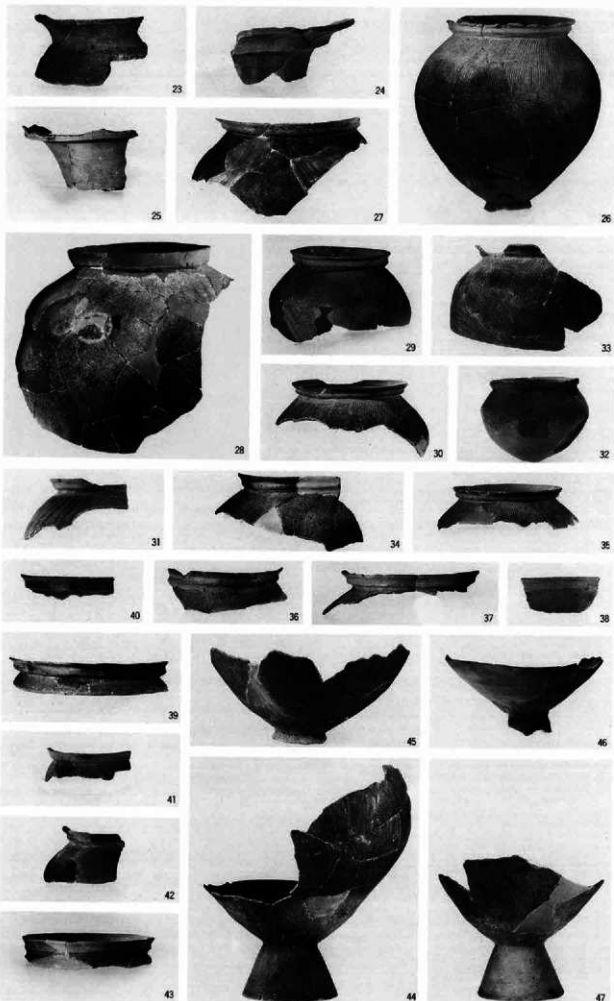


21



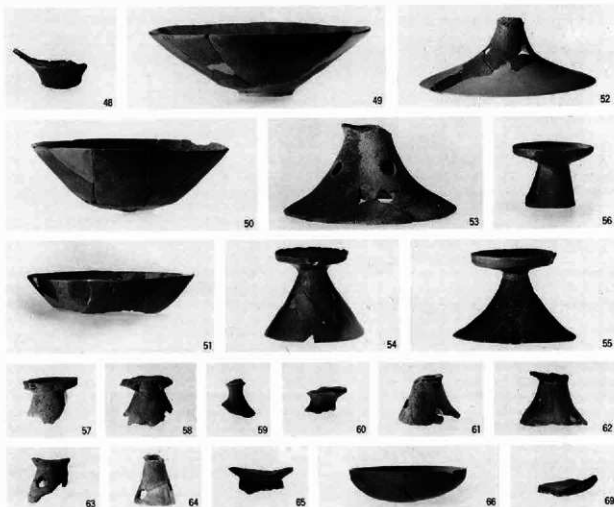
22

グリッド出土遺物

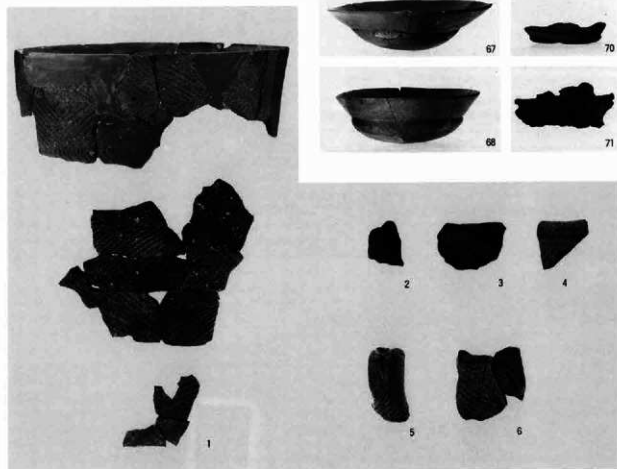


グリッド出土遺物

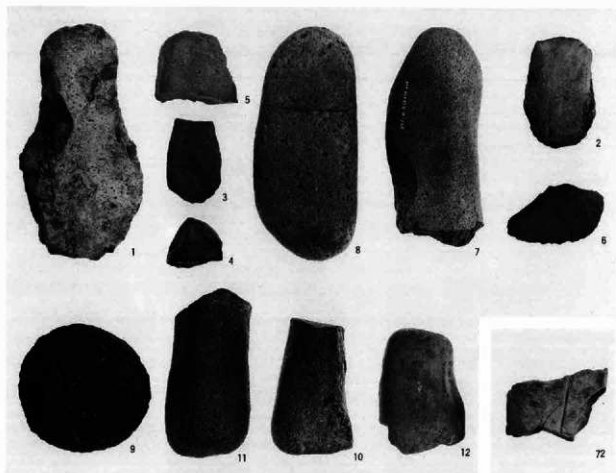




グリッド出土遺物



グリッド出土縄文土器



グリッド出土石器

グリッド出土遺物



28号土壇出土馬歯



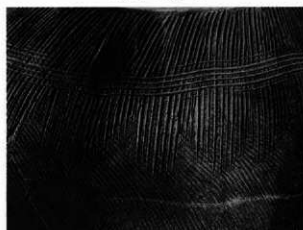
下斉田 方形周溝墓-3



下斉田 土壇-8



滝川C 土壇-12



滝川C グリッド-26



滝川C グリッド-20



下斉田 8号住居址-3



下斉田 溝-2



下斉田 土壇-5



下斉田 6号住居址-6



下齊田・滝川A遺跡  
滝川B・C遺跡

—開越自動車道(新潟線)地域埋蔵  
文化財発掘調査報告書第17集—

昭和62年12月19日 印刷

昭和62年12月26日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会  
前橋市大手町1丁目1番1号  
電話(0272)23-1111

財団法人群馬埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村下箱田784番地の2  
電話(0279)52-2511(代表)

印刷／上毛新聞社出版局